

悪夢の少女と

ヤマシロ=サン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ポケモンの世界に転生した少年ハルト。

彼はとあるポケモンと出会う。

いろんな出会いを繰り返しながら生きるという物語。

※タイトル詐欺です

目次

【随時更新】登場人物まとめ（メタ注意）

プロローグ

第1話 悪夢

第2話 悪夢の果てに

第3話 翌朝

第4話 日常

第6話 ナナカマド博士

第7話 シンジ湖で

第8話 帰路にて

第9話 鳥

第10話 気になるニンゲン

第11話 841番目

第12話 ヨスガにて

第13話 チャンピオン

第13話 依存

第14話 逃亡

第15話 狂愛

第16話 新天地

第17話 貧相なバス

第18話 再会

第19話 とある雨の日、そして災厄

第20話 誕生

第21話 終焉

第22話 帰還

1

9

19

30

43

55

68

76

96

109

127

141

157

169

183

199

212

233

249

262

282

308

333

355

第 2 3 話 運命
第 2 4 話 来訪

382 367

【随時更新】登場人物まとめ（メタ注意）

ハルト

主人公、前世ではポケモンDPをやり込んでいた（らしい）

周りの手持ちポケモンに好かれすぎているが、本人は鈍感……なわけもなく、その現実を半ば見なかったことにしようとしている。超高校級のリアルエスケーパーである。言い換えればヘタレ。どんな人とも普通に話せるのでそのせいでシロナさんに懐かれました。あと、普通の人間なので熱中症で普通に倒れます。そのかわり、周りが大変なことになる。超天然ヤンデレ製造機（原因不明）

主コメ：こんなはずじゃなかった。

メア

ダークライの女の子。前世のハルトのお気に入りポケモンでハルトのことがD a i s u k e ☆

白い肌に白い髪、透き通るような水色の瞳、赤色のマフラー、黒いゴスロリ+黒ニーソと本当にダークライをそのままにした形をしている。口調は丁寧語で明るい性格をしている。戦闘能力も結構あり、シロナさんの相性的には悪い、ルカリオと格闘戦で互角、もしくはそれ以上の戦いを見せる。人型の特権ですね。彼女はなぜかポケモンの姿に戻ることが出来ない、果たして何か謎があるのかなのか：（適当）ゆめくいを使うとその副作用でまるでクスリがキレたヤク中みたいにハルトを求めるようになる（謎設定）

主コメ：当たり前ですけど、タイトルの悪夢の少女は勿論この子のことです。きっかけとしてはダークライの擬人化絵を見て書きたくなったんですね。ここままでやる気は無かったですねはい。ちなみにゴスロリに黒ニーソは好みです。

ソラ

アグノムの女の子。エムリットから話を聞いてハルトに興味を持ち、わざわざミオまでやってきた。そのときに鳥ポケモンを必死に身

体を張って守ろうとしている姿に一目惚れした。格好は水色の肩までかかった短い髪に黄色の瞳、薄灰色のパーカーに紺色のミニスカートを着ている(バタバタ前話読み返した)一人称はボク、はい、ボクっ娘だぞ喜べ。戦闘能力は戦闘シーンがあまりないため不明だが、伝説級なのでたぶん強い。リッシ湖の管理なんかよりハルトのことが大事(おい)で勝手にハルトのボールにインしたポケモン第1号。ハルトと長時間離れたせいでハルトがいないと生きていけない身体へと変わってしまった。最近ハルトの近くにいると身体が反応しちゃう(意味深)

主コメ：アグノムは絶対ボクっ娘にするつもりでした。これは揺るぎませんでしたねw

p. s. 正直最近この子のこと書いててすごく興奮しました()

サクラ

エムリットの女の子。メアと二人でいちゃついているのが気になって気づけばハルトに興味を持ち、気づけば惚れていた。2年ぶりにハルトと再開し、念願のハルトのポケモンになった。割とピュアで可愛い子。容姿はピンク色の腰まで伸びた長い髪にピンクのパーカーと黒いミニスカートを着こなしている。ヒトの姿に慣れていないため、たまにポケモンの部分が映っちゃったり？(予定)ソラのあのやばい体質にちよつと憧れてたり。

主コメ：エムリットはふつうの恋する女の子路線でいきます(信憑性：中)

ユクシー

ユクシーの女の子。寝ることくらいにしか興味がない(終了)

主コメ：予定は未定。

ヤヨイ

ガブリアスの女の子。前世のハルトのボックスの中に厳選に厳選

を重ね、最強のステ値をもつガブリアスになるフカマルとして放置されていた（おい）。

生みの親をハルトと思っており、お父さんと慕っている……が、果たして今はハルトのことを親として見ているのか、もしかすると……？

目覚めるとハードマウンテンにいたらしく、ヒードランに地獄のような特訓をつけられて、本当に最強のドラゴンポケモンになっちゃった☆また、とんでもない戦闘狂で戦うことが好き。しかし、その戦う理由の根源にはハルトがおり、ハルトのためにならどんな力でも手に入れるつもりらしい。ホウエンで知り合ったレックウザとつても仲がいい。性格は比較的穏和だが、戦闘狂。キレたらマジで大変なことになる、戦闘狂なので。あと、地球を救ったヒーロー。最近は初めて本気の攻撃を受け止めたヒカリのエンペルトのことが気になってたりする（サンドバグ並感）

主コメ：因みに手持ちの中ではぶっつっつっつちぎりで最強です。

シロナ

史上最速でシンオウの頂点に君臨したチャンピオン。今作ではトレーナーになって早二年と書いており、割と最近の出来事になる。つまり何が言いたいかというと、ハルトより歳がたぶん、2つか3つ上ということになる、あんまり年の差がないね。なのに、体は（ry。原作では考古学者らしいが、本作では考古学に手を出す前にハルトの虜になってるのでそんなものに興味をもつわけないでしょjk

生まれは大富豪だったが、不都合だったらしく捨てられ、また大富豪に拾われ、召使いとして働かされていた。金目当て、正確には幸せな生活を送りたくてポケモントレーナーになった。チャンピオンになっても決して幸せとはいえず、苦しんでいたところで主人公を投入。あとは察しのとおりです。お幸せに。

主コメ：シロナさんと結婚したい。シロナさんと結婚したい（2回目）今作ではチャンピオンになりたてという設定なのでハルトとは年の差はあまりありません。ハルトの年齢をこっそり調整したい（本

音)

あと、手持ちがハルトと被りまくりなのでミロカロスを持ってません、トリトドンでも押し付けとけばいいか(おい)

ガブちゃんさん

シロナのガブリアスの男の子。シロナのパーティのエース。本人曰くガブちゃんはやめてほしい模様。普通に最強(当社比)

主コメ：原作ではメスですが百合はしんどいので妥協しました。許してね。

ナナミ

ハルトの小さい頃からの幼馴染的な存在。今は図書館で働いている。ハルトとの年の差は2〜5くらいの予定。

主コメ：なんかカントー地方にいたな、ナナミって人。あ、ポケスペにいたね。

ラテイアス

ラテイアスの女の子。ハルトの義妹。二年前、兄のラテイオスが亡くなり、消滅したときにハルトが助けてあげた。その際に彼女はハルトのことをお兄ちゃんと慕うようになった。ハルトへの依存心は手持ちの中で一番強く、ほかのポケモンがハルトといるのを見るととてもない嫉妬心を持つようになった。見た目は白く腰まで伸びた長い髪に頭のでっぺんにアホ毛、ハイライトのない金色の瞳、普段は赤いワンピースか赤に白いラインの入ったパーカーにミニスカートかジーンズを履きこなしている。服装はハルトのその日の好みに合わせている。ハルトがシンオウに帰る前日にラテイアスは自分の命を削り、こころのしずくを創り出し、それをハルトの身体に埋め込んだ。そのおかげでラテイアスはハルトの感覚を共有している状態になる。今作のこころのしずくは発信機のようなものでハルトがどこにいてもラテイアスには一発で場所がわかってしまう。また、手持ちの中でも1番のサイコパスでハルトに敵なす者は同族であろうと誰であ

ろうと消そうとする。それだけならまだ普通だが、彼女の場合はまず、手首から先、その次に腕と、このように順番に体の部位吹き飛ばしてしまふので余計にタチが悪い。また、どのような形であれ、敵を消せばハルトに褒めてもらええると思っっているのです、そのあとは褒めて褒めてと言わんばかりにハルトに寄ってくる。メガシンカも使いこなすが、彼女とハルトのメガシンカを使うと、ラティアスの姿が禍々しいものになってしまう。彼への狂依存ゆえなのだろうか。でもかわい。

主コメ：ラティアスって可愛いよね。この可愛さがわからない人が一回天国に行くか、映画を見直すといいですよ。ここまでサイコパスにするつもりはなかったです本当に申し訳ございませんでした。

アオイ

元ヒンバス、現ミロカロスの女の子。ニンゲンだと思っっていて、ラティアスによりヒンバスであることがわかった。そのときの落ち込みようは悲惨なものだった。ハルトに諭され、ミロカロスへの道を歩む。血の滲むような努力の末、ミロカロスに進化することができた。ハルトのことをご主人様と呼んでおり、ハルトへの愛情も忠誠心も確かなものである。何の影響かは知らないがメイド服を着ており、料理、家事、洗濯やらなんでもこなすことができる。それも全てアオイの努力の賜物である。単純な努力の量ではヤヨイの次に値するだろう。ヤヨイは次元が違います。アオイは色違いのミロカロスのように水色の明るい髪にてつぺんのアホ毛はピンク色になっており、瞳はピンクで、いたって普通のメイド服を着こなしている。しかし、メイド服の胸あたりから盛り上がる2つの果实、そして、細い腰、くびれ、スタイルの良さはハルトの手持ちの中でも群を抜いている。あと、寝巻きはネグリジェでたまにハルトのところまで添い寝したときはハルトのSAN値がゴリゴリ削られている。美しい。

主コメ：ミロカロスってなんでこんなに可愛くて美しいんでしょうね？本来は普通のミロカロスにするつもりでしたが、色違いも面白いと思、こちらを選びました。エロそう。

レックウザ

レックウザの女の子。そらのはしらで寝ていたところ、いきなりヤヨイに喧嘩をふっかけられ、そこから戦いに至った。最初は互角だったがだんだん押されはじめ、気づけば負けていた。そこからヤヨイを慕うようになり、ヤヨイからハルトの娘さんだと聞き、レックウザもハルトをお義父さんと慕うようになった。レックウザも今のハルト達の家族のような生活にこれまでにない幸せを感じており、それを妨げる奴は絶対に許さないつもりだ。見た目は黄色の瞳に緑色のツインテール、ナイスバディで胸の大きさはヤヨイに負けず劣らずくらいで、いつもヤヨイとお揃いの色違いのジャージを着こなしている。口調はヤヨイやハルト、手持ちのポケモンには「くっす」か、丁寧語。それ以外には男口調でしゃべる。そして、ハルトのボールに勝手に入ったポケモン第2号。戦鬪狂。

主コメ：ヤヨイとの百合を考えてましたが、それを書き連ねる文章力が私にはございませんでした。ごペンなさい。

p. s. :百合あるかも(手のひらドリル)

カイオーガ

カイオーガの女の子。基本無口であまり喜怒哀楽が激しくないが、ハルトを前にすると感情が溢れ出してしまう。実は寂しがり屋で人間が好きだった。今はハルト一筋。特性を完全に制御することができ、雨を好きなように降らせたり止ませることができる。見た目は青色の髪に黄色い瞳、水色のワンピースと薄着である。胸は……………はい。また、あいいろのたまを使うことでゲンシカイキし、ゲンシカイオーガへと進化を遂げる。勿論、能力も格段に上昇する。そして、Bが+20くらいする。

主コメ：カイオーガもいいよね。カイオーガは幼い感じが欲しかったのでこんな感じにした。ちなみにゲンシカイキを遂げるとロリ巨乳へと進化を遂げるのだ(変態)。

アオギリ

アクア団のボス。あいろいろのたまの運び役。

主コメ：彼は運び屋としての役割をしつかりと果たしてくれましたよ。

大誤算

ホウエンのてっぺんにいる人。

主コメ：誤字じゃないです。

ユウキ

エメラルドの主人公クン。今はホウエンを救った英雄として讃えられているだろう。

主コメ：ハルカにしなかったのはちゃんと理由があります。言わないですけど。

グラードン

グラードンの女の子。マグマ団の人たちにべにいろいろのたまを渡され、ついつい暴走してしまった。暗赤色のポニーテールの髪にカイオーガと同じ、黄色い瞳、そして赤のTシャツにジーンズを着こなしている。胸は人並みにある（当社比）性格は臆病で、いつも周りを気にしながらびくびくしている。今回の一件で例の二人の逆鱗に触れてしまい、ルネシティで2秒で召された後、モンスターボールで捕まえられ、スパルタ並みの教育を施され、特性を制御できるようにさせられた。彼女は好きでハルトのところにいるわけじゃないのでハルトのことは好きではない……………と思うじゃん？

主コメ：ギャップ萌え。

デオキシス

赤い三角の物体から生まれたポケモン。ハルトのことを親と違って愛してはるはずだが、どこか違う感じがしてたりする。オレンジ色の髪に青緑色と橙色のツインテール状の髪が特徴、因みに、触手のよう

プロローグ

俺は小学校に入学した時、親に初めてゲーム機を買ってもらった。

うちはそこまで裕福な家庭でもなく、自分が幼い頃に父親は亡くなったらしく、小さなアパートでお母さんと一つ下の妹の3人で暮らしていた。

確かに友達みんながゲーム機を持っていて羨ましいとは思っていた。持ってないせいで現に仲間はずれにされている。

だが、貧乏でゲーム機を買うお金なんてないことはわかった。欲しいなんて言えるはずもなかったんだ。でも、お母さんは……

「入学おめでとう。」

そう言っただけに渡してきたのは、みんなが持っている人気のゲーム機、DSだった。

俺は驚いていた。お母さんにはこのことは一言も言っただけだったのに……

「あんた、ずっと欲しかったんでしょ？○○くんや**くんたちと遊んでるのを見かけたんだよ。でも、母さんのことを考えて我慢してたんでしょ？」

「っ……っ……！」

俺は顔を背けた。

「これでみんなと遊べるでしょ、仲間外れなんてされないでしょう？」

そう言ってお母さんはもう一つ四角い箱を渡してきた。
『ポケットモンスターダイヤモンド』

「っ!!これ……!!」

そう、大人気ゲーム『ポケットモンスター』の最新作、ダイヤモンドだったのだ。

俺の頬から涙が落ちた。

「かぁ……さん……」

お母さんは俺を優しく抱きしめてくれた。

——ありがとう。

「ん、んん……？」

カーテンの隙間から日差しが差し込む。

「っ……、夢か。」

俺はとあるアパートの一室で目が覚めた。

寝ぼけ眼であたりを見渡すが誰もいないようだ。ということは母さんはもう仕事に行ったのだろう。いつも朝は俺一人しかいないので少し寂しく思いながらも、ゆっくりと身体を起こし、リビングの方に行くと、テーブルの上に小さな弁当箱があり、ちゃんと中身のご飯やおかずが可愛く綺麗に盛られていた。朝も早いのにわざわざ弁当

を作ってくれて本当に感謝しかない。

「懐かしい夢を見たな。あれは、小学校の頃か…」
テーブルに着き、適当に食パンを焼いて食べながら、昨晚見た夢のことを思い出していた。

入学式の後、母さんが俺に買ってくれた一つのゲーム機と一つのカセット。

ポケモンのおかげで仲間外れにされることも無くなり、友達だつてできた。友達と遊んだ時のことを話すと、母さんや妹が嬉しそうに笑ってくれていた。貧乏だったけど、家族みんなで過ごすこの時間が俺は大好きだったんだ。

「ポケモン……か。」

今はゲームはほとんどしていない。高校に通っていて、生活の足しになればとアルバイトをしてお金を稼いでいる。妹は俺なんかとは違ってすごく賢いから都市の方の名門の女子校に特待生として、寮に泊まりで通っている。

俺は引き出しからボロボロになってしまったDSを取り出す。これが母さんが残してくれた俺の大事な宝物だったからだ。まだ動かし、カセットも入ったままだ。

俺は何となく電源を入れる。

『ポケットモンスターダイヤモンド』

当時の俺はかなりやり込んでいたらしい。全国図鑑までほとんど綺麗に埋まっていた。

「…はは、だからこんなに目が悪いんだよな。」

今、俺は眼鏡をかけている。原因は十中八九こいつのせいだろう。

だが、悪い気はしなかった。俺はこれが無かったら友達すら出来ず、1人のままになっていただろう。ポケモンは俺に元気をくれた。ポケモンは友達をくれた。そのおかげで、今は元気に高校に通うことが出来ている。

「…ふーん、色違いなんかもぼちぼち集めてたんだっけか？」

俺は学校に徒歩で通っている。その途中、小学校の頃やっていたポケモンを開き、懐かしむようにボックスを見ていた。あまり覚えていないが当時は結構やり込んでいたらしい。ボックスを覗けば一目瞭然だった。

「…っと、こいつは。」

俺はボックスの隅にとあるポケモンを見つけた。

「懐かしいな、俺はこいつだけは他のポケモンより愛情を込めて育ててたんだよなー、……………名前なんだっけ。」

俺は十字キーを押して、矢印をそのポケモンに合わせる。

「そうそう、確かこいつの名前は……………」

名前を呟こうとした瞬間、突然目の前がブラックアウトした。

「!!」

パツと突然目の前が明るくなる、見たことのない天井だ。

「あら、起こしちゃった?ごめんね。」

そう言っただけ見たことのない女の人は俺を抱き上げる。

抵抗しようとするも身体が思うように動いてくれない。しかも、声もまともに出すことが出来ず話せない。

あれ、俺赤ちゃんになってる?

俺の寝ていたベッド、哺乳瓶、そして俺の母親であろうこの人。うん、間違いなく赤ちゃんになってるな。

何故かこんな状況なのに冷静であった。

——それから10年が経った。

俺は言葉も喋れるようになったし、割と普通に健全な男の子となった。(精神面以外)

俺はとある世界に転生したらしい。何がトリガーとなって転生し

たのかはさっぱりわからない。よく小説であるトラックに轢かれたらよくわからない真つ白な空間にいて、神様が「転生できるぞよかつたな。」みたいな展開もなく、いきなり赤ちゃんからやり直しになるなんて。原因がわからないがわかったことが一つある。それは、

ここがポケットモンスターの世界だということだ。

俺はシンオウ地方のミオシティという港町で生まれ育てられた。

うん、やったことあるから知ってるわ。

親父は漁師をしており、偶に新鮮な魚を持って帰ってきてくれたりする。母親はいたって普通の主婦で俺を優しく見守ってくれる。

あ、死んだわけじゃないからね？

いたって普通の家庭に生まれ、普通の生活をしていて、裕福すぎず、貧乏すぎず幸せな日々を過ごしている。

——俺は、前世はこんな生活を求めていたのかもしれない。

「にゃあお。」

ソファアに座っていると俺の膝の上に猫が乗って座った。

灰色の体に細い目、そして、細くぐるぐる巻きとなっていて先端にもふもふしたようなものがついている尻尾。そう、こいつはねこかぶりポケモンのニャルマーだ。俺の膝の上で寝ているが、懐いてるわけでも嫌っているわけでもないらしい。まあ、猫らしいと言えるだろう。

俺は優しくニャルマーの頭を撫でてあげる。気持ち良さそうだ。

「ねえ、ハルト。」

「んあ、なに？・母さん。」

母さんが俺を呼んだ。そう、俺の名前はハルト。奇跡的に前世と名前が同じ……というわけではない。それでも普通の名前に入っている。ダイヤモンドパールにちなんで、パールなんて名前つけられても何か恥ずかしくて嫌だからだ。

「ハルトって今年で10歳でしょ？旅に出ようとか思わないの？」

そう、10歳になると旅に出る権利を与えられる。だが、前世で高校生まで生きてる俺ならこう思った。

「うーん、まだ社会のルールもわかってない俺が旅になんて出られるわけないでしょ。せめてある程度勉強して12歳くらいになつてからにするよ。」

そう、ずっと前から思っていた。無印ポケットモンスターアニメの第1話を見て思っていたことがあった。

10歳からは早すぎる。

せめて小卒、できれば中卒くらいから旅に出るべきなんだと思った。だが、ポケモン世界は違うらしい。社会のルールなんて分からなくてもいいらしい。

全く素晴らしい世界だよちくしょう。

「そう、なら勉強頑張りなさい。」

母さんも特に反論もせず受け入れてくれた。本当にいい母親だなと心底思った。

俺は朝は外に出て適当に友達と遊び、昼からは本を読んでポケモンの勉強に努めている。前世ではそこそこやりこんではいたが、小学生の頃のことなので感覚が戻るまでは旅に出ないことにしていた。

『ガチャ』

「帰ったぞおお!!」

この耳の奥まで届く低い声、そう親父である。親父は朝早くに出て、周りよりは少し早い夕方ごろに帰ってくる。

「おかえり親父。おつかれさん。」

「おう!今日は大漁だったぞ!!ほら!!」

親父は俺にクーラーボックスを渡す。中を見るとアジやライワシや色々な魚が入っていた。え?ポケモンじゃないのかだって?ポケモン食べるなんて想像もしたくないでしょ、最低限の考慮ですよ。

「おお、すげえ。じゃあ今日は刺身かな?」

「おかえりなさいあなた。お疲れ様。」

母さんも出てきた。

「おお、ただいま。今日は刺身にするか!!」

母さんは微笑んで答えた。

「そうね、刺身にしましょうか。」

もしかしたら、今の家庭は俺が求めていたものだったのかもしれない。高校生になって、母さんは仕事で朝早くに出て帰ってくるのも遅く、一緒に過ごす時間がかかり減ってしまった。こんな家族団らん時間を俺は過ごしたいと願っていたのだろう。前世の家族と過ごせなかったのは残念だけど、この幸せをずっと感じていたいと思ってしまった。

そして夜、俺は9時ごろには寝る主義なので自分の部屋のベッドに寝転がっていた。

「……………ふう、今日も楽しかったな。」

そう呟いて電気を消した。

ポケモン世界に転生。これほど嬉しいことはないだろう。ガキの頃はこんな世界で暮らして見たいと思っただけだ。………ポケモンにあまり関わってない気がするけど。

俺はそんなことを考えながら眠りについた。

「………ツ!!?」

俺は漂う寒気で急に目が覚めた。慌てて起き上がる。そこは俺の部屋ではなかった。アスファルトの上で目が覚めたのだ。

「何だよ………ここは!!?」

目が覚めると空が真っ暗で霧がかかっている。そして、人は誰もいないミオシテイの広場にいた。

第1話 悪夢

真つ暗な街並み、夜空を見上げるも月は形しかわからない。
つまり新月だということだ。この街並みは見覚えがあった。

「……ミオシテイだよ……な？」

そう、ここは間違いなくミオシテイの真ん中にある広場だった。今朝も友人と遊んだから余計記憶が鮮明に残っていた。

しかし、人は誰一人おらず、ポケモンセンターすら電気もついていない。

そして、この静寂が俺の恐怖を引き立てる。

『独り』

この感覚は前世から全く変わっておらずこれを意識した瞬間、体の震えが止まらなくなった。

「……まじかよ。寒いな。」

俺はこの震えは寒さのせいだと体に言い聞かせる。震えは止まらないが大分マシになっただろう。

俺は街を散策することにした。

まずはミオの図書館に行った。

「やっぱり誰もいないか……」

『ガチャ』

「ん、開いてるぞ?」

なぜかミオの図書館は鍵が開いていた。こんな夜中なのに変だな。と思いつつ足を踏み入れる。

「非常口マークすら電気がついてねえじゃん...」

本当に真っ暗だった。

外の光が入ってきて通路は辛うじて見えるものの本の名前は全くと言っていいほど字が見えない。

「はあ、取り敢えずポケモン図鑑のところに行ってみるか...」

普段よくきている場所なので何となく構造は頭に入っていたらしい。思いの外スムーズに進むことができ、気づけばいつも通っているポケモン図鑑のコナーまで来ていた。

「んー、いつも読んでいるポケモン図鑑はどこだ?」

字が読みづらいが目を凝らして探してみる。本を読んで恐怖を紛らわす作戦だ。

「んーっと、あ、あつたあつた。」

俺は分厚い辞書のようなポケモン図鑑を引き抜く。

「字、見えるかな? 何とか見えそうだ...!!?」

俺は驚いてそのポケモン図鑑を落として腰を抜かしてしまった。

なぜなら...

「は…!?何で真っ黒なんだよ…!!」

そう、表紙はポケモン図鑑と書かれている。

しかし、目次のページもどのページも墨で塗りつぶされたように真っ黒だったのだ。

俺は慌てて適当にその本棚から本を引き抜いて適当にページを開いていく。

「え、どうなってんだよ!?!」

そう、ポケモン図鑑と同じくどのページも真っ黒。

俺は資料のファイルを開き、適当に資料を引き抜いて見る。

「ッ!!」

どの資料も両面真っ黒だったのだ。

「は!?!は!?!何で…!?何でどの本も資料も真っ黒なんだよ!?!」

そう、どの本もどのページも真っ黒だったのだ。

俺の冷や汗と身体の震えが止まらない。恐怖が体を支配する。

…カッソ

「ひびく!」

思わず声をあげた。

「… あしお… と？誰かいるのか…!?」

…カツン… カツン… カツン…

足音はだんだん遠くなっていく。俺は聴覚を研ぎ澄ませその足音だけに集中することにした。

カツン… カツン… キイイイ… バタン…

足音が一瞬止まったかと思うと、ドアの開く音がした。そう、誰かは知らないが図書館を出て行ったのだ。

今現在、怖くて震えも止まらないくらい怖いけど、そんなことを言っている暇はなかった。

「… 追いかけてよう。」

俺は震える足に喝を入れ、ふらふらと立ち上がる。

そして、ゆっくりと足を進めさっきの入り口まで戻った。

「ふう、取り敢えず表に出よう。」

ガチャ…

俺はミオシテイ図書館を出た。

相変わらず外は真っ暗で街灯一つ付いていない。月の光も当たっておらず、星の光のみが唯一の光だった。

その後、俺は親父がいつも仕事で行っている港の事務所に行った。ポケモンジムに行ったりした。しかし、どこも開いていなかった。

「あとは……………」

俺はとある一軒の民家の前に立った。

そう、俺の家だ。

震える手でドアノブに手をかけて、ゆつくりとドアノブを捻り、ドアを後ろに引く。すると、恐ろしいほど素直にドアは開いた。

その瞬間、俺は悟った。

「……………俺の家に……………誰か……………いる……………!!」

その事実を知った時、図書館の時の、いや、それ以上の恐怖が体全体をよぎる。そして、今まで以上に鳥肌が立ち、冷や汗がブワツと出てくる。

俺はおそろおそろ靴を脱ぎ、まずは一階を散策することにした。

「まずは……………リビングだな。」

音を立てないようにゆつくりとドアを開けてリビングに入る。

いつも母さんが読んでいる週刊誌がテーブルの上に乱雑に置いてあった。しかし、

「これもかよ……………」

そう、どのページも真っ黒だった。そして、リビングの本棚にある母さんがよく使う料理本も真っ黒だった。

特に何もないと判断した俺は母さんの部屋に行くことにした。今の時間帯なら母さんは寝ているはず。しかし、いや予想通りというべきだろうか……。

「……っ、やっぱりいないか。」

そう、布団が敷いてあるものの母さんの姿は無かった。

俺はそのあとキッチンや風呂場や親父の部屋を回ってみた。しかし、あるのは真っ黒になった書物と特に何も変哲のない洗剤やシャンプーなどだった。

そして俺は階段の前に立った。

どくん…… どくん…… どくん……

俺の心臓が激しく鳴っている。

緊張感が一気に増して、足がガクガクと再び震えだした。そして、自然と呼吸も荒く鳴った。

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

俺は一度大きく深呼吸をした。

「ふう、行くか。」

俺は一步ずつ、キシキシと音を立てながら階段を登って行く。

そして、たどり着いたのは。

「ここだな。」

『ハルトのへや』

そう、俺の部屋だ。

ここにさっきのやつはいる。そう踏んだ。

数秒間、動けなかった。しかし、俺は覚悟を決めることにした。

俺はドアノブに手を掛けドアをゆっくりと開けた。

キィィィ……

「っ!!」

部屋を覗くと、俺のベッドの上に誰かがいた。

「うう…… ひつく…… ひつぐ……」

泣いているのか……？

声を聞く限り女の子のようだ。よく見えないが俺のベッドの上で
体操座りでうずくまるようにして泣いていた。

「っ!!」

少女は俺に気づいたのかゆつくりと顔を上げた。その瞬間我に帰りまた恐怖が体を支配する。動かない。恐怖で体がうまく動いてくれない。

その少女の目は……………

青かった。

青い、宝石のような綺麗な青い目、だが、若干黒ずんでいるように見える。

そして、ゆつくりと少女の口は開く。

「ぐっ… あ…!？」

少女が何かを言おうとした瞬間、とてつもない頭痛に襲われる。頭が割れそうな痛みだ。たまらず地面に倒れこんだ。頭を抑えてうずくまった。

「ぐあ…!?!なんなん…だ…?！」

意識が朦朧としてくる。段々体の感覚が無くなってきた。そして、意識が途切れる寸前、ふと、顔を上げるとその女の子は立って見下ろしていた。

その女の子の目には何か雫のようなものが見える。

そして少女の口は開く。

『ま…………た…………たす…………え…………！』

「な……………に……………？」

何かを言ったようだがこの瞬間俺の意識は落ちた。

「はっ!!!」

俺は目が覚めた。朝の日差しが差していた。

「はあ… はあ… なんだ……………夢か……………」

あれは夢だったらいい。しかし、俺の寝巻きは汗でびっしょりだった。よほど、うなされていたらいい。

夢の中にいたあの女の子……

『ま……た……たす……え……！』

その言葉が脳裏に焼き付いていた。そう、何か助けを求めているよ
うな、今にも消えてしまいそうな、そんなか細い声だった。

しかも、あの女の子を見た時、恐怖だけじゃなくもう一つの感情も
浮かんできていた。

懐かしい

初めて見たはずなのに、何故か知っているような……どこかで
見たような……そんな気がした。

「ハルトー!!(ざ)飯よー!!」

しかし、母さんの声で我に帰った。

「はい、今行くよー!!」

俺は急ぎ足で部屋を出て下のリビングへ降りて行った。

第2話 悪夢の果てに

「いただきます。」

俺は朝食を摂っている。コッペパンと野菜スープ、そしてベーコンエッグという洋食の時のテンプレのようなメニューだった。

「今日はいつもより起きるのが遅かったけど、珍しいわね。」

そう、普段は7時ごろに目がさめるのに、今日はいつもより1時間遅い8時に目が覚めたのだ。普段の俺ならあり得ないことだろう。

「まあね、昨日少し遅くまで起きてたから。」

「それもまた珍しいわね。調べ物か何か？」

「うん、ちよつとね。」

この悪夢のことは話さなかった。無駄に心配はして欲しくなかったし、自分で解決したかったからだ。

「ごちそうさま。おいしかったよ。」

俺は立ち上がって玄関の方に足を進める。

「あら、もう図書館に行くの？早いわね。」

「あ、うん。ちよつと調べたいことがあってさ、行ってくるよ。」

俺はそう言っただけで玄関のドアを開けて外に出た。

俺はいつも皆と遊ぶ広場を抜け、ミオ図書館の方へ向かう。

「おはようございまーす。」

「あら、おはようハルトくん。今日はいつもより早いのね。」

入り口付近の受付にいるのは司書のナナミさんだ。俺はほぼ毎日通っているから結構な顔なじみである。

「あ、はい。ちよつと気になることができたんで…」

「そうなの、ゆつくりしていつてね。」

ナナミさんは返却された本を抱えて本棚の方は歩いて行った。ナナミさんは司書を始めてから3年くらいになるらしい。本人曰く「本の場所は全て把握している」とのこと。シンオウで一番広いこの図書館を全て把握してるなんてよほど本が好きなのだろう。

俺はいつも通りポケモンの資料や図鑑のコーナーに足を運ぶ。

『夢』というものは起きると自然と記憶から消えていくものである。

しかし、昨晚見たあの悪夢、そしてあの少女の叫びを俺は忘れることができなかった。

全身が震え上がり、思い出すだけで鳥肌が立った。まるで夢じゃないかっただかのようにだった。それほど、俺の脳裏に焼き付いていたのだ。

「…………… 夢、悪夢…………… ポケモン……………」

俺は今、ミオシテイの図書館にいた。悪夢に関するポケモンを探していたのだ。前世でそんなポケモンがいた気がするが思い出す寸前で、もやがかるようにわからなくなる。

「悪夢を覚えるポケモン…………… は…………… あった。」

悪夢を覚えるポケモンはエスパータイプやゴーストタイプがほとんどだった。

「…ゲンガー、ではないな。」

『あくむ』という技は眠り状態のポケモンに有効で、最悪瀕死状態にまで至らしめることができる。強い分習得は難しいらしく、ゲンガーやゴーストは高レベルにまで上げないと習得できないらしい。しかも、習得しても制御ができず、相手を死なせてしまうという事例も少なくないらしい。この情報だけでゲンガーやゴーストの線はかなり薄くなった。

そう簡単に断言できたのにはもう一つ理由がある。

あの青い瞳、あれが一番印象に残っていた。

いたずらでしたようではなかったように見えたからだ。

「…どれなんだ？もしかしたら、ただの夢だったっていいのか…？」

俺はどんどんポケモン図鑑をめくっていく。

「…ん？なんだこれ。」

ポケモン図鑑に一部違和感を覚える箇所があった。

何故か全国図鑑No. 491の部分が破り取られたかのようなようになっていたのだ。

どうしてこの部分だけ無いのか。この図書館にはコピー機もあり、モノクロになるがコピーすることだってできる。そもそもこんな子供が読まないようなポケモン図鑑を破るなんて明らかにおかしい。

気になった俺はナナミさんに聞いてみることにした。

運良く、ポケモンの資料や図鑑のコーナーの近くにいたので声をかけた。

「ナナミさん。」

「はい、あらハルト君。どうしたの?」

俺はポケモン図鑑の破り取られた部分を見せた。

「……………っ!」

すると、ナナミさんは目を見開いて驚いた表情をする。何か訳ありらしい。

「この部分がなくなってるんですけど、誰かいたずらしたんですか?と聞きたいところですけど、ナナミさんのリアクションを見た限り訳ありみたいですね。この部分って何のポケモンのページだったんですか?」

俺は単刀直入にナナミさんに聞いた。

ナナミさんは少し悩んだような表情をみせるが、決めたのか俺の方を見る。

「4年前、このミオシテイである事件が起こったの。」

ナナミさんは真剣な顔で俺にこのページがなくなった理由を話し

出した。

「ミオシティにはあるポケモンが住んでいた、そのポケモンは野生のポケモンにも関わらず、人間と仲良くして、何より喋ることができたの。そのポケモンは町の人たちや子供達と仲良く暮らしていた。大人たちの仕事の手伝いをしたり、子供達と一緒に遊んであげたりしていて周りからの信頼も厚かったのよ。」

「でも、とある事件が起きた。町のこどもの一人が突然悪夢にあったかのようになされて起きなくなった。町のみんなが心配してその子の家にお見舞いに来てくれたわ。そう、そのポケモンもよ。」

「町の人たちも必死になってくれて、悪夢避けのお守りをくれたり、おまじないなどいろんな手を尽くしてくれた。しかし、どれも効果が無い。しかも、その子供はどんどん衰弱していったの。」

「うなされ始めてから10日くらい経ったとき、とんでもない事実が発覚したの。その子のお父さんが原因を探すために本を読み漁っていたときにポケモン図鑑を見た。」

「…っ！まさか…!!」

「そう、そのなくなったページの部分、そのポケモンのせいであなされていることがわかったわ。」

「その子のお父さんはそのページを勝手に破り取り、事実がわかったことを町のみんなに伝えたの。」

「町のみんなのそのポケモンの見る目は変わった。本人はそんな能力があることなんて知らなかったみたいなの、でも町の人たちは許してくれなかった。そのあと町の人たちがとった行動は……」

ナナミさんは少し間をおいて口を開いた。

「そのポケモン、『ダークライ』を町から追い出したのよ。」

「… ツ!!ダークライ……!!」

「これで私の話は終わりよ。ハルト君はダークライのことを調べに来たんでしょう?」

「はい。」

「どうして調べようと思ったの?」

俺は悪夢のことをナナミさんにつつみ隠さず教えた。

「そう、だから調べに来たのね……」

「ダークライの仕業だったことはわかりました。でも、ダークライ、いや、彼女はイタズラや悪気があってしたわけじゃないとおもうんです。それに……」

「俺は彼女に心当たりがあるんで。」

俺はミオ図書館を後にした。気がつけば夕日が沈み始めていた。よほど夢中になって調べていたらしい。それに、収穫もあつたし、俺のとるべき行動もわかった。

彼女は苦しんでいた。

彼女は泣いていた。

そして、彼女は俺に助けを求めていた。

今日の夜、恐らくまたあの悪夢を見ることになるだろう。

でも、俺はもう怖くなかった。俺の取るべき行動がわかっていたからだ。

「それじゃ、そろそろ寝るかな。」

「あら、今日は早いよね。調べ物で疲れたの？」

「うん、それにやることもあるし。」

「??？」

「それじゃおやすみ母さん。」

「ええ、おやすみ。」

俺は自分の部屋に戻り、ベッドに入った。そして、電気を消した。

疲れていたせいか直ぐに眠りにつくことができた。

「……………」

目がさめると、昨日と同じように誰もいないミオシテイの広場にいた。

昨日はパニックになっていたが、今日は違う。落ち着いていて周りもよく見える。

「行くか。」

俺は覚悟を決め、自分の家へ向かった。

昨日と同じように自分の家の鍵は開いていた。

『ガチャ』

ゆつくりとドアノブを引き、中に入る。

俺は靴を脱ぎ、今回は迷わず二階へと続く階段へと足を運ぶ。

一段、一段と階段を登って行く。

『……っ！……！』

二階から昨日と同じ少女の泣き声が聞こえて来た。

そして、俺は自分の部屋の前に立った。

俺はドアノブに手をかけゆつくりとドアを開ける。

「うっ……！ひっぐ……！」

少女は俺のベッドの上で泣いていた。

電気も付いていない真っ暗な部屋。星の光だけが部屋の中を照らす。

だが、今日は違う、はっきりと彼女の姿が見え、声もはっきりと聞こえる。

俺はベッドの上で体操座りでうずくまって泣きじやくる彼女の横に立った。

彼女は気づいていないのか震えながら泣いていた。

そして俺は口を開き、こう言った。

「迎えにきたよ。ダークライ、いや………」

「メア。」

泣きじゃくる彼女の肩がピクリと動き、ゆっくりと顔を上げた。

彼女の青くて水晶のように透き通った目が俺の姿を映していた。

そして、彼女の口が震えるようにゆっくりと開く。

「来て……………くれたの……………?」

彼女の震えるような細かい声が聞こえ、彼女の目からは再び大粒の涙が溢れ出てくる。

「ああ、長い間待たせてごめんな……………メア。もう大丈夫だ。ずっとそばにいてやる……………ずっと……………な……………!」

「うつ……………!!ま、ま、まずだあああああああああああああああああああああ
あああああつ!!!」

メアは俺の胸に飛び込んで来た。俺の胸の中で泣いていた。そして、俺も強く抱きしめかえしてあげた。二度と離れ離れにならないように……………。

『…っと、こいつは。』

俺はボックスの隅にとあるポケモンを見つけた。

『懐かしいな、俺はこいつだけは他のポケモンより愛情を込めて育てたんだよなー、……………名前なんだっけ。』

俺は十字キーを押して、矢印をそのポケモンに合わせる。

『そうそう、確かこいつの名前は……………』

そして、俺が愛した最高のパートナーの名前を思い出した。

『メアだ。』

第3話 翌朝

「ん、んん…？」

カーテンの隙間から日差しが差し込む。
無事に朝を迎えることができたようだ。
壁に掛けてある掛け時計を確認する。

『7:08』

よし、いつも通りの時間に起きれたな。

俺は昔から生活リズムを気にするタイプで、起床時間は7時プラマイ10分で起きるよう心がけている。

特に何も無いいつも通りの朝だ。ただ……………

『俺のとなりで気持ちよさそうな寝顔で寝ている少女がいることを除けば』だ。

「すう……………すう……………」

何故か夢の中で会った少女、『メア』が俺の布団の中で気持ちよさそうな寝息を立て、眠っていた。

メアの正体はあの悪夢に定評のあるポケモン『ダークライ』で、前世では俺のポケモンでかなり愛情込めて育てた記憶がある。

どうして、こんな可愛い少女になってしまっているのかは知らないが。

布団を被っているため顔しか見えないが、透き通るような白くて綺麗な髪、雪のような白い肌、首元には赤いマフラーのようなものがまかれている。

「んん……」

メアも目が覚めたのか静かに目を開ける。

「おはよう、メア。」

とりあえず俺はメアにおはようの挨拶をした。

寝ぼけて半分しかメアの目は開いていないが、その青く、透き通るような瞳はいつ見ても美しい、そう思えた。

「ま……すたあ……？」

メアは目をこすりながら俺の方を見て言う。

「ああ、そうだよ。」

俺は返事をした。

「あれ……………返事が返って来た……………。まだ私夢見てるみたいで
す……………」

そう言ってもう一度メアは布団に入って寝ようとする。

「おいおい、少なくとも夢じゃないと思うが……………」

「でも……………マスターとは……………会えないはず……………じゃ……………
？」

そう、本来なら会うことなどできない。ゲームの中のキャラクター
とそのプレイヤー。誰もが夢見る二次元の世界だ。ゲームのキャラ
クターに話しかけたって答えるはずがない、そのキャラクターはプロ
グラムされた通りに動くだけ、それが世の理だ。

メアは確かめるようにペタペタと俺を触る。

「あ……………れ……………？触れる……………。ゲーム内には来れるはずがないの
に……………！」

「そうペタペタ触るな、俺はちゃんとここにいるぞ？」

さつきまでの眠気はとれたのか目を見開いて俺の顔を見ていた。
とても驚いているようだ。

「やっと会えたな……………メア。」

俺は静かに微笑む。するとメアの目から一粒の雫が落ちる。

「ま、マスターだ……………！夢なんかじゃない……………！触れるし声も聞こ

える……！本物のマスターだ……！！

メアはそのまま俺の胸に飛び込んで来た。

「はぐらひ！」

そのまま俺は後ろに吹き飛び、ベッドから落ち、背中を着地した。

………
すごく痛いです。

「マスターああああ……！」

そのままメアは俺に抱きつく。メアは再会が嬉しくて気づいていないのかもしれないが、俺の肉体はまだ10歳で俺の方が少し背が低い。それに精神面においては思春期真っ只中の16歳だ。こんな美少女に抱きしめられて平静を装えるはずがない。メアは気づいていないだろうが抱きしめられている時にメアの胸の柔らかな感触が俺の理性を壊しにかかっている。メアの体型は中学生くらいと言えるだろう、それでも僅かに感じられる膨らみ、『むにゆり』という擬音がお似合いだろうか。さらに、追加攻撃で女の子特有のいい匂いが俺の鼻腔を通り、脳に直接リンクしてくる。今言えることはこのままだとヤバイということだ。前世では女子との交流が皆無だった俺にとっては精神的ダメージが大きすぎる。

「マスターあ……！夢のようですよう……！こうやってマスターと話
しができて、触ることができるとえ……！！」

メアは抱きしめる力を一層強める。女子のおかげなのかそこまでするくらいにまで強く抱きしめられている。あばばばばばばば……

そろそろ理性がログアウトしそうだ。そろそろ止めなければ……

「マスター、ずっと前から、マスターに言いたかったことがあるんです。」

メアは俺を抱きしめたまま耳元で艶めかしい声で囁く。

やめてください、これ以上やると俺の精神が死んでしまいm……

「好きでした。マスターと新月島で出会ったときからずっと……。」

俺の唇に柔らかい感触。

あ………なんか意識が朦朧としてきた……。体を動かそうとしてもうまく動いてくれない。このままだと……落ちる。

そして、メアが唇を離した後微笑んでこう言った。

「ふふっ、これからの生活が楽しみです♪……………ね？マスター？」

その直後、俺の意識がプツンと切れた。

「……………ん、ん……………」

目がさめると壁に寄っかかって長座体制で座っていた。

「あ、お目覚めですねっ、マスター♪」

「あ……………ああ……………」

隣にいる白髪で綺麗な青い瞳の少女、メアは俺と同じ状態で隣にい

て、俺の右肩に寄っかかって右腕を抱きしめていた。それに、再びメアの胸の感触が俺の理性を（ry

「大丈夫ですか？15分くらいは気絶したままでしたけど……。」

メアが心配そうな目で俺の顔を覗いてくる。

「いや、ちよつと思春期真っ只中の俺にはちとばかし刺激が強すぎたみたいだ。こんな美少女にハグされた挙句、キスマでされたんだぞ？」

そう言うと、メアの表情が少し暗くなる。

「ご、ごめんなさい……。」

「でもな……。」

「え？」

「お前の気持ちは十分に伝わったよ。ありがとな、正直すごく嬉しかったよ。」

すると、メアの表情が花が咲いたようにはあつと明るくなる。

「マスターああ……！！」

再びメアに強く抱きしめられた。今度はおれも強くメアを抱きし

め返してあげたのだった。

「なあ、メア。」

おれとメアはベッドに腰掛けて話していた。

「なんですか、マスター?」

「どうして人間の姿になってるんだ?」

そう、まず一番気になったのがそれだ。メアは今、紛れもなく人間の姿になっている。いわゆる擬人化というやつだ。ポケモンの擬人化なんて今まで聞いたことがない。

「うーん、それがよくわからないんですよー。気がいたらマスターの夢の中において、気がいたらマスターのとなりで目が覚めたんですもん。」

「そうか……」

「まあ、私は神様からのプレゼントだと思ってますけどねー♪」

メアはおれの腕に抱きついて嬉しそうな笑顔を見せながら言った。

「私はゲームの中にいたときから、マスターのことが好きでした。でも、想いを伝えることはできません。……でも、この世界にきて、この姿になってマスターにこうやって腕に抱きつきながら話すことができる。……私は今、幸せです。」

「そうか、それは俺もだよ。なんてったって一番愛情込めて育てたのはメアだからな。一度は会って見たかったさ。……女の子とは思ってなかったけどな。」

「知ってますか？性別不明のポケモンってほとんどが女の子なんですよ?。」

なんか今、とんでもない事実を知らされた気がする。

今は気にしないことにするが、その事実をこの目で知ることになるのはもう少し後のことであった。

「お前つてき、やっぱりダークライなんだな。」

「そりやそうですよ、一応この姿でも中身はポケモンですし。」

ダークライをそのまま女の子にしたような姿をしているからだ。

透き通るようで腰の部分までかかった白い髪、雪のような綺麗な白い肌、青くて水晶のような瞳、首には赤いマフラーのようなものが巻いてあり、服装は真っ黒なゴスロリの服、細くて綺麗な脚は黒いニーソックスで覆われている。

しかし、メアが街中を歩けば10人中15人くらいが振り向くだろう、そのくらい可愛い容姿なのだ。

「……………かわいいな。街の人たちにめちやくちやモテるんじゃないか？」

俺はメアの頭を優しく撫でる。メアは嬉しそうで気持ちよさそうな表情をしている。

「ありがとうございます。でも、私はマスター、あなたのものなので離れずにつつと傍にいますよ？それに私もマスターのことが大好きなので離れたくないです。」

「……………そうか。」

俺は相当な幸せ者らしい。前世では長い間一人にさせてしまっただけ寂しい想いをさせたというのにこんなにも愛してくれている。

「メア……………」

「これからもよろしくな。」

メアは嬉しそうな顔でこう返事をした。

「はいっ、マスター♪」

「…さて、まず親にどう説明しようか。」

そう、よくよく考えてみれば親はこの事実を知らない。気づけばこんな美少女と寝ていたなんて言って信じてくれるだろうか。それに、彼女は美少女でもダーククライだ。ミオではダーククライに関する事故が以前起きている、母さんや親父もそのことは知っているだろう。母さんと親父はそれを知った上で承諾してくれるだろうか……？

「お前の特性ってナイトメアだよな？」

「そうですよ？この『メア』って名前もナイトメアから取ってるんですから。」

そう言えばそうだった……。

「メアはナイトメアの制御ってできるか？」

「勿論ですよー!!制御くらいできないと人と暮らすなんてやっていけませんからねー!!」

メアは自信満々に答える…… なら大丈夫かな。

「よし、下に降りるぞメア。親に説明しに行く。」

「もし……ダメだったらどうするんですか……？」

メアが不安そうに聞いてきた。だが、俺の答えは決まっている。

「その時は二人で旅に出よう。」

メアは嬉しそうな表情で

「は、はいっ！」

そう返事した。

「よし、行こう。」

俺とメアは部屋を出てゆっくりと階段を下りていく。

まあ、ウチの親は器の大きさにおいては世界一だから多分許してくれると思うけどね。

第4話 日常

まず言わせてもらおう。

うちの親はきつと神様からの使いか何かなのだろう。

両親にメアのことを話しに行ったんだ。最悪、旅に出ることも考え
てた。しかし、

母さんの場合。

「あら、いつの間に彼女なんて作ってたの？」

「へー、この子ダークライなのね、よろしくね」

終わり。

親父の場合。

「可愛い子に悪い子なんていない!!」

なんて鼻血出しながら承諾してくれた。

終わり。

本当にいい親を持ったもんだ、つくづくそう思わされた瞬間だっ
た。

「マスターのご両親って寛大な方々なんですねぇ。」

「だろ？確かに器は大きいと思ってたけどここまですと、逆に怖いからだよ。」

『ふたりともー、ご飯よー!!』

下の方から母さんの声が聞こえてきて、いい匂いがする、今日の夕飯はなんじやろな。

「え、もう夕飯か。」

時計をチラッと確認してみると、短い針が7を指していた。

「いろいろありすぎてあつという間な1日でしたね。」

「ああ、そうだな。」

俺とメアはそんなことを話しながら下のリビングに降りて行った。

「わあ、鍋ですかー！」

「ほう、キムチ鍋か…… やったぜ。」

俺は基本鍋はあまり好きではない。キムチ鍋は除くが。キムチ鍋はいい感じの辛さで飯が進むから許す。

「親父ー、飯だぞー。」

「……ん、ああ。」

親父は昨日の夜中から漁に出ている、昼過ぎくらいに帰ってきた。寝てないらしいからさつきまでソファで仮眠（4時間）を取っていたのだ。

「お父様、お疲れ様ですっ！」

メアが満面の笑みで労いの言葉をかける。

「ッ!!」

「おい親父、鼻血出てんぞ。」

俺は親父に箱ティッシュを投げつける。俺はメアの背中しか見えなかったが、親父が献血レベルの量の鼻血を出すなんて……どんな笑顔だったんだろうか、すごく気になるところだ。

「ほら、あなた、食べますよ?」

「あ、ああ。すまんすまん。」

親父はティッシュを両鼻に突っ込み、ソファーからゆっくりと起き上がる。

俺たちはテーブルに座って親父が来るのを待っていた。

因みに席割りは、俺の隣にメア、メアの前が母さん、母さんの隣に親父が座るようになってる。

親父が「よっこらせ」と椅子に座る。

「よし、食べるか。」

「「「いただきます!!」」」

「鍋を食べるのは初めてですー!!」

「そうか、たくさん食べるよ?」

「はいっー!」

メアは鍋から具材をどんどん取って食べていく。ものすごい食べっぷりだった。……あれ、メアって『食べるのが好き』だったっけか?なら、体力が高いのかな?

まあ、美味しそうに食べているから考えないことにしよう。

俺も具材を取って食べていく。

「……美味しい。」

鍋も終盤となり、ちゃんぽん麺を入れてる時に母さんが思い出したように言ったら、

「そう言えば、メアちゃんの寝る部屋を作らないといけないわねえ。」

確かに。今朝は俺と同じ部屋で目が覚めたが家族と認められた以上メアの部屋を作っておける必要がある。

「大丈夫ですよ、マスターと寝るので。」

「うん………は?」

え？今何だった？

メアの口からとんでもない言葉が発せられた気がするんですが……。

「いいですよねっ？マスター？」

え？

「は、確かに今朝は同じ部屋だったけどさ、無理して俺と寝ようとしなくてもいいんだぞ？空き部屋もあるし。」

やめてくれ、毎日同じ部屋で寝るのは精神的にくるものがあるから……。

すると、メアは母さんの方を向き、

「マスターもいいそうです。」

「うえっ？」

「そう、良かったわね、メアちゃんと毎日寝られるわよ？」

「……」

うちの親は少し寛大すぎるらしい。さすがにこれを許可するのはどうかおもうが……。ソレニオレキョカナンテシテナイシ……。

親父においては羨ましそうな目でこっちを見てるし、変態かよ。

「ごちそうさまでしたー！」

「風呂沸いてるから先に入っただいよー！」

「メア、先に入っただいよー！」

「いや、マスターお先にどうぞ。」

「そうか、それじゃお先に入らせてもらおうとするわ。」

俺は寝巻きを持って風呂場に向かった。

その時俺は何故気付かなかったのだろうか。どうしてメアが風呂を先に譲ったのか……。

「ふいー、気持ちいいー！」

俺は頭と体を洗い、湯船に浸かる。今は冬でここは港町だから寒い潮風がビュンビュン吹いているのだ。だから、風呂は俺にとって天国なのだ。

「…… いやあ、まさかメアもこっちに来てるなんてなあ……。」

転生した理由はわからないが、こっちに来て良かったと思う。裕福な家庭に生まれ、メアと再び会うことができたのだから。

「メアってこんな可愛い女の子だったんだなー、画面越しじゃわからないこともあるんだなあ……」

「少し暑いな……窓を少し開けるか……」

湯気も濃くなつて来て、暑苦しくなつて来たので窓に手をかけようとした時だった。

「呼びましたか？ マスター？」

「んおあ？」

風呂の中でうつらうつらしていると、（↑危険だから絶対に風呂場では寝るなよ!!）急にメアが目の前に現れた。

「ぶっ!!」

驚きのあまり壁に思い切り頭突きしてしまった。

「大丈夫ですかマスター？」

「ななななんでメアがここにいるんだよ!? 一応、予測して鍵も閉めて来たのに……!!」

メアが風呂場に乗り込んでくることもあらかじめ想定していたので風呂場の入り口の鍵はしっかり閉めていた。
すると、メアが超ドヤ顔で言った。

「ふふん、施錠なんてこの私には通用しませんよ！私はこの姿でも
ダークライなんですっ!!影になって風呂の扉の下から入って来ちゃ
いました!!」

そうだった… 映画でもあつたけど、ダークライって影に入れるん
だった…。ん？俺、詰んでね？

つまり、施錠は無意味ということはずなわちいつでもメアは入って
来れる。

そして、俺は今とんでもない事実気づいた。

現在進行形でドヤ顔を見せて、浴槽に浸かっているメア。俺が目の
前にいるのにも関わらず、タオルを巻いていないのだ。

「おおお前… タオルは…!?」

俺は顔をそらして、メアに聞いた。メアはキョトンとした顔で

「え？なんでタオルがいるんですか？」

メアはこの状態がどんなに恐ろしい状態なのかまるで気づいてい
ない。湯気さんのおかげでR—18タグは必要なさそうだ。

メアの真つ白なもちもちした肌が露わになってるが、うつすらし
が見えなかった。窓を開けなくて良かったと真底思った。なるほど、
湯気が多かったのはこの伏線だったんですね!!湯気さんナイスです
!!

「さて、そろそろ上がるとするか…」

俺の理性が壊される前に退散することにした。

「ええー!? マスター上がるの早くないですか!?!」

「施錠は無意味ということは今回の件でわかった… 入ってくるなど無理に言うつもりもない、だがな…」

「今度から体にタオルを巻いてから来ること!! いいな!?!」

俺はそう言ってこの天国のような地獄を後にした。

『ぶー』

体を拭いていると浴室からメアの不貞腐れたような声が聞こえた。今回は俺は悪くない、悪くないんだ。そう言い聞かせた。

その後、俺はリビングでテレビを見ていた。

「この時間はニュースしかやってねえじゃん。つまんねーの。」

現在時刻は20:56、大抵、9時のバラエティの前のニュースの時間だ。

「……………寝るか。」

俺はテレビをつけたまま二階の俺の部屋に上っていった。

「明日は暇だな、どっか出かけようかな…」

しかし、ミオシティは港町で店なんてほとんどなかった、出かけるならコトブキシティまで行く必要があった。

『ガチャ』

「マスター！なんで途中で出ていっちゃうんですか?！」

「……っ!」

そこにいたのは水色に水玉模様入りのパジャマを着ていたメアだった。

「…… どうしたんだよ、そのパジャマ…!!」

「いやあ、別にいつもの格好のままでも良かったんですけど、寝るということなのでパジャマ風に変身してみました!」

色々聞きたいことがあったが、そんなことはどうでも良かった。

「メア………」

「はい?」

「…………… すごい可愛い…!!」

俺は親指を立てて賞賛の言葉を述べた。ダークライは黒しか似合わないと思ってたが、まさか水色、水玉模様のパジャマがここまでマッチングするなんて…!!最高です。

「えっ、ほんとですか…………… !何だか照れますね… / / /」

メアも頬を赤くして視線を背けているが、嬉しそうだ。

その後、ベッドに座って明日のことを話していた。

「なあ、明日シンジ湖に行かないか?」

「え? いいですけど、どうしてですか?」

「いや、コトブキシティでショッピングでも良かったけど、何となく自然の多いところに行きたくなってな、ピクニック気分でサンドイッチでも作って行こうぜ。」

「そうですね、マスターとのデートはもう少し後っていうことで、明日はピクニックにしましょう!!」

ん、デート…?」

「あ、ああ、そうだな。よし、今日はさっさと寝るぞ。」

「はーい、電気消しますね。」

メアは壁に付いている電気のスイッチを押した。

「おやすみ、メア。」

「… おやすみなさい。マスター。」

俺とメアはゆっくりと眠りにつ……………くことができ
ない。

「なあ。」

「はい？」

「抱きつくのやめてくれないか？当たってるんだが。」

そう、がつつり俺の背中に抱きつかれている。メアの慎ましい二つ
の丘が俺の背中に当たっていて、気になって眠りにつくことができな
い。

「嫌ですよく、風呂でダメならせめて布団の中だけでもいいじゃない
ですか。」

「………… わかったよ、おやすみ。」

「おやすみなさい… マスター。」

因みにメアが気になって12時くらいまで眠りにつけなかったこ

とは内緒ってことで。

第6話 ナナカマド博士

「ん……………もう朝か……………」

俺は目が覚めた、時刻は6時で普段より起きるのが1時間ほどは早い。早く起きたのには理由があった。

「んう……………ますたあ……………むにや……………」

メアはまだ目が覚めておらず寝返りをうっている。めちやくちや可愛いです。

「さて、準備するか。」

俺はそろそろと下に降りて、キッチンに向かう。

そう、ピクニックに行くということは昼ごはんの準備が必要だ。だからこうやって早起きして準備しているのだ。

「……………ピクニックと言ったらサンドイッチだよなー。」

あらかじめ買って置いてもらったサンドイッチ用のパンを取り出した。

「ゆで卵作らないとなー。卵どんくらいあるんだろ。」

俺は冷蔵庫を開けて卵を確認する。

「うん、結構あるな、5個くらい使ってもいいか。」

そう言っただけは沸かしたお湯の中に卵を放り込んだ。

あれ？作り方合ってたっけ？

そのあと、ハムを半分に切って、レタスの間に挟んでマヨネーズをかけたり、いちごを切ってホイップクリームをかけてデザート用のサンドイッチを作ったりした。気づけばゆで卵も茹で上がってたので

切り刻んでボールの中に入れて、マヨネーズと一緒に混ぜたものをパンに挟んでタマゴサンドを作った。

「ふいー、かんせーい。」

気づけば日も上って来ており、7時を過ぎていた。因みに今日は日曜日なので私の寛大なる両親様はお目覚めになってはおられない。さらに言えば、ここでむやみに起こしに行ったりすると怒りに触れて生きて帰ってくることはできない（実体験済み）

メアが『食べるのが好き』と読んで、バスケット二つ分のサンドイッチを作っておいた。喜んで全部食べてくれると嬉しいが……。

「どうしようか、二度寝しようかな……。」

普段より1時間も早く起きたので眠気がぶり返して来たのだ。どこまでデリケートな身体してんだよ俺……。

『がちや』

リビングの扉が開いた。

「ふああ、おはようございますー、ますたあ……。」

メアが7時ジャストで下に降りて来た。まだ眠いのか欠伸をしながら、トロンとした目をこすっている。

「ああ、おはようメア。」

「マスター何してるんですか？朝早くに起きてましたけど。」

「ああ、これを見てくれ。」

俺はさつき作ったサンドイッチの入ったバスケット二つをメアに見せた。

「わあ!!サンドイッチですかー!!」

メアがぱあつと嬉しそうな表情を見せた。

「つて、結構たくさん作ってますね、二人で食べきれますかね？」

「さあな、俺は敢えて朝食は食わないよ。メアはどうする？」

「それじゃあ私も遠慮しときますね。」

そのあと、ソファアに座ってテレビを見ていた。朝なので、まだニュースしかやっていなかった。

『速報です。先日、行われましたシンオウリーグでカンナギタウン出身のシロナ選手が史上最年少でチャンピオンとなりました。新チャンピオンのシロナ選手は「勝っちゃいました☆」と驚きの表情を見せておりました。…… 続いてのニュースです。』

ふーん、ここで原作と合わせて来たか……。

「すげえなあ、シロナさん。俺もいずれ戦って見たいなあ。」

「そうですね、私も戦ってみたいです。」

「近いうち俺たちも旅にでる。その時の目標は決まったな。」

「はい。」

俺は拳を強く握る。

「絶対シロナをぶっ倒して俺がチャンピオンになってみせる。」

「もちろんです!! 私も全力でサポートしますよ!!」

こうして俺たちの目標は決まり、結束を強めたのだった。

『続いてのニュースです。シンオウ地方のナナカマド博士がポケモンの擬人化について発表いたしました。』

「え?」

思わずテレビ画面に視線を向ける。

『えー、ゴホン! みなさんこんにちは、ナナカマドポケモン研究所のナナカマドでございます。今回はポケモンの擬人化について記者会見を開かせていただきました。最近ごく稀に野生のポケモンの中に人とほとんど同じ姿をしているポケモンが発見されました。最初はただの変人かと思いましたが、精密検査の結果、ポケモンと同じ構造となっていることが発覚いたしました。次に擬人化したポケモンは知

能が高く、喋ることができると人にも紛れてもほとんど違和感がなく、人とポケモン自由に変化することができます。また、先日チャンピオンとなったシロナ選手のポケモンのガブリアスですが、今朝擬人化の現象が確認されたそうです。今回の件でトレーナーのポケモンも擬人化することが判明しました。条件についてはですが、まだ詳しくはわかっておりません。わかり次第会見でお知らせしていく次第でございます。』

「なあ、メア。」

「はい。」

「元の姿に戻れるか？」

「え、戻るって……どうやるんですか？」

「え、わからないの？」

「は、はい。」

多分、ナナカマド博士が言った通り、メアはダークライが擬人化したポケモンだろう。博士が言うならば、元の姿に戻れるはずだが……… 本人曰く『戻れない』とのこと。

「うーん、まあ、悩んでも仕方ないか。そろそろ着替えて準備するぞー。」

「私はもう着替えていますよ。」

「えっ？」

メアはいつの間にかいつもの黒いゴスロリの服に変わっていた。

「どうやって着替えたんだ？」

そう、昨日パジャマ服に変わってるときから気になっていたことだ。取り敢えず聞いてみた。

「私が来ている服って、なんというかー、えーつと、これ服じゃなくて毛皮みたいなやつですかねー。よくわからないです。」

「ふーん、楽な身体してるんだなあ。それじゃあ着替えてくるから待っててくれ。」

「はい。」

俺は二階の自分の部屋に戻って、服を着替えた。

服装は湯煮黒で買ったヒートテックの上に黄色いパーカーにまあまあ暖かいジーンズを履いた。ファッションに疎い俺はこれが限界だった。

最後に同じく湯煮黒で買った、うるとらなんちゃらダウンってやつを上羽織った。軽くて暖かいのが売りだそうだ。

下に降りると玄関前でメアが待っていた。

「マスター！行きましたよっ!!」

「ああ、行こうか。」

外に出て、コトブキシテイに行くため、218番道路の方へ向かった。

「寒っ。」

まだ午前中のためか、少し肌寒かった。

すると、メアが俺の腕に抱きついて来た。

「これで暖かいですねっ♪」

「ああ、そうだな。」

……………あれ、218番道路からコトブキシテイに行くのって、なみのりが必要なんじゃない？

そう、原作通りに従うと、なみのりが無いと渡ることができないはずだ。

「あれ？橋が架かってる……………」

何故かコトブキシテイと218番道路を繋ぐ木製の橋が架かっていた。

「まあ……………いいか。」

俺たちが橋を渡った瞬間だった。

『じゃぼおおん!!』

釣り人「うおあああつ!!?」

「えっ?」

渡り終えた瞬間後ろの橋の一部が沈んだ。

ああそうか。

俺は理解した。

なみのりで渡らないといけないのは俺たちの所為なんだなって。

コトブキシテイには特に用事は無かったのだが、ポケツチの会社の前を通ると社長の人と会い、ポケツチをもらった。

第7話 シンジ湖で

「結構暗いですねー、少し怖いです。」

「あともう少しで出るはずだ、頑張ってくれ。」

俺たちは201番道路を抜け、シンジ湖の方へ繋がる森を抜けていた。結構長く木が生い茂っていて結構暗い。

「お、出口が見えてきたぞ。」

数分間、森の中を歩いていると開けた場所が見えて来た。出口である。

「うっわ、広っ!!」

俺たちは森を抜けてシンジ湖に出た。ゲームではそこまで広いマップではなかったはずだが、実際に見てみると向こう岸がうっすらとしか見えないくらい広かった。

(確か、シンジ湖にいてのってエムリットだったよなー。一度でいいから見てみたいわー。)

そんなことを思いながら湖の真ん中にある小島を眺めていた。

エムリットはやりののはしらでのイベントを終了させないと会うことが出来ない、しかも、エムリットは他の二体、アグノムとユクシー

とは違い、シンオウ地方のどこかに逃げてるというすごく面倒くさいことをするポケモンなのだ。それと結構かわいい。

「まあーすたあー!!!」

「ん？」

メアが大声で俺を呼んでいるので振り向いた。

「あそこの木の陰で一緒に食べましょー!!」

メアがバスケットを抱えてこっちの方に手を振っていた。昼食は早くないか? と思い、ポケツチを確認すると既に12時を回っていた。ナナカマド博士と話すぎたおかげでかなりの時間が経過していたらしい。井戸端会議はよろしくないな。そう感じて反省した俺だった。

「よし、今から行くよ。」

俺はメアのいる木陰へ足を進めていった。

私の名前はエムリット、一応、感情を司るポケモンって言われてるわ。

……感情いじったことないけど。

このシンジ湖の管理者として湖の真ん中にある洞窟で暮らしているの。でも、ここに来て何も無いわよ？

だって、周りからは認識されないように透明になってるんだもの。

私はこれでも伝説のポケモンとされていてたまに私を捕まえようとする人間もいるわ。他のポケモンたちは人間に従って戦わさせられたりしてるけど、本当にそれでいいのかしら。私は絶対にお断りだけどね。人間みたいな醜い生き物に従うなんて吐き気がするもの。

でも、偶に……ごく稀に見かけるのよね、私たちのことを純粋に愛してくれてそのポケモンたちもその人間のことを心から愛し、慕っている。いわゆる相思相愛ってやつかしらね。そんな人間なら主人として従ってもいいかもね……そういるはずないけど。

私は普段どおり透明になって湖のまわりを飛んでいた。ここには色んなポケモンがいて、楽しそうに暮らしている。ここは人間の手によって侵されていない場所、きつとポケモンたちにとって一番住みやすい場所なのでしょう。冬なので冬眠しているポケモンもいるのか少し寂しい感じもするけど。

すると、入口の方から誰かが入って来た。一人は黄色いパーカー？とかいう着物をきている男の人間、それにもう一人は白くて長い髪をひびいて、黒いよくわからないヒラヒラしたものを着ている女の人間だった。

私はそこで違和感を感じた。あの女の人、何かがおかしいのだ。よくわからないが何か普通の人間とは違う感じがした。どちらかといえばそう、私たちポケモンと雰囲気似ているのだ。

男の人は間違いなく人間だ、特に感じるものはない。その男の人は湖の方をみて何か考えているようだ。

私が気になっている女の人はバスケットを抱えて木陰の方へ駆けて行く。そして、バスケットを木のそばにおいて一言。

「ふふふ…運がいいことにブルーシートのような引くものはありません。つまり、マスターと寄り添う形を取ることができるってわけです…！しかも、寒さのせいのできるので合法ってことになるのです…！！ふふふふふ…」

怖い。企んでることはしようもないのに怖い。

「まあーすたあー！！！」

そして、さっきのドス黒い笑みが無かったかのような明るい笑みで手を振っている。

「あそこの木の陰で一緒に食べましょー！！」

男の人も気づいたのか返事を返して木のそばへ向かう。

「おまたせ、って木陰って寒くないか？日差しも暖かいから日向で食べようぜ。」

男の人は当然日向での食事を提案した。返答は……？

「すみません、私、日差しって苦手なんですよ。」

うん、明らかに嘘だ。だったら、ここまでわざわざ来るはずがない。

「……そうか、それじゃ木陰で食べよう。」

承諾したあー！ー！！男の人！！もう一度考えてみて！！さっきまで一緒に歩いて来てたんですよ！！日差しガツツリ当たってたじゃないですか！！気づけ！！彼女の発言が矛盾していることに！！

私は心の中で必死に訴えかけていた。

すると、男の人は女の人の隣に座って一言。

「別に嘘つかなくてもいいだろ、一緒に食べたかったらそう言うってくれればいいのに。」

あ、気づいてたのね。心の中でホツとしている自分がいた。

「なあ。」

「はっ？」

「寒くないか？そんな格好で。」

確かにそれは言えている。特に足の部分なんかにおいては膝より上の部分くらいまでしか丈がない。寒くないわけがない……………ハッ！まさか!?

「そんなことありませんよー!!ダークライの特防なめないでくださいよー!」

すげえどや顔で言っているが、よく見たら震えているのがわかる。

ん？ダークライ？

男の人は少し考えたあと一言。

「……………ダークライってさ、そこまで特防高くないよな?」

「あ、高いのは特攻の方でした☆」

ええ!?ダークライって、あのダークライ!?

あの悪夢を見せることに定評のあるあのダークライのこと!?

わたしは驚きを隠せなかった。人付き合いが皆無のはずのダークライが最近流行りの擬人化をしていて、すごくトレーナーに懐いているのだ。

「とゆーわけで寒いので抱きしめてくださーい!!」

ハッ!!これも狙いか!!これも狙ってたのかダークライ!!

「はーはー。」

トレーナーの方も呆れながらも優しく抱きしめてあげている。

「んふふー、暖かいです♪」

「そろそろサンドイッチ食べるか。」

「そうですね。」

この世に生を受けて、何十年も経つがこのような人間は初めて見た。言葉に表せないような普通の人間とは違う何かを持っているのだ。

気になる。

もっと知りたい。

この人間のこともっと知りたい。

でも、私が姿を現したら…

私が姿を現したらあの貪欲に満ちたあの人間たちのようになってしまうかもしれない。

怖い。

そうなってしまふことが怖くて姿を現す勇気がない。

「……………なあ、そこにいるんだろう？」

……………え？

トレーナーがぼそりと呟いた。

「さつきからすげー視線感じるんだけど、いるなら出てこいよ。」

え？…私に言ってるの？

「あれ？いないのか？確かこの辺から視線を感じただけど。」

『ガシッ』

あつ、頭掴まれた。バレてたのね。

「あ、やっぱいるじゃん。」

「流石マスター、見えない姿を気配で察知できるなんて!!」

『離してくれませんかね?』

私は素直に透明化を解いた。私としては話をしてみたかったので一石二鳥だった。

「お、喋れるのか。確かお前は…………… エムリット、だっけ？」

「ええ!?! エムリットって確か伝説のポケモンの一匹でしたよね!?!」

『まあ、一応そういうことになってるわね。』

「やっぱあれか、俺たちへの奇行がどうしても気になったのか。」

「えっ、奇行!？」

ダークライは驚いた表情をしているが、あれは策略に策略が重なった奇行にも見えた。

『まあ、それもあるけど。』

「けど?」

トレーナーが首をかしげる。

『トレーナー、あなたのことが気になったから………かしらね。』

「ほう、俺のことか。あ、俺の名前はハルトね。」

『あ、うん。』

「ふふふふ………」

隣のダークライが傾いて震えている。寒さで震えているわけではなさそうだ。しかも、不吉な笑みで笑っているあたり、何か私やらかしたらしい。

「ふふふ、面白いですね。今の発言はあれですか?私に対する宣戦布告と受け取ってもよろしいのですね?」

『えっ!?!』

ダークライは右手に黒いエネルギー弾を生成する。よく見るとダークライの青い目からハイライトが消えていた。

「マスターとラブラブしているのを見てたならわかると思いますけど、私特攻めちやくちや高いんですよ。それに私はあくタイプであなたはエスパークタイプ。負ける要素はゼロに近……いや、ゼロです。」

『えっ、ちよ、ま……!!』

「因みに手加減なんかしませんよ。勝負を申し込まれたなら全力でお相手する、それが礼儀つてもんですから。」

「マスターは私の物です……ツツ!!」

ダークライは私に向かってエネルギー弾を放つ……

「なーにやってんだバカ。」

『ゴスツ』

「ぶっ!?!」

放つ前にトレーナー、ハルトのダークライへのチョップで仲裁してくれた。死ぬかと思った。

『あ、ありがとうトレーナー。本当に死ぬかと思ったわ……。』

「こつちこそ悪かったな、メアはたまにこーやって嫉妬するんだよ。」

別に何もする気は無いのにな。」

「ふええ、痛いですよお、ますたあ……………」

ダークライが頭を抱えてうずくまっている。すごく痛そう。

「ごめんごめん、ちょっとやりすぎたわ。」

「それじゃあ、頭撫でてください。」

「あーはいはい。」

トレーナーは嫌がる様子もなくダークライの頭を撫でてやっている……………。すごく羨ま……………。ゲフンゲフン。

「話戻すけどさ、何で俺のことが気になったんだ？俺、いたって普通の人間なんだけど。特に特徴も何も無い平均平凡な少年なんだけど。」

『いや、さつきから見ただけで、あなたは他の人間とは何かが違うわ。私にもよくわからないけどね。それで気になって気づいたらそばにいたのだけけど。』

そう、最初はある程度の距離のあるところで見ただけなのに気がついたらほぼゼロ距離の場所にいたのだ。

「ふーん、伝説のポケモンって割と物好きなんだなー。あ、サンドイッチ食べるか？」

そう言っただけでサンドイッチの中からサンドイッチを一つ取り出して差し出してきた。

『ええ、いただくわ。』

「ほら、メアもどうぞ。」

「わーい！マスター手作りのサンドイッチ最高ですー!!」

えっ、これって全部トレーナーの手作りなの!?!にしてはかなり量がある気がするんだが………。

『はむ。』

一口食べて見た。見た感じたまごさんど?っっていうサンドイッチらしいけど。(食べたことないからあってるかどうかわからない。)

『ふわああ…♪』

自然と声が漏れた。卵とまよねーずの分量が絶妙でうまく混ぜられているおかげか、味にクセがなくすごく美味しい。

「どうだ?美味しいか?」

『はむ、すごく美味しいわね。』

「そりやあなんてったって私のご主人様ですから!!」

メアがサンドイッチを食べながらすごいどや顔でこつちを見ている。お前が作ったわけじゃねーだろ。なんかすごく腹が立った。

『ね、ねえ………』

「ん？どうした？」

『も、もうちょっと貰ってもいい？』

こんなに美味しいものを食べたのは生まれて初めてだ。もっと食べたいと思った。

「ああ、沢山あるからいくらでも食べていいぞ。」

『ほ、ほんと!?!』

「ああ。ほらどんどん食べろ。」

『うん!!』

多分、今の私はここ最近では一番の笑顔を見せていると思う。

「おーい、お前らも見えてないでこっちに来ていよー。一緒に食べよーぜ！」

トレーナーが話している先には木陰に隠れているポケモンたちがいた。ムツクルやビツパ、コリンクなどたくさんの野生のポケモンたちがおそるおそる出てきた。まだ、表情が固い。警戒しているようだった。しかし、トレーナーは気にすることもなく、

「ほい、沢山あるからどんどん食べていいぞー。俺のサンドイッチはあのエムリットさん公認だからな、味は保証するぜ。」

すると、野生のポケモンたちは気を許したのかサンドイッチを取り、食べ始める。美味しかったのか食べるペースが速くなった。

「おー、お前らも食べたいのかー。よし、何個か持って行ってやるから待ってな。」

トレーナーの視線の先を見ると湖に住むみずタイプのポケモンたちもあつまっていた。トサキントやコイキング、ギャラドスまでいた。しかし、トレーナーは恐れる様子もなく紙皿に何個かサンドイッチを入れて持って行ってあげる。みずタイプのポケモンも飛びつくようにサンドイッチを頬張っている。トレーナーは優しい笑顔でポケモンたちを撫でてあげる。

何よりすごいのがこんな短時間でこんなにたくさんポケモンたちと打ち解けてしまったということだ。野生のポケモンは警戒心がとても強くそれを解くためにモンスターボールで捕まえたりしている。だが、トレーナーは優しくポケモンたちに接してあげる。そうすることで自然とポケモンたちも心を開いているのだ。

トレーナーを後ろから見守っていると。

「……………すごいですよね。マスターって。」

ダークライが呟いた。

「すぐに誰とでも人、ポケモン関係なく打ち解けてしまう、これは一種の才能だと思うんです。」

「私もその中の一人ですよ。昔は新月島で一人でした。私は一人が好

きだと思つてたんです。でも、そんなことは無かった。」

「マスターは言つてくれました。『一人で過ごすのもいいかもしれな
い。でも、俺は一人で生きるなんて無理だよ、寂しくてたまらなくな
る。側から見たら強がつて一人を好きがつてる人もいる、でも、その
孤独から抜け出した時、仲間、友達といえる存在が出来た時、今まで
味わったことのない幸せを感じる事ができると思うんだ。』そう言
われて私は気づいたら目から涙が溢れていました。そして、気づいた
んです。私も独りが寂しかったんだなつて。すごく共感できたんで
す。そして、思いました。マスターは孤独の怖さを知っている。この
孤独を味わつてほしくない、そう言つてると思つたんです。」

「マスターは優しいんですよ、ただ純粋に。その人のことを想つてく
れる。そんなマスターに私は一目惚れしたんです。」

「私はマスターのことが大好きなんです。だから、わたしはずつとそ
ばにいてあげるつて決めたんです。」

「これが私ができる精一杯の恩返しなんですよ。」

そう言つてダークライ、いやメアはトレーナーのもとへ歩みだし
た。

『優しい……………か。』

私も生まれて独りだった。いや、友人はいる。でも、会うのは一年
の中でも数回だけだ。それにシンジ湖の管理も任されていて、周りに
認識されないようにしながら湖の平和を守っていた。充実している
ようで心の中は満たされたいなかった。まるで、ぽっかりと穴が開い
たように。

私は求めていたのだ。想ってくれる存在を、想える存在を。彼のよ
うな優しさを求めていたのだ。私は彼と話しただけで心の中が満た
された。それに彼を見ていると心臓の鼓動が早くなり、胸の奥が苦し
くなる。

ポケモンがこんな感情を抱いてもいいのだろうか。

交わるはずがないのに、私は人間にこんな感情を抱いてしまった。

『…………… まあ、彼なら許してくれるわよね。』

私は彼、ハルトのことを一人の女の子として好きになってしまった
のである。

「よし、バスケットの中は全て空になったな。」

「んー、ポケモンたちにも大人気でしたね、マスター。」

「みんな美味しそうに食べてくれてよかったよ。ん、そろそろ帰ると
するかな、もう四時だし、日が沈んでしまう。」

ハルトはバスケットを抱え上げて帰る準備をする。

「そろそろお暇させてもらうわ。今日はありがとな、エムリット。」

ハルトはそう言って森の中へ入ろうとする。

『あ、あの!!』

気づいたら無意識に口が動いていた。彼を呼び止めていた。

「どうした?」

彼は振り向いて私の方を見る。

『た、偶に会いにきて欲しいんだけど………だめ………かしら?』

彼に会いたい。こんな縁で終わらせたくない。そんな色々な思いが交錯していて、つい口から出てしまった。

「そうだな、暇があったら会いにきてやるよ。」

『ほ、ほんと!?!』

「ああ、もちろんだ。メアも勿論来るよな?」

「はい、私はずっとマスターのそばにいますので!!」

「そんじや、今度こそ帰るとするわ。またな、エムリット。」

そう言つて彼は森の奥へ消えていった。

その夜、シンジ湖の洞窟内で。

「私ね、面白い人間を見つけたの。」

『へえ、あまり人間に興味を示さない君がねえ。』

『…………… どうでもいい、寝る。』

「流石ユクシーね、周りへの興味が相変わらず皆無だわ。しかももう寝ちやったみたいだし。」

『それはいいよ、いつものことだし。で、その人間について教えてくれるかな。』

「彼、ポケモンたちと仲良くするのが上手なの、1日で湖にいるポケモンたちと打ち解けてしまったのよ。」

『へえ、そんな人間もいるもんなんだね。』

「それに彼、誰にでも優しく接してくれるのよ、私が姿を見せても同じ

ように話してくれたわ。」

「私ね、そんな彼に一目惚れしちゃったみたい。」

『ほお、まさか君がここまで感情移入しちゃうなんて、ますます興味が湧いてきたよ。』

「ふふ…。」

『彼ってどこに住んでいるのか知っているかい？』

「確かー、ミオシティって言ってたわよ。どうする気なの？アグノム。」

『決まってるじゃないか、ボクも彼に会いに行くのさ。話してみたくなったんだ。』

「…そう、多分あなたも気にいると思うわ。」

『そうか。ボクも明日が楽しみになってきたよ。それじゃボクも明日に備えて寝るとするよ。おやすみ。』

「ええ、おやすみアグノム。」

アグノムとの会話の後、私は静かに月を見上げていた。

「明日、ハルトはどんな反応をしてくれるのかしらね……。ふふっ」

月の光に照らされているシンジ湖の真ん中でエムリットは静かに微笑んでいた。

第8話 帰路にて

201番道路

「やべー、早く帰らねえと日が沈んじゃうよ!!」

夕方で空が赤くなっていたので、少し急ぎ足で帰っていた。

「暗くなっても大丈夫ですよ!!私、夜でも見えるんで!!」

「いや、そーゆー問題じゃねえだろ!!早く帰らねえと母さんに怒られるんだよ!!」

あの神様のお怒りに触れたら外に閉め出されてしまう。それだけは嫌だ。

「あ、それなら急がないとすね!!」

メアも納得したらしく急いで帰ろうとする。その時だった。

『ドンッ!!!』

走っていると誰かにぶつかった。あ、なんか心当たりがあるぞ?…この展開。

「なんだってんだよオオーッ!!」

うん、この展開知ってるわ。

ぶつかって目の前に倒れてるのは金髪でオレンジ色の縞模様の少年……………あれ？なんかちっちゃくね？

「おつ、お前!!急に出て来やがって!!罰金100万円だからな!!」

このテンプレのセリフを聞く限り本物らしいんだけど……………もしかして俺より年下？

「あれ、お前って今何歳だ？」

「お前じゃないーっ!!俺にはジュンって名前があんだぞーっ!!」

知ってる。

「はいはい、ジュンって今何歳だ？」

「俺は8歳だ!!2年後にはポケモンリーグの頂点に立ってる男だ!!」

ふーん、二つ下か。↑現在10歳。

「お前ー!!さっきから見下すような目で見てるけど、まず言うことがあるだろーっ!!」

ジュンは腕をブンブン振りながら言うてる。

「ふふふ…… さつきから黙って聞いてれば、なんですかその言い草は。」

「お前、何を… むぐお!?!」

「はっ!?!」

気づけばメアがジュンの顔面を掴んで持ち上げていた。メアの中にはハイライトが無い。うん、めちやくちや怒ってるよ。

「先に言うことって、先に言うことがあるのは貴方の方ですよねえ…!!」

「いぶあい!!いぶあい、ふふいふあふえん!!ほふふあふあふつふあつふああ!!」

「んー?何言ってるかわからないですねー?」

おそらくジュンは謝罪の言葉を述べているのだろう、メアは不吉な笑みを浮かべながら掴む力を強めていく。

「はいはい、すとーつぶ。」

「むぎゃん!?!」

俺は再びメアの頭にチョップを食らわせた。それと同時にジュンも開放された。

「し、死ぬかと思った…!」

「ごめんなー、ぶつかった俺も悪かったよ。だから今日は早く帰るな。」

俺はジュンの頭を撫でて上げる。

「うっ、うるせえーっ!!」

ジュンはめっちゃ涙目でこちらを睨んでいる。

「おっ、お、お前にやんか、お前なんか、大嫌いだーっ!! うわああああああああん!!!」

ジュンは泣きながら走り去って行った。8歳とは思えない精神年齢の低さである。(推定精神年齢：4才)

しかも、噛んでるところが地味に可愛かった。旅に出て会った時は虐めてやろう。

「さて、ほら、帰るぞメア。」

頭を抑えてうずくまっているメアを起こす。

「ま、ましゆたあ…、さつきより強くないですか…?」

「気のせいだろ。ほら、暗くなる前に帰るぞ。」

俺は手を差し伸べる。

「おぶってください。」

「無理だ。今はお前の方が若干背が高いんだ。俺の成長期を信じて待つことだな。」

「むー、絶対背伸ばしてくださいよ〜?」

メアは若干しかめっ面で立ち上がる。

「善処する。」

「なら期待して待ってますねマスター♪」

そして、マサゴタウンを抜け、コトブキシテイになんとか戻って来たのだが、一つ問題が発生した。

「どうやってミオに帰ろう……………」

そう、今朝栈橋を自分たちが壊してしまったため、帰る手段が無くなってしまったのだ。

そうこうしてるうちに日も沈んできて辺りが暗くなり始める。

「と、とりあえず！栈橋のところまで行って見ましよう!!もしかしたら直ってるかもしれないよ!!」

しかし。

「…………直ってねえ。」

ヤバい。マジでヤバいことになった。このままじゃ怒られるどころか家に帰ることもできない。

「どうしよう。」

　　棧橋の壊れた部分を眺めていると。

「あら、こんなところで何をしているの？」

「はい？」

　　後ろから声が聞こえたので振り返るとそこには長い金髪で黒いスーツを纏った女性の人がいた。メアが目を見開いて驚いていた。どうして驚いているんだ……ってあれ？この人シロナさんじゃね？最近ポケモンリーグチャンピオンになった超有名人のはずなのに俺のテンションは上がることもなければ下がることもなくいたって普通だった。

「あれ、シロナさんですよ？どうしてこんなところにいるんですか？」

　　ヤバい、馴れ馴れしく話してしまった。気まずい雰囲気になってしまふ。

「あら、貴方は普通に話してくれるのね。」

　　あれ？思ってた展開と違う。

「何だかチャンピオンになってから周りの人たちの視線が変わったみたいなのよね。チャンピオンになって嬉しいこともあったけど、こういう面では少し困ってるのよ。」

へえ、チャンピオンになって困ることってあるんだな。

「そうなんですか。って言っても俺が少し変わってるだけかもしれないですよ。」

「ふふ、そうかもね。」

……
否定して欲しかった。

「話戻すけどこんなところで何をしているの?」

「はい、実は俺ってミオに住んでるんですけど、何故か棧橋が壊れていまして、帰れないんですよ。」

「あら、そうなの? だったら向こう岸まで送って行ってあげましょうか?」

「まじすか!?! ありがとうございます!!」

「後ね、私からもお願いがあるんだけどいいかしら?」

「はい、何でしょうか?」

「友達になってくれないかしら?」

うん、友達に…… って、え?

「すみません、聞き間違いかもしれないんですけどもう一度いいですか?」

「友達になってくれないかしら？」

うん、聞き間違いではなかった。

「一応聞きますけどどうしてですか？」

「そうね、普通に話してくれるのが貴方が初めてだったから…。かしら？…ここで縁を終わらせてしまうのも嫌だったから。ってことで、はい、これ私の携帯番号とアドレスよ。何かあつたら連絡してちょうだい。」

シロナさんに番号とメールアドレスが書かれたメモを渡された。

「あ、はい。」

色々と驚きすぎて返事が単調になってしまった。そのあと、俺の家の電話番号を教えてあげた。(強制)

「それじゃ、向こう岸まで送ってあげるわ。ミカルゲ出ておいで!!」

「おんみよくん。」

おつ、シロナさんのミカルゲか。ミカルゲをこの目で見るのは初めてだなあ。ん？……………シロナさんのミカルゲ……………技……………あつ(察し)

「ミカルゲ、サイコキネシスよ。」

「おんみよくん。」

ミカルゲはサイコキネシスを俺たち二人に使った。

「これで……あら？」

俺は宙に浮いているがメアが浮いていない、というよりサイコキネシスが効いていない。うん、知ってた。ポケモン知識のある人ならどうしてこうなったかわかるよね？

「あー、やっぱり効かないですよねー。」

メアが苦笑いしながら言った。

「私つてあくタイプなんでサイコキネシス効かないんですよ。」

「えっ？あくタイプつて……あなたポケモンなの!？」

「はい、ダークライつていうポケモンなんですけど。」

「おんみょくん。」

「あなたも私のガブリアスと同じ……擬人化できるポケモンなのね……!」

シロナさんが驚いているが、少し嬉しそうだった。

「擬人化できるっていうより私の場合には常時擬人化なんですよ。元の姿に戻れないっていうか……元の姿がない？つていうことなんですかねー?」

「そ、そう。それなら、どうやって向こう岸まで運びましょうか……?」

そう、俺は向こう岸に着いたが、メアがまだコトブキシテイのほうにいる。モンスターボールも持ってないしどうすべきか…。

「あ、私ならこのくらいなら飛び越えられるので大丈夫ですよ。」

すると、メアは助走をして栈橋にむかって走り出した。

「よっ!!!」

10メートルくらいあるのにそれを軽々と飛び越えてきた。

「おおー、つて…ん!?」

「まあすたあああああ!!」

俺はあることに気づいた。メアがこのまま行けば俺に直撃すr…

「ぐぼあ!?!」

飛び越えて着陸と同時に俺に抱きついて来た。俺は支えきれずそのまま後ろに倒れた。

「マスター♪」

仰向けに倒れた俺にメアは抱きついている。

「大丈夫ー!?!」

シロナさんの声が向こう岸から聞こえて来た?

「あ、はい!!大丈夫です!!シロナさんありがとうございますー!!」

メアが代わりに返事を返した。俺は胸が圧迫されて上手く喋ることができない。

「げほげっほー!飛びついてくるなよ!!めっちゃくちゃ痛かったんだけど。」

「これは事故です(キツパリ)」

メアが俺の上に座ったまま、清々しい表情をしている。うん、明らかに狙ってたよね、そんな顔してるけど確信犯だよね。

向こう岸を見るとシロナさんは既になかった。

ポケットに入れてたメモを取り出して思った。

「俺… とんでもない人と出会ってしまったかもしれない。つか、なんでコトブキシテイにいたんだよ。この辺って特に何もないだろ。」

考えても仕方ない。そう結論づけて帰ることにした。

「ほら、早くどいてくれ。帰るぞー。」

「はい。」

メアは素直にどいてくれた。

既に日が沈んで暗くなっていて、親に怒られるのは確定となつてしまった。でも、何故か、俺は清々しい気分だった。意味がわからない。

でも、清々しい気分だった。

そんな気分で俺たちはミオシティの方へ足を進めたのであった。

203番道路では。

「ふふ、まさか擬人化ポケモンに会えるなんてね。ここまで来た甲斐があったわ。ね？ガブちゃん？」

「はあ、そうですね。あと、ガブちゃんって呼ぶのやめてください。僕一応雄なんで恥ずかしいですよ。」

「ふふ、それにあの子も中々おもしろかったしね……あ。」

「どうしました？」

「名前聞くの忘れた。」

「はあ、シロナさんってどこか抜けてるところがありますよね。」

「うっ、うるさいわね。だったら、今からあの子の家に電話してやるわよ。」

シロナはポケットから携帯を取り出してハルトの家に電話をかけるようにする。

「それだけはやめてください。」

月の光が照らす203番道路では、ガブちゃん……げふん、ガブリアスのツツコミが冴え渡っていたのだった。

「ガブちゃん言うな。」

あっ、はい。

第9話 鳥

家に着いたのは18:30頃だった。

まず家に入れてもらうことはできた。しかし、母さまからは「てめえにやるメシはねえ。」とご立腹の様子で夕飯は抜きとなってしまった。もちろんメアも同罪である。仕方ないので風呂に入ったあと二階に上がって寝ようとしていた。現在時刻は19:38。うん、早すぎる。

「はあ、腹減ったなあ。」

めちやくちやお腹が鳴っていた。サンドイッチをいろんなポケモンに分けてあげてたので俺は二、三個くらいしか食べていなかったのだ。

「マスター♪おにぎり作って来ましたよー。」

ドアの下の隙間から一つの影が入って来てそこからいくつかおにぎりの乗った皿を持ったメアが現れた。

「おつ、ナイス！」

「お母様がお風呂に入っていたのでこっそり作って来たんです。」

「そうか、でかしたな。いただきます。」

『パクっ』

一口かじるとご飯の中から赤い物体が出現した。

「ん、梅干しか。この酸っぱさがたまんねえなあ！」

ちなみに俺は梅干しは基本すっぱいものじゃないと食べられない。ハチミツの梅干しとかあるけどあれは口に含んだだけでリバーシしてしまう。うちにある梅干しはカントーにいる(らしい)おばあちゃんを作ったものでとにかくすっぱい。でも、この酸っぱさが好きなのだ。

「まあ、私は塩一択ですけどねー。」

そう言っただけは具の入っていない塩オンリーのおにぎりを食べる。

「うん、美味しいでふ。」

喋らながら食べていたら気づけばおにぎりは無くなっていった。満腹とまではいかないが結構お腹が膨れたと思う。

「ふー、ありがとなメア。美味しかったよ。」

「はい、これでいつでもマスターのお嫁に行けますね♪」

何かとんでもないことを言った気がするがスルーでいこう。

「んー、とりあえずシロナさんの連絡先を追加しとくかな。」

俺は机の上に置いてある携帯を手に取り、連絡先に『シロナさん』と書いて追加した。その直後だった。

『♪♪』

携帯から着メロが流れる。

「ん？誰だ？」

俺は再び携帯を手に取り、開いて見た。

「……いきなりかい。」

携帯の画面には『シロナさん』とあり、さつき登録した電話番号からかかってきていた。

『ピッ』

「はい、何ですかシロナさん。」

『さつきぶりね。実は一つ聞きたいことがあるんだけどいいかしら？』

「あー、はい。何ですか？」

『あなたの名前教えてちょうだい。まだ聞いてなかったのよ。』

あつ、そういえば名乗ってなかったな、俺の名前？

「ハルトつていいいます。要件はそれだけですか？それじゃ。」

『えっ、ちよつ、ハルト……』

「ふー、結構面倒な人と知り合いになったかもしんねーな。」

俺は携帯を充電器に挿し、ため息をついた。

◆◆
翌日

「やつべ、本今日までに返さないといけねえじゃん!! すっかり忘れてた!!」

そう、本を5冊ほど借りていたのだが、返却日が今日までで遅れた場合、延滞料金を取られるのだ。うん、図書館なのに延滞料金取られるって意味わからん。

「母さん、ちよつと図書館行ってくるわ。」

「そう、行ってらっしゃい。」

俺は急ぎ足で外へ出た。因みにメアはまだ寝ているらしい。(もう10時)

昼夜逆転現象不可避。

『がちや』

「おはようございまーす。」

俺は入り口のすぐそばにある受付に向かった。そこにはいつも通りナナミさんがいた。

「おはようハルトくん。ちよつと久しぶりね。例の件は済んだの?」

「はい、何とかなりました。」

そう言つて俺は借りた本をナナミさんに渡した。それを受け取るとナナミさんはバーコードを読み取ったり返却事務を進めていく。

すると、ナナミさんは静かに微笑み

「そう、なら良かったわ。はい、返却確認しました。また、借りに来てね。」

「はい。それでは失礼しますね。」

ナナミさんは俺が返した本を元に戻すため、受付を離れて行つた。

「さて、帰つてメアを起こすか…。」

『ガチャ』

俺はミオ図書館を出た。

「おつ、ハルトじゃないか！」

「あつ、おはようございますトウガンさん。」

ミオ図書館を出ると、そこには赤紫に近い色の髪と鬚を持つ。黒のマントに白のノースリーブ、作業着の下衣を着用していて肩にシャベルを担いでいる男、また、ミオシティのジムリーダーでもあるトウガンさんがいた。

「なんだ、また本を借りてたのか。」

「いや、今回は返しただけですわ。」

「読書に勤しむのもいいが、適度に体を動かさせよ？お前くらいの子供は一番運動に勤しんだほうがいいからな。」

「はい、気をつけます。」

精神面は高校生並みだが、体はまだ子供だ。確かに体は動かしたほうがいいのかもしれない。

「ところでお前って何歳だったか？」

「10歳ですけど。」

「旅には出ないのか？」

うん、聞かれると思ったわ。

「いや、まだ出るつもりはないですね。出ても12歳くらいですかね。」

「ふむ、そうか。割としっかりしてるじゃないか。うちのヒョウタなんて旅に出たい出たいって6歳のころから言ってたからなあ!!はっはっは!!」

因みにトウガンさんの息子さんヒョウタさんは今はクロガネシテイのジムリーダーをやっている。親子揃ってジムリーダーか。どんな気持ちなんだろう。

「そろそろ、ジムに戻らんな。挑戦者が来てるらしいからな。」

そう言つてトウガンさんはそそくさと急ぎ足でジムに帰つて行つた。

「旅か…… そろそろ考えないといけないのかな。」

そんなことを考えながら家に帰ろうとしていた、その時だった。

「むくおー!!」

「おつ、ムクバードか？珍しいなお前がミオシテイに来るなんて。」

こいつは218番道路にいる野生のムクバードだ。普段ミオシテイに入つて来ることなんて滅多にない。因みにだが、俺は218番道路のポケモンたちとも仲がいい。たまにサンドイッチやらを持つて行つてあげている。そのムクバードが慌てた様子で俺のところに来た、多分何かあつたのだろう。

「おっけー、連れてつてくれ。」

「むくおつー」

ムクバードは俺を先導するように俺の前を飛んで218番道路に連れて行つてくれた。

「……っー」

「ぺらっぱあ!!」

俺は驚きを隠せなかつた。草むらの隅の方に檻のようなものが置

いてあつてその中にペラップが閉じ込められていたのだ。

「ちつ、誰がこんなことやりやがったんだ…!? 待ってる、今助けてやっから。」

俺は檻をなんとか開けようとした。その時だった。

「おいお前、何やってんだよ。」

「あ?..」

振り向くとそこには黒? いや、少し灰色に近い髪、そして下に白いTシャツを着て、その上に赤いベストを羽織っている男。うん、RSEの鳥使いの人だな。なんでこんなところに。

「せつかくハウエンから来てやったんだから、シンオウの鳥ポケモンが欲しくてな。だから、ちよつとばかし罫を張ってたんだが、お前何やってんだ?..」

すげえ目つき悪いわ。RSEの鳥使いの人って結構イケメンないメージあつたけど、実際に見ると全然違った。全くイケメンじゃなかった。

「てめえか、こんなところにこんなもん置きやがったのは。」

「ああ、そうだ。交通費でほとんど財布の中身が飛んじまったからよ。こーやって拘束して痛めつけてやってから捕まえようってわけだ。」

「ちつ、いろいろツツコミたいところだが、そんな汚ねえやり方しかできねえのか。お前ポケモン持ってんだろ? だったらそいつで捕まえればいいじゃねえか。」

「ああ、確かにポケモン持つてるぜ？出てこいオオスバメ。」

鳥使いはモンスターボールからオオスバメを出した。

「でもな、俺はモンスターボールを2個しかもってねえんだ。そして、所持金は40円……言ってる意味わかるな？」

いや、なんでこいつこんなドヤ顔してんだ？正直、笑いを堪えるので必死なんですけど。

「なんでもう少しお金貯めてからシンオウに来なかつたんだよ!!40円じゃ何もできねえじゃねえか!!」

「てめえ!!一番気にしてることをーっーっ!!オオスバメ!!つばめがえしだ!!」

「はあっ!?なんでだよ!?てめえからふってきたんだろうが!!」

「問答無用!!死ねえ!!」

『バギイ!!』

「ぐはあっ!?!」

オオスバメのつばめがえしが俺の身体に直撃した。

俺は後ろに吹き飛ばされ、木に背中からぶつかった。

「く……そ……いてえ……!」

そう言いつつも俺は鳥使いを睨みつけていた。防御力下がってくんねーかな。

「…おい、何だその目は？殺されてえのか？」

鳥使いは俺の腹に思いつきし蹴りを入れた。理不尽だ。

「ぐっ!!」

しかし、タダでは終われないので俺は鳥使いの足を掴んでそのまま一緒に倒れこんだ。

「いつてえ!!? テメエ、何しやがる!! 離せや!!」

「お前なあ、捕まえるなら正々堂々捕まえやがれ!! こんな捕まえ方して捕まったポケモンが懐くわけねえだろおがよお!!」

俺は拳を鳥使いの顔面にねじ込んだ。

「ぐぼあ!?!」

しかし、鳥使いは何とか俺を振り切り立ち上がる。

「ぺっ、てめえ…!! よくも俺の超絶イケメンフェイスを汚してくれやがったなあ!?!」

いやいや、イケメンじゃねえだろwww中の下くらいの顔しやがって。ナルシストかよ。

「オオスバメ!! ブレイブバードだ!! あいつをぶち殺せ!!」

「はっ!?!」

ヤバい、ブレイブバードはヤバい。今度こそ死ぬかも…!!
ブレイブバードは反動ダメージがあるもののひこうタイプの技の中ではゴッドバードの次に威力の高い驚異の120だ。

※ゴッドバードは140※

「すばああああっ!!!」

オオスバメはものすごいオーラを纏い、突っ込んできた。
あ、死んだわ。ガチで死を覚悟した、その時だった。

「あなた、私のマスターになんてことしてるんですか。」

「はっ? 誰だ!?!」

ん、この声は……

「な、何だったんだ… つ!!オオスバメ!?!」

気づけばオオスバメは地面に墜落して、苦しんでいた。
これは多分『ナイトメア』が発動しているのだ。

「……っ、メア……か……?」

「ま、マスターっ!!大丈夫ですか!」

メアは俺の目の前に現れ、心配そうに肩を貸してくれた。

「あ、ああ……悪いな。ありがとう。」

「いいですよっ……!!ほんとに大丈夫ですか……!」

「ああ、つばめがえしを食らったときはちよつとヤバかったけどな。」

「えっ…… つばめがえしを受けたんですか……?」

「ああ、めちやくちや吹き飛ばされたよ。」

「……っ!!…… そうですか。」

メアはゆつくりと立ち上がった。

「お、おい、何する気だ……!」

メアは振り向いた。メアは不気味に笑っているが目が全く笑っていないかった。

「いや、ちよつとあのクソ野郎に天国への片道切符を渡してくるだけですよ。」

うん、めちやくちやキレてるね。まだ、オブラートに包んでくれて
いるが要するに殺すってことだね、うんダメだ。

「さて、メア…。」

俺はメアの右手を掴んだ。

「離してください、あの人を殺せません。」

とうとうオブラートにすら包まなくなっちゃったよこの子。

「…… やつてもいいけど殺すなよ?。」

俺は許可した。正直彼奴にはムカついてたからな。

「それじゃ行ってきます。」

逝ってらっしゃい。

メアは鳥使いの前まで歩いて行った。鳥使いの人はメアの殺気で動けなくなっていた。既に涙目になっているが、男の涙目なんて需要は無い。だから大人しくメアに食われてこい。

「鳥使いさん。」

「ひゃ、ひゃ、ひゃ?。」

「マスターに感謝することですね。仮にマスターが気絶でもしていたら、私に指示していなかつたら…」

「迷わず消してましたよ？アナタ。」

鳥使いをどのような顔で睨んでるのだろうか。想像もつかない。

背中を見てるだけでも殺気が凄い。今すぐでも殺せてやりたいが我慢してやると言っているような、そんな様子だった。

「あが……がぁ……！」

鳥使いは白目をむいて跪いている。何かに取り憑かれているようで真上を向いて泡を吹いていた。

「次はありません。次マスターに手を出すようなら、今度は迷わず消します。跡形もなく……ね。」

「っ!!」

鳥使いはその言葉で正気に戻ったのか、目を見開いて恐怖の表情を見せていた。

「ひっ、ひいひいっ!!」

鳥使いはナイトメアの効果で気絶したオオスバメを抱えてコトブキシテイの方へ逃げていった。

『じゃぼおおん!!』

「ひゃあっ!?!」

橋が落ちていることを忘れていたのか、海の中に落ちていた。

もう知らん。

『ガチャン!!』

「よし、何とか開いたぞ。」

俺はテコの原理やら何やらを駆使して、檻をこじ開けてペラップを解放した。

「ぺらああ!!」

ペラップは泣きながら俺の胸に飛び込んできた。
俺は優しく抱きしめ撫でてやった。

「ごめんなペラップ。俺たち人間がこんなことしちゃって……」

「えっ、マスターは何もしてないじゃないですか、どうして謝るんです？」

メアは俺の行動を疑問に思ったのか聞いてきた。

「たとえば俺がやってなかったとしても、俺たち人間がやったことに変わりはない。だから、俺にも人間としての責任があるんだ。こんなもので許されるとは微塵も思っていない。でも、謝らないといけないと思ってたんだ。」

「…ッ!!」

メアは驚きの表情を見せ、突然涙を流し始めた。

「えっ?」

「ま、まずだああ…！まさかあなたがここまで私たちポケモンのご
どを思っていたなんてええ…!!私、感動しまじだああ…!!」

メアはその場で膝から崩れ落ち、感動の涙を流していた。

「(。D。)ポカーン↑俺」

「。。。ん、ん。。。うわああ!!↑ポケモンたち」

その後俺は何とか皆を泣き止ませて別れた。

「ふう、何とか済んだか。ほら、お前も涙を拭けよ。」

俺はポケットからハンカチを差し出した。

「ぐすつ、ありがとうございます…!!」

メアは俺のハンカチで涙を拭いていた。何故かその時、メアの鼻息が荒かったのかは触れないこととしよう。

「腹減ったな、もう12時か。よし、帰るぞメア。」

「はい！昼ごはんにしましょう!!」

俺とメアは218番道路を去ろうとした。その時だった。

「ふーん、君があいつが言ってたハルト君か。ボクが思ってた以上の人間だね。」

後ろから俺の名前を呼ばれたので振り向くとそこには、水色で肩くらいまでかかった短い髪、透き通るような黄色い瞳、とくに何も描かれていない薄灰色のパーカーに、紺色のミニスカートでメアと同

じ…………… いや、少し背が低いくらいの少女がいた。

まさかのボクっ娘ですか…!!

初めて見たボクっ娘に若干テンションが上がっていたのは内緒の話だぞ？

その少女は俺を見ながら静かに微笑んでいたのだった。

第10話 気になるニンゲン

「ふーん、君があいつが言ってたハルト君か。ボクが思ってた以上の人間だね。」

何でこいつ俺の名前知ってんの？あいつって誰や？

突如現れたボクっ娘美少女は不思議な雰囲気を漂わせている。その前に気になることがあった。

「まず聞くけど、お前誰だ？」

向こうは認識があるみたいだが俺はこいつのことを全く知らないし会った記憶もない。

「ボク？ボクの名前はね…。」

※5分後

「うーん…。」

目の前のボクっ娘美少女さんは5分くらいずっと腕を組んで名前を考えていた。確定ですね。

「はあ… お前、ポケモンだろ。」

俺は呆れながら言った。

「ふえっ!? そそそそんなボロボクがポケモンだって!? そそそんなわけないじゃのいこ!!」

目の前のボクっ娘美少女さんは頬を赤く染め、びっくりしていた。

「明らかに動揺すんな。」

うん、見た目が明らかに普通の人とは違うし、自分の名前言うのにこんなに時間がかかるならポケモンで確定だろ。名前考えてないっぼいし。

「そそそれじゃあ、ボクがポケモンっていうなら何のポケモンだって言うんだい!? 聞いてみようじゃあないか!!」

半ギレで返事を返して来たボクっ娘美少女（笑）。

「うーん、そうだなあ。」

俺は今までの記憶を蘇らせ思考する。

「アグノム……………とか?」

「ツ!!?」

うん。当たり前らしいです。

「どっ、どうしてボクがアグノムだってわかったんだい!? ボクたちって初対面だよね!」

「先ずは、お前が『あいつ』って言ったことかな。最近会ったポケモンって言えばエムリットくらいしか浮かばない。そいつに関連するポケモンといえば、ユクシーかアグノムだ。あとはお前の見た目で簡単に絞れたってわけだ。その青い見た目でね。」

みたか?これが俺の名推理だ(ドヤ顔)

「はあ……、そうだよ。僕は意思を司るポケモン『アグノム』だ。わざわざリツシ湖からきてやったんだぞ。感謝してね、と言うよりしろ。」

えっ、頼んでもないのに勝手にきて、そのことを感謝しろ?上から目線にも程があるだろ。

「いや、お前ら伝説のポケモンってどんだけ物好きなんだよ。何で俺なんかに会うために遠くからわざわざ来るんだ?」

すると突然アグノムは

「そんなの……… 気になったからに決まってるじゃないか。ボクたちポケモンにこんなにも優しくしてくれる人間、エムリットにそう聞かされてどうしても会いたくなっただよ………」

そうやって俺の胸に体を預けてきた。

「僕はいつだって『護る』立場だった。あそこ《リツシ湖》の管理を任されている以上、僕はそこに住むポケモンたちを守らないといけな

い。正直辛かったんだよ……。僕は普通のポケモンより遥かに強い。だから、周りからの距離感も感じていたんだ。そんな時に君のことをエムリットから聞いたんだ。」

アグノムは俺の顔を見た。その顔は伝説のポケモンとは思えない、何かに怯えるような弱々しい表情をしていた。

「でも、キミ……ハルトはそんなこと関係なく接してくれる。エムリットのように。それに、さつきもペラップを守る為にあそこまで体を張ってくれていた。そんな君にボクは惚れてしまったんだ。」

「うん、確かにさつきペラップを助けようとしたよ。でも見ただろ？俺は人間だ。ポケモン相手では手も足も出ないんだ。強いのはポケモンの方だろ？」

「……わかってる。それでもボクは君のことが好きなんだ。その優しさに惚れたんだ。並みの人間にはないその優しさにね……。」

何だ……こいつら俺を過大評価しすぎだろ……!!俺はただの人間なんだぞ……!まあ、確かに転生者ではあるけど特にチート能力なんてものももらってないし。普通の人間なんだ。なぜこいつらは俺に惚れたんだ……!?意味がわからない……!!

しかも、彼女はうるうるした目で俺を見ているぞ?これじゃ関わりも断ち切れねえじゃねえかよ!!

「そ、そうだな……俺には大したことはできないが、相談とかあったらいつでもここにきていいぞ?俺はしばらくはここにいてもいいから。」

うん、俺にはこれしかできないよ。ごめんなさいアグノムさん。

「ほ、ほんと…?」

で、何でこいつは嬉しそうなんだ?

「あ、ありがとうハルト!!大好き!!」

アグノムは俺を強く抱きしめた。痛いです。どれくらい痛いかわかっていうとな、肺が骨ごと潰されそうなくらいには痛い。ポケモンは強いんだ。もちろん力もな、だから自重してください死んでしまいません。

そして後ろからは感じ慣れた殺気。

「ふふふ…私を差し置いてマスターとこんなスキンシップをするなんて…!!」

「へへーん!!ボクとハルトはもう友達以上の関係になったんだもんねー!!」

やめろ、友達だが、それ以上に進ませたつもりは無いぞ…!!?

「ぶち殺す!!!」

あ、メアの目がマジだ。殺しに来る…!!

「死ねえ!!」

「よっ!!」

『バギイ!!!』

メアの渾身の右ストレートがアグノムに向かって放たれた。しかし、アグノムは軽く交わり、その拳は後ろの木に当たりその木は見事に真つ二つにへし折られた。

「ツ!!危ねえだろメア!!俺に当たってたらどうするんだよ!!?」

「その時は私も自害しますので大丈夫ですよ!!」

「大丈夫だよハルト!!そんな時はこのクソ女を地獄送りにしてからボクも死ぬから!!」

二人も平気でとんでも無いこといつてるぞ…!!
というより当たらないようにするという選択肢は無かったのか?

俺は唾然としていた。

気づけばアグノムは俺の隣に立っていた。

「さて、相性最悪だから、今日はこの辺でお暇させてもらおうかな…
んっ」

「ツ…!!」

そう言っつてアグノムは俺の頬にキスをして消えた。

「なっ!!あの女!!!」

メアはアグノムが消えたところを睨みつけていたが、

「はあ、もう帰るぞメア… 今日はどうと疲れた。」

「あ、はい。」

忘れてるかもしれないけど俺はつばめがえしを喰らって体のあちこちが痛いのだ。帰って休みたい。

※その帰路にて。

「あの女あ……、次会ったら挽き肉にしてやりますよ……!!」

「やめろ。それは女子の使う言葉じゃないぞ。」

「大丈夫です。性別不明ってことになってますから。」

「……………」

翌朝、俺はリビングで朝のニュースを見ていた。

『次のニュースです。ヨスガシティに新設されたバトルコンテスト場にて、新チャンピオンのシロナと、四天王のオーバのチャンピオンマッチが開催されることが決定しました。日にちはちょうど二週間後の〇月〇日となります。チケットを購入して是非お越し下さいませ。』

「チャンピオンマッチか……。シロナさんの初陣ってことになるんだな……。ああ、見に行きてえなあ……。」

『♪〜』

眩いた瞬間俺の携帯が鳴った。

「ん？誰からだろ。」

『シロナさん』

シロナさんからだ。俺は携帯を手を取った。またしようもないことだったら切つてやる。

「はい、ハルトですけど。どうしました？シロナさん。」

『こんにちはハルトくん。二週間後にチャンピオンマッチがあるのを知ってる？』

「はい、さつきニュースで確認しましたけど。それがどうしました？」

『ハルトくんは見に来てくれるの？』

「そうですねー、行きたいんですけどチケットないですし、それにヨスガは少し遠いんですよねー。」

『そんなことだろうと思ってチケットは買って送っておいたわ。』

「え、マジですか？」

え、普通にありがたいんですけど。シロナさんって神？↑アホ

『あと、私のトゲキッスを迎えに送るから経路は問題ないわよ。』

「マジで!?ありがとうございます!!」

『その代わり絶対観にきてね?約束よ?』

「もちろんですよ!!頑張ってくださいね!!」

『ええ。それじゃあね。』ブツツ…

「シロナさんからですか?」

ちようど起きてきたメアが聞いてきた。

「ああ、なんかチャンピオンマッチに連れてってくれるらしい。」

「ホントですか!?良かったですね!!」

「ああ!!シロナさんのバトル見てみたかったんだよ!!」

普通に嬉しかった。チャンピオンのバトルも観れるし、勉強になるからだ。百聞は一見にしかずという言葉があるが全くもってその通りだと思っている。本で読んでもわからないことがある、そんな時は実際に見た方が良かったってこともたくさんあるのだ。

その後、俺はミオシテイの広場のベンチに座って本を読んでいた。

「はあ、暇だなあ。旅に出てもいいけど、二週間後にはチャンピオンマッチが控えてるしなあ。」

図書館の本もほとんど読んでしまい、メアのレベリングもほとんど完了してしまっている。

ちなみにメアは何をしているかというところ、チャンピオンロードに殴り込みに行っている。レベリングは済ませていて後は実践を積むだけなのでチャンピオンロードのトレーナーを無双しているらしい。

本人曰く『マスターに傷一つつけさせない』とのことで俺を護るために最強になろうとしているらしい。嬉しいが女の子に護られるというのもどうかと思ったが考えることをやめた。

「もう冬も終わりだなあ、暖かくなってきたし…」

「そうだねえ。」

「ああ、って、うおあ!?!」

隣に座っていたのは人の姿をしたアグノムだった。

「やつほ、暇だったから会いに来ちゃった☆」

「お前、リツシ湖の管理はいいのか？エムリットなんか結構真面目にしているとと思うが…。」

「いいんだよ。ボクにとってリツシ湖よりハルトだからね。」

なんかとんでもないことを二回聞いた気がするが……。

「それじゃあね、ハルト。また来るから。」

そう言つてアグノムは姿を消した。

エムリットもアグノムと同類だったようだ。なんだか悲しい気持ちになつてきた、どうしてだろ……。

時は流れ夕方、俺は特にやることも無く、218番道路の栈橋（破損）に座つて海を眺めていた。

「やばい……ぼーつとしてたら一日が終わつてしまいそうなんですけど。」

特にやることもなく街をうろちよろしたりしていたらもう夕方になつてしまつていた。

「はあ、もう帰るか……」

俺はやることもないので家に帰ることにして立ち上がった時だった。

『ガサツ』

森の方から音が聞こえてきた。振り向くとそこには一人の少女がいた。

見た目で勝手に判断させてもらうが恐らくポケモンである。

黄色い瞳、髪は濃い紫色の巻き髪ロールで真ん中の前髪の部分のみ黄色になっっている。赤いロンティーの上に髪とほぼ同色のジャケツトを羽織っており、かなり際どい紫色のミニスカートを履いている。身長は女子高生並みで、胸は大きい。すげえ可愛いですありがとうございます。

独特な格好をしてるやつは大概ポケモンだ。えーと、この見た目だとなんてポケモンだったかなー？なんか似てるやつがいた気がするんだが……。

てか、その子ずつと俺を見つめてるんですけど。しかも、なんか震えてるし……ん？泣いてないか？

「…… やつと……！見つけた……！！」

彼女は震えた声でそう言った。彼女の目からは大粒の涙が溢れる。

「えっ？」

次の瞬間だった。気づけば彼女は俺の目の前にいて、

「会いたかったよおおおおお!!おとうさあああんツ!!」

「え？おとうs... がはっ！」

その少女は俺のことを『お父さん』と言って俺の胸に飛び込んで来た。

第11話 841番目

「おとうs... がはっ!？」

俺は昨日のオオスバメのつばめがえしと同じ威力のダイブを喰らった。俺は受け止めきれず後方の壊れた栈橋の方に吹き飛ばされ、海に落ちた。

「げぼっ!?!ごぼぼぼ!!？」

海に落ちてしまった俺は静かに意識を落とした。

「.....!.....っ！」

「ん.....？」

気づけば俺は地面に寝ていた。てか、ここは218番道路か？

「あつ、お父さん!?!え、えっと、本当にごめんなさいッ!!」

「むごあつ!？」

さつき俺に飛びついてきた女の子が泣きながら俺に抱きついてきた。状況が全く把握できてないのと、力強すぎて苦しいです。あと、

胸がでかいです。これが女子高生のおっぱいか……!!

「ひぐつ、よかったよう……、お父さん生きてて……!!お父さんが死んだら私は……!私はある……!!」

うん、全然状況が把握出来ません。まず、なぜお父さんの方が子供なのか。そして、俺は子作りをしたこともないし、出来るはずもない……ふう、取り敢えず俺も優しく抱き返してあげた。そして一言。

「お父さんってどゆことや?」

すると、女の子は目を見開いて言った。

「えっ!?覚えてないのお父さん!?ヤヨイだよ!!私のこと忘れちゃったの!?!」

ん?ヤヨイ……?

「や、やっぱりさっきの衝撃で記憶喪失になってるのね!!」

何だろう……どこかで聞いたことあるような……。

「ど、どうしよう……!!やっぱりショック療法しか……!」

以前、どっかで聞いた覚えのある名前なんだが……。

『ガシツ!!』

「え?」

y 俺は今頭を掴まれている。何を言ってるかわからねーと思うが（r

「思い出して!!お父さぁんっ!!」

『ズドン!!』

「ぐほおっ!!」

俺はそのまま後頭部を地面に叩きつけられた。さつきとは比べものにならない衝撃が頭から全身にかけて走り、俺は意識を再び落とした。

『はあ、これで来なかったらもう諦めるしかないな。』

ん?これは...前世の俺か.....?

俺はポケモンDPで手持ちいっぱいに卵をもたせて例のごとくうろちよろしていた。

「はっ!!?」

俺は目が覚めた。まだめちやくちやアタマが痛い。周りは日が沈んで真っ暗になっていた。しかし、そこにいたのは…

「ううう…!!ごめんなさい…!!ごめんなさい…!」

ヤヨイだった。

ヤヨイは地面に座ったまま顔を覆い隠して泣いていた。俺はよろよろと起き上がりヤヨイの元へ向かった。

「え……………?おとうさ……………ツ!!」

俺はそのままヤヨイの大きな体を強く抱きしめてやった。

「ごめんな…ヤヨイ。お前のことを忘れるなんて…!!お前はズーっと俺のことを覚えててくれたんだな…!!」

「おとう…さん…?私のこと思い出してくれたの…?」

「当然だ。約束しただろ?最強のガブリアスにするって…!!(何か既に完遂してる気がするけど!!)」

「ううううああああ……………!!おとうざああん!!」

ヤヨイは俺の胸の中で再び声をあげながら泣き始めた。今まで溜

め込んできたものを全て吐き出すように。俺もまたそれを優しく受け止めてあげた。二度と離れ離れにならないようにするために。

「どうだ？ だいぶ落ち着いたか？」

「うん。 えへへ……。」

ヤヨイは俺の胸に抱きついたらまだ。冷静になってみて気づいたんだが、ヤヨイの豊満な胸が形を変えるくらい押し付けられていて俺の理性をじわじわと壊しにかかっていた。

「やっとお父さんに会えたよ……！ どれだけ長い間探したことか……！」

「ごめんよ……。ほんとにごめん……！！」

今の俺には謝ることしかできなかった。でも、ヤヨイは笑顔を見せてくれる。

「うん、別にいいんだよ。今こうやってお父さんを見つけて、お父さんの胸の中に入れるんだから……。」

「そうか……。一つ聞きたいんだが、最初はどこにいたんだ？ 姿を見る限りフカマルではないだろう？」

6Vとはいえ、一人でここまで強くなるのは不可能に近いと思うんだが……。

「ハードマウンテン。」

ヤヨイが突然無表情になってそう言った。

「はっ。」

「あそこは地獄だったよいやめちやくちや暑かったから本当に地獄だった目が覚めたらそこにいたんだとつぜんカバルドンに襲われるし戦う術もなかったから生き残るのにも必死だったよヒードランとかいうポケモンに会わなかったらほんとに生き残れなかった確かにあいつの修行も地獄級だったよもういつそのこと死んでしまおうなんて思ったこともあったよでもお父さんに会うまでは死ねないと思ってたからここまで生き残れたんだガブリアスにまで進化してお父さんの求めている『最強』になったからハードマウンテンを抜けてシンオウ中を旅して回ってやつとの思いでお父さんを見つけたんだもう私はお父さんのそばから離れたくないよ離れたら今度こそ死んでしまうからいいよね私最強になったから絶対誰にも負けないからだから私を見捨てないでお願いお願い……」

「心配するなヤヨイ。俺に見捨てるなんて選択肢は無いさ。お前はもう俺の家族だ。絶対に離れ離れになんてさせない。だから、そんな悲しそうな表情を見せるのはやめてくれ。あと……よく頑張ったな。ほんとにすごいよお前は……!!」

俺はヤヨイの頭を優しく撫でてあげた。

「ほんとに……？ほんとに見捨てたりしない……？」

ヤヨイは目を見開いて俺に尋ねる。気づけばヤヨイの目にハイライイトが戻っていた。取り敢えずヤンデレルートは回避かな。

「ああ、当然だ。」

ヤヨイは涙を流しながらもう一度笑顔を見せ、俺に抱きついた。

「えへへ、ありがとうお父さん。私頑張るから…!!お父さんを最強のトレーナーにするから…!!」

「ああ、ありがとな。あと、そろそろ離れてください。そうしないと俺の理性が爆発四散してしまいます。」

進化したらこんなナイスバディになるんだなあ。スタイル良すぎだろ…!!しかも、今抱きしめられてるんだぜ?ヤヨイの豊富な胸が変形してしまうくらいにだぞ?この柔らかい感触がこれ以上続くと色々イヤなことになりそうなんですけど、確かに10歳児だから大丈夫そうに見えるけど、心は17、8歳くらいなんだ。理性を壊されたら何をしでかすかわからない。だから、お願いします離れてください。

「えへへ、ごめんね嬉しくて強く抱きしめすぎちゃった。」

ヤヨイは素直に離れてくれた。メアかアグノムだったら、「は?いやですよ?」(だよ?)「って言ってるな間違いない。」

「ふう、そろそろ帰るか。外真っ暗だしな。俺の家にくるだろ?」

「うん!お母さんにも会ってみたいしね!」

今気づいたけどヤヨイも背が高いなあ。頭一つ分くらいはでかいぞ?このままだと示しがつかないから早く俺の成長期来てくれえ!!!

「ま、マスター……!?」

後ろから聞き覚えのある震えた声。

振り向くとそこには修行から戻って来たメアがいた。

「なつ、なんで『が841』がいるんですか!? あなた最後はボックスの隅にいたはずでしょう!? しかも、進化してガブリアスになってるし!! しかも、マスターとくつついてるし!! 離れてください!! そこは私のポジションですよ!!」

ダークライが超涙目でこちらを指差して叫んでいる。よほど悔しかったらしい。

「へーん!! ここは私のポジションだもんねー!! もうお父さんの隣から絶対に動かないからー!! てゆうか、お前もボックスの隅にいたじゃん!! (プロローグ最後らへん参照) お前も人のこと言えないじゃん!! どうしても欲しかったら私を倒してみなー!! あと、私にはお父さんからもらった『ヤヨイ』って名前があるんだからー! 次その名前で呼んだらぶち殺すぞ? (怒)」

「望むところですよ!! あなたを半殺しにしてポジションを返してもらいます!! 覚悟ツ!!」

メアがヤヨイに飛びかかって来た。ヤヨイはドラゴンタイプが見せるような凜猛な目をしている。ヤバイ、戦闘モードに入ってるわ。

「だったら、とりま死ねえ!!」

『ズドオオオオオン!!!』

メアとヤヨイが218番道路のど真ん中でぶつかり合った。爆発音が響き渡る。

その光景を見て一言。

「帰って寝よう。」

俺はこいつらを無視して家に帰ることにした。

「この野郎!!無駄に固いですねえ!!だったらこれでも……!!ってマスター!!?帰らないでくださいよお!!」

「嘘お!?!待ってよお父さあん!!置いていかないでえ!!」

二人も俺が帰ろうとしていたのに気づいたらしくバトルを強制中断してついて来た。最初からこうすれば良かったのだ。

翌朝、218番道路の真ん中にどでかいクレーターが発見されたらしいが俺は知らない。俺は何もしていない(震え声)

家に帰ってからは大変だった。まず、親に説明しなければならなかったからだ。母からは『いつの間に子供授かったのよ!!?母親はどこにいるの!?!』と勘違いされ、父親からは『お前をそんな息子に育て

た覚えはない』と殴られ、後ろからメアとヤヨイの殺気があふれ出ていて父親がそのまま気絶してしまったりして。夕飯はメアとヤヨイの食べ比べが始まり、冷蔵庫がすっからかんになってしまったりしていた。何より一番大変だったのは風呂だ。メアくらいならまだ許せるが、ヤヨイが風呂に入ってから来た時はガチで焦った。本人は自分が超絶ナイスバディであることを知らないらしく、さらに精神年齢は思春期を迎える前で幼い様子もあったので恥という感覚を知らなかったらしくずっと首を傾げていた。俺はずっと浴槽の中で壁の方を向きながらポケモンをNo.1からずっと言っていた。No.370くらいで構ってくれないことを不満に思ったヤヨイが背中に抱きついて来て女の子特有のいい匂いと柔らかな感触とともに俺の意識は途切れてしまったらしく、気がつけば俺はベッドの上で寝ている、メアとヤヨイが泣きながら取っ組み合いをしていた。俺が体を起こすと二人は同時に俺に飛びついて来て、肺が圧迫され、俺の意識は再び闇の底へと落とされた。

色々なことなあってその翌朝。

「……………はっ!!」

朝の光を浴び目が覚めた。時間はマルナナヒトマル、ノルマはギリギリ達成だ。さて、起きようか……………あれ?動かないぞ?

「すう……………すう……………ます……………たあ……………」

「う……………ん、おと……………う……………さ……………ん……………」

二人が両端から俺を抱きしめているらしく俺は全く身動きを取ることができない。眠っているところ仕方が起こすことにした。

俺は大きく息を吸い、

「火事だああああ!!!」

「ひゃん!!?えっ!!?えっ!!?かじっ!!?まっ、ますたあ!?ますたあはどこでしゆか!?えっ、えと、取り敢えずかえんほうしやで火をけさにやいとおお!!」 ↑大混乱

メアが飛び起きてかえんほうしやを放とうとする…………… え?

「わわっ!!お父さん!!?お父さんはっ!!?どこどこどこどこどこどこどこどこどこ!!?もっ、もひかしてあの火の中にい!!?(寝ぼけている)はわわわわっ!!?えっ!と取り敢えずかえんほうしやで火をけさにやいとおお!!」 ↑大混乱

ヤヨイも飛び起きてかえんほうしやを放とうとする…………… は?

「おいしい!!ストップストップ!!やめてやめて!!家が燃えるからやめろおおおお!!」

やり過ぎた。今度から普通に起こさないと、こいつらは普通のポケモンの何倍もの力を持つてるんだからこんな起こし方をしたら家がいくらあっても足りないぞ……………。

「はっ!!ああああ!!よがっだあ!!まずだああ!!」

「はっ!!?ああああ!!よがっだあ!!おどろぎああん!!」

二人は泣きながら俺を両端から抱きしめてくる。朝から元気だなあこいつらw

そのあと朝食を済ませてソファでゴロゴロしていた。

「お父さーん!!朝の散歩に行きましょう!!」

「マスター!!図書館で本読みませんか!!」

二人がほぼ同時に俺を誘って来た。それは即ち戦いを意味する。

「は?いや、私が先だよね?何であんたがくんの?あんたはとつとと私の目の前から失せなさい!!」

「いやいやいや!!あなたこそ新参者の分際でマスターを馴れ馴れしく誘ってんですか!!あなたこそ失せた方がいいんじゃないですかあ!!」

「はあ!?!」

「ああん!?!」

「はあ、こいつら...。」

俺は頭を抱えて呆れていた。その時だった。

『ピンポン、宅配便です。』

「はーい。お前らうるさいから静かにしとけよ?」

「はーん」

二人同時に返事。こいつらもしかしたら仲がいいのか？

「こちらとなります!!今後もシロネコヤマト宅配便をよろしくお願ひします!!それでは失礼しやーす!!」

「はいはい、ありがとうございますまーす。」

俺は小さい箱を受け取った。シロネコヤマトの人はムクホークに乗って飛び去ってしまった。シロネコ関係ねえ……………。

箱を開けると小さい封筒が入っていた。手紙も同封されている。

『チケット送っておいたんで絶対に来てね☆ シロナ 』

「いやあ、シロナさんと知り合いになって本当に良かったな……………ん?」

俺は封筒からチケットを取り出した。

「はっ!?二枚しかない…だ…と?」

そう、チケットが二枚しかないのだ。俺が一つ座るとして余る席は残り一つ。耳のいい二人には既に聞こえており、リビングでは既にリアルファイトに発展していた。

「私が座るんですよ!!そもそもあなた後から来たんですからシロナさんは私の為に用意してくれたんですよ!!」

違う!!そもそももう一つの席は母さんに用意してたんだ!でも、母さんは行かないらしいから席が余っただけなんだ!!なんかごめん!!

「いやいや!隣に座るのは血の繋がった(理想)家族の私でしょう!!そもそも赤の他人のあんたに座る権利なんてないから!!」

いやいや、(理想)つてなんだよ!!人とポケモンなんだから血なんて繋がってないから!!てゆうか、本当のお父さんもお母さんもガブリアスだからね!?!俺じゃないからね!?!

ヤヨイは俺のことを本当のお父さんだと思ってるらしい。すりこみかな?

その後、これ以上家を壊されるとヤバイと思った俺はじゃんけんで決めさせることにし、最終的にヤヨイが隣に座ることになった。ヤヨイは本気で喜んでおり、メアはガチで悔しがっていた。

メアはモンスターボールの中で待機だ。シカタナイ。

「もし、マスターに傷一つついたりしたらその場であなたの首を飛ばしますからね!!忘れないでくださいよお!!」

「当然よ。貴方ももし私に復讐でもしてその反動でお父さんに傷でもつけてみなさい、モンスターボールごとぶっ壊してやるからね。」

そう言つて二人は握手を交わしていた。こいつら仲良いなあ(再確

認

第12話 ヨスガにて

チャンピオンマッチ当日、俺はシロナさんのトゲキッスにヨスガシティに送ってきてもらっていた。

「ありがとな、トゲキッス。シロナさんによろしく言つといてくれ。」

「ぎっす。」

俺はトゲキッスの頭を優しく撫でてあげた。トゲキッスは満足したのかスタジアムの方へ飛んで行ってしまった。

「むう……」

振り向くとすごく不機嫌そうな顔をしたヤヨイがいた。

「どうしたヤヨイ?」

「いや別にいゝ?撫でてもらって羨ましいとかじゃないからね?」

「はいはい、撫でてやるからこつちおいで。」

「はーい♪」

ヤヨイは不機嫌な表情から一転すごく満足そうな表情に変わる。……わかりやすい性格してんなあw

あと、さつきから俺のポケットのモンスターボールがやたら動いてるんですけど。

『ポンツ!!』

あ、でてきた。

「何してるんですかマスター!!こんな女のいいなりになるなんて!!
もっと主人としての威厳を持ってくださいよ!!」

「……で、本音は?」

「すぐく私も撫でてほしいです♪」

「おい。」

メアもヤヨイもかなり嫉妬深い性格してるので、片方がこんなことになる
と絶対に過剰反応を起こして同じことを要求してくるのだ。
……すげーめんどくさいわ。これ。

「はいはい、なでなで〜」

「むふー♪」

まあ、嬉しそうならいいか。

「……ボクのはルトに一体何やらせてるのかな?」

「ん?」

この聞き覚えのあるボクっ娘ボイス……まさか……！

気づけば俺の前でメアの胸ぐらを掴んで今にも喧嘩を起こしそうになっていた。

「アグノム……何してんの？」

すると、すごい嬉しそうな声で返事が返ってきた。

「やあ、ハルト。何だかハルトの気配がものすごく近くなったから居ても立っても居られなくなってね。君に会いに来たってわけさ。」

「……気配でわかるのか。」

……俺の身体にGPSでも埋め込まれてんのか……？少し身震いがあった。

「当たり前だよ。僕は1日24時間ずっと君のことを想ってるからね。」

「何言ってますか。この野生ポケモンの分際で。マスターの所有物でもないくせに調子に乗るのもいい加減にしてくださいよ。」

「……は？」

再びメアとアグノムの睨み合いがはじまる。

「めんどくせえなあ……」

俺が呆れながら喧嘩を見ていると、

「ねえおとうさーん。」

すぐくつまらなそうな顔をしたヤヨイが後ろから抱きついて来た。すぐくアレが当たってるからやめてほしいのだが。

「なんだー？ヤヨイ？」

「さつきあそこでやってるクジを引いたら、こんなもの貰ったんだけど。」

そう言っつてヤヨイは大きな箱を一つ渡してきた。

「なんだこれ。」

開けてみると中には青色のポフィンがたくさん入っていた。

『ミロカロス進化用ポフィンセット』

「あーなるほどね。」

「お父さん、中身なんだった？」

「ポフィンだよ。ヒンバスを進化させる用らしい。ミロカロスって結構強いし、欲しいから一応とっておくか。」

俺はポフィンセットをリュックに直した。

――

「なるほどね。それならボクがハルトの所有物になればいいってことなんだね。」

「要約すればそういうことですね。まあ、貴方みたいな雑魚なんて、マスターが欲しがらるわけがないですけど。」

まだ、メアとアグノムの喧嘩は続いていた。

「いいき、無理矢理にでもなるから。」

そう言っアグノムは俺の方へ歩み寄ってくる。

「なんだアグノム?」

アグノムはその透き通るような黄色い目で俺を見つめていた。

「…………ごめんハルト。」

「一体何…………をツ…………!?!」

突然体が縛り付けられるように動かなくなる。

見るとアグノムの目が水色に光っていた。

「サイコ……キネ……シ、ス……か……!」

アグノムは俺のポケットからモンスターボールを取り出した。

アグノムはそれを見ながら言った。

「……ボクはこれから君のものになる。これからもずっと一緒にいるんだ。」

そう告げると、アグノムは自分で頭にボールを当てた。

「って、ちょおおおおい!!?」

もちろん、彼女もポケモンなのでボールは開き、中へ入っていく。彼女も抵抗するわけも無いので、ボールは揺れることもない。

「マジか……!」

「あの女……! 本当に自分から入るとは……!」

『ポンー!』

すると、アグノムの入ったボールから勿論アグノムが出てきた。出てくると、アグノムはすぐさま後ろから抱きついてくる。

「むふふ〜♪これからはずーっとハルトと一緒にだね〜♪いや、ハルトじゃなくてマスターって呼ぶべきなのかな？」

そんな声は俺の耳には入ってきてはいなかった。俺の頭の中はこれからどうすればいいのか、ただそれだけを考えていた。

「やべえよ……なんとかする方法はないのか……!？」

「むふふ〜♪」

後ろから抱きつかれて女の子特有の甘い香りと控えめだが柔らかい感触がするがそんなことを気にするほど余裕はなかった。

「あっー！」

悩んでいるとヤヨイが何かを思いついたように相槌を打った。

「どうしたヤヨイ!?なんかいい案あったか!？」

「たしか、ポケモンセンターのパソコンってさ『にがす』って機能あったよね。」

「えっ…?？」

「それだ!!ナイスアイデアだヤヨイ!!」

「えへへ〜♪」

「今回ばかりはでかしたと言って置いてやりましょう。ナイスです!」

俺もメアも大賛成だった。しかし、

「うそ………！なんでボクが………！せつかくここまでしてハルトと一緒にしろとうとしてるのに………！ハルトはボクのが嫌いな………!?」

俺を後ろから抱きしめているアグノムは震えていた。何かに怯えるように。そして俺は答える。

「違う。俺がお前のことは嫌いなわけではない。でもな、俺はお前をゲットするわけにはいかない。お前は意志を司る神のような存在でリッシ湖を守らないといけないんだ。俺みたいなトレーナーでもないやつがゲットしちやいけないんだ。」

「嫌だ!!」

アグノムは大声で叫んだ。

「ボクはもうあんなどころにずっといなくない!!管理も守護もしたくない!!自由が欲しい!!誰かに護らりたい!!メアやヤヨイみたいにハルトと一緒に楽しく過ごしたいだけなんだ!!」

アグノムは涙で顔をぐちゃぐちゃにして崩れ落ちた。

「嫌だよお………！ハルトみたいなこんなボクでも優しくしてくれる人間なんてもう二度と現れるわけがない………！ただでさえ人間と過ごせる時間なんてボクからすれば僅かなのにそれでもダメなんて………」

「……。」

「……なんで、ボクら伝説ポケモンは人間と話せるようになってるんだろ……なんでボクはアグノムとして生まれたんだろ……。普通のポケモンで生まれれば意思疎通も出来ないし、ハルトと出会うこともなかったかもしれないのに……。!!ハルトに恋することもなかったかもしれないのに……。!!」

耐えられなくなった俺は気づけばアグノムを抱きしめていた。

「ごめんアグノム。俺、お前の気持ち全然わかってなかったよ。せめて、俺がいる間……。その間だけは一人にしない……。俺が守ってやる……。だから、もう泣くなよ……。」

「ハルトお……。うううう……。!!」

俺はアグノムが泣き止むまでずっと抱きしめてあげた。

――

「落ち着いたか？」

「うん、ごめんねハルト。……えへへ。」

アグノムは目の周りを赤くしながらいつもの笑顔を見せた。

「ねえ……。」

「ん？」

「ほんとにずっと一緒にいてもいいんだよね？」

アグノムは確かめるように俺に聞いて来た。

「ああ、それは認めるさ。でも、条件がある。」

「条件？」

さすがにこれは満たしてもらわないと周りに迷惑が掛かると思った。

「せめて、週一くらいでリツシ湖に通えよ？お前はリツシ湖の管理を任されてる身なんだから、俺が生きてる間だけでも守る。それが条件だ。」

「うん、わかったよ。」

「よし。それじゃこれからもよろしくな。アグノム。」

俺はアグノムに手を差し出した。アグノムは満面の笑顔を見せ、

「うん！」

元気な返事を返して握り返して来た。

「はあ…、まーた私のライバルが増えましたよ。まあ、マスターのハートを掴むのは私ですけどね。」

「ボクも負けないよ！絶対振り向かせてやるんだからね!!」

「あ、そういえばアグノムには名前つけてあげないの？」

ヤヨイは思い出したように言った。

「そうだなあ……、アグノム。お前、名前欲しいか？ いらないうらそのままで呼ぶけど。」

「ボクはハルトがつけてくれた名前なら何でもいいさ。さあ、決めて。」

「そうだな、お前はここの青空みたいな青い髪をしてるから……『ソラ』なんてどうだ？」

「うん、最高だね。ありがとうハルト。」

そう言って、ソラは優しく微笑んだ。

こうして、アグノム改め、ソラは俺の仲間となった。

『ワアアアアアアア!!!』

すると、突然後ろの方から大歓声が聞こえた。……大歓声？

「あつ、やべっ！ もう始まってんじやん!!」

「ホントだ。気づけばこの辺りにも人はあまりいないね。」

ヤヨイの言う通り、周りを見渡しても人はあまり見られなかった。

「いそがねえとな。よし、メアとソラは戻れ！」

と、俺がボールを二個出した瞬間。

「あ、ボクなら心配ないよ。」

そう言うと、ソラの身体が光り出し、気づけば元のアグノムの姿になっていた。

『これなら大丈夫だね。ハルトの膝の上で見られるし。』

「くっ、卑怯ですよ！私も元の姿に戻れたらあっ!!」

「いや、お前は元の姿でもそこそこ大ききがあるから無理だろ。」

「……」

メアは黙ってボールの中へ入っていった。

「……なんかごめん。」

俺は小声でメアに謝ったのだった。

第13話 チャンピオン

「やっべ、もう試合も終盤じゃねーか!」

一番前の二つ空いてる席を見つけて何とか座る。

「わー!すごい歓声だね!」

ヤヨイは目を輝かせた。

「そうだな。そりゃチャンピオンと四天王の一人の試合なんてそう見られるもんじゃないしな。」

試合はどうなってるのかな? そう思ってスタジアム中央上側の大モニターに視線を移す。

『シロナ ○○○ vs オーバ ○**』

「まじかよ。シロナさん圧倒的にリードしてんじゃねえか。」

モニターを見る限り三対三のシングルバトルのようだが、オーバはあと一体しか残っていない模様。

ー

「くそっ、あとはこいつだけか……。頼む! ゴウカザル!!」

オーバは最後の一体、相棒のゴウカザルを繰り出した。

「きいー!!」

シロナはポケットからボールを取り出す。

「頼むわよ。ガブちゃん!!」

「任せてください。あとガブちゃんと呼ぶな。」

シロナのエースポケモン、擬人化しているガブリアスだった。

『出たぞお!!シロナ選手のエースモンスターガブリアスだあ!!』

周りのボルテージは最高潮に達した。

「ちっ、メンドクセエ奴がきたぞ……!」

オーバは苦い顔をする。しかし、オーバにもプライドがある。ただ一方的に負けるわけにもいかなかった。

「よし、ゴウカザル!マツハパンチだ!!」

「キイイツ!!」

ゴウカザルの鋭いパンチがガブリアスを襲う。

「ガブちゃん避けて!!」

「ガブちゃんツ……言うな……ツ!!」

「おらあ!ゴウカザル!オセオセで行くぞお!!」

マツハパンチを連続で繰り出し、ガブリアスはそれを避け続けた。

『おーっとガブリアスがどんどん追い込まれていくぞお!!このまま』

ウカザルが押し切ってしまうのかあ!!?』

――

「……まあ、それはないだろうな。」

『だね。あのガブリアス、ゴウカザルのマツハパンチを完全に見切ってるしね。』

俺とアグノムはガブリアスが余裕だと言うことに気づいていた。

「私だったら、マツハパンチの一発目の時にゴウカザルの拳ごと跳ね返してるんだけどなあ……。もしかして、あの同族……弱い?」

ヤヨイは首を傾げながらそんなことを言っていた。

「お前、本当にそんなことできるのか?」

俺は念のため尋ねた。

「もちろんだよ。私はお父さんを世界一にするためには何だって手に入れるよ。圧倒的な攻撃力だって、どんな攻撃も見切れる反射神経も、どんな攻撃も躲す瞬発力だってね。」

そう語るヤヨイの目はまるで飢えたケモノのような目をしていた。

「……そうか。でも、あまり無理はするなよ?俺は別にそこまで急いでるわけでもないんだ。まだ、始まってすらいないんだぜ?」

「……うん。」

ヤヨイは静かに頷いた。

気づけばヤヨイは俺の手を優しく握っていた。気づいた俺も握り返した。

『バギイツツツ!!!』

すると、真ん中の方から鋭い打撃音がした。俺はハッと中心に視線を戻した。

そこには今にも倒れそうなゴウカザルと余裕の表情を見せるガブリアスがいた。

——

「ガブちゃん!!ギガインパクトよ!!」

「御意ツ!!」

ガブリアスはものすごいエネルギーを身体に纏い、全速力でゴウカザルに突っ込んでいく。

「ゴウカザルツ!!!避けろおお!!」

「ギツ……イイ……!!」

しかし、ゴウカザルはもう立つことができず、膝をついた。

「ゴウカザル————ツ!!!」

そして、ゴウカザルはもろにギガインパクトを受けた。

『ズドオオオオオオン!!!』

ゴウカザルはそのまま弾き飛ばされ、壁に激突した。

ゴウカザルは倒れ伏せ、完全に気絶していた。

「ゴウカザル戦闘不能！ガブリアスの勝ち!! やって勝者チャンピオンシロナ!!!」

『試合終了おおお!! シロナ選手のストレート勝ちに終わりました!!!』

周りから凄まじい歓声と拍手が飛び交った。

「まあ、こんなもんかな。」

ガブリアスは軽く息を吐いた。

「お疲れ様、ガブちゃん。」

「ガブちゃん言うなって言ってるでしょ。てか、直す気ないですよね？」

「うん（即答）」

「氏ね。」

「酷くない!?!」

すると、ガブリアスは少し表情を険しくした。

「……、感じるな。」

「どうしたの、ガブちゃん？」

ガブリアスは目を細めて辺りを見渡す。何かを探しているようだった。

「この何処かに僕と似てるものを感じたんですよ。………同族か？」

「へえ、あなたが探すくらいだから……相当強いよね。」

「気配ですけど………まあ、強いですよ。」

「……」

「………」

（うわ……、絶対あのガブリアス、ヤヨイのこと探してるわ。どうしよう……。）

無表情で冷静な表情をしているが冷や汗が止まらず、内心焦りに焦っていた。そう、あいつガブリアスに見つかったら間違いない面倒なことになる。俺の直感がそう言っていた。

「……ヤヨイ。」

俺はヤヨイに視線を移す。

「なに？お父さん。」

「ちよつとボールに戻ってくれ。理由はめんどくさいことになりそうだからだ。」

「えっ、めんどくさいことって?」

「多分、あのガブリアスはお前のことを探してる。見つかったら表に引っぱり出されそうだからな。つーわけで頼む。」

「うーん、戦ってみたかったけど、お父さんの頼みなら断れないよ。わかった。中に入ってるね。」

俺とヤヨイはいったん裏に周り、ヤヨイをボールに戻した。

「……ふう、これでよし。」

――

「……なるほどね。」

シロナは観客席を見ていた。そして、何かを把握したようだった。

「気配が消えたか……。ここを去ったみたいですね。」

「そうね。」

すると、マイクを持ったMCの人が出てきた。

「シロナさん!!お疲れ様でした!!四天王のオーバに対して三連勝のスレート勝ちでしたが、感想はどうでしたでしょうか!？」

「そうね、相手がほのおタイプだったのもあって、相性自体は悪くなかったわ。だから、勝てない試合じゃなかった。あとは今回は偶々運が良かっただけよ。」

「なるほど！確かにガブリアスをはじめとするほのおタイプに強いポケモンが多かったですもんね！」

「それでも、さすが四天王ってところね。最後のゴウカザルのマツハパンチはすごかったわ。ガブちゃんでも完全に見切ることはできなかったし。」

「そうでしょうか……私から見たら見切って全て躲してるように見えましたが……。」

「いや、結構かすってるよ。腕のところとか少し傷になってるし。」

ガブリアスが割り込んで、実際に右腕の若干のキズを見せた。

「なるほど、確かに所々当たっていたようですね。それでも最後はギンパクトで締めたのでよかったですのではないのでしょうか？」

「確かに今回はうまく決まってくれたけど、そもそもゴウカザルは素早さが高いから避けられる可能性も高かった。半分賭けみたいなものね。避けられてたら反動で動けないガブちゃんを叩かれてたと思うわ。いろんな面から見れば反省点もたくさんあったってことよ。」

「なるほど、今回は勝ったけど課題点や反省点も多く見られた試合だったということですね！お疲れ様でした！次の試合も期待してま

す！それでは最後に会場のファンに一言お願いします！」

「そうね……、結構早く終わったからまだ大丈夫よね。」

シロナは辺りを見渡してある一点を見る。

「そうね、中々ハードな試合だったけどまだまだ足りないわ。そこで私はこの会場に来てあるトレーナーと戦いたいなのよ。というより戦え。」

あたりがざわめき出す。流石にMCの人もそれは想定外だったよ
うで、少し驚きの表情を見せた。

「この会場にチャンピオンが戦いたくなるトレーナーがいるのですか？初耳ですけど。」

「そうね、そのトレーナーはまだ若いわ。しかし、将来性は高いし、い
ずれこのチャンピオンの座を必ず獲りにくると思ってる。だから私
はこのチャンピオンシップにその子を招待したわ。」

「チャンピオンがそこまで評価するなんてそこまで強いんですか？そ
のトレーナーは。」

「ええ。」

シロナは頷いた。そして、

「出て来てちょうだい！！そのトレーナー！！」

シロナはそのトレーナーを指差し、大声で呼んだ。

――

「そうね、中々ハードな試合だったけどまだまだ足りないわ。そこで私はこの会場に来てあるトレーナーと戦いたいのよ。というより戦え。」

「へえ、そんなトレーナーが来てるのか。タワータイクーンのクロツグさんとかかな？シロナさんも面白いエンターテイメント用意してくれてるじゃん。」

『……………』

アグノムはなぜか無表情だった。

「どうした？アグノム。」

『い、いや、なんでもないよ。うん、確かに楽しミダネ。』

後半棒読みだった気がするが気のせいだろう。

MCとシロナの会話は続く。

「この会場にチャンピオンが戦いたくなるトレーナーがいるのですか？初耳ですけど。」

「そうね、そのトレーナーはまだ若いわ。しかし、将来性は高いし、いずれこのチャンピオンの座を必ず獲りにくると思ってる。だから私はこのチャンピオンシップにその子を招待したわ。」

「へえ、若いトレーナーなのか。将来性も期待して……………、招待し……………」

た……つて……ん？」

なんだろうものすごく物あたりがあるぞ？招待した？招待したって言ったよな？

『……どんまい。』

「うおい!?なんだよその諦めの表情は!?そもそもまだまだ俺って決まったわけじゃねーだろ!？」

俺の額から冷や汗が止まらない。焦れば焦るほど焦ってしまう(語彙力欠落) やべえよ……w、マジで震えて来やがった……ww

「出て来てちょうだい!!そのトレーナー!!」

突然シロナさんが大声で呼ぶ。思わず「ひゃいっ!？」って叫んでしまいそうになったがそれを死ぬ気で堪え、なんとか声に出さずに済んだ。

俺はすぐに下を向いて目を瞑った。そして、そのまま何も起こらずに終わることをひたすらに祈り続けた。

(このまま終われ……)

「……………」

(このままおW……、なんだ？会場が妙に静かだぞ？)

そう、さつきまで熱気であふれていた会場が嘘のように静か、無音なのだ。

違和感を感じ、そーっと顔を上げる。

「なんd…「はい、捕まえた!!」ファツ!」

背後から肩を叩かれた。振り向くとそこにはなんかすげー黒い笑顔畜生を浮かべてるシロナさんがいた。

周りの観客は誰一人として帰っておらず、下を向いて祈ってるうちにシロナさんがわざわざ俺のところまで来ていたのだ。

「私はあなたのことを指名したのよ。あなたもわかってたんでしょ、ハルトくん?」

「ナンノコトカワカラナイ。ボク、はるとジャナイ。ヒトチガイヒトチガイヒトチガイダヨー。」

「あ?」

「すみませんすみません調子こきました俺みたいなクズがチャンピオン様様相手にはシラを切つて本当にすみませんでした助けてくださいお願いなんでもしますから………はっ!」

「それじゃ来てもらおうわね?」

俺はシロナさんに腕を掴まれ無理やり引つ張られる。

「いやだあ!!行きたくないよおお!!シロナさんに公開処刑されるなんて嫌だよ!!誰かたすけてえええ!!」

そんな悲痛な叫びも届くわけもなく俺はバトル場のど真ん中にひきづり出された。

さっきのMCの人がやってきた。

「君がチャンピオンの言っていたトレーナーだね。名前は？」

「あまり周りに知られたくないので黙秘します。仮名でA氏とでも呼んでください。」

「そ、そう……(結構冷静だなこのガキ……てか、よくも俺とシロナ様の時間を……!!4ね!!)」

シロナさん、は思い出したようにもう一度俺のところに来た。

「あ、ハルト」げふん!!げふごふん!!げほごっほ!!「A君、少し話があるんだけどいいかな？」

「なんすか……?どうやってぶちのめすか予め教えてくれるんすか?」

「違うわよ。あなた……手持ちのポケモンって何がいるの?あ、さっきの何でもするまだ有効だからね?全部教えてもらおうよ。」

「は、はい……（この鬼がああああ!!）」

「ダークラ^メライとアグ^ラノムとガブ^ヤリアス^ヨだけですよ。」

「……やっぱりガブリアスがいたのね。」

「シロナさんのガブリアスってば、めちやくちやヨイのこと探してたんで、面倒ごとにならないうちにボールに戻したんですよ。ま、結局無意味に終わりましたけど。」

シロナさんは少し考えた後、こちらを見た。

「……よし、あなたに3対3のシングルバトルを申し込むわ。いいわね？」

「拒否権は……「無いわ。」……デスヨネー」

「わかりましたよ。その勝負受けます。」

こうして、俺の初バトルはいきなりチャンピオンのシロナさんということになってしまった。………帰りたい（泣）

第13話 依存

『チャンピオンの指名で突如現れた少年A(仮名)!!果たしてチャンピオンも認めるその実力とは如何にツ!?さあ、バトル開始だア!』

周りのボルテージは再び最高潮に達する。……こいつら元気だな。俺はこんなにも精神的にやられてるのに……。

「行くわよ!!ハルト君!!」

「なんでそんなにテンション高いんすかねえ……、力の差なんて歴然でしょ……あれですか、俺を晒し者にして社会的に殺すつもりですか?ひどいですねえ、さすがチャンピオンは格が違いましたわ。」

そうだ、王者はこうやって地位を上げていくんだった。そうだったそうだった、忘れてたよ。

「ちっ、違うわよ!貴方のポケモンが気になったから呼び出しただけよ!ほら、早く出しなさい!!」

「ええ……そもそも戦いたくないんすけどお……(絶望)」

「もう!貴方がなんと言おうと戦うわ!!行くわよ!!ルカリオ!!」

「グアウ!!」

『チャンピオンの繰り出したポケモンはルカリオだあ!!果たして少年Aは何を繰り出すのかあ!!』

かくとう・はがねタイプのルカリオを見て俺は脳をフル回転させ思

考する。

(……普通に考えたらエスパータイプのソラを出すところだが、こいつをこんな全国生中継にこんな伝説ポケモンを晒すわけにもいかない。絶対ギンガ団に目をつけられて捕まることになるわ(確信)。ヤヨイを出してもいいが、なんかシロナさんの思うツボみたいになって嫌だな……。てか、ヤヨイレベルになると全員コマ切れチャーシューにしてしまいそうで怖いんだよね……)

気づけばメアを出すしか選択肢が無くなっていた。そして、メアの入ったボールが妙にキラキラしているのは気のせいだろうか。

『マスター私を出してくださいマスター私を出してくださいマスター私を出してくださいマスター私を出してくださいマスター私を出してくださいマスター私を出してくださいマスター私を出してくださいマスター私を出してくださいマスター……』

気のせいじゃなさそうだ。すげー出して欲しそうにしてるなこりゃ。

あとシロナさんに勝つわけにもいかないから予め手を打っておくか……。俺の未来のためにね。

「……おい、ソラ。」

『おつ、なんだいハルト。結婚したいの?』

「ちやうわ。ちよつとお前にしかできないことがあるんだ……。」

数十秒後……

「ハルト君！さあ、君のポケモンを出して!!」

「……はあ、お手柔らかに頼みますよ。割とマジで。行くぞ！メア!!」

俺はメアを繰り出した。

「まっかせてくださーい!!私があんな犬コマ切れチャーシューにして明日の夕飯のラーメンの具材にしてやりますから!!」

すげえ元気そうにとんでもないこと言いながら出てきた。

すると、周りが急にざわめきだした。……まあ、人型だからな。無理もないか。

『なんと!!少年A選手は人型のポケモンを持っていたようだア!!それは予想外!!面白い展開になりそうだぞ!!しかも！さつき入った情報によりますと、少年A選手の出したあの人型は『ダークライ』というポケモンだそうだ!!さあ、あまり知られていない未知のポケモンの実力や如何に!!?』

「ふふつ、まさかいきなり相性の悪いダークライを繰り出すなんてね。あの子は繰り出さないのかしら?」

「まあ、ヤヨイを場に出したらちよつとやばいことになるのでだそうにも出せないですよ。それにこんな場にソラを出すのも命取りになりかねないし、そうなたら必然的にメアしかいないんですよ。つっても、メアは相性関係なく強いですよ?」

「ふふふ、流石私のマスター、わかっていますねえ……!!私に相性なんて関係ないも同然!!さあ、行きますよ!!」

メアもすぐく気合が入っていて燃えていた。これなら何とかかな。

「行くわよ！ルカリオ!!はどうだん!!」

「グアルー!!」

ルカリオの両手から青色のエネルギー弾が放たれた。

「かわして、前進だ!!」

「はいっ!!」

メアは高速で飛んでくるはどうだんを躲しながら、ルカリオとの距離を詰めていく。

「メア!!一発ドロップキックかましてやれ!!」

「はいっ!!喰らえこのクソ犬やろう!!」

メアの鋭い蹴りがルカリオを襲った。

「ルカリオ!!躲してインファイトよ!!」

「ッ!!」

「グアウ!!」

ルカリオはメアの蹴りを紙一重でかわし、そのまま高速でパンチを繰り出した。

「メア!!」

高速で繰り出されるパンチをメアも何とか受け流していた。

「くっ！やりますね!!でも、マスターの期待を裏切るわけにはいきませんッ!!」

『ルカリオの鋭いインファイトがダークライを襲うぞおお!!しかし、ダークライも必死に避ける!!』

「なかなかやるわね……!!ルカリオのインファイトをほとんど避けるか受け流すなんてね……!!」

「まあ、メアの動体視力も伊達じゃないのでね!!今だ!!ルカリオがよろけてるぞ!!あくのはどうだ!!」

「はいっ!!」

「なっ!?躲して!!」

「遅いですよ!!喰らえええ!!」

インファイトで守りが手薄になったところを狙い、メアは黒いエネルギーの塊をルカリオの腹に叩き込んだ。

「グアアッ!?!」

「ルカリオッ!!」

ルカリオはインファイトの影響でぼうぎよとくぼうが手薄になつていたのでかなり効いたのかすこし動けなくなつていた。

「メア!! まだまだいくぞ!! 物理攻撃で押し押し押し!!」

「はいっ!!」

メアの強烈な蹴りや拳がルカリオを襲った。避けようとしているがほとんどをまともに食らっていた。人型の長所を十分に活かせた攻撃だと自分でも思った。

『おーっと!! かなり一方的な展開になってきたぞお!! ルカリオがダークライの攻撃にかなり押されている!! これは決まるかあ!!?』

すると、シロナはニヤリと笑った。

「ツ!! 今よ!! カウンター!!」

「何ツ!？」

「ぐあああう!!」

『バギイイツ!!』

ルカリオの鋭い拳がメアの顔面を捉えた。

「ぐっ……………はあ……………ツ!!?」

「メアツ!!!」

「こうかは抜群よ!! ルカリオ!! はどうだん!!」

そして再びルカリオの両手から青色のエネルギー弾が放たれた。

「メア!!あくのはどうでむかえうて!!」

「はいっ!!だああおああ!!」

メアの両手から黒い光線が放たれた。

『ズドオオオオン!!』

はどうだとあくのはどうがぶつかり合い、爆発して砂煙が上がった。

「っ!!メア!!」

「ルカリオツ!!」

『おーっ!!はどうだとあくのはどうのぶつかり合いで会場が砂煙で見えなくなったぞ!!果たしてどうなのかあ!!?』

砂煙が会場中を覆い尽くし、周りが見えなくなった。メアとルカリオがどうなっているのか気になるが見えなくて確認することができない。

すこし経つと、砂煙が晴れて見えるようになってきた。そこにいたのは……

「ッ……!」

「ルカリオツ!!」

地面に倒れ伏せているルカリオとそばに立っているメアだった。

「いや、違う!!あれはツ!!」

「そうです。シロナさんのルカリオはおそらく眠っています。」

「砂煙の立っているうちにそばに行ってダークホールを食らってもらいました。実は私ってすごく目がいいので砂煙くらいではどうってことありませんので。今、ルカリオは私の特性のナイトメアとあくむを同時に受けています。だから、ほら。眠っているのに苦しそうですよ?。」

「ぐうう……あッ………!!」

メアは不敵な笑みを浮かべる。文字通り、ルカリオはすごく苦しもうに悶えていた。

「ルカリオ!!起きて!!」

シロナさんは必死に叫んでルカリオに呼びかける。

「ぐっ……あぁう!!」

ルカリオは叫び声を上げて苦しんでいる。まだ、目を覚ましそうにはなかった。

「ダークホールはポケモンであろうと人であろうと喰らえば、睡眠時の一番眠りが深い状態にまで持っていくのでそう目がさめるわけありませんよ。ふふふ……。」

メアは不敵な笑みをずっと浮かべているがどこか自虐的に見えた

のは気のせいだろうか。

「……………私はこの悪魔のような能力でいつも人を苦しめてきました。正直胸が苦しかったです。」

「メア……………お前……………」

やっぱり、メアはこの特性に苦しめられていたらしい。

「でもね、私は『マスターのために』って思えば躊躇なく使えます。マスターを守るために私はこの忌々しいチカラを使うんです。だから今は微塵も辛くありません。」

「ぐううあ……………ツ……………ああっ!!」

その間もルカリオは悶えて眠ったままジタバタしている。これ以上見てるのはこちらとしても辛いのでそろそろ勝負を決めることにした。

「メア……………ゆめくいだ。」

「ツ……………!」

メアが一瞬躊躇したように見えた。

——

「メア……………ゆめくいだ。」

「ツ……………!」

マスターから指示されたのは、相手が眠っている時に相手の夢を喰らい、その半分ほど自分の体力に変える『ゆめくい』という技だった。一瞬躊躇してしまっただが、マスターの命令ならば仕方がないと腹をくくり、技を繰り出した。

「ぐっああああっ!!?ぐっおおおおああああっ!!!」

ルカリオは眠りながらも目を見開き、苦しみの声をあげた。そう、私が夢を喰らったのだ。

「ぐっ……!」

ルカリオの夢が自分の中に入り込んできた。すると、突然自分の身体が何か岩を背負ったように重くなり、視界も歪み、今にも全てを吐き出したくなるようなそんな気持ちの悪い吐き気に襲われた。

そう、私がゆめくいを使いたくないのは使うと副作用なのか知らないが体力は回復するが、さっきの吐き気のような精神的な負担が私を襲うのだ。以前はそんなことは無かった。しかし、今はこんなことになってしまっている。どうしてそんなことになってしまったのか……その原因は………マスターだった。

一週間ほど前にさかのぼるが、私がマスターと添い寝をしていた時、ふと思ったことがあった。

『マスターの夢を食べてみたい。』

自分でも可笑しいことはわかっていた。しかし、自分は夢とは良く

はないが縁のあるポケモンだったせいか、その好奇心を抑えられなかった。……きつと本能的なものだったのだろうか。

そして、その夜私はこっそりゆめくいでマスターの夢を食べたのだ。

すると突然私の視界が真っ白になり、身体が宙に浮くようなそんな感覚になり、とてつもなく癖になるような、そんな快感に襲われた。マスターの夢は他の汚い欲望だらけの生き物とは違う、周りのためを思い、そしてこんな私のことも思うそんな純白でとてつもなく綺麗な欲望と夢を持っていたのだ。私は心がとても安らぐような快感に身を任せていると気がつけば朝になっていた。

マスターは目を覚ました。しかし、眠っていたころの記憶が残っていなかったらしい。私はいつの間にかマスターの昨日の夢を全てを食べつくしてしまったらしい。すごく申し訳なく思い、二度とマスターの夢を食べないようにしようと誓った。しかし、その日から私に異変が起こったのだ。

チャンピオンロードでいつも通り特訓も兼ねて野生の強いポケモンと戦っていたときのことだった。私はいつも通りダークホールで敵を眠らせ、ナイトメアで瀕死寸前まで追い込み、ゆめくいでトドメを刺すというのが必勝パターンとなっていた。そして、私がゆめくいを使ってそのポケモンの夢を食べたときにそれは起こった。

「ぐっ……!?何……こ……れ……、すごく……ぐる……じ……っ！」

そう、昨日まではどうも無かったのにゆめくいで夢を食べると身体がその夢に拒絶反応を起こしたかのように苦しくなるのだ。体力は回復しているがそれよりも精神的なダメージの方が遥かに大きかった。

そして……更に致命的な欠陥が生まれてしまった。それは……。

「ルカ……オ……とう……のう……て……しゃ……くら……」

審判からの判定がかすかに耳に入った。その瞬間、私は安堵し、抑えられなくなった。

「ますたあ……ますたあ……」

私はマスターのことしか考えられなくなっていた。そう、致命的な欠陥とはゆめくいを使ったあとまるで禁断症状を起こしたかのようにマスターを求めてしまうのだ。きっと身体がマスターの夢での快楽を覚えていて忘れられなくなってしまっていたからだろう。しかし、そんなことを考えられるような状態でもなかった。

「……メア？」

気がつければ私はマスターの目の前にいた。そして、無意識に私はマスターの胸に顔を埋めていた。

マスターの香りが私の鼻孔を通り、全身に行き渡る。すると、胸が熱くなり夢で感じたようなそんな快感に再び襲われるのだ。とてもフワフワして幸せな気持ちになる。そして、思わず声漏れた。

「ふひひ……ますたあ……」

ああ、どうしよう。わたし……絶対にマスターに嫌われた……どうしよう、でもマスターから離れられない……。いやだ、嫌われたくない……嫌われたくないの……!!自分を今すぐ殺してやりたくなるようなそんな自己嫌悪に襲われた。

「……………ううう……………」

マスターの顔に埋めたまま気づけば目からは涙が出ていて、マスターの服にシミを作ってしまった。情けない……………快樂に抗えないこんな自分が情けなくて仕方がなかった。

「えっ……………?」

自分でも頭が追いつかなかった。マスターは私を優しく抱きしめてくれたのだ。私は思わず顔をあげた。そして……………マスターは何かを察したような顔で

「そうか……………、よく頑張ったなメア。」

そう言つてマスターは優しく微笑んだ。

……………こんな狂った私でも愛してくれる。

気づけば再び目から涙が溢れていて、再び胸に顔を埋めた。そして、また幸せな感覚が蘇る。

……………ああ……………マスター、私の愛しい愛しいマスター。

……………ずっと、永遠に愛しています。

私は静かにこの幸福な時間を感じながら意識を落としていった。

――

ルカリオは苦しみながら叫び声をあげ、そして、動かなくなった。
いや、死んだわけじゃないからね!? 死んでないからね!? 気絶しただけだからね!?

「ルカリオ戦闘不能!! 勝者ダークライ!!」

『ルカリオ倒れたああ!! なんと大番狂わせが起きたぞお!! いきなり少年A選手!! チャンピオンのポケモンを一匹倒したあ!!』

周りのボルテージもマックスになる。

「ふう……とりあえずこのままメアで………ん?」

気づけばメアは虚ろな目でフラフラとこちらに歩み寄ってきていた。

「どうした? メア……ア……?」

すると、突然メアは倒れこむようにして俺の胸に顔を埋めていた。
何が起きたのかわからないでいると、

『…………なるほどね。あの時躊躇していたのはこのせいだったのか。』

ボールの中からソラの声が聞こえてきた。

「どういうことだ？」

『メアのゆめくいは何か訳ありみたいらしい。使うと発作のようなものが起きて…………この状態を見る限り、ハルトを本能的に求めてしまおうらしいね。』

そうか、だから一瞬戸惑いを見せていたのか。

「ふひひ…………ますたあ…………」

「ううう…………」

最初は笑っていたメアも気がつけば、震えるようにして泣いていた。きつと俺にこんなことをして嫌われたと思っっているのだろう。そんなことで俺はメアのことを嫌いになったりはしない。なら、俺にできることは…………。

「え……………？」

優しく抱きしめ返してやることだった。

「よく頑張ったなメア。」

メアは大粒の涙を流し、再び俺の胸に顔を埋めて、気づけば眠っていた。

「ふう……てか、メアのやつ。俺が苦しくないが離れられない程度の力で抱きしめてやがる……!! 離れられねえじゃん!!」

俺のプランはすぐに破綻してしまった。

『どうする? ボクがいこうか?』

ソラが尋ねてきた。

「いや……もう、こいつで行くしかないだろ。」

俺は仕方ないと腹をくくり、ポケットからボールを取り出した。そして……

「行け! ヤヨイ!!」

俺はヤヨイを繰り出したのだった。

第14話 逃亡

「はっ…はっ…はっ…！」

俺は今全力で走っている。何をいきなり言い出すのかわからないと思うが、俺は今走って逃げているのだ。何故、逃げているのかと言うと、遡るとおよそ20分程前のことである。

俺はシロナさんに引つ張り出されて大舞台でバトルをさせられていた。で、メアがルカリオを倒してしまうという大番狂わせが起きてしまい、ヤバイと思った俺はソラをこっそり繰り出して、ヤヨイが戦ってる最中に会場の照明を落としてもらったのだ。で、周りがぎやーぎやー騒いでいる間にこっそり逃走し、今に至ると言うわけだ。

「はあ……これからどうすりゃいいんだよお……」

テンガン山入口前で地面に座り込んで頭を抱えていた。顔を上げるとヨスガシティの明かりがうっすら見える。行きはシロナさんのトゲキツスにお世話になったが、今は逃亡している身なので当然トゲキツスにお世話になることはできない。引き返してシロナさんに会ってお願いする手もあるが、あの人はおそらく逃げ出したことに激おこぶんぶん丸だろう。捕まったら間違いない俺は死ぬ。

「もう、徒歩で家に帰るしかないね。」

ふと、声がして横を見ると隣にはソラが座って俺にからだを預けていた。中々ご満悦そうな表情だ。ちなみにこんなことしてるとメアが出てきて喧嘩になるところだが、ゆめくいの件でボールの中でぐっすり眠っているらしい。ヤヨイはシロナさんのガブリアスとの戦いが中断されていじけているらしい。……ごめんよ。

「前があまり見えないから道案内頼むわ。」

「おっけー、任せて。」

仕方なく俺たちはテンガン山の中へと進んでいった。

「はあ…」

私は今ヨスガシティのポケモンセンターの一室で休んでいる。そして、さつきまでの彼、ハルトとの戦いを思い出していた。

「なんなのよあの子。私のルカリオをあくタイプのだークライで倒しちゃうし、ガブちゃんとは互角……いや、それ以上の戦いしてるし。手持ち全員人の形してるし、規格外にも程があるでしょ。」

戦いを振り返って考えれば考えるほど思ってしまう。このまま戦ってたら負けてたんじゃないかと。そう思うと悔しくて仕方なくなる。ハルトの方から勝手に逃げ出してくれたから実質勝ちということにはなっているが、私からすればそれが余計気に入らない。……弱音ばっか吐いてて私と戦うことを頑なに嫌がっていた理由が強すぎて倒してしまうんじゃないかと逆に恐れていたとしたら更にイライラしてとても悔しい気持ちになってしまう。

「はあ、取り敢えずハルト君に電話してみようかしらね。」

今回の件は取り敢えず置いておくとして、勝手に逃げ出してしまったのだからおそらく徒歩で帰る羽目になっているだろう。途中でポケモンに襲われたりしたら大h……大丈夫か。あの子のポケモン規格外だし。一応、連絡を取るために携帯を取り出して電話をかけてみる。

『prrrrrrr……prrrrrrr……prrrrrrr……prrrrrrr……prrrrrrr……prrrrrrr……』

「出ないし……もう知らない！寝るツ!!」

連絡もつかないのでどうでもよくなり寝ることにした。このまま起きてると余計にむしゃくしゃしそうだっし。……おやすみ。

「ソラあ、まだ出口つかないのー？」

「まだだよー。」

テンガン山に入って30分は経ったのではないか。真っ直ぐ進むが全く出口が見えない。ゲームではヨスガからクロガネ付近までつて結構短かったはずだが、リアルだとこんなに長いとは思ってもいなかった。シロナさんに送って貰えばよかったと今更だが後悔してしまう。しかし、携帯を開いてみるが、圏外になっていて連絡をとることは不可能となってしまっている。

懐中電灯で前を照らしながら進んでいると、別方向からもう一つの光が見えた。

「あれ、こんな時間にテンガン山をうろついている人とかいるんだな。」

「ホントだ。珍しいね。」

「ゴルバットでも捕まえ……に………ッ!!」

「ハルト?」

俺は思わず絶句してしまった。懐中電灯で照らしながら現れたのは青いトゲトゲ頭で顔は色白で目つきは鋭い、目があった人絶対殺すマンって言われてもおかしくない、ギンガ団のボスのアカギだった。服装はギンガ団のなかなか気持ちわる……独特な服装ではなく、テンガン山にいるからか、普通のジャンパーに大きめのリュックサックという、旅に出ている人のような格好だった。てか、あの人こっちに向かってきてね?

「その君。こんな夜遅くになんでこんなところにいるんだ?」

アカギは答えないと殺すと訴えかけているかのような目つきで聞いてきた。

「ヨスガシテイからの帰り道ですけど。」

取り敢えず正直に答える。

「ふむ、ということはチャンピオンマッチを見に行ったところか。」

「そ、そうですよ。」

「ふ、お前、チャンピオンと戦ってた少年だろう。違うか？」

え、なんでこいつ俺のこと知ってるの？

「い、いや、ただ観戦しに行っただけっすけど。」

「ただの観客ならこんなところにいるわけがない。あの停電の後に騒ぎを沈めたのはウチの連中だからな。誰一人として外に出してないはずだがな。」

「え。」

マジで？ギンガ団めっちゃいい警備会社じゃん！なんで、新世界作ろうとしてんだよw

「まあ、別にだからといって興味は無いがな。」
無いんかい!!

俺は心の中で思わずツツコミをいれてしまった。

「お前に一つ聞きたいことがある。」

アカギは更に目を鋭くして言った。

『『アグノム』というポケモンを知らないか？シンオウの神話に登場する三匹のポケモンのウチの一匹なのだが、リツシ湖で最近見られなく

なったらしいんだが、捕獲されたんじゃないかと思ってな。何か知ってることはないか？」

「あつ、ぼく「いや、知らないです！初めて聞きました！」

「そうか。邪魔したな。出口はすぐそこだから出るといい。」

そう言つてアカギは立ち去つて行つた。

「ソラ、あの男は危ない気がする。」

「え、どうして？普通にいい人だったじゃないか。」

「普通の人がお前のことを聞いてくるわけないだろう？つまり、そういうことなんだよ。」

「あー……なるほどねえ。なら、ここで消しておく？」

こいつ、平然ととんでもないこと言いやがつて。

「いや、あの人は他の人がいつか何とかしてくれるだろ。それに、まだ何もしてないのに消すつてのも理不尽すぎるしな。もしかしたら、何もしないのかもしれないし。」

まだ、ジュンが8歳つてことは、主人公も8歳つてことになるからギンガ団が動き出してないはずだ。何もしてないなら干渉しないほうがいい。これからの未来が変わっても困る。……あ、俺シロナさんに干渉してるわ。未来変わるかも。

思い出すと冷や汗が出てくるが『それもまた有りか。』ということにして忘れることにした。

クロガネシティにて

「あつ、あの人チャンピオンと戦つてた少年だ！」

「……」

「マジで!? 本物じゃん!」

「……」

「すげえ、マジで子供じゃん! 拡散しよ。」

「……」

なんだろうな……どこの世界線でもそうだが、珍しいもん見つけたらすぐに拡散しようとする習性どうにかならんのですかねえ……(多少の憤り) いや、ならないだろうなあ(反語&確信) 俺も実際やってそうだし。取り敢えず取るべきアクションは一つ……

「……逃げるぞソラ。」

「うん、そうだね。」

神様は俺に休む暇も与えてくれないらしい。おそらくシンオウ中に俺のことが知り渡っているらしく、俺を見るなり驚くなり、騒ぐなり、写メるなり、拡散するなりされて視線を集めている。恐らくシンオウ地方ならどこに行っても目をつけられるだろう。これからどうするかについては置いておくとして、とりあえず家まで走って逃げよう。

俺とソラはクロガネシティを急いで後にし、コトブキシティに向かった。クロガネトンネルを抜け、コトブキシティに着いたが予想通り視線を集めて騒ぎ立てられているので走って駆け抜けてミオシティに向かった。前を見ると壊れて先がなくなつた栈橋がある。

「ソラ！」

「わかってるよ。任せて！」

ソラはサイコキネシスを使い、俺を浮かせ向こう岸へ運んでくれた。便利な能力だなあ…

そして、俺たちは何とかミオシティまで何とかたどり着くことが出来た。

「た、ただいま……はあ、はあ……きつつう！」

「あら、あんたヨスガにいたんじゃないの？」

奥から母さんが出てきた。

「それどころじゃなくなって急いで帰ってきたんだよ。」

「はあ、一体何やらかしたの？話してみなさい。」

「なるほどねえ。それは大変だったわね。」

「どうしようか、どこか遠くに身を寄せるか。」

シンオウ地方内では俺のことは周りに知り渡っているのでアウト。別の地方に行くしかない。

「そうだなあ、ホウエン地方にでもにげるか。一応知り合いいるし。」

俺がちつちやい頃にホウエンで一時期住んでた時期があつて、そん

ときに知り合ったやつがいるんだが、連絡取れるかな……。あとついでにヒンバス釣りたい。釣りポイントは何となくわかるからいけるはず（ポケモンRSE知識より）

「今日はもう遅いから寝なさい。これからについては明日考えることにしましょう」

「うん、今日はなんか疲れたから寝るわ。おやすみー。」

翌朝

「よし、出るかわからんけど連絡を取ってみよう。」

携帯に番号を入力し、ハウエンの知り合いに電話を掛けてみる。

『Pr. あつ、もしもしもしもし?!?わあ!お兄ちゃんだあ!!なにになに!?急に電話かけてきてくれるなんて!!』

耳に当てて1秒で電話に出て少しビックリしてしまった。

「お、おお、久しぶりだな。悪いんだけど、シンオウで色々あつて出ないといけなくなったんだが、おまえんちに少し居候させてもらってもいいか?」

『知ってるよー、お兄ちゃんあれでしょ、チャンピオンに喧嘩売ってプライドをズタズタにした挙句、敵前逃亡したんでしょー。知ってるよー』

「なんでそのこと知ってたんだよ!ハウエンにまでそのこと回ってるのか!?!」

『そりやあねえ、私はお兄ちゃんのことこの世で一番愛してるからねえ、どこにいようともお兄ちゃんのこととは見えてるんだー、ふふふ……』

「怖えよ……やつてること完全にストーカーじゃん……。すぐにやめてくださいお願いします。」

『やだよー、お兄ちゃんのことを考えて見てないとしても正気でいられないもん。しかも、最近ほかの子に手を出してるみたいだしねえ……、その子達ともおはなししないといけないしねー』

「お、おう……。」

怖ええええええええええ!!なんでこいつこんなに怖くなってんだよ!!?ヤンデレじゃねえかよ!前会った時はまだ温厚な性格してたのに一体向こうで何があつたんだ!!?

『昼までにこっちに来る準備しといてねー、そっちに私が迎えに行くからね。』

「えっ、ちよ、おまつ……切りやがったアイツ……。」

しれつとアイツは最後に拉致る宣言していた。ハウエンから船で迎えに来るとなるとどんなに急いでも1日はかかるのだが、アイツは関係なく30分ほどでシンオウに来てしまう。理由は簡単、アイツはポケモンだからだ。人ではない。

「マスター、どうするんですか?私としてあんな堂々と犯行予告するなんて許せないので返り討ちにしてやろうと思うんですけど。」

メアは笑いながらとんでもないことを言っている。てか、笑ってるのに目が笑ってない。

「おいこらやめろ。」

「はい、殺意剥き出しにしくなくても大丈夫だよ。私はもう来てるからねー。」

「ふあっ!？」

「ッ!!」

気づけば隣にはアイツ……ラティアスが居た。白くて腰の位置まで伸びた真っ白な髪にてっぺんだけアホ毛が立っており、金色の綺麗な目をしているが、残念なことにハイライトは無い。赤のワンピースを着こなしており、ホウエンで会った時に比べたらかなりスタイルがよくなっていた。あ、別に俺はロリコンじゃないです。

「えへへ、待ちきれなくなって来ちゃった☆」

「いや、来るの早すぎだろ……ものの数秒しか経ってないぞ？いつのまにそんなに速くなったんだ？てか、お前スタイルよくなったなあ
(歓喜)」

「そうだねー、ホウエンで新しいチカラを手に入れてもっと速くなったんだよー。すごいでしょー。スタイルが良くなったのはそのおかげっていうのもあるけど、後は強いポケモンと戦いまくって強くなったから……かなあ。」

そう言つて自然な流れで俺の腕に腕を絡めて抱きしめて来た。

「……何してるんですか。」

メアがとんでもない怒りオーラを出しながらラティアスを睨みつける。

「見たらわかるでしょー?」

ラテイアスはメアを挑発するように嘲笑った。俺から見てもわかるがラテイアスは明らかにメアを見下している。メアも今にも殴りかかりそうだが、家の中だということがわかっているのだから踏みとどまっているようだ。

「…………マスターに手出しやがったら、その場消しますからね。」

メアはラテイアスを睨みつけた。

「あなたにはむりだよー。やれるもんならやってみろーって感じかなあ?」

「おいラテイアス、そろそろ離してほしいんだが…………。」

このままだと、動けないので準備もまともにできないと思い、離れるようにラテイアスに言ったのだが…

「えっ…………。」

何故かラテイアスがこの世の終わりのような絶望に満ちた表情をしている。

「えっ?」

えっ、俺が何かした?

「その…………離れてくれないと準備ができないんだが…………」

そう言うと、ラテイアスは再び希望に満ち溢れたような表情に戻った。

「そっか! そうだよね! ごめんねお兄ちゃん! 離れるね! そっかそっかあ! えへへ。」

マジで向こうでこいつに何があつたんだ……割と真剣に心配になつてきたんだが……

「ボクも何か手伝うことある?」

荷物をまとめているとボールから出てきたソラが手伝おうとしてくれていた。ちょうどソラに言いたいことがあつたのでタイミングがよかった。

「ソラ。」

「なんだい?」

「お前はシンオウに残れ。」

そう、ソラは伝説のポケモンとしてリツシ湖の管理をしている以上、ホウエンに連れて行くことはできないと思つたのだ。だから無理も承知の上でソラに残るように命令した。

「わかつたよ。それにハルトならそう言うと思つてたしね。……寂しくなるなあ……ぐすつ……」

ソラもそのことは理解していたらしく、潔く受け入れてくれた。俺は涙を流していたソラを優しく抱きしめてあげた。

「ほとぼりが冷めたら直ぐに戻るから待つていてくれ。本当に直ぐに戻るから……な?」

「わかつてる……ずっと待つてるから……。」

ソラは少しの間俺の胸に顔を埋めていた。

「なあヤヨイ。お前は どうするよ?」

ソファーに座ってぼーつとしていたヤヨイに聞いてみた。

「私もホウエンに行くよ。ちよつとそらのはしらで腕試ししたいし、あと、レックウザ倒したい(直球)」

獣のようなギラギラした目でとんでもないことを言っている。てか、こいついつのまにこんな戦闘狂になってたんだよ。

「そうか、戦うのもいいがたまには体を休めろよ?」

「わかつてるよー。休憩はちゃんととってるから。とりあえず私もホウエンに行くからよろしくねー。」

「おう。」

「メアは……」

「勿論行きますよ。あの女を野放しにはとてもとてもできないので。いずれはアイツをボッコボコのミンチにしてやりますよ。」

メアはラティアスにライバル心を燃やしながらそう決意していた。俺のベッドに寝転がっていたラティアスは「無理無理」と挑発していてメアが思わず殴りかかりそうになっていた。

「はあ……頼むから仲良くしてくれよ……。」

俺はそう切に願っていた。

第15話 狂愛

「お兄ちゃん……お兄ちゃん……！むふふ……！」

ラティアスはそう言いながら俺に身体を預け、腕を絡めていた。ラティアスのハイライトのない濁ったような金色の目は他の物は一切映さず、俺だけを映している。

「いつまでこうしてるつもりなんだよ……」

「むふふ、永遠に決まってるじゃん。流石に二年も会ってないと私も淋しくてつらくて死にたくなってきちゃうもん。」

「はあ…、つつてもお前俺のことずっと見てたんだろ？あんま変わんねーだろ。」

「実際に会うのとは全く違うのおー。むふう」

そう言って抱きしめる力を強める。俺は思わず溜息を吐いた。

ラティアスが恐ろしいほどに俺に依存し、執着する理由、それは2年前にある。

二年前……俺が8歳のころ、トレーナーズスクールで勉強していた頃だ。前世の記憶もあり知識だけは豊富だった俺は首席ということもあり、留学ということでもハウエンに来ていた。校長曰く知識の差が激しすぎてかなり浮いていたのでこのような方式で一旦距離を置くようにしてみたらしい。こうしてハウエンに渡った俺はミナモシテイでポケモンコンテストなど、いろんなものを見て回っていたときのことだ。

「……………やべえ、ミナモシテイなんもねえ……。マップがほぼゲームの時と同じじゃねえか。ミナモシテイってポケモンジムもないし……………」

俺はバトルの無いミナモシテイでかなり暇をしていたときのこと

だ。

ガサツ

「ん?」

ぶらぶらしていた時、となりの森の方で何か音が聞こえた。普段なら無視するところだがよくわからない胸騒ぎのようなものがしたので音の聞こえた方に進むことにしたのだった。

「確か……こつちの方だった……よな?」

道という道はなく草木を掻き分けながら進んでいた。少し奥に進むと開けた場所が見えてきた。少しホツとした俺はそこに向かおうと急いだ。

「ッ……!!」

そこで俺が見たのは……

「お兄ちゃん……!!お兄ちゃん!!!」

血だらけになって倒れている白い髪の青年とまだ俺と同じ……いや、それよりも若い青年と同じく白い髪の少女だった。白い髪、青と赤、兄と妹、それを見て俺は一つの結論に至った。

(……ラティアスとラティオスカ。)

人型が存在することは当時はまだ知らなかった俺だが、今回は何故か一目見るだけでわかった。ラティアスは大粒の涙を流しラティオスの名を呼びながら必死に揺すっているが全く起きる気配が無い。

『…………少年。』

「ッ!?誰だ!？」

すると、突然どこから男の人の声が聞こえてきた。

『…………頼みがある。俺は力が無いばかりに守ってやれず、俺の力が残ってなかったばかりに『このころのしずく』すら残してやれなかったんだ……。…………赤の他人なのにこんなことに巻き込んでしまつて申し訳ない。でも、無理も承知の上で頼みたい。ラティアスを…………俺の妹を助けてやってくれ…………!!』

声の正体…………それはさつき消滅したラティオスのものだった。どのような力でしゃべっているのかわからないが俺に頼みこんできたのだ。

「…………わかった。俺がなんとかするよ。」

俺はこの子、ラティアスを放つてはおけなかった。このままだところの子はずつと独りぼっちになってしまう、それだけはダメだと思い、ラティオスの頼みを飲むことにした。

『ありが…………と…………う…………』

ラティオスは消えてしまいそうな声で俺に感謝の言葉を述べていた。俺は必ずラティアスを助けてみせると心に誓った。

取り敢えず俺はラティアスを抱えて、ミナモシテイの下宿先へ連れて帰ることにした。

ラティアスを連れて帰った俺はラティアスの傷をきずぐすりなどで治し、ベッドに寝かせていた。ラティアスは苦しそうな表情でうわ言のようにラティオスの名を呼んでいた。

「……………くそっ！」

こんなに苦しんでいるのに何もできない自分を歯痒く思った。俺にできることといえば、そばにいてやることしか無かった。だから俺は一日中ラティアスのそばで見守っていた。

その夜のこと……

「ぐうう！お兄……………ちゃん！お兄ちゃん!!お兄ちゃんツ……………!!」

今までで一番苦しそうにうなされていた。気づけば俺は立ち上がってラティアスのそばに行き、ラティアスの手を握っていた。自分でも何をしているのかよくわからなかった。

「大丈夫……………俺がいるからな……………。だから、安心して眠ってくれよ……………」

すると、ラティアスはさつきまでうなされていたのが嘘のように穏やかな表情になり、寝息を立てて眠っていた。

俺はひとまずホッと息を吐いた。

しかし、ここからだった。彼女が壊れ始めたのは。

翌朝、目がさめると俺は机に伏せて寝ていた。俺のベッドではラティアスがぐっすり眠っていた……

「……ッ?!いない!!ラティアス!?!」

ベッドを見るとそこには誰もいなかった。ラティアスがいなかったのだ。慌てて俺は自分の部屋を飛び出してリビングに出た。

「あつー!」

そこに居たのは白く長い髪をくくつてポニーテールにし、赤色のエプロンをして朝食を作っているラティアスだった。表情は明るく、昨日のことがウソのようだった。

「おつはよーお兄ちゃん!!」

ラティアスは俺のことをお兄ちゃんと呼び、嬉しそうにそばにやって来たのだ。そして、抱きついてきたのだ。

「これ、お前が作ってくれたのか?」

テーブルの上にはトーストと出来立てのベーコンエッグがあり、隣にはサラダもあった。中々美味しそうだった。

「うんっ!きつき料理の本があつて作ってみたくなったから作ったんだくえへへ／＼／＼」

「へえ、すごいなあ……!」

俺はラティアスの頭を撫でてあげた。

「それに……あの……将来、お兄ちゃんのお嫁さんになりたいし……ね?」

「……えっ?」

ラティアスは頬を赤らめて言った。えっ……お嫁……さん?俺の思考が少し停止した。ラティアスがとんでもないことを言っていることに気づいたのは5秒ほど経った後だった。

「い、いや……そもそも俺はお前のお兄ちゃんなんかじゃないぞ?」

続けて事情を説明しようとした時だった。

「!?」

ラティアスの抱きしめる力が強くなったのだ。

「なに言ってるの?」

「え?」

「お兄ちゃんは私のお兄ちゃんだよ。あれ、もしかして私のこと嫌いになったの?」

「あ、いや……。ぐっ……!?!」

すると、ラティアスはどこまでもない力で俺を抱きしめてきた。さっきの笑顔とは違い、無表情で能面のような表情で涙を流しながら強くこちらを見つめていた。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
お願いだから私のこと嫌いにならないで……!!お兄ちゃんまでいなくなっちゃったら私……わだじい……ッ!!」

そう、あの時、ラティオスが死んでしまった時に壊れてしまったのだ。もともとラティオスという兄にとても可愛がられていたのか、そのせいでラティアスの中のお兄ちゃんという存在が大きすぎたらしく

く、結果、その存在が無くなり、ラティアスの中でそのお兄ちゃんという枠に俺が勝手にはめられてしまったということになる。こちらからしたら傍迷惑な話なのだが、俺もこのラティアスを見捨てるなんてことはできなかった。だから、俺は『お兄ちゃん』になることになったのだ。

「ごめんな……。俺はお前の『お兄ちゃん』だ。お前のことをわかってやらなくて本当にごめん。もう離れたりなんかしないからな。」

俺はそう言つてラティアスを優しく撫でてあげた。その後、この発言があまりにも迂闊すぎたということに気付かされるのはまた後の話。

「うん……うん……うん……えへへ、お兄ちゃん……！」

気づけばラティアスも目を赤くしているが、さつきと同じような笑顔に戻っていた。

「よし！せっかく可愛い妹が朝食を作ってくれたんだし、冷める前に食べようか。」

「はーいー！」

こうして俺はラティアスの兄として過ごすことになったのだった。

…………お兄ちゃんが死んだ。

お兄ちゃんは悪いニンゲンたちの攻撃からの攻撃を全て受けとめて私を護ってくれていた。

でも、お兄ちゃんはボロボロになってしまい森に墜落した。

そして、間も無く死んだ。

その事実気づいたとき頭の中がぐしゃぐしゃになってなにもわからなくなっていた。

『えっ………ここは………どこ？』

次に目を覚ますと何一つ光のない真っ暗な空間にいた。周りが何も見えなくて怖くなった。一人で周りには光すらないこの空間はとても寒くて辛くて寂しくて悲しくて一生このままなのかと思うと怖くてたまらなかった。

やがて私は頭を抱えてうずくまった。怖くて怖くて震えが止まらない。今まで感じたことのない孤独感が私を襲った。

『うう………助けてよう………！』

震えてその場でうずくまっていると、突然一筋の光が差して、その直後周りが一気に明るくなった。思わず顔をあげるとそこには一人の人間がいた。

『もう大丈夫だ。俺がそばにいるからな。』

そう言っつてその人間は優しい笑顔で手を差し伸べた。

その手を取ると、とても温かくて気持ちよかった。そして、優しく頭を撫でてくれた。私はそれだけで心が暖かくなって気持ち良かった。

『お兄ちゃん……』

たしかにお兄ちゃんが生きていた頃頭をよく撫でてもらっていた。とても気持ちよくて心地の良いものだった。でも、そんなことがどうでもよくなってしまふほど、『今の』お兄ちゃんは暖かくて気持ちがよくて心地よくて明るい気持ちになって私の生きる希望となってくれていた。この温かみを知ってしまった私は二度とお兄ちゃんから離れることはできないだろう。前のアレは兄なんかじゃない。私のお兄ちゃんはこの人じゃない。そう思った……いや、確信した。

翌朝起きるとお兄ちゃん私の手を握ってベッドに顔を伏せて眠っていた。お兄ちゃんはずっと私のそばに居てくれたのだ。お兄ちゃん絶対離れたりしない。ずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっと一緒に居てくれる。

朝食の時に私がお兄ちゃんと呼んだことにお兄ちゃんは違和感を感じていたみたいだったが、お兄ちゃんは受け入れてくれた。抱きつくときそれを優しく受け止め、頭を撫でてくれた。痛み付きになるような気持ち良さで頭がいつぱいになって思わず笑みが零れた。

それからラティアスは俺から片時も離れようとはしなかった。買い物をするにも洗濯をするにも何をするにもそばにいてついてきていた。

あと、俺以外の人間を信用しなくなった。

大家さんに差し入れをもらってちよつと話していると俺の服の裾を掴んだまま、相手を殺さんとばかりに睨みつけていたのだ。

大家さんはその殺気を感じ、慌てて会話を打ち切るとそそくさと部屋に戻って行った。すると、ラティアスはいつもの笑顔に戻り、俺の胸に頬をなすりつけていた。

そして、俺とラティアスの中で一番最悪の事件が発生した。

それはラティアスと暮らし始めて2ヶ月くらい経ったときのことだった。

ラティアスと散歩をしていてちようど公園のベンチで一休みしていたときのことだった。

「ラティアス？」

「なあに、お兄ちゃん？」

「今日の夕飯何食べたい？ラティアスの好きなものでいいぞ。」

「うーん……」

夕方だったので夕食の支度もしないといけなかったのだ。ラティエアスの好きな料理でも作ろうと思ったのだ。まあ、料理はあまり得意とは言えず、少し不恰好になってしまいが……。

「あつ！ そうだお兄ちゃんの××食べたー!!」

「おいコラやめろ。食べ物の話してるんだよ。そっち系の話しじゃねえよ。」

「冗談だよ。それに先に私の××をもらって欲しいしね／＼／＼」

そう言っつてラティエアスは頬を赤らめる。

「マジでやめろ。」

そんな他愛もない(?)話をしていると、突然全身に鋭い痛みが全身に走った。

「ぐっ!!?」

あまりの痛みの強さに意識が自然と薄れていく……

「…………お…………まえ…………はッ…………」

意識が朦朧とする中最後に見たのは鋭い眼光で俺を睨みつける、気を失ったラティエアスを抱えた白い髪の男だった。俺はその男の雰囲気何かと似ている気がした。

「ん……んん？」

目を覚ますとそこは静かな森の中だった。辺りを見渡すとひとり私と同じ白い髪の男がいた。私は一目で分かった、この男は私と同じ種族である『ラティオス』だと。

「目が覚めたか。」

「……誰。」

全く知らない顔だったのでとりあえず尋ねた。

「私はお前の兄の昔からの友だ。お前の兄からいつも言われていたんだ。『妹に何かあったら助けてやってくれ』とな。お前があこのニンゲンに捕まっていたようだったから助けに来たんだ。これから一緒にみなみのことうに行って仲間たちと合流する、……だから行くぞ。」

「やだ。」

私は即答した。

「何か勘違いしてるみたいだけど私は捕まってなんかいないよ。それにあなたが言うアレはもう私の兄なんかじゃない、私の兄……お兄ちゃんはある人だけなの。だから、私はもう二度と仲間と合流なんてしないよ。」

すると、ラティオスは目を見開いて言った。

「な、何を言ってるんだ!!? そうか、お前あのニンゲンに洗脳されてるん

だな!!？」

「そんなわけないじゃん、あの人がお兄ちゃんってことはもう絶対何があるうとも揺るがない事実だよ。私はお兄ちゃんのところにかえるんだ。」

「どうしてだ!?なんであんな下劣で下衆で醜い生き物であるニンゲンに肩入れする必要があるんだ!?種族の違うニンゲンとは一生分かり合えるはずなのに!!それにお前の慕うあのニンゲンもどうせ影ではお前を何か悪いことに利用しようとしているに違いない!!考え直せ!こつちに来るんだ!!」

そう言つてラテイオスは手を差し伸べてきた。
だから私はその手を

とりあえず吹き飛ばした。

「……………え?」

吹き飛ばした際に飛び散った血が私の頬にへばり付いた。お兄ちゃんならまだしもそれ以外の生き物にこんな穢れたものをつけられるなんて最悪の気分だった。でも、今はそんなことはどうでもいい。

「お前、今お兄ちゃんのこと貶したな？」

「……は？」

右手が吹き飛ばされてまだ未だに状況が飲み込めていないのか腑抜けた返事が帰ってきた。だから私はサイキネシスで右腕ごと吹き飛ばした。

「があああああッ
!!!!??」

「とつとと答えろ、今お兄ちゃんのこと貶しただろ？」

痛みでラティオスは苦しそうに表情を歪める。

「ぐつ、ああ……ッ!! 貶した……さ……ッ!! お前をここまで変えてしまったそのニンゲンを憎んでいるからな……ッ!!」

ラティオスは痛みにも苦しみながらも鋭い眼光でそう答えた。それを聞いた私は思わず軽く笑みをこぼした。

「そっか……なら、遠慮なく殺せるね。」

「……え？」

私はラティオスの左腕を切り落とした。こいつはまだそのことに気づいていないようだ……あ、気づいた。

「ぐおおおあああッ!!」

両腕を無くしたラティオスは苦しそうにうめき声をあげた。

「お兄ちゃんを傷つけたり貶したりするゴミ共は絶対に許さない。誰であろうとね。そんな愚か者は私が一人残らず消してやるよ。」

そう言っつて私はどうやってこのゴミコイツを苦しませながら殺すか考えながら次の手に出た。

「……ハッ!!」

目がさめると公園の地面にうつ伏せになっていた。外が少し明るくなっていた、朝まで気を失っていたようだ。

「……あれは、間違いなくラティオスだった……よな。」

そう、あの気配はあの時ラティアスを残して死んでしまった時のラティオスと感じが似ていたのだ。

「連れ戻しに……来たのか。」

すぐに襲われた理由がわかった。アイツはラティアスを助けに来ただけだったのだ。俺がどうしようともラティオスから見れば俺も憎たらしい人間の一人に過ぎないのだから。仲間を守ろうとすることは当然である。

「平和に暮らしてるといいなあ…ラティアス。」

俺はそう言いながら空を見上げていた。

俺は下宿先に帰り、帰る準備をしていた。ラティアスが居なくなっ
てしまった以上、ここに長居する理由もない。シンオウに帰ってもつ
と勉強に励みたいと思ったのだ。俺は明日に帰る事にしたので荷物
をある程度まとめて下宿先の大家さんにもその事情を話し、お礼をし
てから眠ることにした。

「もう10時か。明日も早いし寝るか。」

俺は電気を消してベッドに潜り込んだ。すると突然窓が開き、冷た
い風が入り込んで来た。俺は驚き思わず体を起こした。すると、突然
誰かに強く抱きしめられた。

「お兄ちゃん……！お兄ちゃん……！……！……！……！……！！」

「おまえ………ラティアス？」

急に抱きしめて来たのはラティオスに連れ去られた筈のラティア
スだった。そして、恐怖したのがラティアスが顔を上げて俺を見つめ
た時の彼女の瞳だった。前よりも黒く淀んでいて光はなく、俺以外を
映していなかった。すると、つぎは俺の胸に顔をうずめ匂いを嗅ぎ始
めた。

「あああ……！！この匂い……お兄ちゃんだあ……えへへへ……！！もう
二度と離さないよお兄ちゃん………ッ！！」

「おまえ、向こうで何があったんだ？」

明らかに様子が変だったので原因を探ろうとした。すると、

「お兄ちゃんは気にしなくていいよ。話をつけて来たただだから。」

そう真顔で答え再び俺を強く抱きしめた。

本気でマズイと思った俺は切り出すことにした。

「ラティアス、俺は明日シンオウに帰る。」

「そうなんだあ……!!じゃあわたしもついていくよお……!」

「いや、おまえは連れて行けない。」

「えっ……」

それを聞いたラティアスはまるで地獄に落とされたかのような絶望の表情を見せた。

「なんで……、なんでなのお兄ちゃん……?もしかしてお兄ちゃんわたしのこと嫌いになっちゃったの?」

「違う、そうじゃない。おまえも兄離れしてしないといけないと思ったからだ。」

「いやだ、お兄ちゃんと離れたくない離れたら私生きていけないよ……」

ハイライトのない絶望感の溢れる瞳でそう言ってきた。胸が痛んで仕方がなかった。しかし、本当の兄に任された以上このままにはしておけない。

「ダメだ。俺はおまえに成長してほしいんだ。……わかってくれ。」

翌朝

「お兄ちゃん！起きてー!!」

「んん……もう朝か……」

ラティアスは普段と変わらない明るい笑顔で俺を起こしてくれたのだ。

「船は10時出航でしょ？早くしないと間に合わなくなっちゃうよ？……まあ、私はそっちの方がいいんだけどね。ひひ。」

そう言っつてラティアスは意地の悪そうな笑みを浮かべた。彼女は俺の頼みを受け入れてくれてハウエンに残ることを決めてくれた。進もうとしてくれたのだ。

そして……

『まもなく……シンオウ行き出航いたします。』

ミナモ船着場でアナウンスが流れた。

「ラティアス、俺は絶対またハウエンに帰る。その時は俺のポケモンになってくれ。」

「わかってるよ、私はいつでもお兄ちゃんの所有物なんだからね。」

ラティアスはそう言って涙で目を赤くしながら俺を抱きしめた。俺も優しく抱き返したのだった。

「それじゃ……行くよ。」

「うん……待ってるからね。お兄ちゃん。」

俺はラティアスにゆっくり背を向け、船の方へ足を進めた。

こうして、俺はシンオウに再び帰ったのだった。

「ふふ……これでお兄ちゃんといつも一緒だよ……！」

お兄ちゃんの下宿先の一室で私は笑っていた。実はお兄ちゃんがシンオウに帰ってしまう前にとある細工をしておいたのだ。それは私がお兄ちゃんのところに帰ってお兄ちゃんを抱きしめた後、私とお兄ちゃんと二人で一緒に寝た時だ。その時に私は少し自分の命を削り、自分のところのしずくを創り出したのだ。そして、それをお兄ちゃんの体内に埋め込んだのだ。そうすれば、私はお兄ちゃんがどこにいようと場所もわかるし、周りの環境やまたお兄ちゃんとも感覚や色々なことを共有できるのだ。

試しに目をつむり、念じてみるとそこには私のお兄ちゃんがいた。お兄ちゃんからは見えないが私がみることができただけで満足だった。お兄ちゃんがそばにいるように感じたのだ。気分が昂り、満たされた気持ちになった。

「ふふふ……お兄ちゃん……いつまでも一緒だよ。」

そして、2年後私は再びお兄ちゃんと再会する。

第16話

新天地

「よし、これで荷物は揃ったな。」

ある程度荷物がまとめたのでそろそろハウエンに逃げることにした。とりあえず母さんに一言言っておこう。

「母さん、しばらくの間ハウエンに隠れてくるよ。当然だけどこのことは他の人には言わないでね。」

「わかったわ。ほとぼりが冷める頃に帰って来なさい。」

「うん。行ってくる。」

そう言ってお店を出た。そこには嬉しそうなラティアスが居て、俺を見つけるとすぐに抱きついて来た。

「よし、それじゃ行こっか!」

「おう、頼んだぜ。」

「早くハウエンでのんびりしたいからメガシンカ使うね。」

「メガシンカ?なんだそれ?初めて聞いたんだけど。」

メガシンカという言葉は授業でも聞いたことがないし、テレビでも観たことが無い。聞いた感じ進化のようだが、普通の進化ではなさそう。少し興味が湧いてきた。

「メガシンカっていうのはねー、トレーナーとの絆が強いポケモンが一時的に更に進化して強くなれるっていうものなんだよ。勿論、私とお兄ちゃんの愛は宇宙一だからメガシンカも勿論できるよ。」

「え、でもさ、俺お前捕まえてなくないか？トレーナーとの絆なんだろう？」

「さあね、心の持ちようなんだと思うよ。それに私とお兄ちゃんはお兄ちゃんの体内に埋め込んだ私のこころのしずくで繋がってるんだから関係ないと思う。」

は？こころのしずく？

「え、なんだそのこころのしずくって？体内に埋め込んだ？」

「そう、2年前お兄ちゃんがシンオウに帰るって言ったその夜にこっそり体に埋め込んだんだ。」

「なんでそんなこと……」

「当たり前じゃん、私はお兄ちゃん無しではもう生きていけない体なんだよ？常にお兄ちゃんが見えて触れられる状態じゃないと気が狂ってしまいそうなんだもん。でも、帰るのを止めたらお兄ちゃんに迷惑かかるし、最悪嫌われる、嫌われて見捨てられたらもう私生きていけないよ。だからさ……これくらい良かったよね……？それにもう埋め込んだ私のこころのしずくは粒子状になってお兄ちゃんの身体中に散らばってるからわたしにもどうしようもないよ。あ、体に害は及ぼさないから安心してね。私がお兄ちゃんといろいろと共有してるってだけだから。」

俺は思わず絶句した。そうだ、そのはずだよな、俺という存在に依存しきってしまっているラティアスが俺が帰ることをそう簡単に許してくれるはずが無い、何かしら細工されてもおおかしくない。……迂闊だったなあ。

「ちなみにもうお兄ちゃんからは絶対に離れないからね。2年も離れてて私の頭の中はお兄ちゃんदैいっぱいなんだ。こころのしずくを通して見るだけじゃもう我慢できない。お兄ちゃんと再会する前までずっと身体が疼きっぱなしなんだもん。憂さ晴らしに片っ端からポケモンを倒していても効果無し、全然疼きが取れないんだ。……もうこれ以上耐えられないよ。」

「……ラティアス。」

「だからさ……、私をあなたの所有物モブにしてよ。もう10歳なんだから持つてるでしょ？ボール。」

ポケットを探ると一個だけ空のモンスターボールがあった。たまたまなのか仕込まれていたのかどうかはわからないがこれで彼女を捕まえることができる。ラティアスは切なそうな目で俺のことをずっと見つめていた。そして、俺は決意した。

「よし、わかった。ラティアス、お前は俺の物だ。」

そう言うと、ラティアスは先程のどこか寂しそうな表情から一転、まるで世界が救われたようなそんな希望に溢れた表情へと変わる。そして、俺はラティアスにモンスターボールを投げた。そのボールはラティアスの頭にあたり、ボールが開きラティアスは赤い光に包まれながらボールの中へ入っていく。ボールは揺れることも無く静かに落ちた。その直後、ボールが開き、ラティアスが俺を強く抱きしめてきた。

「お兄ちゃんー！」

ラティアスの目は相変わらずハイライトはない、とてつもなく俺に

対する重い愛を感じた。しかも、更に強くなってる気がした。ラティアスはパツと俺の手を離すと少し離れた。

「よおーっし、それじゃあ私のメガシンカした姿見せちゃうね！本来ならラティアスナイトっていう石とキーストーンが必要らしいんだけどね、どうしてか私には無くてもできちゃったんだよね。やっぱり想いの強さかなあ？」

そう言つて少し笑つた。

「そんじゃ行くよー！メガシンカ!!」

次の瞬間、ラティアスの体を虹色の光が包み込んだ。気のせいか知らないが虹色の光の中に黒が混じっているような気がした。光が晴れ、そこにいたのは先程まで白かった髪は少し灰色になっており、赤いワンピースは恐ろしいほどの黒に染まつており、所々に赤い線が入っていた。禍々しいオーラがでており、先程までとはラティアスの出していたオーラの強さが全く違う気がした。本人もこの姿に驚いているようだった。

「あれ？私が一人で来た時は紫だったのに……それに何かとてつもない力が湧いてくるよ……お兄ちゃん。」

「こ、これがメガシンカか……!」

「よーし！それじゃあ行くよー！つかまっててねお兄ちゃん！」

「おう。」

ラティアスは俺におんぶするように言ってきた。俺は無心になつてラティアスの背中に覆い被さつた。ラティアスからは女の子特有

の甘い香りがしている。少し頭がクラクラしそうだった。そんな時だった。

むにゆ

「…んあっ／＼／＼」

「あっ、すまん！」

手を掛けると思わずラティアスのそこそこ豊満になった双丘に手が当たってしまった。ラティアスは思わず喘ぎ声をあげる。……てか、なんで喘ぐんだよ……！

「もっ、もう！お兄ちゃんやめてよお！お兄ちゃんの匂いだけで私、クラクラして身体が熱くておかしくなりそうなのにい、そんな時に触れたら感じちやうじゃん……／＼／＼」

ラティアスは顔を真っ赤にして体をもじもじとくねらせた。

「悪かったって！ほら、早くハウエン行こうぜ。」

「う、うん。そうだねそれじゃあ出発しんこー！ー!!!」

「ッ!!!???

「ちよ………ーぐっ………ーは………やッ………イ………ー！」

急に周りの風景が変わり、とてつもない突風が俺を襲った。耐えきれなくなつた俺は自然と意識が落ちた。

「……………んん？」

目がさめると俺はベッドの中で眠っていた。2年前に使っていたオレの下宿していたアパートのようだ。昔と全く変わっていないようだった。外を見ると暗い。夜のようにだ。

「……………！……………！」

「…!?……………!!……………！」

「……………！」

ドアの向こうの方から騒がしい声が聞こえる。

「あっ！お兄ちゃん!!」

「マスター！」

「お父さん！」

リビングに行くトラティアスとメア、ヤヨイが一斉に振り向き、こちらの方へ駆けてきた。その光景はなかなか阿鼻叫喚だった。

「よがっただああ!!まずだーが死んだらわだじい……！」

メアが泣きついてきたり、

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

ラティアスは虚ろな目で震えながらひたすら謝罪してたり、

「この女……よくもお父さんを……！殺す……ッ！」

ヤヨイは怒りをラティアスにぶつけようとしたりしていた。

「ちよ、とりあえずお前ら落ち着け！」

「落ち着けるわけないよ！だって、こいつ……！こいつのせいでお父さんの心臓一回止まってたんだよ!? 殺そうとしてるのは明らかじゃん!!……だから、お父さんが殺される前にこの女を殺してやる!!!」

ヤヨイは涙目でラティアスに怒りをぶつけようとしていた。比較的温厚な性格のヤヨイがここまでキレていて今にも手を出そうとしているのを見る限り本当に俺の身体は大変なことになっていたことがわかる。また、よくよく考えたらヤヨイが強くなろうとするのも俺のためで、こうして、ラティアスに手を出そうとしているのも俺を護ろうとしているためである。あらゆる行動原理に必ずと言っていいほど俺が関わっているのを見る限り、これはヤヨイの一種の俺に対する依存ととつてもおかしくないと感じた。結局は普通そうに見えてもラティアスと同じで俺に依存している一種のヤンデレととつてもいいのだろう。

「ひっ……ごめんなさい!! 本当にわだじはっ……お兄ちゃんを殺すつもりなんでえ……なくっ……でえ……ッ!!」

「えっ、一回心臓止まってたの?」

「ぐすつ、はい……。マスターの体があのスピードに耐えきれず意識が落ちると同時に止まったたそうです。なんとかその…応急措置で……一命を取りとめました／＼／」

なんでメアはこんなに顔を赤らめてるんだ？

「ぞ、そうか。ありがとなメア。」

掛けてある時計を確認すると夜の8時を回っていた。

「お前ら腹へってるか？俺はあまりへってないからお前らもへってないなら風呂入って寝ようかと思うんだけど。」

「私はあまりへってないです。」

「私もちよつと疲れたから（精神的に）早く寝たいかな。」

「上に同じー」

みんなお腹は減ってないらしい。

「そうか、そんじや風呂入って寝るか。お前ら入るなら先に入れよ？」

「え、何で？一緒に入ろうよー！私お兄ちゃんと一緒に入りたいよー！」

「俺の精神が削られるからやめてくれ。」

メアとヤヨイも同じことを考えていたらしい。もう少し自分のプロポーションの良さを自覚してほしいものだ。

「ほら、とつとと入った入った！俺も早く寝たいんだから！」

「それじゃ、わたしから入りますねー……。」

メアがとぼとぼと風呂場に歩いて行った。てか、どれだけ落ち込んでるんだよこいつら。

「あがったよお兄ちゃん。」

「よし、それじゃあ俺入るから。よかつたら先に寝ててもいいぞ。あ、ちなみに布団ないからボールの中だからな？」

「はーいー！」

「ふー、この風呂に入るのも久しぶりだなあ。」

少し小さめの浴槽が当時の俺にぴったりでかなり気に入っていた。少し大きくなって浴槽が少し狭く感じるがそれでも快適さは変わらなかった。

「そうだねー、2年前はよくお兄ちゃんと一緒に入ってたよねー。」

「ああ、そうだな……ってラティアス!？」

いつのまにか前には生まれたままの姿のラティアスがいた。2年前と一緒に入ってた時はまだ幼い体をしていたからよかつたものの今の彼女は少なくとも中学生、下手したら高校生くらいの体をしてい

ると思う。胸も2年前に比べたら遥かに大きくなっていると思うし、腰回りも明らかに違っていた。つまり、目のやり場に困るということだ。しかし、彼女はそれに気づいていない、というよりは自覚していないのか俺が顔を赤らめているのに対して首を傾げていた。

「むう、なんでお兄ちゃん目を合わせてくれないの？」

ラティアスが頬を膨らませて少し不機嫌そうな顔になっている。次の瞬間、彼女の顔色が変わった。

「も、もしかして……私のこと嫌いになっちゃったの？ さっきのことまだ根に持つてるの？」

ラティアスのハイライトの無い目からは大粒の涙がぼろぼろと溢れ、声は震えていた。するとラティアスは一気に間合いを詰めて来て、俺に抱きついて来た。その力はとてつも無く強く振りほどくどころか、全く身動きがとれない。また、顔を俺の胸にうずめており、表情は読み取れなかった。

「ごめんなさい！お兄ちゃん……ッ！わ、わたしッ……なんでもするからあ……ッ！だからあ……」

ラティアスを顔を上げ、

「ひとりにしないでよう……！」

「ッ……！」

こんな状態になる前……ラティアスが生きていたときから、ラティ

アスはいつも兄と一緒にいた。そんな兄が急にいなくなり心が壊れてしまい、今の状態になってしまっている。そう、ラティアスは誰よりも孤独を恐れているのだ。

「なーにいつてんだ。そんなことするわけないだろ？俺たちは兄弟でお前はただひとりの大切な『妹』なんだからさ。」

そう言っつて優しく撫でてあげた。『兄』として優しく受け止めてあげることにした。

「お兄ちゃん……………!!うええん……………!」

「……………よしよし」

「落ち着いたか？てか、いい加減上がらないとのぼせそうなんだけど……………」

「うん……………えへへ。……………私だけのお兄ちゃん……………／／／」

嬉しそうな笑みを浮かべ、俺から離れた。

そして、ガチでふらふらしてきたので急いで俺も風呂から上がった……………のは正しかったのかどうかはいまだにわからない。ラティアスを後に上がらせるべきだと思った（察しろ）。

「あつ、マスター！」

「お父さん！」

風呂から上がった俺を見て、バタバタと俺のそばにやってきたのはメアとヤヨイだった。

「マスター！一緒に寝ましょう！いつも一緒に寝てたじゃないですか！」

「お父さん身体大丈夫だった？……あの女と一緒にいたみたいだけど。」

「……ああ、何もされてないよ。」

「じゃあなんでアイツはあんなに嬉しそうなの？」

「むふふ〜♪」

「……さあな。」

「お前!!マスターと一緒に入浴するなんて羨まけしからんですよー!!私もどうしようか迷ったのにい!!」

「そんなのあなたの行動力が無かっただけでしょー！」

「ツ！テメエ……ツ!!」

メアとラティアスの間でまたバチバチと火花が飛び散っている（ような気がする）ようだった。

「おいおい！お前ら喧嘩すんなよ！あとメア、口調崩れてんぞ！」

「はーい！お兄ちゃんの言うことなら何でも聞くよ。」

「……マスターがそう言うなら……仕方ないですけど。」

ラティアスは快く、メアは若干不貞腐れながらも渋々と受け入れた。

「あと俺は一人で寝るぞ？ベッド一つしかないし、ソファで寝るのはごめんだからな。」

「「え？添い寝じゃないの？（んですか？）」「」」

珍しく3人の声が揃って聞こえた。

「んなわけねーだろ。そもそも前の家よりもベッド小さいんだから無理に決まってるんだろ。はい、決まり決まり。お前らみんなボールに戻れ。」

そう言って強制的に3人をボールの中に戻した。

「ふぁーあ……、もう寝るか……。」

そして、俺は電気を消し、眠りについた。

「……ん」

……俺はふと夜中に目が覚めた。布団に違和感を感じたからだ。俺の上に何かが乗っているのだ。おかげで身動きを取ることができない。月明かりに照らされて少し明るくなると透き通るような水色の瞳があった。その瞬間、上に乗っていた何かの正体がわかった。

「……メアか。」

「はい。」

正体はメアだった。よく見えないが俺の上に乗っている彼女はとても穏やかそうな微笑みを浮かべている。

「なんで俺の上に乗っているんだ？」

するとメアは何も言わず急に俺の手を掴んだ。

「んっ……／＼／＼」

そして、その手をメアの胸に当ててきたのだ。メアの胸の柔らかい感触が俺の理性を刺激する。

「ひゃうッ……／＼／＼」

思わず少し手が動いてしまった。すると、メアの身体が跳ね上がるように振動した。

「あっ、すまん……！」

少し息を荒げながらもメアは言った。

「やっぱりマスターはおっぱいの大きい子が好きなんですか？」

「……………はっ。」

「私のが小さいからマスターは私に構ってくれなくなっただんですか？
ラティアスとかいうぽつと出の野郎に構うのもやっぱり大きいから
なんですか？」

「い、いやそんなことはないぞ。それに俺はお前にもちゃんと構って
やってると思うが…………」

「私はマスターのことが好きです。マスターのことが愛おしくて愛お
しくてたまらないです。マスターが構ってくれなくなつて…………正
確にはラティアスがやってきてから、私はマスターのことばかり考え
てました。そして、気づいたんです。私にはマスターしかいないつ
て、マスターさえいれば他のものは何もいらなくて。正直、ラティ
アスもヤヨイもその場で殺してやりたいほど憎いです。私の…………私
だけのマスターに触れようとしているんですから。自分でもおかし
いことはわかってます。…………それでも頭の中はいつもマスターのこ
とでいっぱいなんです。もうこれ以上耐えられないんです。」

メアは窓の外を見つめ、言った。

「ヤヨイやラティアスが来てからずっと思ってたんです。なんで
…………、なんでポケモンとして生まれてきたんだろうって。ポケモン
じゃなくて人、人間だったらマスターと同じで立場でいられたのに
…………。ヤヨイやラティアスよりも圧倒的に違う…………上の立場…………マ
スターの隣にただひとりいられたのに。マスターの隣にいられるな

らこんな力、いららないんですよ。この力のせいで私はヒトの形をしていても、人じゃないんだなって実感させられるんです。そう考えると悲しくて仕方ないんですよ……どうしようもないってわかってるのに……!」

「……まあ、唯一よかつたって思えるところはマスターを力で強引に抑えられるところですかね♪」

そう言つてメアは俺の布団の中に入つてきた。

「ちよ」

しかも手を掴む力が強くて全く振りほどけない。布団に入つてきたメアは俺の胸に顔を埋めてきた。

「はああく／＼／＼ましゆたあの匂いい……／＼／＼」

「メア、別に人じゃなくても俺はお前のことを愛してるからな？そのへんわかつとけよ?」

「はい、マスターのことは全て知ってるのでそう言うと思いました。……それじゃあ、マスターの夢、頂きますね♪」

「……えっ?」

「もう私の本能がうずうずして我慢できないんです。なので、いただきます♪」

「おい……ちよ、ま……」

俺の意識はここで途切れている。最後に見たのはハイライトのないう濁った水色の目をして微笑んでいたメアの姿だった。

第17話 貧相なバス

「釣りすつぞオラア!!」

おれはボロのつりぎおを掲げてそう叫んだ。

「あー、そういえばお兄ちゃん渋いポフィン持ってたね。ヒンバス狙いで釣りにでもいくの?」

「そう!せっかくヒンバスを進化させるチャンスを手に行っているのにヒンバスを釣らないのはもったいないからな。まあ、釣れるかどうかもわかんねえけどな。………確率低いし。」

ポケモンRSEでは天気研究所付近の119番道路の川でしか釣ることができず、そのヒンバスが釣れるポイントは6箇所しかないというかなり鬼畜仕様となっている。実際、DPTでもテンガン山でしか釣れないからどこでも同じということがうかがえる。まあ、つまり言うとな根気勝負ということだ。

「ラティアス、乗せてってくれ。……とりあえず、ヒマワキシティまでな。」

「おっけー♪まかせてー!」

ちなみにヤヨイはそらのはしらヘトレーニングに(泳ぎで)、メアはおれの夢を食いやがってその余韻が残っているのかまだ夢の中にいる(訳:まだ寝てる)。おかげさまで俺は昨晚寝ている間なんの夢を見ているのか、そもそも寝ていたのかどうかもわからないような状態なのだ。それは置いといて、俺は見栄えはあまり良くないがラティアスにおぶって飛んでもらっていた。

「ねえ、お兄ちゃん。」

「なんだ？ラティアス。」

「朝から思ってたんだけどさ、なんでお兄ちゃんからメアの匂いがするの？昨夜なにかあったの？」

ギクリ

「い、いや、なにもないぞ。気のせいじゃないか？」

「……………まあ、いいよ。どうせ、後で私の匂いをつけておくし。」

女性の…………ヤンデレの嗅覚の恐ろしさを垣間見た瞬間であった。

「ヒマワキシティについたよお兄ちゃん。」

気づけば森の中にツリーハウスのようになってる家が沢山あるヒマワキシティに着いていた。

「おっけ、サンキューな。どうする？お前も来るか？」

「もちろんいくよ。私はずっとお兄ちゃんのそばにいるって決めてるんだ〜♪」

「お、おう…………」

そして、119番道路の川のところに着いたので早速釣りに取り掛かろうとしていたときだった。

「おまえ、気持ちわりいーんだよ!!いつもいつも川の中覗き込んでブツブツ言いながら笑いやがってよお!!」

「それに何が『ポケモンの言葉がわかる』だよ!!そんなしょーもねえ嘘つくのやめろよーきめえんだよ!!」

「いたい…!!やめてよお…!!ほんとだつて言ってるじゃん…!!」

川のほとりのところで2人の少年がひとりの女の子を蹴ったり、罵ったりしていた。

「……お兄ちゃん。」

「ああ、とりあえず止めるぞ。」

俺は3人のところへ足を進めた。

「おいお前らなに女の子いじめてんだ?弱いものいじめしちやダメって習わなかったか?」

「はあ?お前にはかんけーねーだろ!!とつとと失せろや!」

「そうだそうだ!そもそもお前誰だよ?ヒマワキシティ出身ではないな?」

「今はミナモの方に住んでるよ。まあ、そんなことはどうでもいいさ、その子嫌がつてるじゃん、やめろよ。弱いものイジメしちやダメって習わなかったか?」

「なんだてめえさつきから聞いてりや生意気なことばつか言いやがって!!」

「ぶっ飛ばしてやる!」

よし、これでいい。取り敢えず、注意をこちらにむけることが出来た。俺が相手をしている(ケンカ歴0秒)間に逃げるんだ!2人の拳が俺の顔面に向けられる、完璧な作戦だと確信した。しかし、俺はひとつ誤算をしていた。この完璧な作戦はひとりの時は有効なのだ。しかし、この時だけ俺は忘れていた。あの存在のことを。

突然二つの拳が俺の目の前から消えたのだ。気づけば俺の目の前には、そう、彼女ラティアスがいた。

「ぐああああ!!?」

「があっ!!?!!」

突然2人が顔を歪めて膝から崩れる。その直後川に何か落ちる音がした。ハツとなって彼らを見ると彼らの右ひじから先がなくなっており、そこから大量の血があふれ出していた。

「おい……ラティアス……お前……!」

「そもそも私はニンゲンなんかお兄ちゃん以外、誰一人として信用してない。そのニンゲンがその穢らわしい手で触れるどころか私の、私だけのお兄ちゃんに傷をつけようとした………おい、死ぬ覚悟はできてんのか?………てか、もう死ねよ。」

ラティアスは俺の前にはいたので表情はわからなかった。でも、とんでもないくらい恐ろしい表情をしていたことはわかった。そして、彼女がやろうとしていたことも。だから止めようとした。しかし、体が

動かなかった、いや、動けなかったのだ。すると、ラティアスはこちらの方を向いた。そして、優しく微笑んでこう言った。

「待っててね、すぐにこの××どもを始末してあげるからね！えへへ、そのあとお兄ちゃんにいいーいいーっばい褒めてもらうんだー」
／／／

この後のことは覚えていない。気がつけば、ラティアスが立っただけで周りには何も残っていなかったのだ。するとラティアスは俺の胸に飛び込んできて俺の胸に顔を擦り付けていた。

「お兄ちゃん褒めて褒めて〜！」

「……………えらいぞラティアス。」

「えへへへ〜／／／」

「でもな、二度と人を殺すようなことはするな。」

ラティアスは首を傾げながらわからないと言ったような顔でこちらを見た。

「なんで？」

「……………これはマスターとしての命令だ。わかったな？」

「うーん、よくわかんないけどわかった！」

「よしよし、えらいぞラティアス。」

俺はラティアスを優しく撫でてあげた。

「えへへへ〜お兄ちゃん／＼／＼」

「あつ、あの……!」

すると、声をかけられた。顔を上げるとさつきいじめられていた少女がいた。

「そ、その、さつきはありがとうございます……!わ、わたし、アオイっています。この道路のはずれに住んでるんです……。」

「えっと、俺はハルトだ。彼女はラティアスな。よろしくな、アオイ。」

あらためてアオイを見ると、それは中々に酷いものだった。髪はボサボサで顔も傷だらけで、紺色のワンピースは既にボロボロでどこどころ穴があいており、靴も履いておらず、全体的にとても痩せ細っていた。

「なんで川のほとりにいたんだ?」

「……………自分でもわからないんです。最近、よくここに来ていて水を見ると何か自分の中で沸き立つような……………何か胸の奥底で疼いているんです。それに、何故か私はポケモンの言葉がわかります。さつきだつてそうでした。近くにいたコイキングが私にこう言ったんです。『君の居場所はここなんだ。』って。……………私、この意味がさっぱりわからないんです。」

「へえ……………」

「それに、私、親もいないんですよ。昔の記憶は無いし、気が付けばここで暮らしていきのみを時々食べながら何とか生き延びているんです。……もう、肉体的にも精神的にも限界なんですよ。正直生きているのが辛いんです。同じ人間なのになんでここまで違うんだろうなあ。あつていつも思います。」

「は？何言ってるの？そもそも君、ニンゲンじゃないじゃん。」

「え？」

「は？」

突然、ラティアスはアオイに向けてそう言い放った。

「いや、そんな……わたしは……人間……のはず……。」

「そもそもポケモンの言葉がわかるニンゲンなんていないよ。あなたが人の形をしているだけであつて、ポケモンの言葉がわかるのはポケモンだけだよ。その時点でああなたはポケモン確定なの。わかる？あなたがポケモンだとしたら、その、コイキングが言ってたことともつじつまが合うでしょ？」

「そんな……うそ……!!」

アオイは崩れ落ちた。顔は真っ青になっている。

「さーて、あとはなんのポケモンかだね。まあ、その辺はポケモン図鑑で調べればわかるかな。さっきのクソガキから拝借（永遠）したこれで見てもよいかな。」

「おいラティアス！」

「ここはハッキリさせておかないと彼女のためにならないでしょ？私
はニンゲンは信用しないけど、同じポケモンには手を貸すからね。し
かも、境遇も私と似ているしね。」

『ヒンバス、さかなポケモン。』

からだは ボロボロだが どこでも いきていける しぶとい
せいめいりよくを もつ ポケモン。しかし ノロマなので すぐ
に つかまってしまう。』

「へえ、ヒンバスなんだキミ。」

「そんな……わたし……ヒンバス……あのヒンバスだった……？……
なんて……ううう……！」

当時はまだヒンバスの評判は良くないらしく、不幸なことにそのこ
とを知っていたアオイは顔を抑えて泣きはじめてしまった。見てい
られなくなった俺は気が付けば彼女を抱きしめていた。

「えっ？」

「……(出た。お兄ちゃんのクソ女たらし。ま、私も流石に今回は同情
してるから見逃すけどさ。)」

「アオイ……今までよくこんな苦しい時間を耐え抜いたな。本当に尊
敬するよ。お前は本当にすごいよ……。」

「……でも、私はニンゲンではなくポケモン。しかも、あのヒンバスです
よ……はは、もうおしまいですね。」

アオイは光のない目で諦めたように笑っていた。

「そんなことない。お前はこれから輝ける。」

「…………どうやって?…どうやってここから這い上がれって言うんですか!?!私のはあのみすぼらしい、汚いことで有名なヒンバスですよ!!?!もうその時点で生きる価値なんて無いんです!!」

「そんなことない。お前には、いや、お前にしかないんだ。美しくなれるチャンスは。…………ミロカロスに進化できるチャンスは!」

「えっ…?」

「お前は進化したらあのミロカロスになれるんだよ!」

「はは、嘘ですよ。こんなみすぼらしくて醜い私があのにミロカロスになんてなれるわけが…」

「いや、なれる。ミロカロスはヒンバスの進化系なんだ。しかも、お前は人の形をしてる。人間と同じようにすれば、綺麗になれるんだ。」

「…………。」

「…………どうするか?お前が変わりたいなら俺はとことん付き合うぞ。」

「…………私は今までニンゲンに蔑まれ、いじめられてきました。正直ニンゲンのことなんて信用できません。…………でも、あなたのごことは…………ご主人様のことだけは信用できます。私、一生ご主人様について行きます!」

「なんで、ご主人様って呼ぶんだ?普通に呼べばいいじゃん。」

「ご主人様はご主人様です。」

「いや、だから」

「ご主人様はご主人様です。」

「いや、その」

「ご主人様です。」

「アツハイ。」

こうして、俺は釣り竿を使うこともなくヒンバスをゲットすることに成功したのだった。

「てかさ、おまえってさかなポケモンだからさ、」

「はい。」

「一度水の中に浸かってみたら？肌が潤ってくるかもしれないし。」

そう、アオイは今まで自分の事を人間だと思い、人間と全く同じような生活を送って来ていた。そのせいで身体に直接水を浴びせることがなかったため肌がパサパサになり乾いていたのだ。しかも、アオイの本能が疼いていたのかしよっちゅう水を無意識に覗いていたのを聞くとかなり限界にきていることがわかる。

「わかりました。…えーっと、どこにいけば……」

「とりあえず、浴槽に水入れとくから翌朝まで浸かつとけばいいか。水入れてくるから待ってな。」

「よし、水入れたから入っていいぞ。」

少し経ってご主人様が戻ってきた。

風呂場に向かうと浴槽の中に満タンに水が入っていた。それを見た瞬間に自分の中にある何かが疼き始め、入りたくて仕方なくなってきたのだ。気づけば私は服を脱ぎ水の中に浸かっていた。冬で冷たいはずなのに全くそれを感じない、むしろ心地が良かった。それに水に顔をつけても苦しくなく、呼吸が出来た。そこで私はニンゲンではないことを改めて実感させられた。

「気持ちいいか？なら良かった。ゆっくりしていけよ。」

ご主人様はそう言ってリビングへ戻って行った。

ご主人様……ハルトさんはニンゲンにいじめられていた私を助けてくれた。ポケモン……それもヒンバスだったとわかって私に手を差し伸べてくれた。私に希望の光を与えてくれた。その時は私は誓った。ご主人様の所有物となり、一生お仕えしよう。ご主人様이었다ら、この命でも、この身体でも差し出すことが出来るし、ご主人様の為ならばなんでもするつもりだ。だから……私を見捨てたりしないてくださいね……ご主人様……

「ご主人様……」

気がつけば夜も遅くなっていた。真っ暗闇の中私の中にはある一

「おやすみなさい……………ご主人様……………」

「ご主人様……………私は……………ご主人様のことを愛しています……………」。

「ん、んん…………………………フアツ!？」

目が覚めてまず、隣に何か違和感を感じた何かがいる。恐る恐る目を開けるとそこには気持ちよさそうに眠るアオイがいたのだ。

まだ、隣に寝ているだけならよかった。しかし、ひとつだけやばい点があった。それは……………アオイが何も着ていずに全裸の状態であることだった。

「……………不幸だ。」

どこかの男子高校生が言ってそうなセリフが思わず口から溢れた。こいつらは俺にまともな朝を迎えさせる気は毛頭ないらしい。

第18話 再会

いろんなことがあったが、気づけば半年も経っていた。え？展開が早いって？人生あつという間だからそんなもんだよ。

「ほとぼりっていつくらいになったら冷めるんだろうな…」

そう、シンオウの情報が全く無いのでどのタイミングで帰ればいいのかさっぱりわからないのだ。

「もう一生ここにしようよ〜」

ラティアスが横から抱きついてくる。

「やだよ。シンオウをぶらぶらしたいもん。それにソラもいるし。」

「……………ねえお兄ちゃん。なんで別の女の子の話してるの？そんなにあのメスの方が大事なの？ねえねえねえ…」

ラティアスがさかさず目からハイライトを消し、俺を見つめながらとんでもない力で俺の右腕を抱きしめていた。

「……………帰るって約束しちゃったからな。約束は普通守るだろ？」

「へえ……………」

怖いです。笑ってるのに目が全く笑ってないんですもん。

『速報です。シンオウリーグを最年少で制覇し、チャンピオンとなったシロナ氏が本日ホウエン地方に上陸しました。』

「は〜」

テレビ画面を見るとそこには大きな客船から降りてくるシロナさんの姿があった。

「しかもミナモの船着場じゃん。遭遇したらやばいから引きこもつてよう。」

『ピンポーン』

すると、突然インターホンが鳴った。

「あ、誰かきたな。行ってくるから離してくれ。」

「むう……。」

ラティアスはしぶしぶ俺の右腕から離れた。

「はーい今いきまーす。」

俺は玄関の扉を開けた。

「はーい、どちらさまです……か……。」

「久しぶりね。遊びに来ちゃった☆」

そこには腰まで伸びた長い金髪に黒いスーツ……は来ておらず白いブラウスといった少し薄着でただでさえスタイルもよく、胸もあり目のやりどころがないくらい魅力的でまた、俺をハウエンにまでおいやった張本人、シンオウリーグチャンピオンのシロナがいた。

「……………」

俺は思考する。そして、俺の出した答えはただ一つ。

『ボタン!!』

「えっ、ちよっ?!」

扉を迷わず閉めたのだ。これでいい、これでいいのだ。てか、なんでこの人俺のいる場所知ってるんだよ、誰にも教えてないはずなんだが……。さてと、メアたちが買い物から帰ってくるまで一眠りするかな。

「……………今から5秒以内に開けないとガブちゃんのげきりんでドアをこの部屋ごと吹き飛ばすわよー、はい、ごぉー、よーん…」

「すみません調子乗りました。どうぞどうぞ。」

野宿&借金生活は嫌なので素直に開けました。ハイ。

俺は今シロナさんと向き合って座っている。そして尋ねた。

「なんで、俺の場所知ってたんですか？」

「君のお母さんから聞いたのよ。そしたらあっさり教えてくれたわ。」

「マジかよ……………」

何故張本人であるシロナにあっさり教えてしまったのか少し母さんの考えが理解できなかった。

「てか、ポケモンリーグ大丈夫なんですか？わざわざこんなところまで来て……」

「別にいいわよ。そもそも四天王にすら勝てないやつらばかりだし。最近のトレーナーって。」

「え、四天王ってそんな強いんですか？」

「そうよ、ってその話はどうでもいいの！なんで、あの時逃げたの？」

「あの時って？」

オレハアノトキノコトナンテシラナイ……シラナイ……

「私と戦った時よ!!」

「だって、なんか照明が勝手に落ちたから、こんな負け試合やってられなくてラツキーって思ってたんすよ。当たり前でしょ？」

「私のルカリオ倒したくせに？」

「あんなのマグレですよ。そもそも相性もあるでしょ？」

「マグレで私のルカリオは倒せないわよ!!」

シロナが腕をブンブン振りながら言った。その時に同時にシロナの胸も揺れて、とても、眼福であったことは伏せておこう。

「それに……唯一の友達の貴方がいなくて寂しかったんだから……。」

は？うせやろ、友達いないの？

シロナは俯いてとても寂しそうな表情を浮かべているあたりマジらしい。

「電話しても出ないし……、自宅にわすれていったんでしょ？」

「あつ」

そう、実は携帯を家に忘れて来たのだ。すると、シロナはポケットから何か……ハッ!!俺のケータイ!?それを開く、すると待ち受けに映されたのは、

『不在着信 242件

新着メール 184件』

「うっわ、どんだけメールしてるんすか…」

「だっ、だって……!急にいなくなるから不安だったんだもん……!」

急に弱々しく話すシロナさんを見た俺は驚いていた。てか、もう泣きそうじゃん、俺がやったことってそんなやばかったのか…?

「勝手にハウエンに逃げたことは謝ります。ごめんなさい。でも、言っておくとその原因を作ったのは貴女ですからね？」

「…はい。」

「で、今日どうするんですか?どっかホテルにでも泊まるんですよね?」

「えっ…」

「えっ?」

急にシロナさんが驚いたような表情をする。

「泊めてくれないの?」

「えっ?」

「えっ?」

「……………」

お互いに気まずい状態になってしまった。

「てゆうか、まずいですよ!もし、見つかって記事にでも取り上げられて見て下さいよ!一巻の終わりですよ!」

そう、記者とかは割とその辺に敏感なのだ。仮にバレたりしてみろ、わざわざハウエンまで逃げて来た意味がなくなるじゃないか。

「別にいいわよ。それくらい。というわけで泊めさせてもらうわね。」

「……………はあ。」

結局シロナさんを泊めることになってしまった。食費がががが……

すると、後ろのおれの部屋の扉が開く。

「ねえ、お兄ちゃ……………ん……………?」

ラティアスだった。その後、一瞬で間合いを詰められ、ハイライトのない目で見つめられた。

「…………だあれ？その女……」

「し、シロナさんだよ。そ、そのシンオウリーグのチャンピオンの人なんだぜ!?すすすごいだろ!!!」

「ふうん……で、あのメスと何かしてたの？」

「いやいやいや、何もしてないって!!話してただけだよ!!」

「……………ならいいけど。」

許されたらしい。ラティアスはそのまま俺の隣に座り、体を預けて来た。

「むふう……」

「その子は？お兄ちゃんって呼んでたけど。」

「えっと、ラティアスです。色々あつて妹になりました。」

「ええ!?ラティアスって、あのラティアス!？」

「そうです。めちゃくちゃ懐いてて離れようとしませんですよ。あと、そのせいで胃が痛いです。」

「……………なんでハルトくんってそんなに珍しいポケモンたくさん持つてるのよ……………しかも、人型だし。」

シロナさんは呆れたように言った。実際に俺もそう思う。俺の手持ちに普通のポケモンが一人もいないのだ。

『ガチャ』

「ただいま戻りましたー!」

「マスター!」

「ぐぼえ!」

メアがすかさず俺の胸に飛び込んで来た。

「ふええ……ましゆたあの匂い……♪」

俺の胸に顔を埋め、匂いを嗅いでくる。その時のメアの表情はとても蕩けていてすこし恐怖を感じた。

すると、俺の左側にアオイがすんと座り、俺の左腕に抱きついてきた。

「ご主人様♪」

大きくなつたアオイの双丘が俺の左腕に当たり、柔らかく大きく変化する。彼女は半年前とは違う。ピンクの瞳、そして、腰まで伸びた水色の髪にてっぺんだけピンク色のアホ毛が立っている。そう、本来ならアホ毛以外もピンクになるはずが実際は水色だった。彼女は色違いのミロカロスなのだ。そして、何故か知らないがメイド服を着ている。進化した時は急に背が伸び、スタイルが遥かによくなって自分でもびっくりしたが、胸が大きくなりすぎて進化前の時のメイド服の胸元が破れてしまったことは今でも脳裏に焼き付いている。……あれはほんとうに忘れられんわ。ほんとうに凄かったよ、うん。(鼻血)

アオイのうつくしさを上げるのを確かめる際にポケモンコンテストに出ようとした際に、「なんでご主人様以外のニンゲンの測りであ

つくしさを決められないといけないんですか？」と真顔で言われた時は焦ったものだ。それでもミナモシテイのコンテストではマスターランクの大会で優勝し、世界大会にも推薦された。勿論、興味なんてないので断ったが。おかげでアオイの美しさはホウエンでもトップレベルだろう。それに、今のメイド服でも威力は凄まじく、大きく張り強調された胸と、見えるか見えないかギリギリ、いわゆる絶対領域が素晴らしいとおもう。(語彙力)

あと、料理がめちゃくちゃ美味しい。この家に住み始めてから徹底的に家事のことを学び始め、料理のスキルを徹底的に磨き、気がつけばミナモシテイの中で一番のレストランのシェフを負かせたほどであった。ミロカロスに進化し、さらなる美貌を手に入れた彼女はパーフェクトメイド(既視感)へと神化^{しんか}を遂げたのだ。

「…はは、す、凄いわね…」

流石のシロナさんもこれには苦笑いのようだ。だろうね、正直暑苦しいもん。それに動けないしね。

「おい、暑苦しいから離れろー。」

「「いや(です)」」

「頼むから離れてください。俺を蒸し殺す気ですか？」

「マスターからすれば3人の女子に囲まれてるんだからむしろ役得じゃないんですか？」

「言うな。」

その核心を突く一言まじで辛いからやめてほしい(切実)

そこには息を上げながら真剣な表情をしている。紺色のジャージを着たヤヨイがいた。胸周りがきつス。ゲフンゲフン！

「おとうさん！シロナさんが来たってホント!？」

「あ、ああ、ほらここにいるぞ。」

「ご、こんばんわ…」

「ま、待つてくださいーい！はあ、はあ、早いんすよヤヨイさんわあ……!!」

そして、ヤヨイの後に入って来たのは緑色の髪をツインテールにしており、ヤヨイとお揃いの緑色のジャージを着た女の子……こいつも胸が（殴）、実は彼女、レックウザである。

「あつ、お久しぶりっす！お義父さん！お邪魔してます！」

レックウザは俺に頭を深々と下げる。

「俺はお前の親になった覚えはないんですが？」

「そんな！ヤヨイさんの父親なら、私の父親も同然っすよ！」

どうしてそうなるのか。

実はヤヨイとこのレックウザ、二人はそらのはしらで鍛えあっている仲（らしい）のだ。二人がやりあった際に仲良くなったらしく、今でもそらのはしらでトレーニングを続けている。

「そんなことより！シロナさん！ガブちゃんさんはいないんですか!? 是非是非、一戦交えたいのですが!!」

ガブちゃんさんって、そんな、さ○なクンさんみたいな呼び方やめろやw

「ごめんなさいね、ガブちゃん連れて来てないのよ。カンナギタウンで働かせてるから。」

「ええー、そんなあ……!」

ヤヨイががつくりと膝を落とす。

「働かせてるって何させてるんです?」

「先週くらいに大雨でちよつと土砂崩れが起きて家が一軒壊れちゃったのよ。その復興ってところね。」

「てか、主のシロナさんがこんなところでいて大丈夫なんですか?」

「いいわよ別に。」

冷たいなあ……カワイソス、ガブちゃんさん。

その後も夕食を食べながら談笑していた。シンオウのことも聞いたので正直よかったと思う。そして、全員風呂を済ませ、寝ることになったのだが。

「シロナさん、俺の部屋使ってください。流石に客人にのソファアで寝かすのは申し訳ないので。」

「いいわよ別に。私はソファアで……」

「いいからいいから、そこは甘えてくださいよ。自分ソファの方が寝心地いいので気にしてないですよ。」

「だめです。」

すると、急にメアが割り込んで来た。

「あのベッドはご主人様のみの為のベッドです。他者を寝かすわけにはいきません。」

何故かアオイもメアに同意している。

「なんでだよ?」

「匂いが変わるからです。」

「あ、シロナさんベッドで寝ていいっすよ。」

「アツハイ。」

「ええ!」

結局ベッドに寝かせることにした。匂いなんてどうでもいいのだ。

「……………」

「……………ふふっ」

「なんで来るの?しかも、ソファーなんだからクツソ狭いんだけど。」

何か隣がもぞもぞ動くから何かと思ったたらアオイがいたのだ。月の光が少し当たってぼんやり見えるのだが、水色の薄いネグリジエを着ており、なかなかなかなか格好をしているのだ。

「……お前本当に変わったなあ。」

「それは悪い意味ですか？それともいい意味で言ってますか？」

「……いい方だと思ってくれ。本当綺麗になったよ。まあ、それも全てアオイの努力の賜物だからな。そういうひたむきなところ本当に尊敬するよ。外見も内面も合わせて美しいよ。」

「ハルトさん……。私は貴方に出会わなかったら一生蔑まれてつまらない一生を終えてました。貴方に出会えたから私は変わった、貴方が居たから私はどんな辛いことでも耐えられた、全てご主人様のおかげです。だから私は恩返しをしたいんです。」

アオイはまっすぐ俺の目を見ていた。暗くてあまり見えないがそれははつきりとわかった。

「別に恩返しなんかしないでいいぞ。俺はただ事実を教えたただけだからな。」

「ふふ、まあ、私はご主人様のことを宇宙で一番愛してますし、もうご主人様から絶対に離れられないです。私はご主人様のモノです。だから、一生お仕えますし、ご主人様が亡くなったら私もそのあとをすぐに追いますから。」

「よし、お前の忠誠心はよくわかった。だから、ボールに戻れ。ソファーでただでさえ狭いのにお前が横にいるせいで余計狭いんだよ。」

「それじゃあ、こうすればいいですね。」

なにかを閃いたかと思っただらアオイは急に俺を強く抱きしめてきた。むにゆううううううと俺の胸にアオイの豊満な胸が押し付けられてつぶされている。

「私の身体はすべてご主人様のモノなんですから、好きにしていんですよ?ご主人様のやりたいことが私のやりたいことなんですから。」

「むぐぐぐ……」

てか、苦しいんですけど……あと、アオイのシャンプーの香りが俺を刺激する。

「あつ……／＼／＼ご主人様、固くなって……ますよ……?」

例によって男の生理現象が発動する。しかも、当たりどころが悪すぎる。

「ふふっ、それじゃ私の『ハジメテ』もらっちゃってください♡」

やばい……このままだと堕ちる……!!でも、身体が動かせねえ!!アオイのやつ、俺の力じゃ振りほどけないくらい強く、かつ丁寧に優しく抱きしめてやがる……!!

俺はするしかないのか、そう思った瞬間だった。

「なにしてるの……?」

そこには普段の明るさなど微塵も無い金髪の女性、シロナさんがいたのだ。

「何って見ればわかるでしょう？…これから私の『ハジメテ』を捧げるんですよ。わかったらとつと部屋に戻ってください。」

アオイも普段の穏やかさなど残っておらず、低く冷たい声をしていった。

「……………よ。」

「はい？」

「ダメよ…………。」

「ハルトくんはそんなこと望んでなんていないわ。彼の表情をみればわかるわ。」

「あつ…………。」

「……………ごめんなさい。」

アオイは震えながら俺に頭を下げてくれた。

「別にいいよ。別に気にしてな……………いや、気にしてはいるなあ。」

「ほんとにごめんなさい!!」

あれを気にしてないっていうのは無理があるからなあ、仕方ないね。

「そうだー！」

シロナさんが指を鳴らしてなにかを閃いたみたいだが、俺の第六感がやばいと警告ランプを点灯させている。

「ハルトくんのベッドで3人で寝ましょう！」

「えっ……！」

「いいですね!!」

「そうと決まれば早速部屋に行きましょう。」

「ちよっ、おまつ……！」

「ハルトくん……♪」

私は今まで生きてきた中で一番の幸せを味わっている。そう、隣にハルトくんが眠っているのだ。ハルトくんは私に普通に話してくれた唯一の友達であり、愛おしくて愛おしくて仕方ない人で、私の生きる希望なのだ。

私はカンナギの大富豪の末っ子として生まれてすぐに親に捨てられた。どうやら余計に生まれてしまったらしく邪魔だったらしい。捨てられた私はその後、召使いとしてどこかの洋館で働かされ、まともにも休みもなく地獄のような日々を送っていた。周りの人間は幸せ

そうになる暮らしているのにどうしてわたしだけこんな目に遭わなければならぬのかわからなかった。掃除をしている最中、ゴミ箱の中に一枚の紙が入っていた。

『ポケモンリーグ チャンピオンシップ』

そこには各地方で最強の、いわばチャンピオンと呼ばれる地位の人たちが載っていた。

「わたしも……つよくなれば、幸せな生活が送れるのかな……」

そのあと私は夜中に館を抜け出し、何日も飲まず食わずで歩き、コトキタウンのポケモン研究所に立ち寄った。そして、ナナカマド博士にポケモントレーナーになりたいと言って、ポケモントレーナーになった。それから私はシンオウで最強のポケモントレーナーとなるべく、死に物狂いで知識を蓄え、ポケモンの育成に励んだ。そして、ポケモントレーナーとなって早2年史上最速のスピードで私はシンオウの頂点に立ったのだ。たくさんのお金が入り、一躍お金持ちとなった私はやっと幸せな生活を手に入れた……はずだった。しかし、私がチャンピオンになった途端、カンナギの私を捨てた親から電話が入り、『帰ってこないか?』と言われたのだ。声は穏やかだったが明らかに私を利用しようとしているのは目に見えてわかった。カンナギに戻ってきたが、自分の家を作り、旅をしながらのんびり暮らしていた。しかし、環境が良すぎる方向に変わりすぎてしまったのか、周りの私を見る目が変わったのだ。チャンピオンとしてまるで珍しいものを見るかのような目、また私を見る男たちの視線は私の胸や尻にいつていた。当時はまだ幼かったものの何故か13才になったあたりから急に胸が大きくなり始め、大人の女性にかなり近い体型に変わり始めたのだ。正直うっとおしかった。

そんな何のために生きているのかわからないような状態だった私

はコトブキシテイで彼…ハルトくんと出会った。彼は私に普通に話しかけてくれた。他の人とは違う、ちゃんとシロナわたしを見てくれていたのだ。そのことが嬉しくて仕方がなかった。そのあとチャンピオンマッチの時も電話をかけたのは彼の声が聞きたかった、彼と話したかったからだ。試合後に彼を呼び出したのは彼をもっと近くで見たいかった、一緒にいたかったからだ。彼を中央に引っ張っていくときの彼の手の感触は心地よいものでそれだけで心が温かくなっていくのがわかった。その後私は決心した。この試合の後、彼にほんとうの想いを伝えよう、と。

しかし、彼はいなくなつた。会場の照明が落ちたと同時にどこかへ消えてしまったのだ。そのあと、私は死に物狂いで彼を探し回つた。彼がミオに住んでいるのは知っているが、家までは知らなかった。ミオシテイに一月以上籠つたが、彼が現れる様子は一向になかった。彼に電話をしてもメールをしても一向に返事が帰つてこないのだ。ここまで音信不通だとふと思つてしまう。

「なんで……ハルト……くん……いや……！」

彼はもうこの世にはいないのではないかと。そう考えた瞬間目から涙が溢れ出た。この世界で唯一私を見てくれた。彼は、彼だけは私と同じ次元、いや、もしかしたらその先の次元にいるのかもしれない。それでもよかった。彼は灰色だった世界に色をくれた。彼が居るだけで私の見る世界は全く違った。彼と一緒に居ることができるならどんなこともするつもりだった。

そして半年が経ち、遂に私は彼の居場所を突き止めることに成功したのだ。居ても立つても居られなくなった私は気づけば船に乗り、ミナモシテイへと向かつていた。

こうして私は半年ぶりに彼と再会した。

半年の間でまた成長して男らしくなった彼を見たとき思わず涙が溢れそうになった。そして、今はこうやって彼の隣で寝ている。こうしていることがどれだけ幸せなことか実感させられた。ハルトくんのが大好きな彼のポケモンたちもいるが、所詮、ポケモンの戯言だ。ポケモン風情が人間にかなうわけがないのだ。彼のためにこの恵まれた身体があると考えると嬉しくて仕方がない。彼になら私の全てを差し出せる。

「ふふっ、ハルトくん……♡」

彼の腕を抱きしめ、最高の幸せを感じながら意識を落としていった。

「……眠れねえ。」

(……まともに寝られる日はないのか……!?)

両方から柔らかい感触を感じ、冷や汗をダラダラ流しながら必死に寝ようとする俺だった。

第19話 とある雨の日、そして災厄

「ん……？」

ふと眩しく感じたのだが、それよりも気になったのが何か俺の上に乗っているのかやけに重みを感じるのだ。なんとか目をなんとか開けてみた。

「あっ……／＼／＼おはようございます！マスター!!」

そこには俺の上に跨っているメアの姿があった。

「おはよう………あのさ。」

「はい？」

「なんで跨ってるの？」

「いや、その、マスターの……アソコが………その、苦しそうだったの
で………その、楽にしてあげよう／＼／＼」

「はっ。」

「あっ／＼／＼当たってますって／＼／＼」

例の朝起きた時の生理現象が今起きてるわけだが………てか、メアのスカートトって結構短いよな（話題強制転換）あと少しで、見え……見え……見え、

「もうっ！マスターってば私のパンツみたいなら見たいって言うてくれればいいんですよ!!ほらっ、好きなだけ見てくださいいねっ!!」

メアはそのまま躊躇なくスカートをめくった。……うわ、結構エロいの履いてるんだな………って違う違う!!!

「なにやっつてんだよ!!」

「えっ？何って、パンツ見せてるんですよ。おかしいですか？」

「いやいやいや、なんでそこで首傾げてるんだよそこがおかしいんだよ!!羞恥心つてもんがねえのかお前には!!」

「だって、別にマスターにならいくらでも見られても平気ですし、それで満たされるならいくらでも見せますよ?.....まあ、ほかのゴミどもに見られたら即殺ですけど。」

「その辺の常識感がぶっ飛んでやがるから困るんじや!」

「そんなこと私たちポケモン言われても.....ねえ?」

「人の形してるんだから、少しは人に合わせようとしてくれよ。」

「無理です☆」

もうダメだ。こいつらに説得なんて最初から無理な話だったんだ。

俺は思わずため息をついた。

「わかったわかった。だからさっさとどいてくれ。」

『ゴロゴロゴロ!!』

すると突然外からとんでもない轟音が響いた。

「なんだ.....って雷か。てか、めっちゃ雨降ってんじやん。おつかしいなあ、確か天気予報では晴れのはず.....ってメア?」

ふと気付けばメアは俺の胸に顔をうずめ、ブルブルと震えていた。

「おーい、怖がりアピールはもう通用しないぞー?」

またいつものか、と思つて言ったのだが、なにか様子が変だった。

「.....ごめんなさい。わ、わたし、しょっ、しよの.....雷が.....あの、怖くも『ゴロゴロオオ!!』ひっ!!まつ、ましゆたああ.....!!」

上目遣いでこちらを見ているメアの水色の綺麗な瞳からぽろぽろと大粒の涙が零れ落ちる。どうやらガチで怖いらしい。俺のパジャマをすっかり掴んでいて全く離す気配が無い。正直、なんでも(俺に関わる悪を)ぶちのめすサ●コに近いやつだったから怖いものなんてないと思つていた。意外な弱点だと思つた。

「ほら、俺がついてるから大丈夫だぞ?だから、とりあえずリビングに行こう?」

「ま、マスター.....そ、その、雨が止むまで一緒にいてくれませんか?あの、その、一人じゃ、と、とてもまともにいれそうにないです.....」

「お、おう……」

朝食を済ませた俺はなんとなく窓から外を見ていたのだが、やはりおかしいと感じた。

「うーん、てんきけんきゅうじよの予報はほぼ確実に当たるはずだから今日は晴れるはずなんだけどなあ……明らかに異常気象だよなー。」

俺は立ち上がり、玄関に向かった。

「ご、ご主人様？どこに行くんですか？外すごい雨ですけど……」

「明らかにこの雨は異常だから何か手がかりがないか見てくる」

「そ、そんな!!危険ですっ!!雨が落ち着くまでは家にいてくださいよ!!」

アオイがすごく心配してくれている。すごくありがたいのだが……
「つつても、ちよつとその辺ぶらぶらしてくるだけだからね。すぐ帰るさ。」

そう言つて俺は傘を持って外に出た。

「うっわ、すげー降ってるなあ。洪水とかになつたりしないよな?」

外は窓越しで見るとより明らかに大降りで、あちこちで大きな水たまりができていて、小さな川のようになっていた。なんとなく海の状態が気になった俺は海岸の方に行つてみることにした。

「……まあ、風が吹いてるわけでもないから洪水は大丈夫そうだな。」

雨が降っていて少し水かさが増している気がしたが、洪水になる程じゃなかったので少し安心した。すると、ちらつとある物が目に入った。

「…………アクア団か。」

海岸のはずれに穴の開いた洞窟のような物があった。そこからたまに怪しい人たちが出入りしている。原作通りだとアクア団のアジトで間違いないだろう。

「まあ、アクア団とマグマ団は主人公たちがなんとかしてくれるだろ。最悪、大誤算がなんとかするだろうし。」

帰ろうと思つて振り返つた時だった。

「ん？なんだあいつ、こんな土砂降りなのに傘もささぎずに…」

灯台の方にだれか女の子が座っているのが見えた。傘を持っていないのかびしょ濡れになっているようだったので行ってみることにした。

「おーい、なにやってんだおまえ？」

その少女は振り向いた。みずいろの長い髪に青いワンピースを着こなしていて、ラテイアスと似ているようで少し違う黄色の瞳をしていた。独特な格好と雰囲気でなんとなく察した気がする。

「…………なに？」

「なに？じゃねえよ。こんな土砂降りの中なんでこんなところにいるんだ？どつか雨宿りできる場所いくぞ。話はあとだ。」

俺はとりあえずその少女の腕を掴み、屋根のある場所まで移動した。

「ここなら大丈夫だな。」

「…………なんで私に構うの？」

「そりゃあおまえ、あんな土砂降りの中ほっぴり出されてたら気にするに決まってるだろ。」

「……」

「てかさおまえ……」

「……………」

少女は首を傾げた。

「こんな雨の中突っ立ってるからワンピース透けてるぞ?」

何故、このとき俺は口を滑らせたのかはわからなかった。その時彼女のワンピースは雨に濡れて水分100%状態だったので無論、透けて下が見えてしまっていたのだ。それを何故躊躇なく指摘したのか……

「……………」

しかし、彼女は首を傾げたままだった。いやいやいや、なんでそこで首傾げたまんまなの!?!おかしいでしょ!!

「……………私に話しかけない方がいいよ。」

「なんでだ?」

「だって、この雨降らせちゃってるのは私のせいだし。」

「!?!」

なんていった?今降らせちゃってるっていったよな?確かに彼女が一般人との感性がかけ離れちゃってるのは一目瞭然だからポケモンだとは思ってたけど。決め手はやっぱり見た目ですね。

「……………どうしたの?私が怖くないの?早く逃げなよ。」

「まあ、特性なら仕方ないよな。別にわざと降らせてるわけじゃないんだろ?」

あれだ。メアのナイトメアと同じ要領だよ。つまり、管理が効けば何とかなるかもしれない。

「まさかとは思うけど、あの伝説のカイオーガだったりなんてしないよな?」

「……………」

あっ (察し)

「そうなのか。」

「…………そう、私の名はカイオーガ。多分、ニンゲンたちの伝説になつてる通りね。逃げないの？私が本気を出せばハウエンを一瞬で海の中に葬れるよ？」

「お、おう。そうか。」

すると、彼女はなぜか不機嫌そうな顔でほおを膨らませていた。おそらく、俺のリアクションが薄すぎたからだろう。だって、仕方ないでしょ、俺の家にはサイコパス&ヤンデレ集団、更には、知り合いにレックウザがいると来たもんだ。正直、今更驚くこともない。

「なんで怖がらないの？私ニンゲンじゃないんだよ？普通ニンゲンは恐れて逃げ出すはずだけど……………」

「ウチの家庭が特殊なだけさ。慣れてるのさ。それよりなんでお前もこんなところに来てるんだ？別に滅ぼすつもりもないんだろ？」

「……………」
彼女は俯いてなにも答えなかった。でも、その顔はどこか寂しそう
で、とても見放せなかった。

「…………私がこんなこと言っても笑わない？」

カイオーガは俯いたまま、少し目線を上げ、俺を懇願するかの様な
目で見つめてきた。

「笑わないよ。真剣なことっぽいしな。」

そういうと、彼女はゆっくりと顔を上げた。

「…………私ね、ニンゲンに憧れてたの。」

「……………」

「ニンゲン達みたい成群れになって…………仲間たちと一緒に協力したり助け合ったりして暮らしたかった。ニンゲンは私からすれば短命で直ぐに死んじゃう。それでも、私から見ればそれが輝いて見えたの。短い命の炎を燃やしながら何かを残そうとしてるんだもん。それほど魅力的なもの無いと思う。こうして、ニンゲンの形をしてても、中身はポケモン、『カイオーガ』なの。地上に出ればこの通り。降らせたい訳でもないのに、こんな土砂降りの大雨になっちゃう。こんな大雨じゃニンゲンがそもそも外に出てくる訳ないよね。…………私には仲間なんてものはどこにもいないの。ニンゲンもポケモンも私の

ことを恐れてる。危害なんて加える気なんて微塵も無いのに、私を見るなり、ビクビクしながら、逃げていくんだ。……それ、があ……!!
!うう、辛ぐつ……でえ……ツ……!!」

最初は無表情だった彼女からだんだん悲しみや寂しさなどの感情が溢れ出し、気づけば彼女の瞳からは大粒の涙がぽろぽろとこぼれ落ちていた。俺はいつのまにか彼女を抱きしめていた。彼女も俺の胸に顔を埋めて泣いていた。

「よく今まで頑張って耐えたな。もう大丈夫だ。俺と一緒にいるからな。」

カイオーガは驚いたように顔を上げ、俺の目を見ていた。その瞬間、俺は悟った。また、やらかした、と。明らかに俺は何かやばいフラグを建てた気がしたのだ。

「ほんと……?ずっと一緒にいてくれるの?」

「ああ、ま、まあ、ずっといっしょとはいかないけど、相談くらいなら……」

「えっ……」

「え?」

そして、この今にも泣き出してしまいそうな目、更に上目遣いという必殺コンボ。こんな断れないやんけ。

「どうするか、俺の家に来るか?あめふらしも何とかしたいしな。」

すると、カイオーガはコクコクと強く頷いた。どこか嬉しそうな様子だった。

「よし、それじゃ帰るか。」

「うん……!」

カイオーガはそのまま俺の腕に抱きついてきた。生憎、彼女はある方じゃないので理性は吹き飛ばされなかった。

「ただいまー。」

「おかえりなさい!!大丈夫でした!?滑ってこけたりとかしてませんか!?風邪ひかないように早くタオルで拭いてください!!」

まず、アオイがとても心配そうな様子でやって来て、あたふたとりあえずタオルを渡してくれた。そのタオルでカイオーガの髪を拭いてあげた。彼女も心地よさそうにしていた。そして、その後ろからラテイアスがやって来たが、笑っているのに目が全く笑っていないかった。てか、殺意剥き出しやめろ。

「で、またお兄ちゃんを誑かす〇〇野郎が来やがったんだね？とりあえず消していい？お兄ちゃん。」

「いやいやいや、ダメに決まってるんだろ!! てか、お前共有してるなら事情くらい把握してんだろ!!」

「…………やるの?」

「おい! やめろよ! 家が吹っ飛ぶから!!」

「あつ、おかえりなさいマスター♪」

まさに一触即発の状態の時に何故か俺の部屋のベッドの掛け布団を体に纏ったメアがやって来た。俺がいない間に何があったのか知らないが、メアがやけにツヤツヤしているのが気になるところだ。

「なんで、俺の布団被ってるんだ?」

「雷が怖くて今にも死にそうだったので、マスターの布団を被れば大丈夫かなーって思いました。」

「んで、本音は?」

「マスターの香り最高でした。」

「はい。」

「はい。」

「まあ、いつものお前らしくてなんか逆に安心したわ。」

「えへへ♪」

「褒めてないからな?…………まあ、それはどうでもいいとして、メアにお願いがあつてだな。」

「なんですか？マスターの性欲くらいなら速攻で、正確には30秒で満たしてあげますよ？」

「ちげーよ。アイツに特性の制御の仕方教えてやってくれ。あめふらしらしいんだ。」

「……………また、連れてきてる……………」

メアはムスツとした表情をしていた。そして少し間を開けた後、
「……………今度私とデートしてくれるならいいですよ。」

デートか。最近構ってやれてなかったし仕方ないな。

「おk、その条件でいいよ。それじゃ頼むわ。」

すると、メアの不貞腐れたような表情から一変、少し頬を赤らめて嬉しそうに笑みを浮かべた。

「えへへ……………／＼／＼任せておいてください!!私の全力を尽くして、彼女の特性を制御させて見せましょうツ!!」

……………まったく、現金なやつだ。

「……………こんな感じに、力の流れを感じとって……………そうです。」

「……………あとは、その力の流れを掴むようにして……………」

「……………おっ?」

外をぼんやりと眺めていると、突然雨が止み、日差しが差し込み始めた。どうやら、うまくいったらしい。

「雨……………止んだわね。」

「あ、シロナさん。」

気づけばとなりシロナさんがいた。

「なんであなたの周りって、とんでもないポケモンばかり集まるのかしら?ハウエンの伝説のポケモン、ほとんどいるじゃない。」

「……………」

たしかに、グラードン以外の伝説のポケモン2体とこうして、遭遇している。しかも、俺に対する好感度がやたらめったら高いのだ。あ、俺は鈍感系主人公じゃないですよ？現実逃避のスペシャリスト、ただのヘタレです（諦め）。

「しかも、捕まえてるわけじゃない……つまり、野生の状態なのにあそこまで慕われてるって……正直異常だわ。そもそも、普通の野生のポケモン自体、人間に対する警戒心が強い。それに加え、伝説となればプライドも高いはずなのに……。」

「割とそうでもなかったりするんじゃないですかね。」

「どういうこと?」

「伝説のポケモンのような周りから畏怖されている存在だからこそ一人を寂しがってるんじゃないかなど。カイオーガも色々苦しんでたみたいですよし。」

「強いが故……ねえ……。わからなくもないわね。」

「でしよう?」

「だとしても、あなたの伝説のポケモンの遭遇率は異常だわ。」

「……それは自覚してます。」

まさか、転生の特典それだったりしないよな?このペースだと俺があまり好んでない伝説厨コースまっしぐらだぞ?まあ、可愛いからいいんだけどね。

「終わりましたー!」

俺の部屋からカイオーガとメアの二人組が戻ってきた。

「……ありがと。ハルトのおかげで特性を制御できるようになった。」
「俺のおかげじゃないぞ、メアのおかげさ。」

「でも、ハルトに出会ってなかったら……、ずっとあの時のままだった。本当にありがと。」

「はいはい、どういたしまして。」

「……／／／」

カイオーガはそのまま俺の胸に体を預けて来た。気持ちよさそうにしてたので優しく頭を撫でてあげた。

「…………ツ!!あのメス、またお兄ちゃんと…………ツ!!だったら私も!!」

負けじとラティアスも抱きついて来る。なんか知らんけどもう慣れちゃったのか何も感じなくなってきた。これはやばい（狂気）…………嘘です。やっぱり、女子特有の甘い香りは理性を壊しにかかってます嘘つきましたすみません。

「ただいまー」

「ただいまっス。」

そして、安定の戦闘狂二人組が帰ってきた。誰かつて? ヤヨイとレックウザだよ。てか、なんでレックウザは当たり前のように帰って来るんだよ。

「あ、お義父さん、これおみや……………げ……………」

おい、なんででめえがここにいるんだよ。」

気づけばレックウザはとんでもない殺気を放ちながらカイオーガを睨んでいた。

「…………この人…、ハルトに助けてもらったの。」

「生きる災厄の分際でお義父さんのそばにいるんじやねえよ、失せろ。」

「やだ。」

「お前がいたら、またとんでもないホウエン1つ吹っ飛ぶ規模の豪雨に見舞われるだろ。別にそれでホウエンが無くなるのはいいよ。もしそれで、お義父さんが巻き込まれたらどオすんだ、あア？」

「今、その力を制御できるようになった。そんなことは絶対あり得ない。」

「チツ……ホントかよ、もしそれでお前の災厄にお義父さんが遭ってみろ、塵も残さず消してやるよ。」

「……わかつてる。」

「あのー…なんでいきなりこんなバチバチしてるんですかね？」

てか、急に口調崩れてるし、レックウザの本来の口調ってあんななんだな。いやー、正直怖かったわ。……なんかさっきの会話の中にとんでもないことが聞こえてような気がしたが多分気のせいだろう。

「……私はただ、お義父さんを守ろうとしただけっす。……もうこの幸せを絶対に手放したくないから。」

何かレックウザが小声で言ったがよく聞こえなかった。多分大したことはないのだろう。

「カイオーガは特性を制御できてる。災厄は起きないと思うぞ。俺が保証するよ。」

「ハルト……」

「まあ、お義父さんがそう言うなら信じるしかないっすね！」

とりあえずこの場合は丸く収まったようだ。

「あつーそうそう、お義父さんにお土産あるんすよー！はいどうぞー！」

そう言っつてわたされたのは謎の三角形の物体だった（察し済み）

「……………ちなみに聞くがどこで見つけた？」

「ヤヨイさんとやりあつてたら気づけば宇宙にいたんすよ。」

「はい。」

「そしたらなんかヤヨイさんのげきりんが隕石に当たっちゃったみたいで……」

「はい。」

「隕石が木っ端微塵になったんすけど、その中に入っていました。」

「はい。」

てか、戦いが宇宙にまで及ぶってなんだよ。色々とツツコみたいところだらけだわ。しかも、軽く地球救ってるし。本人らが気づいてないのが少し腹立つな。

あーだこーだあつて、カイオーガは海底洞窟に、レックウザはそれはしらへと帰っていった。カイオーガが凄く寂しそうな顔をしていたのが印象的だったが、これ以上泊めると部屋がパンクしちゃうので致し方ない。

「……ん？」

そして翌日、散歩がてら、ちらつと海岸沿いを見るとアクア団のマジトから何かが出て行くのが見えた。

「潜水艦か。………やばくね？」

アクア団が潜水艦を出したってことはつまり、海底洞窟に向かい、カイオーガを復活させるということになる。あれ？もう復活してないか？普通に俺の家に来てたし。ま、こつちの主人公がなんとかするだろ（放置）

……シナリオ通りに進めばな。

「……ツ!!いたぞオ!!カイオーガだア!!」

俺、アクア団のボス『アオギリ』は目的のモノを見つけ、駆けていった。そこには大きな湖のような空洞、その真ん中には伝説のポケモン、『カイオーガ』が眠っていた。その禍々しい姿を見て思わず、鳥肌が立ち、高揚感に襲われた。

「待てアオギリ!」

後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。この憎たらしいような声……ヤツだ。

「……やっぱり、お前も来たか。ユウキ!!」

「俺はここでお前を止めてハウエンを守ってみせる!!」

「へっ、ガキのくせに言うことは一丁前だな。」

……実際強いから困るんだが。だが、ここで止まるわけにはいかねエ……!

「行くぞユウキ!!俺を止めてみるオ!!」

俺は決意を固め、ポケモンを繰り出した。

「絶対に勝つ!!」

……うるさいなあ、せつかくい彼の夢を見ていたのに。

「……………!!……………ッ!!」

誰かがなんか言ってるのが聞こえるがまだ眠くて脳が覚醒してないのかよくわからない。

!!?

突然、意識が覚醒した。というより、させられた。と言ったほうが正しいだろうか。

気づけば、目の前にはニンゲンが何人かいた。そして、1番前のニンゲンの右手には『あいいろのたま』が握られていた。

「ハハハハッ!!ついに目覚めたぞオ!!」

なんか急に笑い出したし……………気持ち悪。

「俺はアオギリ!!アクア団のアオギリだアツ!!!」

……………どうでもいい。

覚えておくニンゲンの名前なんてあ愛しいの人くらいしかいない。奥にいるニンゲンは……………まだあのニンゲンを止めに来たのか悔しそうにしていた。……………顔くらいは覚えておくかな。

「さあ!カイオーガ!!世界をあるべき姿にイ!!全て海に沈めてしまえエツー!」

は？

今こいつ、なんて言った？海に沈めてしまえって？何言ってるの海に沈めちゃったら彼がいなくなっちゃうじゃんあのあのニンゲンもしかして私にケンカうってるの？てか、もしかして私とハルトの仲を引き裂こうとしてんの？は？は？は？は？待って本当に意味わからないうもしそれが本当なら許せない許せない許せない許せないユルセナイユルセナイユルセナイ

私の胸の奥から黒いドロつとした感情が込み上げてくる。こんな感じたことのない初めての感覚だった。でも、そんなことはどうでもいい。昔のわたしだったら怒りに任せて暴れてただろう。投げやりになってハウエンくらいなら軽く沈めてただろう。でも、今は違う。私には生きる理由がある、愛してる人がいる。絶対にそんなことは出来ない。もしそんなところを彼に見られてしまったら、彼に嫌われてしまったら、もう生きていけないだろう。

それは置いとくとして、よく見たらあのニンゲンの手には『あいのたま』があった。あれで強制的に目覚めさせられたのだろう。あれには使い方によっては私を強くしてくれる力をもっている。また、私の一部と言っても過言ではないのだ。……そうだ、あのたまを彼にプレゼントしよう。きっと彼なら受け取ってくれるし、正しく使ってくれる。

そこからの行動は速かった。

『グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!!』

『グオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!』

カイオーガが鋭い咆哮を挙げる。

「ハハハハハッ!!!いいぞカイオーガ!!!そのままやってしまえ!!!」

「ッ!？」

そのまま世界を海に沈めてくれる、そう確信した瞬間だった。突然目の前が光で覆い尽くされる。

ヒトの姿になった私はアオギリ?だったけ、そのニンゲンのそばまで歩み寄る。ポケモンの姿だと色々と不便なところが多いのだ。…細かい動作ができないし。

「…………アオギリ?だったっけ?まあ、いや。とりあえずそれ、返してもらおうね。」

アオギリは口を開けたまま震えていた。精一杯笑顔を作ってるつもりだが、もしかしたら笑えていないのかもしれない。まあ、こんなニンゲンに笑顔なんて必要ないのだろう。

私は震えているアオギリからあいいろのたまを奪うとそのまま元の姿に戻り、地上へ向かった。

光が収まり、目を開けると目の前に一人の少女がいた。今までこの場にいなかったはずなので驚いた。俺はハツとなつて辺りを見渡した、しかし、カイオーガはいない……はずなのにあの禍々しいオーラが消えていなかった、むしろ近づいている気がした。そして俺は気づいた。

もしかしてこいつがカイオーガなのかと。

その瞬間、恐怖が体を支配し、その場から動けなくなつてしまった。これから殺される、わかつているのに体の震えが止まらず、うまく体を動いてくれない。

「ねえ……」

「ひっ…!？」

「……アオギリ？ だったっけ？ まあ、いいや。とりあえずそれ、返してもらおうね。」

カイオーガは笑っていた……笑っているのだ。しかし何かが違う。彼女の目にハイライトは無く、全く笑っていない。さらに有無を言わせようとしない威圧感を感じた。俺は耐えきれなくなり、震えながら右手にもつあいいろのたまを差し出した。すると、カイオーガはパツと手から奪い取った。

次の瞬間、再び目の前が光りで見えなくなった。気がつけばそこにカイオーガはもういなかった。

「バケモノめ……!」

あのカイオーガの目が脳裏に焼き付いてしまっており、体の震えが止まる気配がなかった。それからしばらくその場から動くことができなかった。

そのころ俺は自宅でのんびりと洗濯物を干していた。主人公がきつとうまくやってくれていると信じて。……にしてもだ。

「あのー……なんか、ひでりで洗濯物が乾くのはとてもいいことだと思うんだけど、流石に暑すぎませんかね？」

そう、ひでりである。原因は間違いなくグラードンだろう。アクア団が動く裏でマグマ団も動いているはずだ(エメラルド参照)まあ、本来ならひでりと雨が合わさって中々カオスな展開になるのだが、カイオーガは特性の制御をマスターしてるから雨は降っていない。……でも、やばい。暑すぎてぶっ倒れそうなんです。まさか、ひでりだけだとこんなにしんどいとは……。

「やっぱり、雨欲しかったなー、熱中症で倒れそう。」

あ、やべ、なんか、あたまが、くら……く、ら……し……て……

『……………ツ……………!?!』

だれかにひっしになにかをいわれているがわからず、そのままいきをおとした。

「〜♪」

私は上機嫌だった。ずっと探していた『あいろいろのたま』が手に入ったのだ。これで私の本当の力を解放できる。

「……喜んでくれるかな、ハルト♪」

「カイオーガ!!」

後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。振り向くとそこにはレックウザがいた。普段よりもどこか焦っている様子だった。

「…なに?」

「た、大変だ…お義父さんが倒れた…!!」

「えっ……?」

なんで? どうして? いつ? どこで? 頭の中でたくさんの? とそして、何かがこみ上げてきた。

「どうして……?」

私は考えた。そして、違和感に気づいた。

「ま、まさかこの大熱波で……!?!」

レックウザも小さく頷く。そう、この異常なほどに強い日差しである。私はみずタイプというか、そもそもポケモンなのでどうもなかった。しかし、ハルトはニンゲン、この異常な猛暑に身体が耐えられなかったのだ。

「…は、はると……ッ!!」

私は頭の中が真っ白になり、ハルトのところに向かおうとした。しかし、何かに私の左腕を強く掴まれた。そう、レックウザだ。

「……ダメだ。私達にはまずやることがあんだろ…!!」

「なんで!? 離してよッ!!……でないとハルトが!!」

「ダメだっつてんだろオッ!!」

レックウザが強く言った。しかし、その声とは裏腹に震えており、

瞳から一粒の雫が落ちる。

「……私達がお義父さんのところに行つたところで出来ることなんて限られてる……いや、できることなんてない。むしろ私達のすべきことは……」

「ッ!!……グラードンを止めること……!」

「そうだ。つつても、アイツはお前みたいに特性の制御が出来ない。だから、気絶……最悪殺すしかない。」

「別にいいよ。ハルトにあんなことするヤツは生きる価値なんてないんだから。」

「……ダメだ。殺したりしてみろ、それこそお義父さんに嫌われる。」
「あつ……。」

そう、どんなポケモンにも優しくしてきてくれたハルトがいくら止めるためとはいえ、グラードンを殺しても喜んでくれる訳がない。最悪、拒絶される可能性もある。それだけは絶対に嫌だ。彼に嫌われてしまったら生きる理由が無くなってしまう。

「ルネシティにおそらくヤツはいる。行って止めるぞ。」

「うん……!」

私とレックウザはグラードンを止めるため、ルネシティに急いだ。

「……で、だ。」

「ひっ……………」

「なんで、グラードンを家に連れてくるかなあ!？」

そう、結論を言うとグラードンはあっさりとやられた。まあ、そうだよ。相性も悪いし、なんせ2対1だったしね。しかもさ、目の前で正座させられてビクビクしてるコイツがグラードンなんだぜ? 正直一番びつくりしたわ。

「ご、ごめんなさい! そつ、そのつ、魔が差したんですよ! なんか、その、マグマ……団? って人たちが、わざわざべにいろのたまをもってきてくれたから、その、暴れてみたくなっちゃったりして……」

「……あなたのその好奇心で私の大切な人が死にかけてるんだけど、どう責任取ってくれるの?」

「もう、用済みなんで殺しちゃっていいですか?」

「ひっ!! ごめんなさい! ごめんなさい! 本当に悪気は無かったんですよ!!」

てか、別に死にかけてないからな? ちよつと暑くてフラツと倒れただけだし、意識も戻ったよ。ポケモンにとってはあのくらいの熱波はどうもないらしく、それで倒れた俺をみて一大事だと勘違いしたらしい。しかも、シロナさんも無知すぎて案山子状態だったし。以前ニングンをやっていたアオイが適切な対処をとってくれてよかったよ。ちなみに手柄はこの作品(エメラルド)の主人公クンに全部譲おしつめたつたらしい。ヨカツタネ、

「…まあ、別に怒ってないからいいよ。マグマ団が勝手にべにいろのたまを持ち出したのが悪いんだし。」

「ほ、ほんとですか!?! ありがとごごいます!!」

「……私は許してないから。」

「上と同じく。」

もう、伝説二人組の怒りと殺気がやばいやばい。まあ、ゆうてラティアスもジュペッタ人形に思いつきり釘を何本も打ち込んでるし、メアもブツブツ言いながら何か企んでるし、ヤヨイだって関節をポキポキ鳴らしてるんだもん。正常なのはアオイくらいだよ。しかも、アオイ関しては機嫌が良いし。

「あとさ、1つ気づいたんだがカイオーガ……お前なんか変わった？」

「……？」

首を傾げているカイオーガだが、明らかに姿が違う。まず、目だ。普段は黄色なのに赤になっていて、青色のワンピースにも薄黄色の線が刻まれており、水色の髪にも黄色の髪がいくつか混じっている。そして、なによりも違和感なのが胸あたりにたわわに実った2つの果実である。見間違いや幻覚でなかったならば明らかに慎ましい方だったはず。

「……あ、これね。ゲンシカイキって言うんだ。言い換えるよね、メガシンカ？みたいなものなの。グラードンと私カイオーガはメガシンカの代わりにゲンシカイキが使えるんだ。とは言っても、キーストーンと同じく、私ならあいろいろのたま、コイツならべいろいろのたまが必要なんだけどね。」

「へえ……っつておい何を……！」

カイオーガは俺に右腕にその豊満になったモノを押し付けるようにして抱きついてきた。

「えへへ……私、魅力的になったでしょ？」

「は？」

「おい」

「何してんだぶち転がすぞ？」

「はわわ……／＼／＼」

すかさず、反応するコイツら。もう、部屋の雰囲気は戦場みたいになってるんですけど。

「……そろそろお開きにするか。正直しんどいし（本音）」

「えっ？」

「えっ？」

「…何言ってるの？私達みんなハルトのポケモンだよ？」

は？何を…みんなって…

「まず、コイツは私が捕まえたの。」

「えっ？捕まえたって……どうやって？」

「普通にモンスターボールで捕まえたけど。」

グライドンも頷いているので本当なのだろう。

「コイツを気絶させてもひでりが直らなかつたんすよ。だから仕方なく、モンスターボールで捕まえたって訳っす。」

レックウザが簡単に説明してくれた。なるほどね。

「なるほど、グライドンを捕まえたというのはわかった。でも、この場合ってカイオーガかレックウザのポケモンってことにならないのか？」

カイオーガとレックウザは顔を合わせると少し吹き出したように笑った。

「…私はハルトのポケモンなの。一度、ハルトのモンスターボールに入ったから。」

「私もカイオーガと同じっす。結構前にこっそりボールに入って捕まっておきました。」

「は？」

「だから、グライドンは私のポケモンだけど、私はハルトの物、つまりグライドンもハルトの物ってことになる。」

なるほど、こいつらの説明はわかりやすくして直ぐに理解できた。し

かし、一言言わせてほしい。

「お前ら勝手に人のボールに入って捕まったことにするのやめてくれませんか?」

「もう手遅れだけどね。」

「うっせえ。」

カイオーガが悪戯じみた笑みを見せる。そして、グラードンも満更でもない顔するのやめろ。

その時の俺は気づいていなかった。

レックウザがお土産と言って持ってきた、あの三角の石。

あの石が徐々に

変色して言っているということに。

更なる脅威が

襲いかかる。

第20話 誕生

「……あれからまた何日か経った。

俺は特にやることもなくソファアに腰掛け、普段通りのんびりとテレビを見ていた。

「……………なあ。」

「ひゃっ、ひゃい!？」

呼びかけると突拍子も無いような声上がる。何故か隣で俺にくつつくようにして座っているのは先日伝説二人に召されたグラードンである。さつきからチラチラとこちらを見て様子をびくびくと伺っているようだ。

「別に無理しなくてもいいんだぞ? あいつらに無理やり捕まったんだし、ここにいるのが辛いなら逃してあげるからさ。」

「いつ、いえー! そ、その、私はだ、大丈夫です。だってハルトさんと一緒にいたいし……………/ / /」

「そ、そうか…」

グラードンは視線を合わせずもじもじしながら言った。なんだろう、どう見ても無理してるようにしか見えない……………。

「あつー! そ、そうです、ハルトさんに渡したいもの、があつたんです。」

グラードンは懐から何か丸いものを取り出した。

「は、はいー! どうぞー! う、受け取ってくださいいっ!」

グラードンはその赤い水晶のようなものを俺に差し出してきた。

「これは……………」

「べ、べにいろいろのたまです。」

べにいろいろのたま、それはグラードンを眠りから覚まさせるのに必要(のはず)なものである。また、カイオーガのようにゲンシカイキをすることも可能でグラードンだけの為にあるような貴重なアイテムなのだ。

「いいのか? こんな大事なものを俺なんかに渡して」

「……………は、ハルトさんなら安心して渡せます。きっと正しく使ってく

れますでしようし………あつ、ちがいますね、ハルトさんが使えばそれは全て正しいんでしたね。」

「どうしてそうなる。」

なんだこの家、全部俺中心で回ってるのかよ………末恐ろしいな。グラードンも既にあいつらに毒されてる気がするの俺だけだろうか？

「わ、私をひとりの女の子として見てくれたのは……ハルトさんだけですから……。」

グラードンは胸元につけてある赤いブローチをそつと握りしめた。

三日前

それはその日の夕飯の買い物で二人でしてその帰り道でのとだった。

「なあ、グラードン。」

「はっ………はい……？」

「この暮らしには慣れたか？」

ハルトさんは私にそう問いかけてきた。正直なところ慣れるわけがない。普段からずっと一人で火山に籠っていたのだ。急に環境が一変してしまつて正直追いつけていないのだ。

「……。」

私はしまったと思った。うまく返事ができなかったのだ。

「………そっか。」

ハルトさんが深刻そうな表情をしていた。これから何かされるのかと思うと怖くて仕方がなかった。ハルトさんのことは正直信じていなかった。あのレックウザとカイオーガを丸め込み、かつ、あそこまで狂愛させてしまっている。どんな手を使って洗脳したのか疑問

でならなかったのだ。私も同じ方法で洗脳されてしまうと考えると怖かったのだ。警戒するあまり、ハルトさんとはうまく話せていなかった。

「いきなりこんなところに無理やり連れてこられてもやっぱり辛いよな……。」

「……………はい。」

私は正直に答えた。

「わ、わからないんです、ポケモンである私がニンゲンたちの生活をしていけるのかなって不安になるんです……。私は何千年も生きてきました。それでも出会ったニンゲンなんて指で数えるほどくらいしかいないんですよ。だから……………その……………」

うまく言葉で言い表せなかった。自分でもなにを言いたかったのかわからなくなってしまうたのだ。

「……………ハ、ハルトさんは私の事どう思ってますか？私はその気になればハウエンを滅ぼすことだってできるんです。こわい……………とか思わないんですか？」

「そうだな……………別に本人にその気が無いなら怖くはないぞ？」

「……………えっ？」

予想外の答えが返ってきた。私が……………怖くない……………？

「まあ、あの時は熱中症でぶっ倒れたけどさ。別に自己管理ができてない自分が悪いってだけでお前は悪くないと思うよ？そういう特性なんだからさ。」

ハルトさん……………

「それに今はちゃんと制御できてこんな普通の空の下を歩いてるんだ。きつとお前の見てる世界は広がったはずだ。……………俺はお前のことを怖がったりなんかしないさ、だってそうだろう？お前はこんなに可愛い女の子なんだ。逆に俺が守ってやるくらいの気持ちがないとカッコ悪いだろ？」

そう言つてハルトさんは笑った。

……そっか。やっと私は気づいた気がした。どうしてあの二人がここまで彼を愛しているのか……………。

「お、このブローチいいな！」

気づけばそこに1つの小さな屋台みたいなものがあり、いろんなアクセサリーを売っていた。私はアクセサリーなんて初めて見たのでよくわからなかった。でも、ハルトさんはお気に入りを見つけたのかそのブローチ？というものを買っていた。

「ほい。」

「……………」

「これあげるよ、お前ならきつと似合うと思ってね。」

ハルトさんはそのブローチを私に差し出してきた。

「…………物で釣ろうとしてるんですか？」

「さあね。俺は少なくとも好意で渡してるよ。」

「……………」

ハルトさんは軽い口調で言っていたが目はまっすぐと私の目を見ており、言ってることは本当だと思った。そう思うと胸の奥から熱いものが込み上げてくる。……………そうか、これが……………！

「で、どうする？受け取る？受け取らない？」

「も、もちろん貰いますっ……………えへへ」

初めて他の人からプレゼントをもらった。そのブローチにはハルトさんの優しさが詰まっているようでとても嬉しかった。

「ありがとうございます！ハルトさん、一生大切にしますね！」

なんかさ、こいつら仮に俺が殺人とかしても警察を全員駆逐してしまえば怖い。てか、してしまえばさ、さもなくばするよねあいつら

なら。

「あとさ。」

「はい？」

「なんか、あの三角石赤くないか？」

「そ、そういうええばそうですね…。」

そう、レックウザとヤヨイたちの乱戦に巻き込まれてしまった隕石先輩から出てきたあの三角石、日に日に赤くなってきているのだ。

「あれ、最終的にどうなるんだろ？」

「爆発する…と…か？」

「……………ありえそう。」

まあ、正体は知ってるからいいんだけど、問題はそいつが果たして俺らに何してくるかなんだよね。

「……………んあ？」

唐突にぼんやりと意識が覚醒した、いや、させられたと言った方が正しいだろうか。誰かに揺すられているのだ。

「なんだよ…またメア……………か……………？」

目を開けるとそこには見たことない誰かがいた。次第と暗闇にも目が慣れてきたのか視界がクリアになっていく。はつきり見えるようになる。そこにはオレンジ色の髪に左右に二束ずつ、オレンジと水色の髪がツインテールのように伸びており、ダボダボの赤い長袖のTシャツ一枚の幼……………小さい女の子が俺の上に跨っていた。

「……………ん」

取り敢えず身体を起こして思考する。誰だこいつは？彼女は俺の目をじっと見つめていた。なんだ？見たことがない……………？いや、こいつは……………！

「……………デオキシス……………か？」

「ん……………!!」

「うおっ……!」

すると、当たっていたのか彼女、デオキシスは嬉しそうに俺の胸に頬を擦り付けていた。何だこの可愛い生物は……!! (悶絶)

「よーしよしよし、かわいいなーおまえー」

「んう……!!」

デオキシスの頭を優しく撫でてあげると彼女も気持ちよさそうにしていた。やばい、俺ロリコンに目覚めそう……! (直球)

流星に夜中なので眠気が再び俺を襲ってきた。俺は布団に入り、デオキシスも一緒に入れてあげようとした。

「よーし、デオキシスも俺と一緒に寝るかー」

「……んー!」

デオキシスは布団の足元から入り、ひよこつと俺の目の前に顔を出して抱きついてきた。あゝ、かわいいんじやゝゝ

「……ッ!」

しかし、突然俺は違和感を覚えた。正面から今、彼女、デオキシスは俺に抱きついている。そう、完全に密着している状態なのだ。そして、何かとてつもなく柔らかい感触があった。それも2つ。……:……:俺は信じたくなかった。突然現実に戻されたようなこの感覚。もうこれ以上遠回しに言うのもやめよう、単刀直入に言わせてもらおう。

彼女、デオキシスは将来性胸が結構あったが高かったのだ!!

……迂闊だった。あのブカブカのTシャツ、あれが完全にあの双丘をカモフラージュしていたとは……!!よく見れば多分気づけたはずだが、あいにく夜中でも照明もついていない。これに気づくのは不可能だ。ちくせう……、完全に彼女に嵌められた(関係ないです)!!まだ、巨乳というわけではない、しかし、生まれたばかりだというのにメアと同じ、いや、それ以上のポテンシWマウンテンナルを持つているのだ。成長速度は完全に不明だが、いずれヤオイやアオイにも引けを取らない一流のものとなるだろう。そんなことはどうでもいい。非常にまづいのが彼女は完全に俺に懐いており、あくまで推測だが、俺のことを親

と思い込んでいたのだ。本来なら見ず知らずの生物を警戒するのが普通だ。しかし、刷り込みの要素と同じなのかどうか知らないが、全く警戒しておらず、このようなスキンシップを取ってきたのだ。たしかにかわいいよ？この子。かわいいけどさ!!こんなモノ胸持っていたらさあ、意識しちゃうじゃん!!

「ん…♡」

「……………ん”ー(困惑)」

さてさて、明日からどうしますかねえ……。

……………?

▪ 88? < 4 × 4 >

× 85 あ & 8% に ▪ 532 …… > …… [……]

g な j に …… + 2 ち …… 7 < 6 2 7

……………。

……………

めをあけるとよくわからないばしょにいた。

まわりをみわたすといろんなものがあつた。

ひっぱるとあくものがあつたのであけてみるとそこにはなにかがいた。

……

そこにいたのは目を瞑り、気持ちよさそうに眠る生き物だつた。

それを見た瞬間、私の胸がキュンとなり、突然鼓動が高まつた。

それ……？

その生き物………？

オス………？

………私は彼から目が離せなくなつていた。

鼓動が抑えられない。

どんどん高まつていく。

恋しく………

愛おしく………

我慢できない。

どうやれば目を開けてくれる……？

「……んあ……あ……！」

あれ

「……あ……ッ！」

口から音が出ない。……声？

私は彼の身体を揺すって目を開けさせることにした。

「……んあ？」

彼の声が漏れた。

ドクン……！

なに……これ……？

私の胸の奥が熱くなり、謎の幸福感で包まれる。愛おしくて、気持ちよくて……一生手放したくなくなるような……

次に私の中に何かが入ってきた。メア……？よくわからない言葉が私の頭の中にたくさん入ってくる。

……なんだろう？

このドロつとしたような感情は…

メアという言葉聞いた瞬間、へんな感情が…。今度は彼を独占したい…。そんな感情に包まれる。

……よくわからない。

彼はゆっくりと身体を起こし、私を見つめる。すると、私の頭の中に彼の情報が飛び込んできた。彼はまだ私がよく見えていないらしい。

「……デオキシス？」

……ツ!!

ハツとなって、気付けば私は彼の胸に頬を当てて擦るようにしていた。そして、さっきのとは比べ物にならない快感、幸福感が私を包み込んだ。

「ん……！」

でおきしす……。私はデオキシスという名前らしい。

もしかしたら彼が……。ハルトが私につけてくれた名前なのかも……！

「かわいいなあー」

やった……。ハルトが私を可愛がってくれた!!嬉しいなあ……！

ハルトは私の頭を優しく撫でてくれる。この行動の意味はよくわからないけどとても気持ちよかった。まるでハルトのモノになつたかのような、そんな優越感でつつまれた。

「んう……いー」

思わず気持ちよくて声が漏れた。

「よーし、デオキシス俺と一緒に寝るかー」

うん！一緒に寝たいっ!!

私はハルトに抱きつくようにした。ハルトは暖かくて……なんだろう、安心する……

……？

あれ、ハルト……なんで興奮してるの……？

ハルトから、興奮……感情の高ぶり……羞恥心……いくつかの感情が私の頭に飛び込んでくる。

胸……？

私はなぜか胸あたりに少し大きく膨らんでいる2つの山のようなモノに視線を移す、それはハルトの体に押し付けられるようにして当てられており、今はつぶれるようにして形を変えている。この状態を見る限り、とても柔らかいものらしい。それに何故か感覚がほかのと

ころに比べてハッキリしている。……………よくわからない。

でも、ハルトはそれに興奮しているみたい……………なんだろう……………少し嬉しいな……………／／／

他にも色々わかったことがあった。ハルトは私の産みの親だということ、私はメス……………女の子だということ、そして、将来性？があるらしくて、これからもこの胸は大きくなっていくこと、ハルトは胸が大きい方が好きなのかな……………？

ハルトを見てから胸の高鳴りが止まらない。むしろドンドン高まっていくばかり。

私はハルトが親だからこんなにドキドキしてるの？

……………なにか少し違うような気がした。

でも、今はとても幸せ。ハルトの子として生まれてきてよかったと思う。……………あれ、なんだか眠い……………おやすみ、マ……………m……………ハルト……………ト……………♡

「……………ハッ！もう朝か。」

多分眠りについていたのは夜の3時くらいだろう。つまりだな、どういうことかというのだな。全然眠れなかったんだよチクシヨウ!!

「んう……♡」

そして昨夜からずっと変わらないこの柔らかい感触。……夢オチじゃなかったようだ。

「ん……」

デオキシスは目を覚めますが、まだ寝ぼけているのか目が半分ほどしか開いていない。

「まだ眠たそうだな…。」

「……ん。」

彼女はまだ首がこくりこくりとしており、再び眠りに落ちようとしていたので取り敢えず朝食ができるまで寝かせておこうかな。朝食を作る為に俺は立ち上がってリビングへ向かおうとした。

「………ん？」

「ああ、俺は今から朝食作ってくるからまだ布団で寝てていいぞ？」

俺が扉に手を掛けた瞬間だった。

「………や……！」

デオキシスは目を潤ませて今にも泣きそうな顔で俺を見ながら服の裾を掴んでいた。

「や………あ………っ……！」

彼女は想像以上に幼いみたいで親（代わり）である俺から離れるのが嫌だったらしい。裾を掴んで俺から全く離れようとしななのだ。

「そっか、それじゃあ一緒に行くっか。」

「う……………ん……！」

俺は彼女を背中におぶってリビングに向かった。扉をあけて中に入るとそこには普段と変わらないメイド服を華麗に着こなして朝食を作っているアオイの姿があつた。……ああ、今日は俺が作る日なのに……。

「おはようアオイ。」

「おはようございますご主人様！あ、ご主人様の背中にいるその子は？」

「あの三角石から産まれた子だよ。」

「……………ん！」

デオキシスは俺の後ろに隠れてアオイを睨みつけている。

「かわいい……………」

そう、この警戒している姿でさえ萌えポイントとなるのだ。……てか、コイツほんとうにデオキシスだよな？あのサイコブーストぶっぱなしまくるデオキシスだよな？その面影が微塵もないんですが……。

「……？」

デオキシスは俺をみて首を傾げていた。かわいい。

「あ、この子昨日産まれたばかりのくせにいきなりお兄ちゃんに夜這いしてきた子だ！とりあえず殺すね。」

「おいやめろ。」

どうやったらあれを夜這いと受け止めるのか。ただ俺は起こされただけだというのに。てか、何でもかんでもコイツは殺そうとしすぎだろ。

「……………？」

「お前は知らなくていいことだからなー？」

純粋な彼女を穢したくないからこのことは是非是非忘れていただきたい。そう切に願っております。

「おはようございます、あれ、その子は？」

レックウザも起きてボールから出てきたのか俺の部屋から出てきた。

「お前のお土産の中身だよ。」

「はえー、なんかエネルギー感じたからパワーストーンかなって思ったんですけど、まさかのタマゴっすかー！」

「……………」

レックウザが近づき頭を撫でようとした瞬間だった。

「かわいいっすねえ」

「ん!!」

ガブツ!

「いったあ!?!」

その腕に思い切り噛みついたのだ。離れたあと、すぐに俺の後ろに隠れた。

「まってまってまって普通に痛いんだけど、ああああ!!めっちゃ痛いめっちゃ痛いいいいい!!!」

レックウザは噛まれた痛みで悶え苦しんでいた。…………御愁傷様です。血が出るほどではないがくつきりと歯の跡がついていた。

「お兄ちゃん、やっぱコイツ危ないよ!今すぐ消してやる!」

ラティアスが殺意全開でデオキシスとの間合いを詰めた瞬間だった。

「…ん!」

ガブリ!

「ッ!!」

デオキシスが今度はラティアスの腕に噛みついたのだ。

「こらデオキシス！むやみやたらに噛み付くのはやめなさい！」

「……………ん……………♪」

ダメだ、こいついいことしたと思ってるのかめっちゃ俺に嬉しそうな顔で擦り寄ってるわ。てか、胸がガツツリ当たってるから正面から抱きつくのやめてくれよ？

「ラティアス……………大丈夫か？」

デオキシスに噛まれた後、よほど痛かったのかその場から動けずいたラティアスに声をかけた。

すると、彼女の体が揺らぎ、

「……………う……………そ……………で……………しよ……………？」

そのままうつ伏せに倒れ伏したのだ。

「は？ラティアス？おい、ラティアス!？」

は？…なんでいきなり倒れたんだ？夜中に何か大変なことでもあったのか？おれは何故ラティアスが倒れたのかわからず、半分パニック状態に陥っていた。

「彼女はおそらくひんし状態になってるわ。」

「……シロナさん。」

突然後ろから声が聞こえたので振り向くとそこには寝癖で髪がボツサボサのシロナさんがいた。

「え、ひんしって……なんでですか?」

そう、ラティアスが何故ひんし状態になったのか理由がさっぱりわからなかったのだ。

「……理由は簡単よ。ラティアスは効果バツグンの攻撃を受けたの。」「効果バツグンの攻撃……?でも、今朝はまだ一度も外に出てないですし、戦闘なんて……。」

「いや、今さっき起きたわ。……ねえ、ハルトくん?ラティアスって何タイプ?」

「えっと、ドラゴンとエスパーですね。……あ。」

「そう、あくタイプのかみつくは効果バツグンのよ。」

え、てかあれ攻撃技だったの?しかも結構強いラティアスをワンパンで沈めるなんて……!

俺は自覚した、いや自覚させられてしまった。こんなに小さくて可愛らしくてもポケモンなのだと、それも圧倒的な強さを誇るポケモンだったのだと。

少しデオキシスのことが怖くなった。

「……や……あ……っ……!」

すると突然デオキシスの抱きしめる力が強くなった。ふと視線を下げると彼女の瞳から大粒の涙がぼろぼろと零れ落ち、まるで捨てないでと言わんばかりに俺の目を見ていた。顔に出てしまっていたらしい。俺は彼女を抱き抱えて、優しく頭を撫でてあげた。

「大丈夫、絶対捨てたりなんてしないからな。」

「う……ん……。」

「……。」

「シロナさん?」

「この子も貴方のポケモン達と同じ匂いがするわね…。」

オマエモナー(的確)

「取り敢えず、ラティアスを回復しないとな。シロナさん、何か回復系の道具持ってます?」

「ふっかつそう(苦さ4京倍)ならあるわよ。」

「死ぬやん(〇)」

「死ぬわよ(〇)」

「あれですか、なんか罰ゲームで食わせる…:…みたいなの?」

「いや、こんなもの罰ゲームでも食わせないわよ、というよりこんなもの食べたら舌が溶けてしまう(物理)わ。」

「げんきのかたまりとか持ってないんですかね? かけらでもいいです。」

「私ポケモン持ってきてないのよね。」

「は?」

「え?」

なんだこのひと、さつきポケモン持ってきてないとかぬかしてなかったか? いや、もしかしたら気のせいかもしれない。

「シロナs「持ってきてないわ。」……………」

「なんで持ってきてないんですかね…:…流石に護身用にガブちゃんさんくらいは持ってきた方がよかったですんじや…:…。」

「だって、ハルトくんと一緒に居たかったから私のポケモン邪魔だったし…:…。」

「は?」

「いや、普通にポケモン達を休ませてあげたくて…:…。その、ほら、ここ最近忙しかったから!」

なるほどな、たしかにチャンピオンともなると普段よりもっと忙しくなるよね。腑に落ちない点もあったような気がするが、まあ気にしなくていいか。

「はあ、そんじやちよつとげんきのかけら買ってきます。」

とりあえず抱っこしているデオキシスを降ろそうとするが、

「……………む……………」

離れてくれない。てか、ビクともしないんですがどうすればいいんですかね。めちやくちや密着してるし（しかも正面）胸が思い切り当たられてて理性がぶっ飛びそうなんですけど誰かぼすけてください。「デオキシス、これからちよつと買い物に行くから離れなさい。」
『……………やだ。』

「んー、どうしたもんか。」

今、さらつと流したけど喋ったよね。いやテレパシー使ったのか、だとしてもやつぱ言葉話してるようなもんだし……………、学習能力高すぎだろ。……………もういいや、このまま行くか。

「ちよつと行つてくるので留守番よろしくです。」

「はいはい。」

ミナモデパートに向かって歩いて行つてるのだが、さすがに抱っこしながらだと歩きづらかったので言つてみた。

「抱きついてでもいいけどさ、せめて背中に乗つてくれないかな。」

『……………やだ。』

はい。

「てかさ、普通に喋れないの？まだ一度も喋ってるの見ないけど。」

『……………まm、はると以外とはなしたくない。』

「なんで話したがるらないんだ？何か嫌なことでもあるのか？」

『…はるとが好き、はるとだけいれればいい、それがいはなにもいらないから。』

一瞬寒気がしたが、流石に産まれたばかりの子だからきつと母親（代わり）に甘えたい、そんな感情から来てるのだろう。……………でないと困るわ。

『……………ちがうのに』

「これでよし。」

俺はげんきのかけらを粉末状に砕き、それを水と一緒に飲ませた。

「……………んん……………」

「お、起きたか？」

飲ませたらすぐに意識を取り戻した。

「あれ、お兄ちゃん……………」

「お前、ずつと気絶してたんだぞ？デオキシスに噛みつかれた後。」

ちなみにその本人は俺の背中で眠っている。デパートの人混みで疲れてしまったらしい。

「ひっ……………」

ラティアスが彼女に対して完全に怯えてしまっている。それも珍しい現象だなあと思った。

因みにだが、この子、俺から絶対に離れようとしてくれないのだ。

例を挙げるとすれば、ラティアスを目覚めさせた後のことだ。

「…………ラティアス、俺を守ろうとしてくれるのは嬉しいけどあまりやり過ぎるなよ？」

「…………お兄ちゃんは私のものだもん。」

「少しはその欲を抑えなさい。」

あつ…………なんか一通り済んだおかげか知らんけど急にトイレに行きたくなってきた。流石に我慢するのも限界だったのでとりあえずデオキシスをソファアに寝かせてからトイレに行くことにした。

「よいしょ…………つと。」

ゆっくりと起こさないように俺の背中から下ろし、寝かせてあげた。よし、トイレに行こう。と、トイレに向かい一歩踏み出した瞬間だった。

「…………やあ……………」

んでいるデオキシスがいた。

「あの、デオキシスさん？」

『なあに？』

「用を足したいのでちよつと出てもらえませんか？」

『……………』

ギユツ

あつ……………

結局、俺は彼女と同室で用を足すという暴挙に出てしまった訳だが、恥ずかしいなんて次元を遥かに超えてるからやめてほしい。デオキシスは俺がどこに行こうとしても絶対服の裾やら何やら掴んで着いてくると来たもんだ。しかも、もっとタチが悪いのが産まれたばかりでラティアスを倒しちゃってるもんだから周りも中々手が出せないのだ。手を出せる子つて言えば、単純に強いヤヨイと、母性の塊とも言えるアオイくらいなのだ。

「はあ……………」

「どうしたの？ため息なんて吐いて。」

「…カイオーガか。」

ソファに座っていたら（デオキシスは膝の上で寝てる）カイオーガがとなりですとんと座って来た。最近、カイオーガが癒しに感じ始める当たりかなりやられて来ていると実感している。

「この子がさあ……………」

「……………殺そうか？」

カイオーガの眼の色が変わる。おいおい、ゲンシカイキシしようとするのやめろやめろ。

「……いやいや、殺す必要はないだろー!」

「ハルトの障害になってるし、そんなもの消してしまったほうがいいよ。」

「なんでお前らはそんな荒々しい考えしか持っていないんだよ、もう少し温厚に済ませようぜ。」

「……コイツのかみつく痛いもん。」

あ、ちよつと涙目になってる、可愛い。思わず彼女の頭を優しく撫でてあげた。

「……ん／＼／」

気持ち良さそうで何よりだ。

「……ハルト、好き。」

「どうしたよ?いきなり」

カイオーガが俺の方に体を預けてきた。

「こんな充実してる生活、今まで生きてきて一度もなかったんだもん。これも全部ハルトのおかげだよ。それ以外でもハルトのことが好き、ハルトがいない世界なんて必要ないって思えるくらい好きなの。……ハルトが死んじゃったらどうしよう。ニンゲンだから絶対私より先に死んじゃうし……私も一緒に逝こうかな。…いつそのことハルトをニンゲン以外にするのも……ブツブツ……」

カイオーガの目からハイライトが消え、不気味に微笑みながらブツブツつぶやき始めた。

『はると……?』

「ん?どうしたデオキシス?」

目が覚めたのかデオキシスは俺をじっと見つめていた。

『はると……わたしよりさきにしんじやうの……?』

うーん、聞こえちやつてたか。どうしたもんかなあ……

「……そうだなあ。お前より先に生まれたんだから多分先に死んじや

うのは当たり前なのかもな。」

そう、デオキシスは俺のことを親と思っている、ならば、親が先に死ぬということにもできるのだ。騙しちやってるのも申し訳ないが、あまり悲しませすぎたくなかった。

「うっ、……うええ……！」

泣くなよ……。

「大丈夫だからな？別にまだすぐ死ぬわけじゃないし、まだまだ先の話だから。気にすることじゃないぞ？」

『で、でもお……！』

デオキシスが俺の胸にしがみついてじっと涙目で見つめてくる。
誰だよ、寿命のネタ振ってきてたやつ○

『ピンポーン』

すると唐突にインターホンが鳴った。

「ん？誰だろ、N●Kかな？（適当）」

俺は立ち上がり、玄関に向かう、もちろんデオキシスも俺の服の裾を掴んで一緒について来ている。

「はーい」

俺は玄関の扉を開けた。するとそこにはメガネを掛けた怪しげな白衣の男がいた。

「……え？どちらさまですか？」

「私はトクサネ宇宙センターの局長を務めております、アラキという

者です。」

「あつ、はい。で、その宇宙センターのトップが僕に何の用ですかね？」

トクサネシティなんて行ったことないし、全く心当たりが無かった。何故この人はわざわざ俺のところに来たのだろうか……。

「単刀直入に言います。アナタ、宇宙から来たポケモンを持っていますよね？」

「あ………？」

その男は核心に迫る言葉を俺に言ったのだった。

第21話 終焉

私の名前はアラキ、研究者の一人である。そんな私は子供の頃から宇宙の魅力に惹かれて、宇宙について調べ調べ尽くして、気がつけばハウエンで唯一の宇宙研究施設、トクサネ宇宙センターで局長として研究に励んでいた。この施設では世界トップクラスの宇宙に関する設備が整っており、宇宙には人工衛星、宇宙ステーションもある。宇宙好きの私としては最高の職であった。

しかし、そんな楽しい日々も続かなかった。なんと、宇宙から隕石が地球の方向へ向かってきているのだ。最初は耳を疑ったがレーダーによる精密な計算によるとほぼ確実に、いや絶対地球に衝突することだ。なんとかしなければと思い、どんな方法を取れば隕石を破壊することができるか色々思考し、演算処理に掛けてみるもの不可能なものばかりだった。

そこに現れたのは流星の民と名乗る者だった。彼女が言うにはあの伝説のポケモン『レックウザ』が遠い昔、隕石から地球を守ったと言う話だ。そんな迷信に近い話、信じるのも難しかったが希望がある以上、それに頼るほか無かった。しかも、その件に関して元ハウエンリーグチャンピオンの『大誤算』に加え、新生チャンピオンとなった『ユウキ』くん、更には以前はグラードンやカイオーガを操ろうとさまざまな悪事を企てて世界を破滅に導こうとしていたが今はその罪の償いとして、様々な場所で建設や工業、農業など幅広く活動している新生マグマ団とアクア団も協力に名乗り出たのだ。流星の民を名乗る少女『ヒナ』はそらのはしらで儀式の準備に取り掛かりレックウザを迎える準備を、大誤算は我々とともに隕石による影響を少しでも抑えられないかと対策を練っている。ユウキくんはレックウザと対峙した時の為に所持ポケモンの強化を、新生マグマ団と新生アクア団は私設応援団を設立、彼らの応援の修練に励んでいる。今の我々には隙が全く無いと言っても過言では無かった。そう、ハウエンは一つにな

ろうとしているのだ。

これならいける!!

私を含め、誰もがそう確信していた。

そして、迎える儀式の日、そらのはしら頂上では大誤算を始めとする、沢山の協力者が集まっていた。ヒナは床に描かれてある紋章のよなものの前で待機しており、その後ろにはユウキくんがボールを持つて今か今かとレックウザを待ちわびている。そして、更に後ろにはマグマ団のトップ、マツブサとアクア団のトップアオギリが応援団長として総勢50名の応援団員を率いてユウキの応援をしようとしていた。途中、マツブサが虚ろな目で「カガリが『あ　ほ　く　さ』つて吐き捨てて出ていってしまったのが誠に遺憾であった…」と言っていたのが印象に残っている。

「よーし！それじゃパパッと始めちゃうよー!!」

そう言つてヒナは手を合わせ唱え始める。そう、儀式が始まろうとしているのだ。

「……………」

俺はユウキ、先日、大誤算、もといダイゴさんを倒しホウエンのチャピオンになった男だ。これから隕石を防ぐべく流星の民であるヒナさんのレックウザ召喚の儀式に参加していた。俺に任せられたのはただ一つ、『レックウザ』を捕獲し、レックウザとともに隕石衝突を阻止することだ。周りが一致団結し、この日の為に尽力して来た。

「よーし！それじゃパパッと始めちゃうよー!!」

そしてヒナさんの合図とともに詠唱が始まった。これからレックウザが召喚され、ここに飛んでくる…はずだ。

なんだろう、この胸騒ぎは……。

皆一つになつて、以前は敵同士であったアクア団やマグマ団も今は仲間同士応援団とか言う正直必要なさそうなことをしているが協力してくれている。全く隙のない陣形のはずなのに……成功する気がしないのだ。

なんだろう……ルネシティで確かにレックウザはいた。レックウザとカイオーガが協力し、グラードンを阻止しているのを見た。そして、彼らの目を見たときに思った、いや、思わされてしまった。

『彼らは本当に世界を救おうとしていたのか?』と。

つまりどういふことかと言うと彼らの目は俺たちのことなんて見えていなかった。何か別の、もっと小さな物しか見ていなかったような、そんな感じがした。ねつとりと何か執着しきっているような、それだけの為にやっているような……あーダメだ、説明しきれないや。そんなことを考えてても仕方ない、今は儀式に集中しないと。

「うーん……」

「どうしましたヒナさん?」

「なんかるんつてこないんだよねー、なんでかなー?」

るん?つまりどういふことだ?

「とりあえず詠唱続けてみるよー」

やばい、なんか本当に嫌な予感しかしない。ヒナさんの予感は大抵当たるから本当に嫌なことが起きる気がするのだ。

「うーん……………これは……………」

「どうしました?」

「レックウザとアクセスできないや、多分眠ってないね。なにか……別のことしてるよ。」

「「ええ!」」

ま さ か の 別 件

「そ、そんな……………」

私のがくりと膝から崩れ落ちた。レックウザを呼ぶことができない、それはつまり、最後の希望が潰えたことになる。こうなってしまう以上迎える結末はただ一つ、世界の滅亡だ。打つ手は打った、皆が一丸となり、できることは全てやった。しかし、すべて無駄だった、結局運命を変えることなど不可能だったのだ。こんな簡単に終わってしまったっていいのだろうか……………」

「……………あー、なるほどねー。だからレックウザ来なかったんだー。これはこれで少しるんって来るかもねー。」

ヒナさんは少し苦笑いを浮かべながら天を仰いだ。何かに気がついたようだが、どうせ結末は変わらない。無駄なことだ。

『プルルルルルル!!』

すると、突然ポケットから携帯の着信音が鳴った。助手のアライからだった。

「……………どうした?」

『……………アラキさん大変です!!今すぐ戻ってきて下さい!!』

「……………儀式は失敗した。もうどうしようもないだろう。」

『いいから!!』ブツツ……

いつも冷静なアライがここまで慌てているところを見るとまた一大事らしい。わたしは大急ぎでトクサネ宇宙センターまで戻るこ

にした。

「どうしたアライ!!」

私は観測室の扉を強く押し開けた。そこにはたくさんの研究員とその中心に助手のアライがいた。

「アラキさん!!これを!!」

アライはたくさんある中の一つのレーダーを指差す。そこには驚くべき光景が映っていた。

「なんだ……これは!!」

二つの巨大なエネルギーがぶつかりあいながらどんどん上昇していつているのだ。

「うーんそうだねー、これはレックウザと……ガブリアスかな?」

「うおっ!」

突然声が聞こえて振り向くとそこには流星の民であるヒナがいた。

「レックウザだと!?それは本当なのか!」

「多分間違いないよ。だってレックウザとアクセス出来なかったし。一瞬ipアドレスを間違えたのかなーって思ったんだけど、間違っくなかったし、回線も良好だった。おねーちゃんでも多分出来なかったと思う。……これはあのレックウザ多分……されてるなー。」

「アラキさん!!二つの巨大なエネルギーは大気圏を突破!ぶつかり合いなからそのまま隕石の方へ向かってます!!」

「なに!?今すぐ人工衛星の方のカメラに切り替えるんだ!!」

「はいっ!!」

大気圏を突破したと聞いて急いで人工衛星の方にカメラを切り替えさせた。

そこに映っていたのは楽しそうに笑いながらぶつかり合う人型のガブリアスとレックウザだった。

「隕石との距離、50メートルを切りました!!」

本人らは気づいていないが間違いなく隕石との距離を詰めていつている。しかも、発せられるエネルギーは我々が放とうとしていたミサイルの威力をはるかに超越していたのだ。

「衝突します!!」

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

耳の鼓膜を突き破るような爆音が響き、カメラの画像が乱れる。少し経って目を開けるとそこには驚きの光景が映されていた。

「隕石が……なくな……った……!?」

そう、戻った映像を見たのだが、先ほどまでであった隕石が消滅していたのだ。

この光景は我々を一つの結論へと至らせた。

「助かったのか……!?助かった!!!助かったぞおお!!!」

『わあああああああああ
!!!!!!!』

周りの人達も喜び、狂喜乱舞した。そう、助かったのだ。地球はあの2匹のポケモンにより救われたのである。皆喜んでいてそれどころではなかったが、私は一つ異変に気がついた。

レーダーに地球のものとは思えない全く別のエネルギーの跡らしきものを発見したのだ。そのエネルギーの跡を元にそこから辿っていくと何故かは知らないがミナモシテイのとあるアパートの一角につながっていた。そして、脅威が去った今、私の研究者魂に再び火がついた瞬間でもあった。

よし、そこに行こう！

私は決意し、すぐにミナモシテイに向かう準備にとりかかった。

「……………か。」

エネルギーを辿ったところ最終的にここ、ミナモの古いアパートの一室にたどり着いた。

『びんぽーん』

私は恐る恐るインターホンを押した、もしかしたらここに住んでいるのはとんでもないバケモノかもしれない。正直恐怖でいっぱいだった。しかし、1ミリでも好奇心、探究心があるなら別だ。無理をしてもそれを知る必要がある、と私は思うのだ。

『はい』

奥から声が聞こえた。……………ん？男の声か？

そして、ゆっくりと扉が開いた。

「…えっと、その、どちら様でしょうか？」

出てきたのは見た感じ12、3才くらいの子供だった。一瞬場所を間違えたのかと思ってしまったが、エネルギーは間違いなくこの部屋から出ている、しかもすごく近い。

「私はトクサネ宇宙センターの局長を務めております、アラキという

者です。」

わたしはとりあえず自己紹介をした。怪しまれて扉を閉められては話にならない。

「あつ、はい。で、その宇宙センターのトップが僕に何の用ですかね？」

少年は明らかにこの状況を飲み込めていないようだ。もしかしたら隠しているのかもしれない。それならいつそ……

「単刀直入に言います。アナタ、宇宙から来たポケモンを持っていますよね？」

「え？」

私はいきなり答えを迫ることにした。誤魔化されても困る、そういう時は一気に答えに迫るのが一番なのだ。明らかに彼は困惑している。

その時だった。

「…ツ!？」

突然、背筋も凍る絶対零度のようなそんな時寒気に襲われた。そして、彼の方を見ると彼の後ろに隠れるようにしながらも私のことを今にも殺さんとばかりの殺気を放ちながら私を睨みつけている少女の姿があった。

彼女の容姿は少し特殊で、オレンジ色の髪をしているのだが、そこからオレンジと青色の髪がツインテールのように伸びているのだ。その髪はゆらゆらと不規則にうごめいており、まるで触手のようだった。そして、何よりも驚いたのはこんなに幼いのに放つ殺気が凄まじく、近付けば殺すぞと言っているようだったのだ。

「……さん？……アラキさん？」

彼の呼ぶ声に私はハッと正気に戻った。

「大丈夫ですか？ 顔色が悪そうですね。」

「…あ、ああ、大丈夫だ。」

彼女の殺気が治まることは無いが何とか正気を保っていた。彼女はこの間も彼の服の裾を掴みながら私を睨みつけていた。

「……そうですね。ここで話すのもアレですし、どうぞ中にお入りください……あ、ちよつと待っていてくださいね？ 片してくるんで。」

そう言つて彼はまた、中に戻つていった。

俺は一旦リビングに戻ることにした。

「いやあ、やっぱりリークされてるよなあ。」

『……はると？』

デオキシスは心配そうに俺のことを見ていた。

「多分、デオキシスのことが気になったんだろうなあ、宇宙センターから来てるあたり間違いなさそうだ。」

『なんで？』

「やっぱ、宇宙から来たポケモンであるお前のことが気になったんだと思うよ？」

『……やだ……！ はるとにならなにされてもいいけど、ほかのやつらにすきにされるのはいやだ……！』

デオキシスは震えながら俺に縋るように抱きついて来た。てか、俺になら何されてもいいのね。

「よつと……、大丈夫だ。絶対お前を守るからな。誰にも渡さないよ。」

デオキシスを抱っこしてあげて優しく頭を撫でてあげた。

『はるとお……！』

安心したのか俺の胸に顔を埋めてきた。しかも、ツインテール状になっているオレンジと青の髪が触手のようにして俺の身体に巻きついてきた。

『えへへ……これで、ずっといっしょだね……！』

「お、おう……そうだな。」

とりあえず、手持ちのやつら＋αをどうにかしないとね。

「おーい、お前らーとシロナさーん。これからちよつと会合があるから全員俺の部屋にいてください。ちなみにこの大人数を部屋にねじ込むわけだからきつと窮屈に感じるでしょう。はい、嫌ならボールに入ってください。ボールが嫌なら我慢してください。ちなみに絶対部屋から出てきちゃダメです。出てきたら罰を与えます。」

「マスターからの罰……おしおき……！」ゴクリ

「そこ、嬉しそうな顔するな。因みに罰の内容は一週間の間、お前らをパソコンに預けることだからな、嫌ならちゃんと我慢しているように！わかったな！」

「えっ、じゃあ私は？」

シロナさんがひよこつと顔を出した。

「シロナさんはメシ抜きです。ちなみに期限は俺の気分次第なので。」

「あつ、はい。守りますー！」

「よろしい、そんなじゃお客さん中に入れるから絶対余計なことするなよっ。」

「「はーん」」

「すみません、お待たせしました。どうぞ中へ。」

五分ほどして彼は戻ってきた。しかし、私はその光景にとっても驚かされてしまった。

そう、先程も一緒にいた少女、なんと髪の毛がホンモノの触手のように彼の腰に巻きついていたので。そして、彼の後ろに隠れて服の裾を掴んだまま、初めと同じように私のことを睨みつけているのだ。

「そ、その子は……!!」

「ま、まあ、このことも含めて話しますから……、さあ、どうぞどうぞ。」

私は恐る恐る家の中へ踏み込んで行った。しかし、中は意外と普通でソファにテレビとどこにでもあるような普通のリビングだった。

「どうぞ、こちらにお掛けください。」

彼が案内したのは家族と一緒に食べる時に使うようなそんなダイニングテーブルだった。私は取りあえず席に座った。彼はキツチンの方に歩いて行った。私を睨みつけていた子も彼の服を掴んだまま一緒にキツチンへ向かう。見たところものすごく彼に懐いているようだった。彼に撫でられたりするととても嬉しそうな表情を浮かべて密着するのだ。私は彼女が人間ではないと確信している。リーダーが彼女に沿うように動いているのだ。そして、髪が触手のように自由自在に動いているあたり間違いないだろう。

「粗茶ですがどうぞ。」

彼はそう言ってお茶を差し出した。

「どうも。」

私は一口お茶を啜った。……美味しい。というか、奥にある扉の隙間からとんでもない視線を感じるのは気のせいということにしておう。

「で、貴方はこの子を求めて僕の家まで来たんですね？」

彼はいきなり本題に切り出してきた。

「はい、本来なら今日私はここにいないことすらなかったでしょう。」

「と、いいいますと？」

「この地球は滅んでいるはずなのです。」

「……………」

彼は黙り込む。何か知っているようだった。

「隕石がこの地球に衝突して真つ二つ、滅ぶ運命だったはずなのです。私たちも打つ手を打って必死に抗おうとしました。でも、どうにもならなかった、最後の手段として流星の民の儀式のもと、レックウザを呼び出し、隕石を壊す予定でした。しかし、呼びだすことも叶わなかった。……私は諦めていました。」

「研究者である貴方がそんな迷信的なことを信じたんですね。」

うつ……………この少年、何気に痛いところを突いてくる。

「もう、それに頼るしか術はなかったんですよ。……話を戻します、その時二つのエネルギーがぶつかり合いながら隕石の方に向かい、そして、隕石を木っ端微塵にしてしまったのです。」

「……………」
少年はすごく深刻そうな表情をして黙り込んでいた。その瞬間彼が何かをしたのは間違いないと確信した。

「……………どうしました？」

「いや、その……………多分、うちの……………ガブリアスがやっちゃったのかなーと……………」

彼は苦笑いを浮かべながらそう言った。

「へ？」

「そ、そのー、レックウザとの戦闘に夢中になってて周りが見えてなかったらしいんですよ。気がついたらどかーんって壊してたらしい

です。で、この子、『デオキシス』はその隕石の副産物みたいなものです。」

彼の膝の上に座っている少女、その子もやっぱりポケモンだったのだ。しかも私が探し求めていた宇宙から来たポケモンだったのだ！私の好奇心のレベルは最高潮に達しようとしていた。

「……多分アラキさん、この子を研究か何かに使おう！とか考えてると思うんですよ。」

ぎくっ！

「でもね、見たとおりこの子、俺から離れてくれないんですよ。今もこうして俺の膝の上に座ってますけど、実は彼女の髪（しよくしゆ）の毛が腰のところに巻きついてるんですよ。」

私はハツとなって彼を注視してみると水色と赤色の触手が彼のお腹あたりから腰にかけて巻きついていたのだ。

「トイレやお風呂まで一緒について来ちゃうから、多分アラキさんの研究材料にはなってくれないですよ。仮に強引に連れて行つたとして、損をするのはあなた方になるかと思えます。」

「……ッー……といいますと？」

「多分、トクサネ宇宙センター消えますよ？そして、また俺のところに戻ってきます。」

消える。

その一言で一気に私の背筋が凍るように震えた。デオキシスに関しては諦めるしかないと思わされてしまった。その時点で私の負けなのだろう。

「……そうですね。彼女は貴方にとっても懐いているようだ。宇宙から来たとはいえポケモン、貴方から離すなんて無理な話ですよね。」
彼も微笑み、

「わかってもらえて嬉しい限りです。」

「そういえばなんでお宅のガブリアスとあのレックウザは戦ってたんですか?」

すると、彼は目をそらし

「……知らないです。」

「……そ、そうですか……。」

なにか話せないような事情があるのは目に見えてわかった。でも、ここで無理やり聞き出すのもやっぱり最低だ。「ただいまー!!」……えっ?

「あっ、やべ。」

玄関の方から二人ほど家に入ってきたようだ。

「いやあ、やっぱり強いっすねヤヨイさん最近自分が負けることの方が多くなって来ましたよ!」

「そんなことないよ! 殆ど互角だったし、レックウザもあの一撃が決まったら多分負けてたしね!」

「……は? レックウザ?」

今レックウザって言ったよね?

なんでいるの?」

え?」

なんで???)

そして、バツと彼の方を見ると、彼は明後日の方向を向いてただの

呼吸と化した口笛を吹いていた。顔が青ざめているあたり何かありそうな様子だった。

「な、なんでレックウザがここに来たんですかね…?」

「あつ、えーつとお…」

「そんなの決まってるじゃないすか!!」

そう言っつてレックウザは彼の右腕に抱きついて言った。

「この人は私の『おとうさん』だからっすよ、娘がお義父さんのところに帰ってくるのは当たり前でしょう?」

「えっ!?!」

「ちよw」

「義理だけどねー。」

ガブリアスも彼の左腕に抱きついて頬ずりをしていた。表情はかなり緩くなつており、気持ち良さそうだ。

「んう……♡戦うのもいいけどやっぱりお父さんと居るのが一番だよねー、お父さんの匂い大好き……/ /」

「私もツスよお……/ /」

「コホン……、今までのことは全部忘れてください。」

「えっ?」

「忘れてください。」

「いや、その……」

「忘れろ。」

「アツハイ。」

とりあえず整理すると、彼、ハルト君はなんと既にレックウザを捕まえていたのだ。しかも、レックウザの方からボールに入ってきたというのだ。事情はよくわからないがすごく懐かれているのは目に見えてわかる。

「……………」ギユウウウウ……………」

「待ってデオキシス、痛い痛い痛い痛い！」

ムスツとした表情をしたデオキシスが彼の胸に強く抱きついているのだ。妬いているのだとしたら中々可愛いと思った。

「ふう、とりあえずありがとうございました。わざわざ話に応じてくださって。話を聞けただけでもいい経験になりました。」

「……………そうですか、なら良かったです。また、良ければお話ししましょう。」

私は玄関で軽く挨拶をし、ミナモシテイを後にした。

さてさて、宇宙にはまだまだ知らないことがいっぱいあるようだ。その未知の神秘について考えるとワクワクしてくるものだ。よし、また研究を再開しよう。

「……………よし、帰ったな。」

俺は挨拶をして出て行ったのを確認した。

「おーい、もう出てきていいぞー。」

ボタン!!!ドタドタドタ!!!

ドアが強く押し開けられた音、そして、騒がしくこちらの方に来る足音……俺は自然と警戒態勢に移行する……。

「マスター!!」

「ハルト……!!」

「ハルトさん……!!」

「ご主人様!!」

正面からはメア、左右はカイオーガとグラードンに固められ、後ろからはとてつもない柔らかさとともにアオイから抱きしめられた。

「なっ!?お前らどうしたいきなり!？」

「そりゃあ、マスターの成分を補給するためですよ。」

メアがさも当然かのように答える。てか、なんだよ、俺の成分って。……ハルトに定期的にぎゅーってして成分を補給しないと、苦しくておかしくなってしまうようになるの。」

と顔を埋めるカイオーガ。

「そ、その、なんだか最近ずつとハルトさんのことばかり考えてるように……その、なっっちゃって……えへへ／＼／」

頬を赤らめてニヤつきながら腕に抱きつくグラードン。

「普段は自重してあげてるんだから今回くらいはいいですよね?ご主人様♪」

むにゆりとマシユマロのように形を変える双丘を俺の背中に押し付けて抱きつくアオイ。

四方から完全に押さえられ、女の子特有の甘いクラクラするような匂いに包まれたまま、リビングへと連れていかれたのだった。

ミナモシテイ砂浜付近にて

「さて、帰ったらとりあえずレックウザの話でも聞かせてやるかな。」

私は帰るためにエアームドを出そうとした瞬間だった。

「ちよつと待つつす。」

後ろから女性の声が聞こえ、呼び止められたのだと気づいた私は振り向いた。

「なに……か……ね……」

私は目を見開いた。

「レ、レックウザ……！、」

そこにいたのは、さつきまで彼の家にいたはずのレックウザだった。にこやかな笑みを浮かべてはいるが瞳は暗かった。それが余計に私の恐怖を駆り立てる。

「いやあ、ちよつと忠告をしておこうと思いましたがね。」

「ち、忠告……？」

「さつきのお義父さんと話してた内容に関しては口外は禁止です。」

「ッ!!」

釘を刺されてしまった。デオキシスやレックウザのことに關しては素晴らしい研究材料でもあり、いい話題でもあると思っていたのだが、本人直々に忠告されるとは……！

「もし、これを破ることがあつたら……」

ホウエンを消しとばす

からな。」

「な……………!?!」

消し飛ばす。彼女は間違いなくそう言った。彼女の瞳はまっすぐと私を射抜く、冗談なんかじゃない、そう確信した、いや、確信させられてしまったのだ。

「で、でも!!あなた一人じゃホ、ホウエンを消すなんて、そんな……………! そんなことができるはずない!!」

そう、レックウザ一匹になにができるというのか、全てを海に沈めようとしたカイオーガや水を枯らして全て陸に変えてしまうグラードンならあり得るのかもしれないが。

「……………おい、私を一体誰だと思ってるんだ?」

レックウザから凄まじい殺気が放たれる、思わず意識が飛んでしまったようになった。

「あの隕石を壊したんだぞ?その力を使えばホウエンを更地にするにとくらいわけではないさ。いや、あんな石ところ、ヤヨイさんなら小指で受け止めてしまうだろうがな。……………それに。」

「カイオーガもグラードンも既にあの人のモノだ。」

……………は?」

今なにを言ったのか一瞬わからなかった。

グラードンもカイオーガも彼のモノ……………だ……………と……………?

「あの時カイオーガと協力してグラードンを止めたのもそうだ。お前からニンゲンはホウエンを守るために戦ってくれたとか勝手に思い込

んでいるようだが………そんなわけないだろ。あの時、ひでりの所為でお義父さんは倒れていたんだ。このままこの状態が続けば死んでしまうかもしれない………そう思ったからグラードンを止めた。………それだけだ。別にお義父さんの故郷はシンオウだからホウエンが消えても問題はないはずだ………いや、あのアパートが無くなったら悲しむかもしれない………移動させればいいか。」

「何故だ………何故あんななんの変哲もない普通の人間にそこまで執着するんだ………!?!」

そう、伝説とも呼ばれるポケモンがなんであんなどこにでもいるような人間、しかも子供に尽くせるのか。全く理解ができなかったのだ。

「あの人は私の全てだからだ。お前らニンゲンにはわかるわけない。ハルトさんニンゲンからは恐れられ、ましてや同じ種族であるはずのポケモンにさえ畏怖され、避けられていた私の気持ちを………!カイオーガもグラードンも同じ孤独を抱えているんだ。ヤヨイさん、アオイさん、ラティアスさん、そしてメアさんも形は違えど様々な孤独を抱えて生きていた。………でも、ハルトさんは違う。あの人は私たちの全てを受け入れ、それでもなお、私たちのことを他の人たちと変わらないように扱ってくれて、愛してくれた。だから、私たちはあの人のことを世界で一番愛しているし、あの人の為ならどんなことでもする、たとえそれが世界を滅ぼすことであろうとな。」

そう力強く言い放ったレックウザの光のない黄色い瞳には彼の姿しか映していないように見えた。

あれから更に月日は流れ、気づけばもう半年も経っていた。

「………シロナさんっていつ帰るんですか?もう居候して半年過ぎまし

たけど。」

そう、旅行という名目のもと、ハウエンに来たはずなのに既に半年以上経ってしまっているのだ。ちなみにシロナさんの携帯の着信履歴を覗いたことがあるのだが、なんとポケモンリーグの方から100件を超えるほどの電話がかかってきていた。

「最近チャンピオンなんてどうでもよくなって来てるのよね。こうして貴方と一緒にいる、それだけで幸せなの。」

「……じゃあ僕がシンオウに帰ったら貴女もリーグに戻ってくれますかね?」

「もちろんよ。私はあなたについて行くから。」

そう、いい加減ほとぼりも冷めている頃だろうし、ちよつとハウエンでも怪しい雰囲気になってきてるからとつと出て行った方がいい気がしたのだ。

「よし、シンオウに帰るか! (唐突)」

「はい!」

「うん!」

「はい!」

「かしこまりました!」

「…わかった…!」

「はいっす!」

「は、はい!」

…うーん、返事の数か2倍くらいになってる気がするんだが……。

「えっ、カイオーガとグラードンとレックウザも来るの?」

デオキシスは責任持って育てて上げないといけないから連れてくとして流石にハウエンの伝説のポケモンを連れて行くのは気がひける部分もあるんだが…。

「……? ついてくるのおかしい?」

3人とも心底疑問そうな表情で首をかしげていた。

「わ、わたしはもう、ハルトさんの、そ、そのポケモンモですから……、ハルトさんに捨てられたら……わ、わたしは一体どうしたら……!」

光のない怯えるような瞳は間違いなく俺に向けられていた。しかも三人ともからだ。

「……ハルトのいない世界なんて考えられない。」

「ハルトさんとヤヨイさんさえいれば、私は他がどうなろうと関係ないっすから……。」

「……はあ、わかったよ。おまえらもシンオウについて来なさい。」

「「やったあ!!」」

なんでこんなに彼女らを執着させてしまったのか正直よくわからないが、責任は取らなければならぬ、だから連れて行くことにした……つてことにしておこう。てか、そうだよね???

こうして俺はたくさんの仲間を引き連れ、一年ぶりにシンオウに帰ることとなったのであった。

第22話 帰還

「ただいまー」

俺は玄関の扉をゆっくりと開けた。

そう、およそ一年ぶりに我が家へ帰って来たのだ。

「おかえりなさい。」

そして、奥から出て来たのは懐かしく、見覚えのある顔、そう、母さんだ。

「ハルト……大きくなったわね……」

「うん、確かに背は伸びたかな…、ちょうど成長期なのかもしれないね。」

「向こうでポケモン捕まえたりしたの？」

「……ッ！」

ギクリ

「う、うん、まあ、ぼちぼちかなあ……あつははは……」

「捕まえてるのね、それじゃあ見せてちょうだい？」

ギクツ!!

「そ、そうだなあ……」

やっぱり見せないといけませんよー!!さてさてどうしたものか、流石にグラードンやカイオーガを見せたら度肝抜かしてしまいそうだし……ここは無難にコイツかな……。

「出てこい！アオイ！」

俺はボールを宙へ投げた。ボールが開き、中から出て来たのは真っ白な身体に水色の眉から伸びた髪、そして金色の綺麗な尾びれを持つ、真正正銘のポケモンの姿のミロカロスだった。その堂々としていて、それでも美しい佇まい、人の姿でも、ポケモンの姿でも魅了される、いつくしみポケモンとしても名に恥じないそんな彼女の主としてここまで誇らしく思えたことはないだろう。

「まあ……ミロカロスを生で見るのは初めてだけどやっぱり綺麗なのね……！」

母さんも思わず目を見開いた。

「うん、そうd、いだだだだだだだ!!待って待って、痛い痛い痛い痛い痛い痛い!!!巻きつかないで死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ!!!」

そう、いくらポケモンの姿をしていようと中身はあのアオイなのだ。当然過剰なボディタッチもしてくる。しかし、人の姿をしている時よりかは遥かにタチが悪い。頬ずりしてくるところまではいい、まだ可愛らしくて許せる、しかしそれ以外の全ての行動が完全にヤバいのだ。まず、とんでもない力で俺の体に巻きついているところだ。てか、もう完全に殺しにかかっているよね?人の姿をしているときは抱きつかれてもせいぜい胸の柔らかい感触で理性が飛びそうになるだけで済むのだが、ポケモンの姿だと意識どころかこの世から飛ばされてしまいそうになる。つまり、命が危うくなるのだ。

「あら、その子すごくハルトに懐いてるのね、ふふっ♪」

「あの、死にそうなので助けてください。」

すると、突然目の前が光で包まれ、眩しさを思わず目をつむった。すると、さつきまでの締め付けられるような苦しい感覚はなくなり、その代わり、とつても身に覚えのあるあの柔らかい感覚が何故か俺の顔にあった。

「むぐっ?!?むぐぐぐ……ッ!!?」

「あんっ……♡ご主人様の吐息が……♡」

てかなんで人の姿に戻ってんだよ。ポケモンの姿でいろと指示したはずなんだが?

「アオイ、私のマスターになにしてんですか。」

すかさずメアが止めに入った。

「ご主人様は私を選んだんですよ、ハズレはとつと戻ってください。」

「別にお母様とはもう知り合ってるから私はハズレって訳じゃないです。やり過ぎだって言ってるんですよ。マスターに巻きつくなんて、殺す気ですか？」

「だから、途中でヒトの形になったじゃないですか。」

「マスターと約束したでしょ、ポケモンの姿でいるって。それにその憎たらしい脂肪の塊をマスターに押し当てるのをやめろ。」

「あるときご主人様に救われた瞬間からこの身体はご主人様のモノなんです。必死に努力を積み重ね、今のこの姿、『ミロカロス』になったのも、料理を勉強しご主人様のお口に合うような料理を作れるようになったのも、家事を全てこなせるように頑張ったのも全てご主人様のため。ご主人様にならこの身体をどんな風にされても構わない、ご主人様が一つになりたいと申せば、喜んでこの身体を捧げるつもりですから。」

「そんなの私も同じですよ。マスターになら何されてもいいです。」

「お前ら、聞いててこっちが恥ずかしくなるからそろそろやめてくれないかな？」

「ハルト、そのミロカロスつてもしかして人型なの？」

「ん、ああ、そうだよ。なんか進化させたらヒトの形になった。」

「やっぱり、ミロカロスなのね……ヒトの形をしても美しいわ。」

「お母様にも褒めていただけるなんて、嬉しい限りです。」

「で、そのメイド服はなに？ハルトの趣味なの？」

「んなわけあるかい。アオイが勝手に着てたんだよ。」

前世には一応都市部に行けばメイド喫茶なるものがあつたらしいがあいにくど田舎に住んでた俺には縁遠いものだった。だから断じてメイドに興味はない！

「私はご主人様に命を助けてもらいました。だから、私はご主人様に一生お仕えすると決意したのです。」

「まあ、ミロカロスに進化したのは間違いなくお前の努力の成果だけだな、俺は何もしてないさ。」

「ご主人様が私の生きる理由になってくれました。だから、頑張れたんです。ここまで成長出来たんです。今もこうしてご主人様のそばにいらることが出来る、それだけで十分幸せなんです。全てご主人様のおかげですよ。」

アオイはそつと俺の肩に寄り添ってきた。そして、耳元で囁く。

「……だから、いつでも私を襲っていいんですよ？その為の私の身体なのですから♡」

「おいやめろ。」

わざと胸が変形するように俺の腕に押し付けてくるアオイ。本当にシヤレにならないからやめてほしい。

「むー、私だってマスターの為に胸が大きくなるように頑張ったんですからねっ！」

メアも負けじと反対側から抱きついてくる。別にアオイが極端なだけであつてメアも人並みにはあるんだからな？

『はると……っ？』

突然脳内に語りかけてくるような幼い声、彼女だ。

振り向くと、むすつと頬を膨らませたデオキシスがいた。いつのまにボールから出てきたんだよこの子……。そして何を思ったのか、背後から抱きついてきたのだ。背が低いので腰あたりになるのだが、それでも柔らかい感触は免れない。

『わたしだつて……まけないから。』

いやいやいや！そんな対抗心いらさないから!!

「あら、この子はっ？小さくて可愛いわね……っ！」

「んう……／＼／＼」

母さんがデオキシスを抱きかかえて優しく撫でている。てか、母さんにならいいのね。

「デオキシスって言うんだ、宇宙から来たポケモンらしいよ。」

『……っ？わたしははるとのこともだよっ？』

デオキシスが不思議そうに首を傾げている。

「へえ、この子もポケモンなのね。あなたの周りって変わったポケモンが多いわよねえ。みんな人型だし。」

ははは、実はレックウザやカイオーガ達もいるだなんて口が裂けても言えねえや。

あの後には久しぶりに家族で夕飯を食べた。結局、我慢できなかったレックウザやカイオーガたちが出てきちゃってどうなることかと思っただが、母さんや父さんはあまりポケモンに詳しくなかったことが幸いして、あまり騒動にはならずにすんだ。そして、気づけばもう寝る時間になっており、俺は一年ぶりの自分の部屋で寝ることになった。船での長旅で疲れたのを察してくれたのか、俺のポケモン達はみんなボールの中に戻ってくれた。久しぶりに俺は、ひとりで寝ることができたのだ。

「……………んあ……………」

何故か目が覚めた。部屋は真っ暗でまだ夜は明けていないようだ。起きてしまった原因は不明かと思っただが、とてつもない尿意が俺を襲った。眠気で半分ぼーっとしながらも早足でトイレに向かった。

「ふいー……………スッキリした。ふああ……………きて、寝ますかね。」

用を足してスッキリした俺は部屋に戻り、扉を開けた瞬間だった。

「……………すうー…んん…はると…、はるとお…！」

さつきまでトイレに行っていて誰もいないはずの俺のベッドの上で誰かが俺の枕に顔を埋めていたのだ。

「……………誰だ？」

部屋が暗くて顔がよく見えない、でも、どこか聞き覚えのある声だった。

「……………ハルト？」

その影は俺に気づいて振り向いた、黄金の瞳に水色の髪、灰色のパーカー、間違いない、『彼女』だ。

「ソラ…なのか？」

俺が驚いたのはソラが酷くやつれていたことだった。目元に隈ができており、一年前に別れたときよりもかなり痩せているように見えたのだ。

「ハルト…？…本当にハルトなの…?!？」

「ほ、本物って…？…ソラ一体何があったんだ…？」

「はると…ツ!!本物だ…!本物のハルトの匂いだあ…！」

ソラは俺の胸に顔を埋める。その力はさつきまでの弱々しきとは違い、力強いものだった。

「お前、そんなにやつれて…、この一年何があったんだ？」

ソラは虚ろな目をして言った。

「……………地獄だった。」

「え？」

「一年前、ボクはああやってハルトと離れることを受け入れたはず

だった。……でも、ボクが思っている以上にボクの身体は正直だったみたいなんだ。」

ソラは再びハルトを抱きしめ、顔を俺の胸に押し付けた。そして、深く空気を吸い上げた。

「はあ……♡ハルトの匂い……一度嗅ぐだけでボクの身体が快樂で満たされていくのがわかるよ……♡」

ソラは頬を赤らめ蕩けた表情をしていた。

「…ボクはハルトがホウエンに行ってしまった後、リッシ湖にいたんだ。約束もしてたしね。最初のうちはどうもなかったんだよ。守護者として悪い者は追い払って、ポケモンたちを守ってた。……でもね、ある程度日にちが経つとすぐにおかしくなり始めたんだ。だんだん無意識にハルトのことを考え始めたんだ。……たしかに考え始めたとは言ってもどうもなかった時もハルトのことは考えていたさ、でもね、違うんだ。頭の片隅に置いてたハルトのこと、それが段々と大きくなってきて気づけばいつでもハルトのことが頭に浮かんでしまふんだ。思い浮かべるたびに『ハルトに会いたい』って思っちゃうんだよ。3日も経つた頃には湖と守護どころではなくなっていたんだ。何も考えられない…ハルトのことしか考えられなくなってたんだ。それからかな……、だんだん感覚も変になり始めたんだよ。何を食べても美味しくない、いやそもそも食欲が湧かないと言った方が正しいかな、空腹感も無いんだ。でもハルトのことを考えるだけで身体は疼くんだ。いくら慰めても全然収まらないし、どんどん強くなるばかりさ。……半年くらいかな、ハルトが居なくなつて半年くらい経つたころだ、とうとうボクはハルトの幻覚が見えるようになってしまったんだ。最初はそれに気づかなくて飛びついたんだ。でも、すり抜けちゃう、何をしようとしてもハルトの幻覚が現れるんだ。ボクはそれにすぐるように何度も捕まえようとした、抱きしめようとした、触ろうとしたんだ。……そんな当てのない地獄のような日々が一年も続いたんだよ?」

ソラは自嘲するように苦笑いを浮かべたがその表情はどこか暗く、寂しそうだつた。

「……………そして、今日ハルトが帰って来てくれた。第六感ってやつなのかな？今朝なんとなく、なんとなくだけどハルトが帰ってきたってことにボクの身体が反応したみたいなんだ。最初はこの感覚の正体がわからなかったよ、ほとんど動かないくらいまでボクの身体は衰弱してるはずなのにうずうずして、動かそうとしてるんだもん。気付けばボクはミオシティにいたんだ。どうやって移動したかはわからない。意識が戻った頃には夜だったし、もしかしたら這いずるようになって来たのかもしれないね。」

ソラはくすつと軽く笑った。俺はそれを見て少し不気味に感じてしまった。

「まず、ハルトの匂いが濃くなってたんだ。ハルトがハウエンに行つてから何回もミオを訪れてただけど、日に日に匂いが薄くなって行つてたし、洗濯されて匂いが消えた時は絶望したね。ハルトの匂いで家にいるのはわかったよ、夜中だったし、二階の窓から入ったんだけど、ボクがハルトの部屋に入った瞬間、急に頭がくらつとして身体力が抜けちゃったんだ。飛んでただけで体に力が入らないからハルトのベッドの上に落ちちゃったんだけど、そのときはもつとすごかったよ、急に頭の中が真っ白になっちゃってさ、意識が飛びそうになったんだ。……………そう、いつちゃったんだよね、えへへ……………」

「ハルトの周りにもハルトのことが好きなポケモンが沢山いるから独占しようだなんて思わない。でも、ハルトの側に居させてほしいんだ。」

ソラの抱きつく力は強まっていく。

「ボク……………この一年で間違いなくハルトがいないと生きていけない身体になっちゃった。ごめん、約束守れそうにないや。リツシ湖を護らないといけないのに……………」

虚ろな目でこちらを見てくる。ほおは真っ赤で息が荒かった。

「だからさ……………ハル……………んあッ!……………ひ……………あ……………ツ……………ああ……………ん……………ツ……………」

「ソラ!？」

突然ソラの身体がガクガクと痙攣しだしたかと思ったら、力が抜けたように俺の体に寄りかかる。ソラの顔は真っ赤で熱を帯びていた。「はあ……はあ……、ごめ……ん……はると……♡……ぼく、また………イツ………ちや………」

そのままソラは流石に寝息をたて始めた。どうやら眠ってしまったようだ。

「……まさか、ここまでとは思わなかったな……。」

俺は驚きを隠せずにいた。ソラがこの一年だけでここまで変わり果ててしまっていたことに、俺の思っていた状態をはるかに超えて来っていたのだ。

「ん……んん？」

眩しい光が俺の意識を覚醒させる。

「もう朝か……。」

いつのまにか寝ていたらしく、気づけばもう朝になっていた。

「おはようございませすマスター。」

体を起こすとそこにいたのはメアだった。

「……ああ、おはようメア。」

「朝ごはん出来てますよー！下に降りましょうー！」

「おっけ。すぐ降りるよ。」

階段を下り、リビングに出るとアオイが朝食をテーブルに並べていた。

「おはようアオイ。」

「おはようございますご主人様♪今日はご主人様が好きなベーコンエッグにしましたよ♪」

焼き加減や半熟の卵の状態……たしかに俺好みだ。好きだなんて言った記憶ないけど。

「おはようハルト。」

すると、ソラも俺のところに来てくれる。昨日のような状態ではなく、幾分か調子も良さそうだった。

「おはようソラ。」

「あの……、昨夜はごめんね。変だったでしょ？」

「いいよ、別に気にしてないから。一年も離れてた俺が悪いんだし。」

そこまで末期症状がひどいとは思ってもしなかったが、それら全て含めて俺が悪いと思ってる。早く帰るべきだったな。

『ぴんぽーん』

すると、家のインターホンが鳴った。

「ん？なんだろうこんな朝っぱらから……、郵便か？」

俺は急ぎ足で玄関に向かい、扉を開ける。

「はーい。」

「おはようハルトくん。」

「は？」

そこにいたのはシロナさんだった。あれ、帰ったんじゃないの？

「なんで朝っぱらから来たんですか、てか家帰ったんじゃないの？」

「ああ…、今はちよつとミオの図書館の部屋を借りてるのよ。」

そっか…、考古学の方にも興味あるって言ってたしな。だから、住み込みで調べ物してるのか、納得。

「なるほど、で、なんで俺の家来たんですか？」

「え？理由がなかったら来ちゃダメなの？」

シロナさんは首をかしげる。

「…いや、そんなことないですけど。」

「なら、毎日来るわね♪」

「…あんま目立たないようにしてくださいよ？もうしばらくはハウエンに逃亡なんてしたくないんで。」

「わかってるわよ。ハルトくと毎日会うためにミオに住み込んでるんだし♪」

「ん？」

「なんでもないわ♪」

シロナさんは嬉しそうに微笑みながら俺の家に入って行った。

「はあ……、はあ……。」

ボクはおぼつかない足取りでなんとかトイレまでやって来て、個室に入り鍵を閉めた後、へなへなど地面にへたり込む。

「……身体が……熱いよ……。」

そう、ハルトがリビングに入ってきたときから身体が熱くて仕方ないのだ。

昨晚でハルトに会えて満たされたと思っていたのに、全然そんなことなかった。なんとかハルトがいる間は平静を装ったが、ハルトの匂いがボクを発情させてしまっているのはすぐにわかった。少しでも気をぬくとハルトのことを襲ってしまいそうになっただけくらいだ。

「……んっ♡」

下着の不快感から濡れてしまっているのがわかる。

「また、履き替えないと……、でも、その前に……。」

ボクはこの熱い身体をなんとかかするためそこに手を伸ばした。

第23話 運命

「……いい加減、ポケモンリーグに帰ったらどうですか？シロナさん、なんやかんや言ってももう3ヶ月くらい居ますけど。」

「別にいいじゃない。四天王を勝ち抜いて私のところまで来る人なんてめったにいないんだし。」

「定期的に帰った方がいいと思いますよ。」

「別に帰らなくても大丈夫よ。私は自由でありたいの。」

いや、ずっと俺のところにいる時点である意味自由じゃないと思うんですが。

「そんなことより、ハルトくんは旅に出ようと思ったことないの？ほとぼりも冷めてるみたいだからもう大丈夫だと思うんだけど。」

「……あー、そうですね。たしかに旅に出るのもアリかもしれないです。」

俺はもう12歳だ。旅に出られるのは10歳からなので一応旅に出ることは可能ではあるんだけども。

「こいつらの管理で手一杯なんですよね……。」

そう、生憎俺の手持ちは伝説やら何やらで癖の強いポケモンばかりだ。

「すう………、すう………。」

こうして話している間もデオキシスは俺に正面から抱きつくようにしてすやすやと眠っている。触手のような長い髪は俺の服の中に忍び込み、離すまいと巻きついていてるのだ。

他にもメアはいつも俺の影の中に潜んでいて、夜になれば夢を喰わ

れるし、ラティアスはこころのしずくを通して、常に監視している。身体の一部として俺の体内に浸透してしまっているっぽいのでどうしようもないらしい。

とにかく俺への依存傾向があまりにも強すぎて旅どころじやないってというのが本音だ。

「ま、私はハルトに着いて行くだけだから………ね♪」

シロナさんにもすごく懐かれてるのが謎だが。

『〜♪』

すると、聴きなれない音楽が聴こえた。

「シロナさん携帯鳴ってますよ。」

「あ、ホントね。ゴメンね、ちよつと離席させてもらうわね。」

そう言うとシロナさんは若干急ぎ足で玄関を開けて出て行ってしまった。

しばらくするとシロナさんが戻ってきた。

「ハルトくん、ちよつと挑戦者が来そうだからポケモンリーグの方に戻るわね。」

「四天王倒したんですね、その人。」

「ええ、しかも結構やるみたいなのよ。年は10歳みたいだし。とんでもないトレーナーが現れたものね。」

トレーナーになって一年足らずでもうチャンピオンに挑むところまで来るなんて、一体どんなやつなのか少し気になるね（適当）

「頑張ってくださいね、シロナさん。」

「ええ、負けないわ。」

軽く会話を交わすとシロナさんはそのまま出て行った。

「10歳か……………、こっちの主人公くんはもうチャンピオンと戦うのか……………すごいな。」

俺はそう一言こぼし、天を仰いだ。

「……………待たせたわね。」

大急ぎでポケモンリーグの方に戻り、最深部に足を運ぶとそこには例の挑戦者がいた。

白くピンク色のモンスターボールが刺繍されたニット帽に上手くまとめられた紺色の髪、白いマフラーをしており、赤色のダウンコートを着こなし、ピンク色のブームを履いた幼い少女だった。

「……………チャンピオン、シロナ……………。……………あの人じゃないのか。」

「改めて自己紹介するわね、私はシンオウリーグチャンピオンのシロナよ。普段は、考古学者として各地のいろんなところにある古代遺跡を巡ったりしてるの。」

ま、最近ほとんど彼のところにいるんだけどね。

「あなた、今年トレーナーになったばかりでしょ？正直驚いてるの。名前を伺ってもいいかしら。」

「……………ヒカリです。」

「そう、ヒカリちゃんっていうのね。」

「馴れ馴れしく呼ばないで下さい。そんな呼び方をしてもいいのはあの
人だけです。」

……………この子すごい辛辣ね。てか、すごい視線が冷たいし。

「……………もう、正直私はチャンピオンなんてどうでもよくなりました。
あの人じゃないんですね。」

「あの人って?」

「二年前、ヨスガシティであなたに善戦していたあの人ですよ。……
あの人なら軽く貴方なんかねじ伏せてチャンピオンになつてると
思っていました。」

ハルトくんのことね……………、やっぱりほとぼりが冷めたとはいえ、記
憶に焼き付いてる人もいるみたいね。

「彼はつい最近までハウエンにいたからね。今のところ旅に出る気も
ないみたいだし。チャンピオンにはあまり興味がないようにも見え
たわよ?」

「ということは、ハウエンでポケモンコンテストで優勝してたのも
……………、あの人らしいですね。ふふつ……………」

「……………で、どうするのかしら?別に戦いたくないならそれでもいい
んだけど?」

早くハルトくんのところに戻りたいしね。ふふ……………。

「いや、せつかくですし、貴女にはこの子たちの経験値になつてもらい
ますね?」

そう言うと彼女はおもむろに懐からボールを取り出した。……………や
るみたいね。

「…………いいわ。チャンピオンとして、貴方の挑戦受けてあげます!!」

私もボールを取り出し、構えた。これほどワクワクしたのは二年前、ハルトくと戦った時以来かしら……。史上最速でこの舞台まで登りつめた彼女の實力、じつくりと見させてもらおうわ。

「…………ふふっ、秒で終わらせてあげますっ♪」

その時の彼女の不気味な笑みは私の記憶に焼きつくものとなるなんて…………

その頃の私には知る由もなかった。

「…………エルくん、きあいだまで押し切っちゃって♪」

「…………エルツ!!」

エルレイドから放たれたきあいだまはルカリオの鳩尾を正確に捉え、ルカリオは吹き飛ばされてしまう。

「ルカリオツ!!」

ものすごい速度で壁に叩きつけられたルカリオは地面に倒れ込み、ビクともしない。

「ふふっ、めいそうを極限まで積んだ状態でのきあいだまですからね、まあ、耐えられるわけがないですよ♪」

この子……………、相当強い……………!!

ポケモンのレベルもそうだが、彼女自身もポケモンの技や特性を知り尽くしていて、それを完璧に活かしたバトルをしてくる。そんなことを思っている頃には私の手持ちはもうほぼ全滅、あとはこの子だけになってしまった。

「さてさて、シロナさんの手持ちもあと一匹だけになっちゃいましたね♪……………最後の一匹は例のガブリアスでしょう?」

「そうね、かなり厳しい展開になってしまったけど……………、それでも諦めない、私にもチャンピオンとしての意地があるわ。行きなさい、ガブリアス!!」

私は最後のポケモン、『ガブリアス』を繰り出した。

「ガルアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!」

ガブちゃんの強い咆哮が鳴り響く。

「あれっ、人型じゃないんですね。あの時は人型で戦ってたのに。」

「まあね、こっちの方が動き易いみたいだし。」

「そうですか、じゃあ私もちよっとホンキ出しちゃいます♪」

そう言つて彼女は新しくボールを取り出した。

「……………頼んだよ、エンペルト♪」

ボールから出てきたのはもちろんエンペルトだ。その目つきは鋭く、殺気が尋常じゃなかった。

「……………。」

しかも、無言だし。

「……先手は頂くわ！ガブちゃん！ドラゴンクロー！！」

そう言うと、ガブちゃんは一気にエンペルトとの間合いを詰めていった。

「……………」

……彼女、ヒカリは楽しそうに微笑んだ。

この悲惨な状況を楽しんでいるように微笑んでいた。

私のガブリアスはエンペルトを前に地面に倒れ伏せ、既に虫の息だった。

「エンペルト、『みねうち』ですっ♪」

「……………」

エンペルトはコクリと頷くと、無言でガブリアスをきりさいた。急所を外しつつも、確実に傷をつけていく。

「……………」

叫ぶ気力も残されていない。

「やめなさい……………。私の負けよ。だから、これ以上、私のガブリアスを傷つけないで…………!!」

この悲痛な光景に耐えられなくなった私は堪らずサレンダーした。
「…………ふふっ♪まあ、13回も『みねうち』をしても意識を保ってる、その子のすごさに免じて今回はここまでにしてあげますっ♪」

嬉しそうに、でもどこか少し残念そうに微笑む彼女悪魔はエンペルトをボールに戻した。

「…………さて、チャンピオンの座は結構ですので、あの人がどこにいるか知ってるなら教えてください♪」

「…………彼に会ってどうするつもり？さつきみたいなのをするなら教えることはできないわね。」

彼には守ってくれるポケモンたちがいるから大丈夫だろうけど、でも正直会わせたくない。それが本音だ。

「まさか。あの人にこんなことするわけがないでしょう？」

「…………自覚はあったのね……？」

「…………ええ、無理矢理にでも貴女に居場所を吐かせるつもりだったので。で、あの人は今どこにいますか？」

「…………彼ならミオシテイに住んでるわ。」

「…………そうですか。じゃあ私もう行きますね。」

そう言っ、彼女は背を向け歩き出す。でも、ひとつだけ、どうしても気になることがあった。

「…………貴方って一体何者なの？」

彼女がただのハルトくんのファンじゃないことは一目見てわかった。でも、それ以上に彼に執着しているような、そんな目をしていて、一度も顔も合わせたことのない人がそんな目をするわけがない。まだ私が知らない何か秘密が隠されている、そう思ったのだ。

「そうですね、あなたが信じるかどうかは自由ですけど、特別に教えてあげましょう。」

彼女は振り向きざまにこう言い放った。

「私はあの人の……………」

「母さん。」

「なあに？ハルト。」

「俺さ、そろそろ旅に出るわ。」

正直、年がどうこう言い訳して家に籠るのもよくないと思ってはいたんだ。俺ももう12。この世界において、旅に出ているもおかしくない、むしろ遅いんじゃないかと思われる年齢になる。いつまでも親に頼りっぱなしになってるわけにもいかない、そう思ったのだ。

「そう…………やっとな旅に出る気になったのね……………」

「ほんと決意固めるの遅くなつてごめんさい。本当に申し訳ないです。」

うん、精神年齢がちよつと高めだから、思考がリアリストになつちやつてるんだよね。

『10歳になった!!旅出るぞー!!うおおおお!!』

って気持ちに微塵もならなかったからなあ。はあ、前世のあの幼きあの頃に戻りたい……。

「誰に似たのか知らないけどハルトは慎重すぎるのよ。思い切って行動に移すことも大事なんだからね?」

「はい。」

ホントそれ。てか、もう優柔不断ってレベルじゃねえな、ただのチキンじゃん。

「で、結局いつ頃旅に出るつもりなの?」

「もう早めに出たいから今週中には出ていこうかなって思ってる。」

「そう……、ある程度荷物をまとめておきなさい。」

「……はい。とりあえず明日はナナカマド博士のところ行って、ポケモン図鑑貰えるか聞いてみることにするよ。」

初心者用ポケモン……通称『御三家』貰えると良いんだけど……。

『……はるとに御三家そんなものなんていららない。わたしがいるよ?』

「……おにいちゃん?どうしてそんなこと言うの?」

「心読むな。」

デオキシスとラティアス
心読める組がすぐに食いついてくる。

「……お前ら強すぎるもん。」

「……お、おとう……さん……?わたし……おとうさんのためだけを考えて……、おもっでえ……ー(ぐ)まで……え……!!づよぐなっ

だのにい……！なんでそんなこと……いうのお……!!」

流石に言いすぎた。誰よりも強くなろうと努力したヤヨイのことをあまりにも考えてなさすぎたな。

「……ごめん、言いすぎた。俺が言いたかったのはな？ポケモンだけが強くなってもそれをトレーナーである俺が使いこなせなかったら意味がないんだ。もつと、トレーナーとして、おれが、俺自身が強くないといけない、そう思ったんだよ。」

「……。」

「だからさ、俺は一かr」だとしても御三家を最初から育てるのはおかしくない？」……え？」

「お父さんはトレーナーとしての技術をもつと身につけて最終的にはわたしたちを使いこなせるようになっていきたいわけなんですよ？だったら、新しいポケモンなんて必要ないじゃん。」

「えつと、だから……」

「わたしたちを使って強くなればいいんだよ。これ以上手持ちが増えることなんて絶対無いんだし、それが一番だよお父さん!!」

黄色い瞳をキラキラさせながらずっと迫るヤヨイ、柔らかい双丘も当たり、色々とアレな状況なんだが、もう知らん。

「はい、御三家貰いにいきまーす。」

「おどろぎあああああぁぁぁん!!」

簡単にゲームがクリアできちゃったらつままないでしょ？俺はそう言いたい。……そう言いたかった。

「……てことなんですけど、ポケモン凶鑑ってまだ在庫あったりします?」

「うむ、確か一つ残ってたはずだ。少し待っていたまえ。」

周りの反対を押し切り、俺はナナカマド博士のあるポケモン研究所を訪れていた。とりあえず旅に出る上で必需品であろうポケモン凶鑑をなんとか譲ってもらえないかと懇願しにきたんだけど……。

「少し……傷はあるが、正常に動くはずだ。それでもいいなら進呈しよう。」

『……はるとにこんな“ふりようひん”をわたすなんて……!』

「……おい。もちろんありがたく使わせて貰います。わざわざありがとうございます。自分なんかに。」

デオキシスがほおを膨らませ、不満そうな表情を浮かべているが、そもそも傷ありの品とはいえ、ポケモン凶鑑を貰えたことでも奇跡に近いと思っている。もちろんありがたく使わせてもらおうとした。

「謙遜しなくてもいいのだぞ。君はあのシンオウチャンピオンと中断されてしまったとはいえ、互角に戦っていたのだから。私は君の将来性を買ってこれを渡したのだ。」

『あのにんげん、みるめあるね。』

「……それは、どうも。あと、もう一つお願いがあるんですけどいいですかね。」

「なんだね?」

「初心者用のポケモンが欲しいんですけど……無理ですかね?」

「……なぜ、欲しいのかね?」

博士の目つきが鋭くなった。まるで俺を試しているかのように。

「……自分はあるのシロナさんと戦って善戦してたかもしれない。でも、それは自分のポケモンが強かっただけでトレーナーである自分は未熟だったと思ってるんです。このままだと、自分はポケモンの強さだけに頼るダメなトレーナーになってしまう気がするんです。もちろん、今持つてるポケモンも大事に育てていきますが、一から育てることでは何かを得られるかもしれない、そう思っただけです。」

「……………うむ。」

ナナカマド博士は目を閉じ、頷いた。

「よし、君にポケモンを一匹あげよう。ちょっと待っていなさい。」

そういうと、博士は部屋から出て行ってしまった。とりあえず、合格だったらしい。

『むう……………、わたしがいるのに……………。』

「ごめん、デオキシス。」

『……………はるとがあんなにしんけんにとたえちやったらなにもいえないよ……………。』

「まあ、俺はお前らに頼りっぱなしじゃダメって気づいたからな。この機会を絶対モノにしてみせるさ。」

『さすがですね。』

「ッ!？」

後ろから女性の声が聞こえた。振り向くとそこに立っていたのは

……。

「…………マジか…………!」

ポケットモンスター『ダイヤモンド』『パール』『プラチナ』における主人公。白いニット帽に赤いコート、それにあのブーツ……『おんなのこ』の方だ。

「…………君は？」

「ふふつ、私の名前は『ヒカリ』っていいいます。シンオウチャンピオンときつき戦ってきたばかりなんですよ。」

優しく微笑む彼女は例の一年足らずでいきなりポケモンリーグの頂点、チャンピオンシロナと渡り合ったトレーナーだった。

「私、あなたにずっと会いたかったんです。二年前……、ヨスガでチャンピオンと戦っていたのを見た時から……。」

俺はどうにも変な感じがしていた。彼女の俺を見る目、あの執着しているような、淀んでどこか不気味な感じ、どこか覚えがあった。…………まるで、…………いや、そんなはずはない。気のせいだろう。

「…………ふふつ、気のせいじゃないですよ？」

「なッ…………!？」

「『木崎光』きさきひかりって言えばわかりますよね…………？」

嘘だろ…………!?!?なんでお前がここに…………、この世界にいるんだよ…………!?!?

「に
い
さ
ん♪」

そこにいたのは前世の俺の実妹にして正真正銘の天才『光』^{ひかり}だった。

第24話 来訪

「……光、まさかお前もこの世界にいるなんて。」

そこにいたのは姿は違えど、間違いなく俺の妹、『木崎 光』だった。

「当たり前じゃないですか♪それよりも私を置いて消えちやう兄さんの方がひどいですよっ!」

ぶんすかとか可愛らしく怒る光、だが俺は、それよりも聞きたいことがあった。

「……光、なんでお前がここにいるんだ。それもどうやって……?」

「そんなの、兄さんと同じく転生してきただけですよ。兄さんが行方不明になったって聞いて、実家に戻ってきたら本当にいなくなってるんですもん。」

「……行方不明ってことになってたのか。」

「そのあとは学校を辞めて、兄さんを探し続けました。でも、一向に見つかる気配がない……私は絶望しました。」

「おまえ……。」

「だから、私は自殺しました。」

「……は?」

いま、なんて……??

「いつそのこと、死んで兄さんのところにいけばいい、そう思ったんで

す。まあ、結果的にその願いは届いたみたいでこうして会えてるんですけどね。」

光は天才だ。それは一緒に過ごしていれば嫌でも自覚させられた。見ただけで覚えてしまう記憶力、何かモノを作らせてコンクールに出せば簡単に賞を貰ってくる。どんな難しい問題だって秒で解いてしまう超人的な計算力、一目見て彼女は俺とは違う人間だと気づいた。兄である俺よりもはるかに優れていた光だったが、別にコンプレックスのようなものを感じたことは一度もなかったし、周りから比較されても特に辛く感じたこともなかった、寧ろ、妹のことを誇らしく思ってたくらいだった。やっぱりどんな形であれ、かわいい俺の妹のだった、だから辛くもなかったし、誇りに思えたんだと思う。だから、光の才能を無下にして欲しくない、そう思った俺は親に頼み込み、頭の良い学校に行かせたのだ。光なら全国有数の進学校の試験だって余裕で満点を取れる、きつと俺なんかよりもっといい人生を歩めるはず、そう思っただけで送り出したつもりだった。

「……私は兄さんと同じ学校が良かったです。私には兄さんしかいないんです。私のことを理解してくれて、受け入れてくれる人なんて……。」

「そんなことないだろ、お前に仲良くしてくれてた友達もいただろ、遥ちゃんや鳴ちゃんといつも3人で仲良く遊んでたじゃないか！」

光は幼い頃から天才的な才能を發揮し、周りから浮いていた存在になっただけでなかった。そのせいで友達も出来ず、時にはいじめに一緒に過ごしていた。だから、登下校時や休み時間の間はいつも俺と一緒に過ごしていた。そんな光を救ってくれたのが二年生の時に同じクラスになった『赤崎 遥』と『園田 鳴』のふたりだったのだ。二人は光の才能と共に受け入れ仲良くしてくれた。気づけばいつも3人で遊び、『親友』のような関係になっていた。だから、そんな自分勝手な理由で命を投げ捨てるようなことは絶対にはいけない、そう

思っていた。光だけの命じゃない、それを知って悲しむ人がいる、そのことを知って欲しかった。……すでに手遅れでどうしようもないことだけだ。

「そうですね、たしかに私のことを理解してくれた友人もいました。でも、遥と鳴ふたりと兄さんを天秤にかけたら、そんなの間違いなく兄さんを選ぶに決まってるでしょう？テストで満点を取って褒めてくれるのは兄さんだけ、読書感想文で最優秀賞をもらったときも兄さんだけ、クラスの合唱コンクールでピアノを一生懸命練習して出来るようになっても周りは何も言ってくれない、当たり前のように受け流してしまう、でも、兄さんは、兄さんだけはその努力を、私の才能と一緒に受け入れ、褒めてくれたんです。こんなバケモノじみた能力、一番比較されて辛いのは兄さんのはずなのに、それでも理解して受け入れてくれた、兄さんが褒めてくれるから私は頑張れたんです。だから、兄さんがいなくなってしまう以上、私があの世界で生きる理由が無くなってしまうんです。たしかに遥と鳴を置いてきてしまったのは申し訳なく思ってますけど。……まあ、あの二人もきつと……ふっ」

「……もうこの話はいいや、解決しそうにもないし。」

「私はもう解決しましたけど♪」

「……うっせ。で、お前はこれからどうするんだ？この様子だと殿堂入りもしてるっぽいけど。」

光もとい、ヒカリは最強レベルのトレーナーになっている。殿堂入りを果たしてるなら、ファイトエリアにでも行って力試しするのもアリだ。てか、すごく羨ましい。

「…してません。」

「え？」

「私殿堂入りなんてしてないですよ？」

「え、てことはシロナさんに負けたの？」

「いえ、勝ちました。あんなのでチャンピオン務まってるのがおかし

いくらい弱かったです。」

「勝ったならなんで殿堂入りしてないんだよ。」

「別に、兄さんがチャンピオンの席にいると思ってたんで、いないとわかった以上、あそこに興味なんてなかったです。とりあえず経験値だけ貰ってそのまま帰ってきました。まあ、兄さんの居場所はチャンピオンに吐かせましたけど。」

シロナさんエ……………！

シロナさんでも手も足も出なかったなら本当にシンオウ最強はヒカリかもしれない。ポケモンでは妹に負けてないつもりだったけど、こつちでは先を越されてしまったか…………。

「ま、いいです。とりあえず私とポケモンバトルしてください。」

「…………え？」

「唯一ポケモンだけは兄さんを超えることが出来ませんでした。この世界において、私は貴方を倒して初めて兄さんとなり立つことが出来ると思うんです。だから…………、勝負してください。」

光の俺を見る目は真剣そのものだった。さっきまでの執着するよいうなそんな淀んだ瞳とは違う、ひとりのポケモントレーナーとして俺に勝負をしかけようとしている。

「…………やっぱりすごいな…………。」

「…………？」

「その勝負のお誘いだけど、今は無理だ。」

「えっ…………？」

「今の俺じゃ、お前に手も足も出ない。そりやそうだろ？俺はこれから旅に出るんだし、バッジも0個。それにひきかえ光はチャンピオンに完勝してるんだ。今のままじゃ、お前を満足させることもできないよ。」

「……そんなことないです。兄さんは二年前、あのチャンピオンに善戦してた。遠慮しながらも限られた手持ちで相手のポケモンに的確に対応し、タイプが不利な状態でも勝ってたじゃないですか……!」
「だとしても、まだお前には敵わないよ。」

光はシンオウ最強のトレーナー、それに比べ、自分はこれから旅をしようという新人トレーナー。いくら手持ちが強くてもトレーナーの地力の差で負けるだろう。

「……そうやって、自分を卑下するの……やめてください。兄さんがすごい人だってことは私が一番わかっていますから。」

光はうつむき、震えるような声で零した。

「……俺はすごくなんてないよ。」

「ま、俺がバッジ8個集めた時くらいにお前に挑戦してみるとするよ。」

「………わかりました。その時まで待っていますから。」

光は澁々了承してくれたようだ。

話が一段落したところで研究所奥の扉が開いた。

「すまない、探すのに手間取ってな。ポツチャマ、ヒコザル、ナエトルから選ばせたいところなんだが、ちょうど新人トレーナーが旅立ったばかりでいないのだよ。そこでなんだが、このポケモンはどうかね？」

「お久しぶりです博士。」

「おお！ヒカリ君じゃないか！もうバッジを8個集めたと聞いたから

ポケモンリーグにいると思っていただけが戻ってきたのだな！」

「はい、ちよつと用事を思い出したのでフタバまで帰るところだったんですよ。」

「そうかそうか、ポケモン図鑑の方はどうかね？……ふむ、順調のようだね、引き続きよろしく頼むよ。」

「はい。」

「さて、話が少しそれてしまったが、本題に戻るとしよう。初心者用ポケモンの代わりといっってはなんだが君にはこのポケモンはどうかかな？」

そう言つて博士は俺にモンスターボールを渡してきた。

「中身はなんですか？」

「イーブイだ。参加の種類も多種多様だから中々育て甲斐はあると思うぞ。」

「なるほど、確かに中々面白そうですね。」

イーブイ、犬と猫を足して二で割つたような容姿をしており、中々可愛らしい見た目をしている。しかし、魅力はそれだけではない、イーブイにはたくさんの種類の進化があり、それぞれタイプも進化条件も違うのでうまくやれば、自分の好みのタイプに進化させることも可能なポケモンだ。確かに最初から育てるのにはもつてこいなポケモンだと思つた。

「だがな……少し問題があつてだな……。」

「問題……？」

「このイーブイなんだが、元は捨てられたポケモンで少し警戒心が強くてな……。だいぶマシにはなつたんだが、それでも少し距離を置かれることがあるのだ。」

「そうだったんですか……。まあ、これから仲良くしていくので大丈夫です。」

「……うむ、それならよろしい。さあ、イーブイを出すんだ。」

「よし、出てこい！イーブイ！」

ボールを投げると、光とともにイーブイが飛び出してきた。

「……………」

辺りをキョロキョロと見渡し、気づいたのか俺の方を向き、一步後ろに下がった。

「……………ブイ……」

イーブイは明らかに怯えていた。ふるふると震えながら警戒の姿勢を崩さない。

「……………イーブイ。」

「……………ッ！」

俺は腰を落とし、手を差し出した。

「俺はお前を捨てたりなんて絶対しない。お前は無限の可能性を秘めてるんだ。俺はまだまだ未熟なトレーナーだが、必ずお前を活かしてみせる。俺と一緒に成長して、強くなつて、お前を捨てたやつを見返してやろう。だから……………力を貸してくれないか？」

「……………」

すると、イーブイは恐る恐る近づいてきて俺の手に触れた。そして、イーブイは怯えるような目で俺を見た。

『しんじて……このっ…』

イーブイの目からそう尋ねられているように感じた。俺は静かに頷き、優しく頭を撫でてあげた。

「これからよろしくな、イーブイ。」

イーブイはこくりと頷いてくれた。

『……このイーブイ、さつきまであんなにはるとのことこわがってたのに、もうこんなになついでる。』

デオキシスがテレパシーで俺に伝えてきた。イーブイは気持ちよさそうに俺に撫でられ続けているけど。

「〜♪」

……たしかにそれっぽい雰囲気醸してたけど、もう懐いたの!? 思わず俺は自分の手を見た。え、俺の手ってなんか力でも宿ってんの?

『……はるとはほけもんから好かれやすいからね……。』

「え……………」

「うむ、私も驚かされたがイーブイもハルトくんのことを気に入ってくれているようだな。」

「え、あ、はい。」

そんなことしてる間もイーブイは気持ちよさそうに俺の足に頬ずりをして離れる様子がない。

「〜♪」

『むう…………、ずるい、わたしもっ』

デオキシスも負けじと頬ずりを仕掛ける。

「……………なにこれ。」

イーブイを貰った俺は取り敢えずコトブキシテイに向かっていた。

「なあ、光。」

「はい。」

「お前ってこれからどうすんの？」

「……？兄さんがバッジ8個集めるまで待ちますけど……？」

「それまでどうしてるんだ？もっかいリーグ行くとか？」

「……？」

「ん……？」

ヒカリが首を傾げている。あれ……、会話成り立ってなかったか……？

「なんで、リーグに行かないといけないんですか？」

「え、そりゃあ俺を待ってる間暇だろ。その間もポケモン育成に励んだ方がいいんじゃないか？」

「……？それじゃあ兄さんと離れ離れになるんじゃないですか？」

「まあ、そうなるな。」

ヒカリの目の光がどんどんと失せていく。

「なんで……、離れないといけないんですか？」

「なんで兄さんの側にいちやいけないますか？」

「なんで……？、なんで、なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで……？、なんで、なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで……？」

ナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデ
ナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデ
ナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデ

ヒカリの身体がガクガクと不自然に揺れる。彼女の瞳から一粒の涙が落ちた。

「お前……。」

ヒカリは息を上げながら、自分の身体の震えを抑えようとした。

「私がポケモンを持つてる理由なんて、兄さんと繋がる可能性があつたからであつて、そこにポケモンとの絆や愛情なんてそんなチンケなもの存在しないんですよ。」

無表情で彼女はとんでもないことを次々と吐き捨てていく。光のこの世界で積み重ねてきたものがボロボロと崩れていく。狂気を帯びたその暗い瞳は俺以外何も映していない。最初から何も見えていなかったんだ。

「もう、兄さんと再会できて、一緒に居られるなら……、ポケモンなんかどうでもいいんですよ。」

すると、光は背伸びして顔を近づけた。その光のない目はまっすぐと俺を射抜く。

「また……兄さんがいなくなったりしたらもう私……、生きていけないです。もうあんな地獄……、味わいたくない……。」

震えた声でそう零した。俺の服の裾を握りしめる力も自然と強くなつた。

「兄さん……………」

「光……………」

——すると突然辺りが暗くなった。

「っ!？」

それに気づいた俺は思わず顔を上げた。そこにいたのは……。

「……………エンペルト。」

「……………」

ひたすらソイツは黙っていた。だけど、目を見てわかった。エンペルトから溢れる殺気、そしてその目には明らかに憎悪が宿っていたのだ。

『……………なにこいつ……………』

「デオキシス？」

『こいつの頭の中、ひかり光のことしかないよ。ひかり以外なにも考えてない、こわれてる。』

「壊れてるって……………」

『あぶないはるとツ!!』

デオキシスの突然の強大なテレパシーに驚いて顔を上げると、俺を殺そうと腕を振り上げ、攻撃をしようとするエンペルトの姿が……………。

——だめだ、避けられ……………!

バギイツ!!!

……………いた、くな……………い？

でも、何かぶつかる音が聞こえたはず。俺は目を開けた。

そこにいたのは紫の長い髪にクツソダサイえんじ色のジャージを着た女性、ヤヨイが少なくとも俺の目では捉えきれないほどの速度を誇るエンペルトの攻撃を片手一本で簡単に受け止めていた。

「お父さん大丈夫!？」

片手で受け止めたまま、こつちを向き、心配そうな表情を浮かべる。

「あ、ああ……………ありがとうヤヨイ。大丈夫だよ。」

「よかったあ……………!」

どこからどう見ても人の姿、ましてや女性の形をしているのに、ポケモンの攻撃もいとも容易く受け止めてしまっている辺り、やっぱりポケモンなんだなあって思わされる。

「ヤヨイさん!!エンペルトをなんとか押さえつけたつす!」

「お、ナイスレックウザ〜!そのまま押さええてね!」

「はいっす!」

気がつけば、緑ツインテ巨乳クソダサ緑ジャージ二号のレックウザがエンペルトの両腕を取り、押さえていた。エンペルトは振り解こうと激しく腕を振るがビクともせず、解ける気配が微塵もない。にこにここと屈託のない笑みを浮かべるヤヨイだが、目は全く笑っておらず、凄まじい殺気とともに威圧感を感じた。

「取り敢えず殺すからね、こんなやつ生かしておく価値もないもん。」

その直後、一瞬で隣にあった木々が抉り取られるように吹き飛び、消滅した。それに気がついたのは凄まじい風圧を感じたからだ。

「ヤヨイ!」

俺も急なことでビックリしたが、あまり表情豊かではない光でさえ、目を見開いていた。それほど威力だったのだ。そして、抉られた大地の一番奥、一番細くなっている場所に……………。

「……………ッ、へえ……………」

ヤヨイのあの攻撃をもちに食らったエンペルトは腕を盾にし、全身傷だらけになりながらも立ち、受け止めていたのだ。その様子にヤヨイも目を見開き、苦笑いを浮かべた。

「……………」

ボロボロになりながらもヤツの瞳は尋常ではない殺気を帯びてお

り、真正面から堂々とヤヨイと対峙していた。

「あは……………あはは……………!」

「アハハははハハははハハツ!!」

ヤヨイは傷だらけになりながらも立っているエンペルトを見て、狂ったように嗤った。恐ろしくも見えるが、俺には何故か、嬉しそうに見えたのだ。

「すごいよ……………!すごいねキミ……………!!どうしよう……………!?私、アイツのこと気に入っちゃったよ……………!」

「ああ……………、嫌だなあ……………、殺したくないなあ……………!」

「初めて私の本気を受け止めてくれたヒトに出会えたのになあ……………」

そう呟いたヤヨイの背中はどこか寂しそうに見えた。

「じゃあ、殺さなくてもいいんじゃないか?てか、俺としてはあまり殺

しはしてほしくないんだけど。」

「ダメだよお父さん！エンペルトはお父さんを殺そうとしてるんだよ？だから、私の殺さないといけない敵なんだ。」

「……だとしても、ヤヨイたちには血に汚れて欲しくないよ。あまり命を軽く見ないでほしい。」

アイツらはヒトじゃない。もしかしたら、命の重さってものは人間に比べたら軽いのもかもしれない。だとしても、俺のワガママであったとしても、不要な血は流させないで欲しいと思った。

「…………無理だよ。お父さんをいつ殺そうとするかもわからないヤツを生かしておくなんて……。これで手遅れで死んじやったら、私は何のために強くなったの…………？私にはこの強さしかないのに……。戦うこと以外なにもできないのに…………！」

ヤヨイは俺を守るためだけに強くなった。もしかしたら、彼女に敵う者なんてほとんどいないのもかもしれない。

「だったらさ、襲われた時はさつきみたいに護ってくれよ。あの時、本当に死ぬかと思ったんだ。でも、ヤヨイが簡単に受け止めてくれて安心してしたよ。そして、思い出したんだ。どんなことがあってもヤヨイが護ってくれるから大丈夫だってな。」

「…………！」

「また、さつきみたいなきっかけがあったら護ってくれよ。俺はお前のこと信頼してるんだからさ。」

「お父さん……………うん……………うん、任せて……………私が守るからね……………！」

ヤヨイは嬉しそうに笑った。これで、少しは丸くなってくれるといいんだけど…………。

「……それに、ソイツのこと殺したくないんだろ？ だったら、組み手の相手にでもサンドバッグにでも好きにすればいい。」

「ホント!?!」

前言撤回。さっきの五倍くらい嬉しそうな顔になりました。うん、全然丸くなってないわ。

「……………ダメですね。」

「ヒカリ?」

いつのまにか腕を絡めていたヒカリが言った。

「一応私のエンペルトは辛うじて意識を保ってますけど、腕の骨は間違いないで持ってかれています。兄さんのガブリアスの勝ちですよ。」

そう言っつてヒカリはボールを取り出し、エンペルトを戻した。そして、俺の方を向き、頭を下げた。

「ごめんなさい兄さん、私の管理不足でした。自分のポケモンで殺しかけてしまうなんて……、トレーナー失格です。」

「……………いいよ別に。気にしてないしね。こうやって襲って来るってことはヒカリに懐いてるってことだろ?」

「懐いてる……………? ああ、まあ、そんなものですかね……………。……………失敗作ですけど。」

「ん? 今なんて?」

「いえ……………何でもないです。ほら、やっぱり兄さん強いじゃないですか。あのガブリアス一匹で戦えば、今のチャンピオンなら楽勝だと

「思いますけど。」

「流石にそんな脳筋戦法で戦って勝っても嬉しくないよ。ちゃんと全体的に育成してから相性にあつた戦い方で勝つき。」

「ふふ……、さすが私の兄さんですね。」

「まあな、妹の前くらい、かつこつけさせてもらおうよ。」

「前から兄さんはかつこいいですよ。」

「で。」

「なんで、メスなんですか?」

笑顔で圧をかけるように迫るヒカリ。うん、そう言った意味ではないつも通りだな。

「そんなの、厳選してたら性別なんか気にしてられないだろ。」

「……………わかりました。人の形をしてる件についても聞いただそうと思いましたが、不可抗力っぽいので許します。ですが…………。」

俺の腰あたりを指差し、言った。

「その小さい娘はどうしたんです?」

「あー、デオキシスのこと?」

「デオキシス…………!?!」

デオキシスはむすつと頬を膨らませて、目をそらす。だけど、服の裾は掴んだままだ。

『むう…………、こいつはるとをころそうとしたからきらい。』

「別に俺を殺そうとしたのはエンペルトだろ。ヒカリは関係ない

よ。」

『……ひかりのもちものなんだから、ひかりがわるい。』

「怒るなよ……。」

「……さつきから一人で何呟いてるんですか？というかなんでデオキシスなんか持つてるんです？」

「ゴイツき、俺以外と話したがないんだよ。さつき一人で喋ってたのもデオキシスのテレパシーに答えただけだ。デオキシスを持つてる理由は卵みたいなやつを拾ったからだ。」

「ん……！」

デオキシスはヒカ리를睨みつけた。

「なるほど……。まだ生まれたばかりって感じなんですね。」

「ま、生まれてそんなに経ってはいいな。」

「やつぱり兄さんの手持ち、既にすごいじゃないですか。」

「ヤヨイさん……、私強くなりますから……！本気も受け止められるように特訓しますからあ……！！だから、見捨てないでくださいいいいい！なんならサンドバッグも私がやりますうううう！！」
「ええ……？」

レックウザがヤヨイの腰にしがみついてそれを引きずるようにこつちに歩いて来るヤヨイ。てか、ヤヨイがガチで困惑してんじやん。初めて見たわ。

「……………」

「……私のエンペルトをあそこまで追い込むなんて流石ですね。」

「……木崎 光。」

「ん、なんで前の私の名前を知ってるんです？」

ヒカリの目の前に立つと一瞬で空気が重くなった。抑えているがそれでもヤヨイから殺気が漏れ出ているのがわかる。だが、ヒカリもそれに微塵も動じていない。

「私は前世もハルトのポケモンだったから。」

「……ああ、兄さんの厳選の賜物が貴女つてことですね。そりゃあ、勝てないわけですよ。」

ヒカリも不気味に微笑む。

「エンペルトのことだけど、お父さんが止めてなかったら迷わず消し炭にしてたよ。」

「……そうですか。まあ、兄さんの所有物に言うことはありません。アウトオブ眼中です。兄さんに謝罪はしましたけど。」

「ふーん……。まあ、お父さんにはちゃんと謝ってるみたいだし、許してあげるよ。」

「ほぎけ。」

「あゝ??？」

「こいつら……。」

ヒカリの方が背が低いのに、あんなだけ見下しながら嘲笑って煽るとかなんかもうしようもないところまで天才だな。あんなだけブチ切れてるヤヨイもそう見ないぞ。二人ともめちゃくちや顔近いし。

「エルツ!!」

すると、大きな声とともにポケットから光が漏れて何か出てきた。頭に深緑色のツノのようなものがあり、腕にも緑色のブレードのよう

な……………、こいつエルレイドか…………？

すると、そのエルレイドは二人の間に割り込み、なんとか引き剥がした。

「エル君……………!？」

「なにこいつ……………」

引き剥がした後、ヒカリのエルレイドはヤヨイにひたすらペコペコと頭を何度も下げて平謝りしていた。まるで上司に謝る社員のような、そんな感じだ。それには流石のヤヨイも驚きを隠せない。

「……………優しいんだね、キミ。」

「エル……………ッ！」

ヤヨイも驚きながらも穏やかな笑みを見せる。エルレイドも顔を上げた。

「……………命拾いしたね。今回はエル君に免じてゆるして「ほざけ」やっぱ殺す!!」

「エルウツ!!」

エルレイドの悲痛な叫びが響き渡った。

「……じゃあ、俺と旅するってことでいいな？」

「はい、どこまでもついていきますよ。」

なんとかヤヨイとヒカリを押しさえ、話をひと段落つかせたところでいっしょにシンオウを旅するという提案をした。ヒカリも勿論その話ののってきたので旅することが決まった。

「とりあえず今日のところは家に帰るよ、準備もあるし。お前は どうする？」

「……………今の兄さんのお母さんのお世話になるわけにもいかないんで私も家に帰ります。荷物の整理もしておきたいんで。」

「そうか。」

とりあえず一緒に泊まるルートにならなくてホツとした。とりあえず夕方にもなってきたのでコトブキで落ち合うと言う約束をして別れた。

「ふいー、そんじゃ家に帰りますかねー。」

デオキシスもコクリと頷いた。俺とデオキシスがコトブキシティの方へ足を進めようとした時だった。

「むぐッ……………!？」

目の前が突然真っ暗になった！

いや、違うからね？ガメオベラのそんなブラックアウトじゃないよ？物理的に目の前が真っ暗になったのだ。正確には俺の顔に何か被さって来ている。少し息苦しいのが証拠だ。

『…………ハルト。』

テレパシーで話しかけられる。デオキシスかと思っただけなのに声が違っていた。

「^{だれだ？}むぐぐ？」

『…………なんで会いに来てくれなかったの？ずっと待ってたのに。』

会いに来てくれなかった…………？一体なんのこ…………と…………、

あつ（気づいた）

顔にひつついている生き物の正体がわかった俺はなんとか引き剥がす。

「ッはあ…………はあ、お前かよ…………、エムリット。」

『ひ・さ・し・ぶ・り・ね、ハルト。元気にしてたかしら？』

引き剥がして視界がクリアになったところで俺に抱えられているのはピンクを基調としたぬいぐるみのような小さな身体、黄色い瞳に、二つに伸びた独特な尻尾が特徴の、シンオウの伝説のポケモンの一匹、エムリットだ。

「あ、ああ…………、久しぶりだなエムリット。元気にしてたか？」

『はあ…………、同じ質問を返してるんじゃないわよ。』

「あ、あはは…………。」

『で、なんで会いに来てくれなかったの？私、ずっと待ってたのに

……』

エムリットはぶんすかと怒った様子で理由を聞いてきた。可愛いと一瞬思ったが本気でキレているみたいなのですぐに恐怖に塗り替えられてしまう。

「ごめんなさい、忘れてたわけじゃないですよ。ちよつと色々あつてホウエン地方に行つてました。」

『……………嘘はついてないみたいね。』

「はい。ごめんなさい（2回目）」

エムリットは小さな身体でぽふつと俺の体に身を埋めた。

『だったらなんで行く前に一言言つてくれなかったのよ……、すつごく寂しかったのよ?』

「いやあ、ソラも置いていったから知らせてくれてるかなつて思つてたんだけどね。」

ソラがあんな末期状態だったら、そりゃあ教えてねえわな。

「……………そんなのハルトがキミのことなんて微塵も興味ないつてことなんじゃないかな?」

『喧嘩売つてるのかしら?……………アグノム。』

振り向くといつのままにか俺の隣にはヒトの姿になったソラアグノムがいた。

「ボクはハルトから『ソラ』つていう名前をもらつてるんだ。キミとはちがつてね。」

『無理やり捕まりに行つたくせによく言うわね。』

「……………ハルトに忘れられるどっかのチビには言われたくないな。」

『ふふふ……………。』

「あはは……。」

あれー？二人とも笑ってるけど全然目が笑ってないし、なんかすごく黒いオーラもでてるぞー？

「……おまえら、会って早々いきなり喧嘩するなよ……！」

『むう………！』

俺が仲裁しようと思いに割り込んでとりあえず二人を引き剥がした時だった。

「ひッ………あ………っ!？」

エムリットは渋々と下がったが、どうもソラの様子が変わる。顔を真っ赤にしてどこか足取りがおぼつかないようだった。

「ソラ……？」

「いつ、いやなんでもないよハルト……！ちょっとびっくりしただけで………」

「でも顔真っ赤だぞ？風邪でも引いたのか？てか、そもそもポケモンって風邪引くのか？」

顔を近づけておでこに手を当てると、ぼんつと顔がさらに真っ赤になっていった。

『アグノム……？』

思わず喧嘩腰だったエムリットですら心配してしまう始末だ。

「あ………、らめえ………♡はるとの、におい………だめなんりや………っ

て…………♡あたま…………おかしく…………なっひや…………う…………♡」
「…………つと、ソラ…………!?!」

目が泳いでいて、足がまるで産まれたての小鹿のようにおぼつかないソラは俺の方に倒れこんできてしまう。俺は驚いてそれを受け止めた。

「……………ツ!!♡♡♡♡♡♡♡♡」

「ビクンビクンと痙攣するように揺れた後、ソラは気絶したのか完全に俺にもたれかかっていた。」

「……………おい、ソラ?ソラ!?!」

『……………気絶してるわよ。』

「ええ…………、なんでいきなり…………?やっぱり風邪だったりしたのか…………?」

『……………そうかもしれないわね。とりあえず寝かせておきなさい。』

「あ、ああ……………」
『……………』

少しほおを赤らめて目をそらしながらエムリットは言った。何故かデオキシスも顔を真っ赤にしていたのだが、そんなこと気にしてる場合じゃないので、とりあえずリュックを枕代わりにして地面に寝かせた。

アグノムが突然おかしくなって気絶してしまったのだが、私にはその原因がすぐにわかった。早い話がハルトに触れられて絶頂してしまっただけだ。その証拠として、彼女の太ももからツーツと何かが垂れてきているのが見えてしまったのだ。

正直、そんなアグノムのことを羨ましかった。ハルトに触れられただけで発情して絶頂してしまう、体の隅々までハルトの虜にされてしまっていて、もうハルト無しでは生きていけないような、そんな堕ちぶれた姿だった。だけど、私もハルトの虜になって堕ちるところまで堕ちてしまいたい、そう思ってしまった。それにハルトのモノになって、名前まで貰っている。それも羨ましかった。

2年前、彼に出会って私はニンゲン相手に、恋に落ちた。その時はまだ純粹で綺麗なものだったかもしれない。でも、アグノムが……、ソラが介入してから全てが狂ってしまった。また会おうと約束をしたけど、ハルトは来てくれなかった。彼には彼の事情があるのは知っていたが、それでも一度でもいいから来て欲しかった。

ソラは湖のことなんてほっぽりだしてハルトのところへ行ってしまった。湖を守護する者としてあり得ない行為だが、それと同時に勇気の要る行動だと思った。そんなソラのことをどこか羨ましくも思っていた。私は湖を抜け出して彼に会いに行くこともヒトの姿になる勇氣もなくてずっと湖に籠っていた。……湖の守護を盾にして。

そして、今日。とんでもない爆発音が聞こえて、思わず湖を抜け出してその現場に駆けつけたら、そこにいたのは彼だった。そばにいたのは、ニンゲンの女と、一目見ただけで強いとわかるヒトの姿になったポケモン。感情を読めばすぐにわかった、二人とも胸の奥には彼に対する愛情が秘められていることに。彼女らもハルトのことが好きなのだ。

心の中で焦りが生まれた。このままでいいのだろうか？このままだとハルトがほかの女に取られてしまう。勇気とか守護とかそんなことを言って逃げてる場合なのか。

————いくしかない。

そう結論付けた私は彼の顔にひつつくことに成功した。……………
なんで、こんな行動を取ってしまったのかは正直わからない。顔に覆い被さっているからもしかしたら私だと気付いてくれないかも、内心ドキドキしながらテレパシーで彼に問いかけた。

『なんで会いに来てくれなかったの？』

……………でも、ハルトはわかってくれてた。

『……………エムリットか。』

嬉しかった。覚えてくれてて、2年も会ってなかったのにちやんと気づいてくれた。胸の奥が熱くなるのが感じられた。……鼓動が高鳴る。自然と頬が緩むのがわかった。ハルトのことで胸がいつぱいになった。そして、ようやく決意することができたのである。

『ねえ、ハルト。』

私は生まれて初めてヒトの姿になった。初めてだから緊張して変な感じだけど、ハルトと同じ姿で同じ時を過ごしてみたかったから。私はうまく笑えてるかどうかはわからないけど、声を振り絞って、精一杯の笑顔で言った。

『……私を、貴方のモノにして?』

私の全てを貴方に。

そんな小さな私の、

大きな決意だった。

光に包まれて、目を開くとそこには立っていたのは一人の女の子。ピンク色の腰あたりまで伸びた長い髪に黄色い瞳、ピンク色のパーカーと黒いミニスカートを着こなす、どっかのポケモンのヒトの姿になったときと似ているのがわかった。顔を真っ赤にして視線がおぼつかない様子だが、とりあえず彼女が誰かというのはすぐにわかった。

「……………ええ？（困惑）」

そんなヒトの姿になったエムリットは何を思ったのか自分を捕まえろと言ってきたのだ。すげー穏やかな微笑みで。

「おまえ、湖の管理はいいのかよ。あれって、大事な仕事なんじゃないのか?」

「ま、まあ、湖はいつでも平和だから問題ないんじゃないかしら?」
「適当だな……。」

エムリットですら、そんなソラみたいなこと言い出したらもうどうしようもないな。

「因みに断ったらどうする?」

「え……、断っちゃうの……?」

エムリットは目をうるうるさせて上目遣いでこちらを見てくる。
……そんな顔されたら断れねえじゃん。

「あーもー……、いいよ!!ついて来なさい!!捕まえたげるから!!」

「ホント!?!」

俺は半ばヤケクソで彼女のお願いを了承した。

「ほら、モンスターボールの中にぶち込んでやるから、いくぞー?」
「うんっ!」

俺はポケットから空のモンスターボールを取り出して、エムリットに向けて放った。エムリットの頭に当たったボールは彼女をポケモンと検知し、赤い光を放ちながら開き、取り込んだ。落ちたボールは揺れることもなく、キラリと捕獲成功を意味する光を放った。その後、すぐにボールが開き、中からエムリットが出てきた。出てきたか

と思っただら急に俺に抱きついてきて胸に顔を埋めた。

「ふふっ、これで私もハルトのモノになれたのね♪」

とても嬉しそうで彼女の抱きしめる力が自然と強くなった。

「なあ……エムリット。」

「……………え。」

「え?」

「なまえつけて……………」

「ええ……………?」

不満そうにほおを膨らませたエムリットは俺に名付けを要求してきた。とりあえず俺は腕を組み、彼女に合った名前を考える。

「よし、お前の名前はサクラにしよう。」

まあ、名前の由来は言わなくてもわかるよね?ほんとこんな安直な名前しか浮かばない自分のセンスのなさに呆れるレベルだよ。

「さくら……………サクラ、うん。ありがとう、ハルト!」

でも、本人はとても満足そうなので結果オーライってところだろ

う。

「なあ、サクラ。」

「なあに？ハルト。」

「本当にこれでよかったのか？俺なんかについてくることになって
さ。」

正直、俺はそんなにいい人じゃないと思う。こうやって信頼してく
れてるのは嬉しいが自信がないのだ。すると、サクラは少し顔をしか
めて言った。

「…………ハルトじゃなきや、やだ。」

「…………そうか。」

「ハルトだから簡単に捕まったのよ？他のニンゲンなら、まあ、殺しは
しないけどタダじゃすまないわ。」

ものすごく特別に信頼されていることはよくわかった。いや、にして
も湖のポケモン2匹も捕まえちゃって大丈夫だろうか。…………割とマ
ジで。

アジトの自室で事務作業を行っていると、無線から通信が入った。

『アカギ様!!』

「……なんだ、サターン。」

『リッシ湖の偵察部隊の報告によると、アグノムの生体反応が完全に消失していたとのことです。』

「なに……?」

我々ギンガ団は定期的にシンオウの三つの湖に偵察部隊を送り、湖のポケモン3匹の様子を伺っているのだが、今、予想外の事態が起こっている。

『こちらマーズ、同じくシンジ湖偵察部隊の報告でエムリットの生体反応が無かったとのことです。』

「……。」

三つの湖のうち、二つの湖のポケモンの生体反応が消失。これが意味するのは、そのポケモンが死んでしまったか、または第三者の手によって捕獲されたか……、いや、あのポケモンたちはそう簡単に人間の前に姿を現わすことは無いはず。人間をあまり信用してないはずだ。

「……………わからん。」

ここまで順調にことを運んでいたのに、まさかの緊急事態。私の計画はしばらくの間、こう着状態に陥ることとなる。

「へくちっ！」

「……………サクラ？」

サクラから突然かわいらしくしゃみが出た。

「うーん、誰か噂でもしてるのかしら…………？」

「でも、今のくしゃみ、ちょっと可愛かったぞ。」

「ううう……………／＼／＼」

顔を真っ赤にしているエムリットだが、本当に噂されていることは知るよしもない。